

横雲バイパス関係発掘調査報告書

かみごう
上郷遺跡Ⅱ

1997

新潟県教育委員会
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

横雲バイパス関係発掘調査報告書

かみごう
上郷遺跡Ⅱ

1997

新潟県教育委員会
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

新潟県教育委員会では、高速道路や国道バイパス建設などにともなう埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。

上郷遺跡の発掘調査は国道49号横雲バイパス建設にともない、平成4年度から6年度の3か年にわたって実施されました。このうち平成4年度の調査成果は『新潟県埋蔵文化財調査報告書第62集 上郷遺跡Ⅰ』としてすでに報告されています。

本書は平成5年度と6年度の調査結果をまとめた発掘調査報告書です。上郷遺跡は古墳時代と平安時代の遺跡で、調査の結果平安時代の建物跡・井戸・畝跡・水田跡などが検出され、当時の村の様子が明らかになりました。低湿地の開発が古代から着実に実践されていたことを窺い知ることができます。

この調査結果を地域の歴史を解明する資料として、古代史の研究に広く活用していただければ幸いです。

最後に、本調査に多大なる御協力と御援助を賜りました横越町教育委員会、発掘調査の計画段階から実施にいたるまで、格別の御配慮を賜りました建設省北陸地方建設局新潟国道工事事務所、同豊栄出張所には厚く御礼申し上げます。

平成9年3月

新潟県教育委員会

教育長 平野 清明

例　　言

1. 本報告は新潟県中蒲原郡横越町大字横越字上郷に所在する上郷遺跡の発掘調査記録である。発掘調査は国道49号横雲バイパスの建設にともない、新潟県教育委員会（以下県教委と略す）が建設省から受託して実施したものである。
2. 発掘調査は調査主体である県教委が財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下埋文事業団と略す）に調査を委託し、平成4～6年度に実施した。ただし、平成4年度調査部分については平成6年3月に報告している。
3. 整理作業および報告書作成にかかる作業は平成5～8年度に実施し、埋文事業団調査課がこれにあたった。
4. 出土遺物と調査にかかる資料は、すべて県教委が保管している。遺物の注記記号は「上ゴウ」とし、出土地点や層位を併記した。
5. 遺物番号は通し番号とし、図面図版と写真図版の番号は一致している。
6. 本文中の註はすべて脚註とした。また、引用文献は著者及び発行年（西暦）を文中に〔　〕で示し、巻末に一括して掲載した。
7. 本書の記述は上野一久（埋文事業団主任調査員）・春日真実（同文化財調査員）がこれにあたった。分担は第II・IV章が上野、第I・III・V・VI章が春日である。ただし、石器の記述・石材の鑑定については鈴木俊成（同主任調査員）・沢田敦（同文化財調査員）から指導を受けた。編集は春日が行ない、木村孝一（同嘱託）がこれを補助した。
8. 「第VI章 上郷遺跡における古環境変遷と稲作の範囲」についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。また墨書き器・木簡については新潟大学教授 小林昌二氏から指導を受けた。
9. 本書の遺物写真撮影は上野を中心に行ない、高橋洋一（埋文事業団主任調査員）がこれを補助した。
10. 発掘調査から報告書作成に至るまで、下記の方々から多くのご教示・ご助言を賜った。厚く御礼申し上げる。（敬称略）

宇野隆夫、柿田祐司、川上貞雄、北野博司、木立雅朗、川畠　誠、坂井秀弥、寒川　旭、出越茂和、櫻田仁史、望月精司、安　英樹、渡辺朋和、渡辺ますみ、亀田郷土地改良区、亀田町教育委員会、横越町教育委員会

目 次

第Ⅰ章 序 説

1. 調査にいたる経緯.....	1
2. 調査・整理の体制	
A. 調査体制.....	1
B. 整理体制と経過.....	3

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置.....	5
2. 地理的環境	
A. 地形概観.....	5
B. 蓼原平野の形成.....	6
3. 歴史的環境	
A. 周辺の遺跡.....	7
B. 文獻資料からみた古代の上郡遺跡周辺.....	7

第Ⅲ章 調査の概要

1. 一次調査.....	10
2. 調査の方法.....	10
3. 調査の経過.....	11

第Ⅳ章 遺 跡

1. 現地形と層序.....	13
2. 概 要.....	14
3. 遺構各説	
A. 古墳時代前期.....	16
B. 平安時代	
建物跡.....	17
井 戸.....	18
土 坑.....	18
不明遺構.....	23
鉢状遺構.....	24
水田跡.....	26
溝.....	27

第Ⅴ章 遺 物

1. 古墳時代前期.....	28
2. 平安時代以降	
A. 平安時代の土器	
(1) 記述の方法.....	29
(2) 土器各説.....	31

B. その他の遺物	38
第VI章 自然科学的分析－上郷遺跡における古環境変遷と稻作地の範囲－	
はじめに	39
1. 番序と試料	39
2. 方 法	
(1) 珪藻分析	43
(2) 花粉分析	43
(3) 植物珪酸体分析	43
(4) 樹種同定	44
3. 結 果	
(1) 珪藻化石の産状	44
(2) 花粉化石の産状	51
(3) 植物珪酸体の産状	57
(4) 樹種同定	61
4. 考 察	
(1) 平安時代～江戸時代の古環境変遷について	62
(2) 平安時代における稻作について	63
(3) 平安時代の「方形溝」について	65
第VII章 まとめ	
1 土 器	
A 古墳時代	66
B 平安時代	
(1) 編 年	66
(2) 器種構成比率	72
2 平安時代の遺跡	
A. 上郷遺跡の遺構	72
B. 上郷遺跡周辺の遺跡の動態	75
要 約	78
引用・参考文献	79
遺物観察表	81

挿 図 目 次

第1図 蒲原平野の地形と主要遺跡	5
第2図 縄文時代後期の蒲原平野	6
第3図 周辺の遺跡一覧	8
第4図 一次調査トレンチの位置と二次調査必要範囲	10

第5図 グリッド設定図	11
第6図 各年度の調査範囲	12
第7図 下層調査範囲と先行トレンチ	12
第8図 遺跡の層序	13
第9図 調査区全体図	15
第10図 平安時代の地形	16
第11図 斧状造構配置図	25
第12図 土器部位名称（古墳時代前期）	28
第13図 平安時代土器器種分類図（1）	29
第14図 平安時代土器器種分類図（2）	30
第15図 土器部位名称（平安時代）	31
第16図 試料採取地点位置	40
第17図 第1地点～第4地点の模式柱状図および分析層位	41
第18図 第1地点における主要珪藻化石群集の層位的変化	48
第19図 第2地点における主要珪藻化石群集の層位的変化	49
第20図 第4地点における主要珪藻化石群集の層位的変化	50
第21図 第2地点における花粉化石群集の層位的変化	54
第22図 第4地点における花粉化石群集の層位的変化	55
第23図 V層および93-S E 3における花粉化石群集	56
第24図 第1地点における植物珪酸体組成の層位的変化	58
第25図 第2地点における植物珪酸体組成の層位的変化	58
第26図 第4地点における植物珪酸体組成の層位的変化	58
第27図 V層における植物珪酸体組成の平面的分布	60
第28図 イネ属とヨシ属の平面的分布	64
第29図 平安時代土器縦年図（1）	67
第30図 平安時代土器縦年図（2）	68
第31図 平安時代土器縦年図（3）	69
第32図 土師器無台純の器高指数と底径指数	71
第33図 頸城地方における古代の灌漑用水路	74
第34図 対象遺跡位置図	76

表 目 次

第1表 横雲バイパス発掘作業行程	1
第2表 上郷遺跡発掘調査・整理作業行程	4
第3表 V層平面採取試料の分析位置	42
第4表 第1地点・第2地点・第4地点の珪藻分析結果	45～47
第5表 第1地点・第2地点・第4地点の花粉分析結果	52

第6表	V層および93-S E 3の花粉分析結果	53
第7表	第1地点・第2地点・第4地点の植物珪酸体分析結果	57
第8表	V層の植物珪酸体分析結果	59
第9表	樹種同定結果	61
第10表	土器の器種構成比率	73
第11表	上郷遺跡周辺の遺跡の存続期間	76

図版目次

図面図版

- 図版1 遺物集中地点分布図（古墳時代前期） 1:200
- 図版2 遺物集中地点微細図1 1:20 集中地点1
- 図版3 遺物集中地点微細図2 1:20 集中地点6
- 図版4 調査区全体図（平安時代） 1:1,200
- 図版5 遺構実測図1（平安時代） 1:600
- 図版6 遺構実測図2（掘立柱建物・竪穴住居・井戸） 1:80 93-S B 1・2, S I 1,
1:40 93-S E 1・3
- 図版7 遺構実測図3（土坑1） 1:80 93-S K70・71
1:40 93-S K14・1・11・7・8・9
- 図版8 遺構実測図4（土坑2） 1:40 93-S K4・2・3・5・6・60
- 図版9 遺構実測図5（土坑3） 1:40 93-S K10・13・35・36・54・101・51・52
- 図版10 遺構実測図6（土坑4） 1:40 94-S K62・61・53・35・52・34・64・51
- 図版11 遺構実測図7（土坑5） 1:40 94-S K63・48・47・46・50・49・39・38・
37・32
- 図版12 遺構実測図8（土坑6） 1:40 94-S K66・42・27・103・26・12
- 図版13 遺構実測図9（不明遺構） 1:40 93-S X31・32・33・34
- 図版14・15 遺構実測図10（畝状遺構1） 1:200 畝状遺構1～5群
- 図版16 遺構実測図11（畝状遺構2・水田跡1） 1:200 畝状遺構6群・水田区画
1～4
- 図版17 遺構実測図12（畝状遺構3ほか） 1:160 畝状遺構7群・畦畔状遺構
- 図版18・19 遺構実測図13（水田跡2） 1:200 水田区画5～9・11・12・16
- 図版20・21 遺構実測図14（水田跡3） 1:200 水田区画10・13
- 図版22・23 遺構実測図15（水田跡4） 1:200 水田区画14～17
- 図版24 遺構実測図16（溝） 1:160 93-S D10'・11・15・16
- 図版25 古墳時代前期出土遺物1
- 図版26 古墳時代前期出土遺物2
- 図版27 平安時代出土遺物1 93-S K70
- 図版28 平安時代出土遺物2 93-S I 2・S E 1・S K 5・7・3, 94-S K32

- 図版29 平安時代出土遺物 3 93-S K101・S X31・32・33・34・50
- 図版30 平安時代出土遺物 4 93-S D22, 94-S D35
- 図版31 平安時代出土遺物 5 94-S D 2・6・1
- 図版32 平安時代出土遺物 6 93-S D30・10, 94-S D 7・5・43
- 図版33 平安時代出土遺物 7 その他の遺構・S D10(旧河道)
- 図版34 平安時代出土遺物 8 旧河道
- 図版35 平安時代出土遺物 9 水田跡・L26-6・7・11・12土器ダマリ
- 図版36 平安時代出土遺物10 N27-19・23・24土器ダマリ・K27-8・11～14土器ダマリ
K26-6・11土器ダマリ・包含層
- 図版37 平安時代出土遺物11・近世出土遺物 包含層
- 図版38 平安時代出土遺物12 土製品・石器・木器・金屬器

写 真 図 版

- 図版39 遺跡俯瞰・平成6年度調査区全景・旧河道土層断面
- 図版40 平成5年度調査区全景・畦畔検出状況・基本層序
- 図版41 93-S B 1周辺・M・N20～23周辺・作業風景
- 図版42 93-S B 1・2, 93-S I 1
- 図版43 93-S E 1・93-S E 1土層断面, 93-S E 3・93-S E 3土層断面,
93-S K70・93-S K71土層断面, 93-S K14・93-S K14土層断面,
93-S K11・93-S K11土層断面
- 図版44 93-S K 1・93-S K 7土層断面, 93-S K 8土層断面・93-S K 7・8
93-S K 9・93-S K 9土層断面, 93-S K 4・93-S K 4土層断面,
93-S K 2・93-S K 2土層断面
- 図版45 93-S K 3・93-S K 3土層断面, 93-S K 5・93-S K 5遺物出土状況,
93-S K 6・93-S K 6土層断面, 93-S K60・93-S K60土層断面,
93-S K10・93-S K10土層断面
- 図版46 93-S K13・93-S K13土層断面, 93-S K36・93-S K36土層断面
93-S K51・93-S K35土層断面, 93-S K54・93-S K54土層断面,
93-S K101遺物出土状況・93-S K101土層断面
- 図版47 94-S K62・94-S K62土層断面, 94-S K53・94-S K53土層断面,
94-S K52・94-S K52土層断面, 94-S K35・94-S K35土層断面,
94-S K51・94-S K51土層断面
- 図版48 94-S K63・94-S K63土層断面, 94-S K48・94-S K48土層断面,
94-S K47・94-S K47土層断面, 94-S K46・94-S K46土層断面,
94-S K49・94-S K49土層断面
- 図版49 94-S K32土層断面・94-S K50土層断面, 94-S K26・94-S K26土層断面,
94-S K27・94-S K27土層断面, 94-S K24, 94-S K42土層断面, 93-S X

- 31・93-S X31土層断面
- 図版50 93-S X33・94-S X34, 93-S D17・93-S D10土層断面, 93-S D11・
93-S D11土層断面・93-S D15, 93-S D22土層断面, 93-S D28土層
断面, 93-S D23土層断面
- 図版51 竊状遺構4群・竊状遺構2群, 竊状遺構2・3群
- 図版52 94-S D6遺物出土状況, 94-S D7・8, 94-S K12・S D14,
94-S D4土層断面, 94-S D9土層断面, 94-S D18土層断面,
94-S D19土層断面, 94-S D17土層断面, 94-S D20土層断面
- 図版53 水田跡区画7~13, 水田跡水口, 水田跡区画14~17
- 図版54 畦畔状遺構・水田跡区画1~4
- 図版55 畦畔3・4検出状況・畦畔13検出状況・畦畔4・水田跡区画6・
畦畔5土層断面・畦畔6土層断面・畦畔5・水田跡土層断面
- 図版56 平安時代土器出土状況・古墳時代前期土器出土状況
(土器集中地点1・5・3・10)
- 図版57 古墳時代前期土器出土状況(土器集中地点1・7・6)
- 図版58 古墳時代前期土器1
- 図版59 古墳時代前期土器2・平安時代土器1:93-S K70
- 図版60 平安時代土器2:93-S K70・93-S I2
- 図版61 平安時代土器3:93-S E1・93-S K5・7・1・3・101, 94-S K32
- 図版62 平安時代土器4:93-S X31・32・34・33・50
- 図版63 平安時代土器5:93-S D22, 94-S D35・2
- 図版64 平安時代土器6:94-S D2・6・1, 93-S D30
- 図版65 平安時代土器7:94-S D7・5・43, 93-S D10', その他の遺構
- 図版66 平安時代土器8:旧河道
- 図版67 平安時代土器9:旧河道・水田跡・L26-6・7・11・12土器ダマリ
- 図版68 平安時代土器10:L26-6・7・11・12土器ダマリ・N27-19・23・24土器ダマリ・
K27-8・11~14土器ダマリ・K26-6・11土器ダマリ
- 図版69 平安時代土器11:包含層1
- 図版70 平安時代土器12:包含層2・その他の遺物
- 図版71 出土文字資料
- 図版72 珪藻化石(1)
- 図版73 珪藻化石(2)
- 図版74 珪藻化石(3)
- 図版75 花粉化石(1)
- 図版76 花粉化石(2)
- 図版77 花粉化石(3)
- 図版78 植物珪酸体
- 図版79 木材(1)
- 図版80 木材(2)

第Ⅰ章 序 説

1. 調査にいたる経緯

一般国道49号（福島県いわき市～新潟県新潟市）は本州を横断する主要幹線道路であるとともに、沿線町村と新潟市を結ぶ地域の幹線道路として重要な役割を果たしており、近年の経済成長とともに自動車交通量は増加の一途をたどっている。しかし横越・京ヶ瀬地区では、道路幅員が狭く人家連絡部を通過するために、交通渋滞・交通事故・降雪時の交通障害などの交通環境の悪化が深刻な問題となってきた。

北蒲原郡京ヶ瀬村下黒瀬を起点とし中蒲原郡亀田町城所を終点とする横雲バイパスは、これらの問題を解消し、現道を地域の生活道路として機能を回復させるほか、亀田バイパスと一体になって新潟都市圏の拡大・発展に寄与することを目的として計画された道路である。

新潟県教育委員会（以下県教委）は建設省北陸地方建設局（以下北陸地建）の依頼を受け昭和63年に横雲バイパス法線内の分布調査を行い、この区間に上郷遺跡他2遺跡の埋蔵文化財包蔵地があることを確認、この結果を北陸地建に通知している。さらに県教委は、平成2年10月22～26日まで一次調査を行い上郷遺跡は集落跡および水田跡の性格が認められるとし、30,000m²の二次調査が必要である旨を北陸地建に伝達し、調査行程の協議を重ねた。横雲バイパスの工事行程や県教委の体制を考慮した結果、平成4・5・6年の3年度に分けて二次調査を行うこととした。

なお、横雲バイパス建設に伴う横越町・亀田町内の実質的な発掘調査は平成4年度から開始され、平成7年度に終了した。調査した遺跡は東から上郷遺跡（横越町30,000m² 平成2・4～6年度）、川根谷内墓所遺跡（横越町9,800m² 平成5～7年度）、牛道遺跡（亀田町6,800m² 平成5・7年度）の3遺跡であり、調査総面積は46,600m²である。

2. 調査・整理の体制

A 調査体制

発掘調査は新潟県教育委員会が主体となり（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団が委託を受け、下記の体制で行った。調査期間は冬期の現場休止期間を含め平成4年から7年にかけての3か年である。調査期間・調査の体制は以下のとおりである。

遺跡	年度	発掘作業行程					
		平成2年度	平成3年度	平成4年度	平成5年度	平成6年度	平成7年度
上郷遺跡 (30,000m ²)	■			■	■		
川根谷内遺跡 (9,800m ²)				■		■	■
牛道遺跡 (6,800m ²)				■			■

■ 一次調査 ■ 二次調査

第1表 横雲バイパス発掘作業行程

2. 調査・整理の体制

[一次調査 平成 2 年度]

調査期間 平成 2 年 10月 22 日～10月 26 日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 堀川徹夫）

管 理 大島 圭己（文化行政課長）

吉倉 長幸（文化行政課長補佐）

庶 務 境原 信夫（埋蔵文化財第一係主事）

調査指導 本間 信昭（埋蔵文化財第二係長）

調査担当 離巻 正信（埋蔵文化財第二係主任）

[一次調査 平成 5 年度]

調査期間 平成 5 年 11月 13～11月 17 日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 本間栄三郎）

調 査 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

管 理 藍原 直木（専務理事・事務局長）

渡辺 耕吉（総務課長）

茂田井信彦（調査課長）

庶 務 藤田 守彦（総務課主事）

調査指導 寺崎 裕助（調査課調査第二係長）

調査担当 赤羽 正春（調査課主任）

調査職員 高橋 知之（調査課専門員）

木村 孝一（調査課嘱託員）

[二次調査 平成 5 年度]

調査期間 平成 5 年 4 月 12～11月 12 日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 本間栄三郎）

調 査 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

管 理 藍原 直木（専務理事・事務局長）

渡辺 耕吉（総務課長）

茂田井信彦（調査課長）

庶 務 藤田 守彦（総務課主事）

調査指導 寺崎 裕助（調査課調査第二係長）

調査担当 赤羽 正春（調査課主任）

調査職員 高橋 知之（調査課専門員）

木村 孝一（調査課嘱託員）

[二次調査 平成 6 年度]

調査期間 平成 6 年 4 月 12～8 月 15 日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 本間栄三郎）

調査 (財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

管 理 藍原 直木 (専務理事・事務局長)
 渡辺 耕吉 (総務課長)
 茂田井信彦 (調査課長)
 庶 務 泉田 誠 (総務課主事)
 調査指導 寺崎 裕助 (調査課調査第二係長)
 調査担当 春日 真実 (調査課文化財調査員)
 調査職員 上野 一久 (調査課主任調査員)
 中沢 敏 (調査課主任調査員)
 大杉 真実 (調査課嘱託員)

B 整理体制と経過

出土遺物の水洗・注記作業は調査現場で発掘調査と平行して実施した。その後本格的な整理作業は平成5年12月～平成6年3月、平成6年12月～平成7年3月、平成7年12月～平成8年3月、平成8年12月～平成9年3月にかけて埋蔵文化財団本部・新潟県埋蔵文化財センターにおいて実施した。遺物の接合・復元・実測、遺構・遺物の製図などの作業については、多くを日々雇用職員が行った。

なお、上郷遺跡の平成4年度に調査された部分 (8,000m²) については整理作業がすでに終了しており、平成6年3月に『上郷遺跡Ⅰ』として発掘調査報告書が刊行されている。

[平成5年度]

主 体 新潟県教育委員会 (教育長 本間栄三郎)
 整 理 (財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
 管 理 藍原 直木 (専務理事・事務局長)
 渡辺 耕吉 (総務課長)
 茂田井信彦 (調査課長)
 庶 務 泉田 守彦 (総務課主事)
 指 導 寺崎 裕助 (調査課調査第二係長)
 担 当 赤羽 正泰 (調査課主任)
 職 員 高橋 知之 (調査課専門員)
 木村 孝一 (調査課嘱託員)

[平成6年度]

主 体 新潟県教育委員会 (教育長 本間栄三郎)
 整 理 (財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
 管 理 藍原 直木 (専務理事・事務局長)
 渡辺 耕吉 (総務課長)
 茂田井信彦 (調査課長)

庶務 泉田 誠（総務課主事）
 指導 寺崎 裕助（調査課調査第二係長）
 担当 上野 一久（調査課主任）
 職員 春日 真実（調査課文化財調査員）
 大杉 真実（調査課嘱託員）

[平成 7 年度]

主体 新潟県教育委員会（教育長 平野 清明）
 整理 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
 管理 藍原 直木（専務理事・事務局長）
 山上 利雄（総務課長）
 龟井 功（調査課長）
 庶務 泉田 誠（総務課主事）
 指導 寺崎 裕助（調査課調査第二係長）
 担当 春日 真実（調査課文化財調査員）
 職員 上野 一久（調査課主任調査員）

[平成 8 年度]

主体 新潟県教育委員会（教育長 平野 清明）
 整理 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
 管理 藍原 直木（専務理事・事務局長）
 山上 利雄（総務課長）
 龟井 功（調査課長）
 庶務 泉田 誠（総務課主事）
 指導 寺崎 裕助（調査課調査第二係長）
 担当 春日 真実（調査課文化財調査員）
 職員 上野 一久（調査課主任調査員）
 高橋 洋一（調査課主任調査員）
 木村 孝一（調査課嘱託員）

年度	月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
平成 2 年度								■■■					
平成 3 年度													
平成 4 年度													
平成 5 年度													
平成 6 年度													
平成 7 年度													
平成 8 年度													

[調査] [整理]

第 2 表 上野遺跡発掘調査・整理作業行程

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置

上郷遺跡は、新潟県中蒲原郡横越町大字横越字上郷402番地ほかに所在する。標高は3.1~3.9mを測り、現状は水田である。

横越町は新潟市の南東に位置し、面積23.622km²、人口10,457人（平成8年12月末現在）の町である。かつては「越後千町歩地主」と称された豪農伊藤家による大土地所有がみられた。現在でも総面積の55%を耕地が占め、農村の景観をとどめるが、近年、高速交通体系の整備とともに企業誘致・宅地開発が進められ、様相が変化しつつある。また、このような開発によって人口増加が促された結果、平成8年1月1日に町制を施行するに至っている。

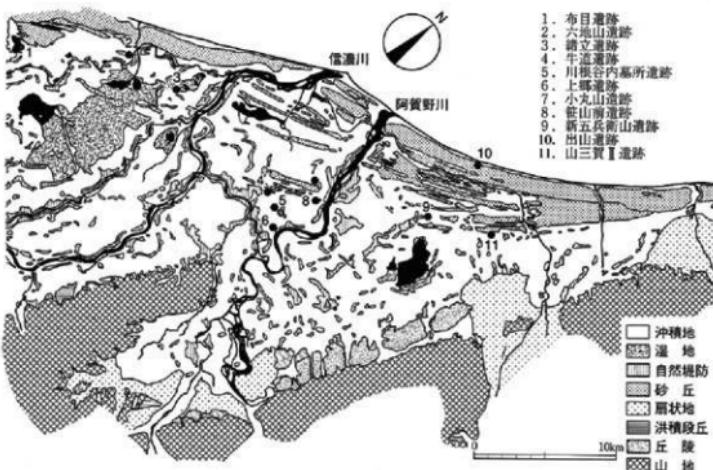
2. 地理的環境

A. 地形概観

上郷遺跡は、蒲原平野を貫流する阿賀野川下流域左岸に位置する。

蒲原平野は、西に頸城丘陵の延長部に当たる西山丘陵、角田・弥彦山塊、東に魚沼丘陵の延長部に当たる東山丘陵、新津丘陵、笹神丘陵、五頭連峰、櫛形山脈が控え、これら山塊に囲まれている。

蒲原平野の中央部には阿賀野川、信濃川が流れ、日本海へといたる。蒲原平野は、おもにこれら2大河



第1図 蒲原平野の地形と主要遺跡（田中他1996を一部改変）

川によって運搬される土砂の堆積による沖積平野であり、その沖積層は、他の海岸平野の沖積層に比してきわめて厚いといわれる。2大河川の蛇行帯には、自然堤防が非常に多く発達し、その後背湿地にはそれら自然堤防に取り囲まれるようにして多数の湖沼群が取り残された。それらの湖沼群は蒲原平野を流れる大小の河川とともに水運の発達を招来し、人と物資の移動を容易にした。他方、そのような広大な湿地帯は、近年土地改良技術が向上するまで、水稻農業の発達には大きな障害として立ちはだかってきた。

ところで、蒲原平野の海岸側には海岸線に沿って10列からなる砂丘が発達し、新潟砂丘とよばれている。新潟砂丘はその形成期から新砂丘にあてはまるが、各砂丘列はその形成時期をさらに細分化することにより、3群に区分される〔新潟古砂丘グループ1974〕。また、各砂丘列上では多数の地点から遺物出土も確認されており、最も古いもので縄文時代前期初頭にまで遡る〔田中ほか1996〕(第1図)。

以上、遺跡をとりまく地形を、上郷遺跡が位置する越後平野を中心に概観した。次項では、これまでの地学的研究成果に依拠しながら、遺跡をとりまく古環境の概要をつかむべく、蒲原平野全体の形成プロセスについて述べる。

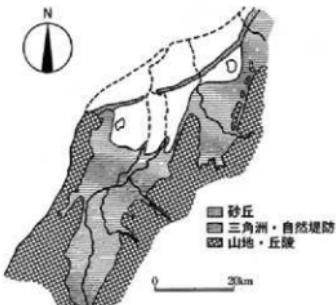
B. 蒲原平野の形成

蒲原平野の沖積層を対象とした珪藻分析では、ほぼ全層にわたって淡水生種が卓越することが知られている〔新潟珪藻グループ1979〕。このことから、縄文海進時においても海水の進入を防ぐような砂丘もしくは砂洲といったものが常に前面に存在し、陸水が卓越する潟湖の状態であったと考えられている(第2図)。その後、信濃川が南から島趾状三角洲をつくりながらこれを埋め立てた結果、泥炭の堆積する沼沢地に変わっていった〔成瀬1995〕。

他方、海岸地域では、5000年前頃から小規模な海面低下にともなって砂堆列が海側へ成長し、何列もの砂丘を形成していく〔成瀬1995〕。一般の海岸平野では前面の浅海がデルタとして埋められていくところを、蒲原平野では何列もの砂丘列となって汀線を前進させていった〔歌代1979〕。前項で述べた、3群に区分される10列の砂丘列である。

ところで、これらの砂丘列は、海岸側すなわち新しいほど高度が高く、連続性もよいが、内陸側すなわち古いほど高度も低く連続性も悪くなる。これは沈降の影響を受けた結果と考えられ、それが極めて厚い沖積層が形成される要因ともなった。他方、このような著しい沈降により、平野中央部の内陸側の砂丘列が沖積面下に埋没している可能性も指摘してきた〔新潟古砂丘グループ1978〕。

以上のことから、蒲原平野の構成を考えた場合、砂丘部とその背後(内陸)に広がる沖積地とに大別されよう。上郷遺跡は、新砂丘に分類される亀田砂丘の前列(内陸側)南辺から南東約3kmに位置する(第3図)。現地形の上では、調査区の大半が阿賀野川左岸の自然堤防上に立地し、一部はその後背湿地にあると考えられる。



第2図 縄文時代後期の蒲原平野
(成瀬1995を一部改変)

3. 歴史的環境

A. 周辺の遺跡

上郷遺跡周辺において人間の活動の痕跡が認められるのは縄文時代前期初頭からである。縄文時代の遺跡は亀田砂丘前列上に集中してみられ、縄文前期初頭から晩期中葉にわたる土器の出土が確認された笹山前遺跡〔新潟市教育委員会1996〕、中期初頭～前葉の土器が出土し、その規模や土器の採集量から中核的な遺跡となる可能性が高い砂崩遺跡〔亀田町史編さん委員会1988〕がある。

弥生時代および古墳時代の遺跡も砂丘前列上を中心に分布がみられるが、遺跡数は縄文時代より減少し、遺物出土量も少ない。弥生時代の遺跡としては、中期から後期の堅穴住居跡を検出した横越町小丸山遺跡〔家田1987〕、弥生時代中期から後期の土器が出土し、菅玉末製品の出土により玉造りが営まれていたと推定される山ノ遺跡〔川上1994〕および前郷遺跡〔亀田町史編さん委員会1988〕がある。古墳時代の遺跡としては、住居跡および土塙墓が確認された既述の笹山前遺跡〔新潟市教育委員会1996〕、古墳時代初頭の土器が出土し、その規模から当時の中核的な集落と推定される武左衛門裏遺跡および手代山排水路遺跡〔亀田町史編さん委員会1988〕がある。

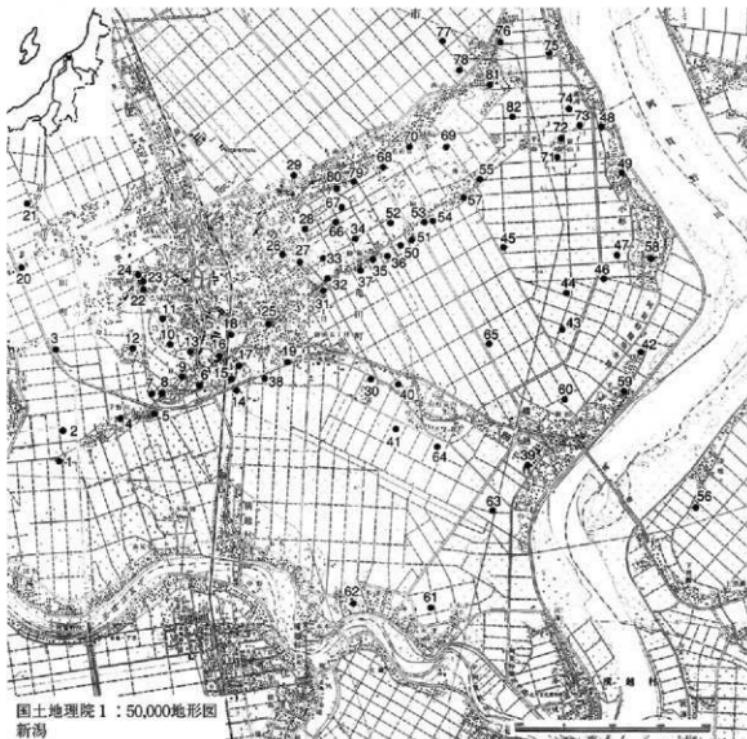
奈良・平安時代に入り、遺跡は急激に数を増し、その立地も砂丘上にとどまらず沖積地へと広がりを見せる。奈良・平安時代以降の遺跡としては、7世紀末～16世紀の遺物が出土し、平安期に一般集落、中世に至って在地領主層の住居地であったと推定される荒木前遺跡〔渡辺1991・川上1996〕、これに隣接し、9世紀から15世紀にわたる遺物が出土し、9世紀頃の堅穴住居・鐵治遺構等が検出された中の山遺跡〔川上ほか1983〕、14棟を数える掘立柱建物群とその周囲に土坑・井戸・畝状遺構等が検出され、9世紀中頃～10世紀後半の集落跡である新潟市小丸山遺跡〔新潟市教育委員会1987・新潟市史編さん原始・古代・中世史部会1994〕、13世紀～15世紀頃の堅穴状遺構・柱列・小鐵冶跡が検出された三王山遺跡〔酒井1980〕がある。

B. 文献資料からみた古代の上郷遺跡周辺

越後国の分割 乙巳の変（645年）の後、北陸地方を一国として設置された越国は、持統天皇3（689）年から同天皇6（692）年の間に、越前・越中・越後に3分された。この時点での越後国は阿賀野川以北をその領域とし、沼垂郡・磐船郡の2郡を分けた。この領域は、既に畿内政権が大化3（647）年に渟足権を、大化4（648）年には磐船権を築き、北方の辺境地防衛を推し進めていたところである。大宝2（702）年に越中国より頸城・魚沼・古志・蒲原の4郡が越後国に編入された後、和同5（712）年に至り後世の越後国の領域が定まった。

郡・郷 上郷遺跡は、当時の行政区画にあっては蒲原郡ないしは沼垂郡に属すと考えられる。承平年間（931～938年）に作られた『名和抄』では、蒲原郡は郡内に日置・桜井・勇礼・青海・小伏の5郷が、沼垂郡には足羽・沼垂・質地の3郷があったことを伝えており、これまでに『延喜式』（927年）に記された神社名や地名などから、これらのうちいくつかは比定地が挙げられてきている。

蒲原郡についてみると桜井郷については現在の弥彦村周辺、勇礼郷は三条市井栗周辺、小伏郷について

国土地理院 1 : 50,000地形図
新潟

1 西前郷道路	鶴文後堀・台良・平安
2 幸通前道跡	平安
3 錦町道跡	台良・中世
4 貝山道跡	平安
5 八幡前道跡	平安
6 手代山道跡	中世
7 手代山跡木路	新北中瀬・古墳
8 左近町前道跡	古墳
9 日水道跡	台良・平安
10 中の山道跡	台良・平安・中世
11 月見道跡	台良・平安
12 日水前道跡	鶴文後堀・台良・平安・中世
13 党木道跡	鶴文中瀬・丸瀬・台良
14 牛糞道跡	平安
15 城山人道跡	鶴文中瀬・新北中瀬・
16 城山人道跡	台良・平安
17 青柳山道跡	鶴文・勢生・台良・平安
18 三工山道跡	古墳・平安・中世
19 四田道跡	平安
20 下西道跡	古墳
21 稲ノ子道跡	平安
22 風山道跡	台良・平安
23 川西道跡	平安・中世
24 市助山道跡	平安・中世
25 芙島道跡	平安
26 刈山道跡	平安
27 塚山道跡	平安・近世
28 霧山道跡	台良・平安
29 北山道跡	平安
30 上沼道跡	台良・平安
31 伊賀道跡	平安
32 上ノ山道跡	台良・平安・近世
33 三河町道跡	台良・平安・中世
34 前山道跡	平安
35 砂利道跡	鶴文中瀬・台良・平安
36 砂利道跡	鶴文中瀬・台良・平安
37 前野道跡	鶴文中瀬・台良・近世
38 岩井道跡	平安
39 桃山道跡	中世
40 川谷内道跡	平安
41 川谷内中瀬	平安・中世
42 下野道跡	平安
43 宮原町道跡	台良・平安
44 上山道跡	鶴文後堀・台良・平安
45 江元道跡	平安
46 山のハサハ道跡	平安
47 石舟人道跡	平安・中世
48 忍野人道跡	台良・平安
49 稲荷C道跡	平安
50 底原道跡	鶴文後堀・弥生後期・台良
51 山ノ家道跡	鶴文前堀・中瀬・弥生
52 砂利縣道跡	台良・平安
53 脇山道跡	台良・平安
54 小丸山道跡	鶴文中瀬・晚期・弥生
55 嘉山道跡	中世・鬼頭・台良・平安
56 岸山道跡	平安・中世
57 上の山道跡	新北中瀬・平安
58 松田山道跡	平安
59 下野山道跡	近世
60 佐代山道跡	平安
61 天王山道跡	平安
62 円通山石仏	中世
63 上郷山道跡	古墳・平安
64 上郷C道跡	平安
65 新田山道跡	台良・平安
66 金城山道跡	台良・平安
67 寺七山道跡	台良・平安
68 丸山道跡	平安
69 京町山道跡	新北中瀬・平安・中世
70 若荷山道跡	平安
71 旗山道跡	鶴文後堀・晚期・弥生後期
72 神明社森道跡	古墳・平安
73 城山道跡	鶴文・古墳・平安・中世
74 中山道跡	鶴文後堀・台良・平安
75 織山石仏	中世
76 底り山人道跡	平安
77 底り山D道跡	平安
78 小丸山道跡	新北中瀬・古墳・平安
79 清水が丘道跡	平安
80 大道外堀跡	平安
81 佐山道跡	鶴文・中世
82 松山内山道跡	平安

第3回 周辺の道跡一覧

は三条市上保内周辺とされている。青海郷については加茂市周辺と新潟市蒲原周辺とする二説があり、日置郷については新津市金津周辺、矢代田・小須戸周辺、吉田町周辺などの説があり、諸説の一致をみていない。ただし、いずれの説をとったとしても、上郷遺跡周辺に比定される蒲原郡の郷は存在しない。

沼垂郡の3郷については、質地郷が新発田市・加治川村などの加治川流域の地域に比定されているほかは不明である。蒲原郡と沼垂郡の郡境を阿賀野川とすると、沼垂郷については、阿賀野川下流の右岸周辺の可能性が高いが、阿賀野川の河道域も古代においてどこであったかははっきりとしていない。享保15(1731)年に砂丘を掘削し、人工的に河口を設定する以前の阿賀野川は砂丘にぶつかり西流し、現在の通船川にあたる部分を流れおり、古代においてもここを流れていたとすれば、現在の新潟市山ノ下・松浜周辺が沼垂郷に比定される。ただし、この周辺は古代の遺跡はあまり確認されておらず、遺跡の多い亀田砂丘周辺が沼垂郡に含まれる可能性も指摘されている【金子1983・坂井1989】。古代の行政区画で上郷遺跡が沼垂郡沼垂郷に属していた可能性はあるう。

初期莊園 8世紀中葉には、越後においても莊園開発の動きが活発化する。沼垂郡に初期莊園は知られていないが、蒲原郡においては、宝亀11(780)年の『西大寺資材流記帳』により西大寺領鶴橋庄・槐田庄が存在したことが知られる。鶴橋莊は五泉市橋田小字鶴橋に、槐田莊は三条市付近にそれぞれ莊城が比定されている。これら二つの初期莊園および、古代の郷比定地が丘陵付近に多く存在する点は古代の開発を考える上で注目される。ただしこれら2つの初期莊園は、以後文献の記録が無く、成立した後早い段階で廃絶した可能性が高い。

蒲原・沼垂郡の有力者 越後国における氏族・豪族に関しては、近年の小林昌二氏の精力的な研究がある【小林1994・1996】。ここでは氏の業績に依り、文字資料にあらわれる蒲原・沼垂郡の氏族・豪族について見ていく。

蒲原郡では、八幡林遺跡出土木簡から高志君五百鷦・高志君大虫が蒲原郡の郡務に従事していたことが知られる。また『和名抄』・『延喜式』に記された郷名・神社名のうち氏族名と関連するものとして、小伏郷・小布勢神社・日置郷があり、布施氏・日置氏の存在が推測できる。このほか延暦3(784)年には蒲原郡の三宅連笠雄麻呂が稻十万束を貯え、これを貧困者の救済や道路・橋を整備するなどの社会事業に当て、從八位の位階をうけたことが知られている。高志君氏については、『西大寺資材流記帳』により頸城郡に郡司として存在が知られる氏族であり、また『国造本記』にみられる高志深江圍造と系譜的につながりを持つ可能性がある。一方、布施・日置氏は越中国新川郡・信濃國更級郡にそれぞれ布施・日置神社があり、越後周辺に両氏がセットとなって存在している氏族である。三宅連氏については5・6世紀に設置された「屯倉」を管掌した在地豪族と系譜的につながるものとの指摘がある（桑原1986）。

沼垂郡では齊明天皇4(658)年に大伴君裕積が沼足橋経営の功績により位階を受けたことが知られているほか、発久遺跡出土木簡・墨書き土器より磯部・物部・山部の各氏の存在したことがわかる。また曾根遺跡出土木簡より「井於連」の存在が確認できる。磯部氏については頸城郡に水鳥磯部神社、三島郡に御嶋石部神社、古志郡に樋原石部神社があり、越後国中部～南西部に分布するほか、『続日本紀』天平神護2(766)年条に越前国足羽郡上家郷人磯部大浜の名が見える。物部・山部氏は和島村八幡林遺跡木簡、『和名抄』に記された郷名や『延喜式』に記された神社名から、物部は古志郡・頸城郡、山部は古志郡に存在が知られる氏族である。井於連氏については、『続日本紀』天平神護2(766)年に「摂津国人姓七位下甘尾雷麻呂に姓を井於連と賜う」とあることが知られるのみである。

第Ⅲ章 調査の概要

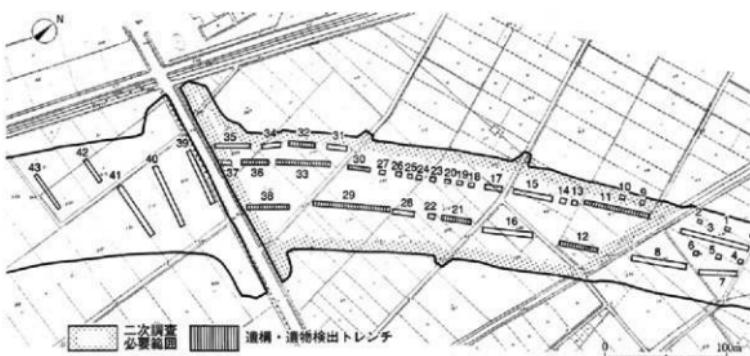
1. 一次調査

現地は周知の遺跡である上郷A・B遺跡に隣接し、当初から遺構・遺物の存在が予測された。一次調査は平成2年度・5年度の2回に分けて、平成2年は県教委、平成5年度は埋文事業団が実施した。各年度の調査範囲は、平成2年度が県道木津線以東、平成5年度はこれより西側である（第4図）。

調査方法は対象地域全体に任意にトレントを設定し、バック・ホーで薄く土層を剥ぎ、遺構・遺物の有無・土層の堆積状況などを確認するものである。二度の一次調査によるトレントの数は合計85基（2,300m²）で、調査対象面積77,000m²に対する割合は約3%である。調査の結果、11・12・21・29・30・32・33・36・38トレントで土師器・須恵器等の遺物や遺構が検出され、出土遺物の特徴・遺構中の植物遺体のC14の結果から、古代～中世にかけての集落跡および水田跡の性格が認められるとし、30,000m²の二次調査が必要となった。またこの結果、従来上郷A・B遺跡と区別されていた両遺跡は本来一連の遺跡であることが明らかとなり、総称して上郷遺跡と登録・呼称することになった。

2. 調査の方法

グリッドの設定（第5図） バイパス共用後には隣接地域の開発が予想された。そのため、今後の開発に伴う発掘調査を考慮し、国土座標軸に沿った10m単位の方眼を組み、これを大グリッドとした。大グリッドは南北方向をアルファベット、東西方向を算数字とし、これの組み合わせによって表示した。また、大グリッドはさらに2m方眼で分割し、1～25の小グリッドとしP28-5のように表記した。



第4図 一次調査のトレントの位置と二次調査必要範囲

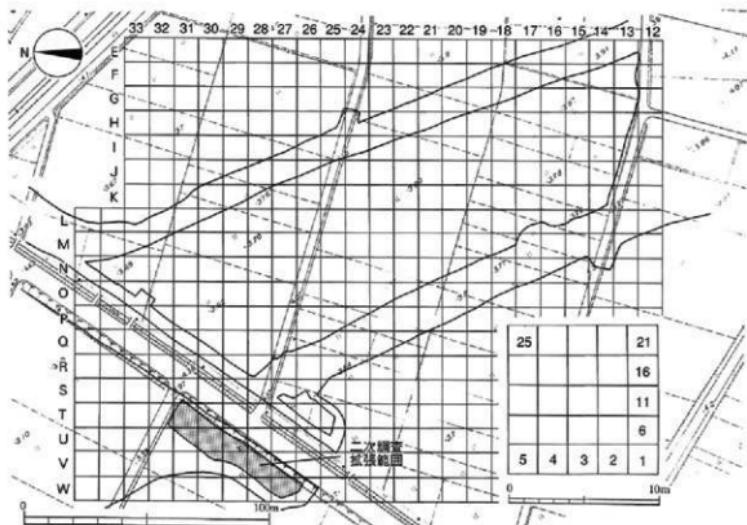
排水施設 遺跡は沖積地に立地し、周囲で水田が耕作されているため、掘り下げると地下水が湧出する状況であった。また降雨によって調査区が湛水することがないように、排水施設は不可欠のものであった。これには暗渠で対応した。暗渠は幅50cm、深さ1.5m前後の溝をバック・ホーで掘削し、底面に多孔の塩化ビニールパイプをいた後、碎石で溝を充填するものである。暗渠は調査区の一片もしくは2辺に敷設し、集水溝を設け、常時100Vの電動ポンプで排水した。また、常時排水を可能にするため調査区の脇に電線を架設した。

掘削作業 地表から平安時代の遺物包含層（V層）までは約1mの層厚があることから、I～VI層まではバック・ホーを用いていた。V層は遺物が希薄なところを除き人力で掘削し、ベルトコンベアーを用いて廃土を移動した。遺構検出はVI層で主に行なった。

遺構番号 平成5年度は建物・井戸・土坑・溝などの遺構の種別ごとに番号を付した。平成6年度は、遺構の種別で分けずに、検出順に一連番号を付した。また両年度とも遺構番号が1番から始まっている。そのため、以下の報告書内の記述では93-S K 1のように表わしている。

3. 調査の経過

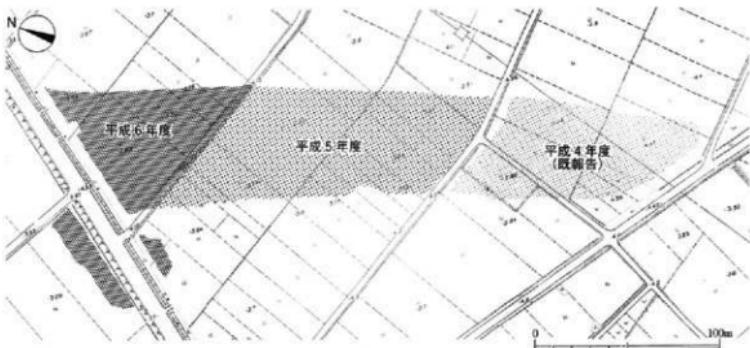
発掘調査は新潟県教育委員会が主体となり（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団が委託を受けて行った。調査期間は冬期の現場休止期間を含め平成4年から6年にかけての3か年である。調査区東側から西へ向かって調査を行った。各年度の調査面積は平成4年度が9,000m²、5年度が14,000m²、6年度が8,200m²である（第6図）。



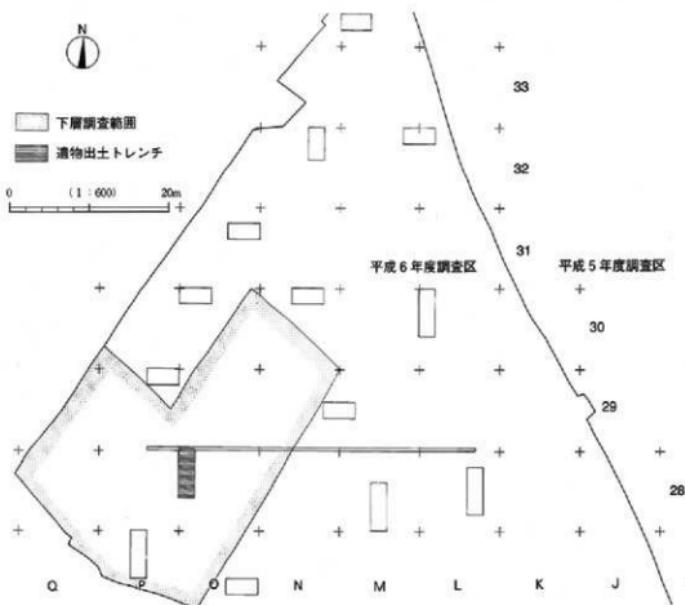
第5図 グリッド設定図

3. 調査の経過

なお、平成6年度には、遺構の広がりが調査区南西側に伸びている可能性が高まったため、南西側550m²について調査を行なった（第6図）。またVI層から古墳時代前期の遺物が出土したため、平安時代の遺構が希薄な地点や遺構調査・実測が終了した地点について、2m×4~6mのトレンチを14基入力で掘削し、遺構・遺物の有無を確認し、700m²について調査が必要であると認められた（第7図）。これについては平安時代の調査終了後、調査を行い、平成6年8月12日に発掘調査を終了した。



第6図 各年度の調査範囲

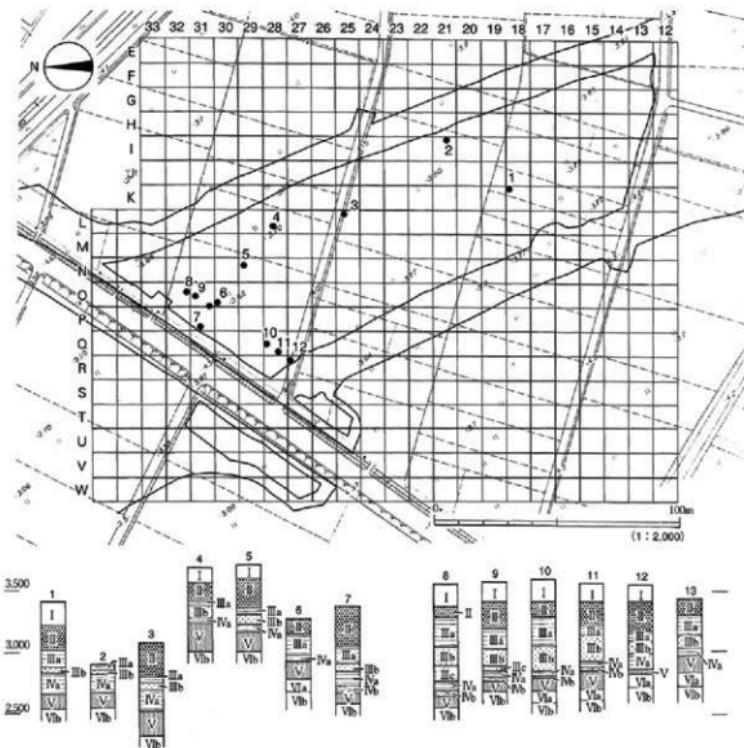


第7図 下層調査範囲と先行トレンチ

第Ⅳ章 遺 跡

1. 現地形と層序

現地形は、21H・25K・30N・31Oの各グリッド付近で削平を受けたところを除き、大半が標高3.6～3.9mを測りほぼ平坦であるものの、30Uグリッド付近では3.1m程に下がり、県道を境として地表面に高低差が認められる。この高低差は、大正3年発行（明治44年測量）の土地更正図から読み取れる土地利用の差異ともみることができる。これは、概ね県道を境として南東側に広がる調査区が阿賀野川左岸の自然堤防上に位置し、北西側に広がる調査区がその後背湿地にあることを示すものといえる。



第8図 遺跡の層序

基本層序は、削平・旧地形の様子等により観察地点で土色・土質・土層に若干の相違が認められるが、基本的にはI～VI層に区分できる。またⅢ層については、さらにa・b・cの3層に、IV・VI層については、a・bの2層に区分した(第8図)。なお、調査区全体を通して砂丘の埋没は確認されなかった。各層の概要は以下に示す通りである。

I層：表土層。水田の床土である。

II層：灰褐色(7.5YR6/2)シルト層。マンガン粒を多く含む。近・現代の遺物包含層である。

III層：3層に細分した。

III a層：にぶい黄橙色(10YR7/3)シルト層。南に向かって漸移的にグライト化が進み、灰色を呈す。マンガン粒を含む。遺物は出土していない。近世ないしはそれ以降の洪水堆積層と考える。

III b層：褐灰色(7.5YR4/1)シルト層。南に向かって漸移的にグライト化が進み、緑灰色を呈す。近世の遺物包含層である。

III c層：b層に似たシルト質の土層と黒色土による互層。31・32Nグリッド付近でのみ確認された。

IV層：2層に細分した。

IV a層：にぶい黄橙色(10YR7/3)シルト層。南に向かって漸移的にグライト化が進み、明緑灰色を呈すとともに粘性が強まる。遺物は出土していない。10世紀以降・18世紀以前の洪水堆積層と考える。

IV b層：暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土層。上部に黒色の炭化物が堆積する。

V層：黒褐色(10YR3/2)粘土層。南に向かって漸移的にグライト化が進み、緑黒色を呈す。マンガン粒を含む。平安時代の遺物包含層である。

VI層：2層に細分した

VI a層：明黄褐色(10YR7/6)粘土層。南に向かって漸移的にグライト化が進み、緑灰色を呈するようになる。炭化物を少量含む。古墳時代前期の遺物包含層であり、平安時代の遺構検出面でもある。

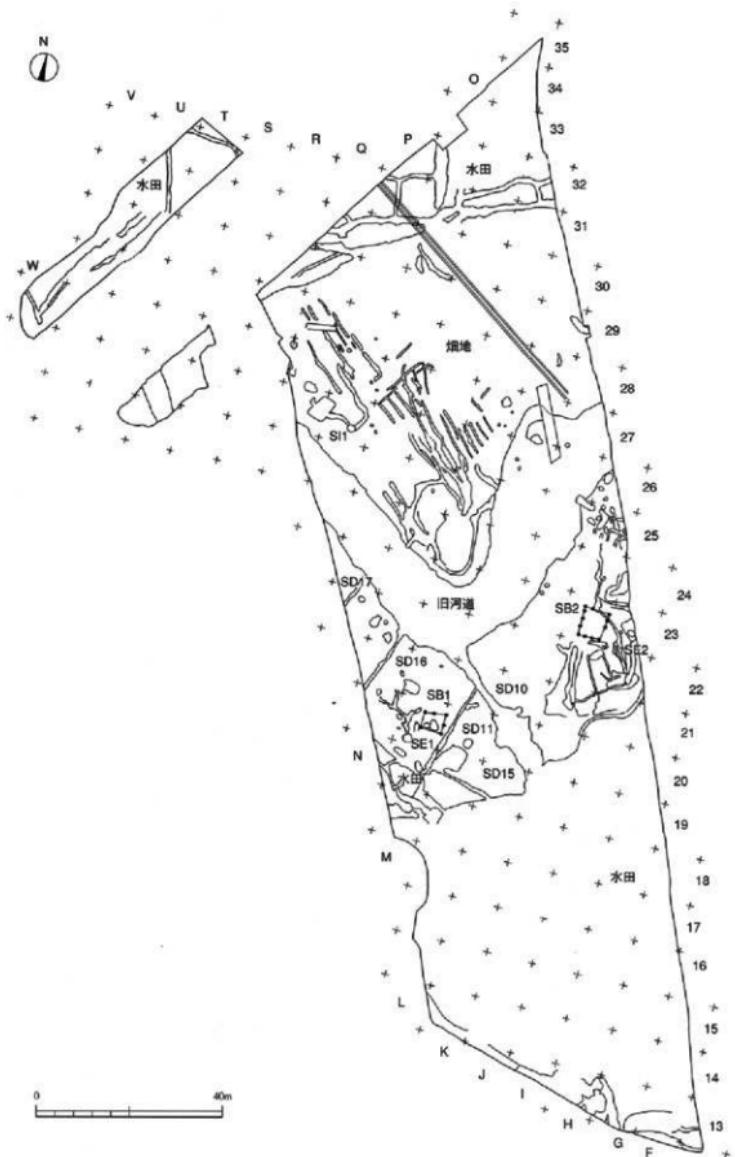
VI b層：明黄褐色(10YR7/6)粘土層。南に向かって漸移的にグライト化が進み、緑灰色を呈するようになる点はVI a層と同じであるが、炭化物は含まない。遺物は出土していない。

2. 概 要

遺跡の時期は、出土遺物からみて古墳時代と平安時代とに大別できる。このうち古墳時代は遺構が明確でない。検出された遺構はいずれも平安時代のものであり、掘立柱建物2、井戸3、土坑49、溝63、不明遺構8、水田跡、ピットなどがある。遺構は調査区中央から北東側に集中し、南東側では希薄である。また調査区中央や北よりには自然流路(S D10)が検出された。

掘立柱建物は20L、23Iでそれぞれ1棟ずつ検出された。井戸2基は2基とも素掘りで、掘立柱建物に隣接して存在する。土坑は25I付近に集中が見られるほか、掘立柱建物・竪穴住居周辺にもまとまりがある。

溝は調査区中央付近を蛇行するS D10から派生するS D10'は水路の可能性がある。またS D11・16・17は土地区画と関連のある溝の可能性が高い。他の多くは畠の歴の痕跡と考えられ、S D10の東側に集中



第9図 調査区全体図

が認められる。水田跡は調査区北側と東側で検出された。また遺構が検出されなかった調査区南東側は、プラントオパール分析の結果、穀のプラントオパールが多く検出されており、水田として利用された可能性が高い。

このような遺構分布のあり方は調査区内の微地形とよく一致する。9~10世紀の地形をみると、22Hと18Lを結ぶラインから南は低地に相当するため、一時南東に向かって漸移的に標高を下げる。そして、17Hグリッド付近で最深となった後、徐々に標高を上げ22Hと18Lを結ぶラインと同程度の標高を測るようになる。また、調査区中央部やや北よりでは、27J・23L・25Pの各グリッドを結ぶようにV字に蛇行した旧河道(S D10)が確認でき、この両岸の25Iグリッド付近・26・27Lグリッド付近・26Pグリッド付近には部分的な高まりが確認できる。そして、河跡以北の地形は、北西方向に漸移的に低くなる傾斜をみせるようになる。これを遺構の分布状況と照合すると、調査区内で最も標高の高い地点が居住域となり、その周辺に畠地が広がり、低地は水田として利用されていることがわかる(第10図)。

3. 遺構各説

A. 古墳時代前期

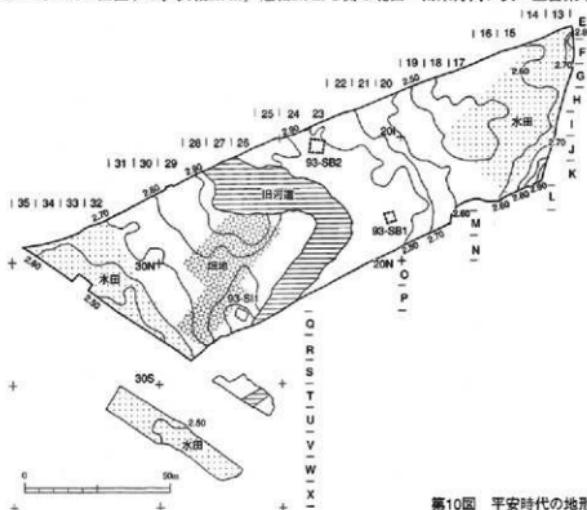
明確な遺構は確認できなかったが、土器集中地点が11箇所確認できた。以下、概要を述べる。

土器集中地点1(図版1・2・56・57)

P29-14・15・19・20に位置する。長軸5.4m、短軸2.0mを測る北西-南東方向に長い土器集中地点。土器の垂直分布は標高2.400m付近に集中する。高杯(2)・器台(3・4)・釜(10)が出土した。

土器集中地点2(図版1)

Q29-11・12・16・17に位置する。長軸2.7m、短軸1.9mを測る北西-南東方向に長い土器集中地点。



第10図 平安時代の地形

遺物の垂直分布は標高2,400m付近に集中する。釜(9・21)が出土した。

土器集中地点3(図版1・56)

Q27-7に位置する。長軸1.9m、短軸1.0mを測る東-西方向に長い土器集中地点。遺物の垂直分布は2,500m付近に集中する。団化した遺物は出土していない。

土器集中地点4(図版1)

Q26-13に位置する。長軸1.6m、短軸0.8mを測る南北方向に長い土器集中地点。土器の垂直分布は2,500m付近に集中する。高杯(1)・釜(9)が出土した。

土器集中地点5(図版1・56)

Q26-2・7に位置する。径約1.0mの略円形の土器集中地点。土器の垂直分布は標高2,400m付近に集中する。団化した遺物は出土していない。

土器集中地点6(図版1・3・57)

O28-15・P29-6・20・Q28-6・11に位置する。長軸11.2m、短軸5.1mを測る東-西に長い大型の土器集中地点。遺物の垂直分布は標高2,400m付近に集中する。釜(7・13・14・16~20・23・24)が出土した。

土器集中地点7(図版1・57)

O28-25に位置する。径約0.7mの略円形の土器集中地点。遺物の垂直分布は2,500m付近に集中する。

壺(6)が出土した。

土器集中地点8(図版1)

O27-19に位置する。径約0.7mの略円形の土器集中地点。遺物の垂直分布は2,500m付近に集中する。団化した遺物は出土していない。

土器集中地点9(図版1)

Q27-7に位置する。長軸1.9m、短軸1.0mを測る東-西方向に長い土器集中地点。遺物の垂直分布は2,500m付近に集中する。団化した遺物は出土していない。

土器集中地点10(図版1・56)

Q27-7に位置する。長軸1.9m、短軸1.0mを測る東-西方向に長い土器集中地点。遺物の垂直分布は2,500m付近に集中する。団化した遺物は出土していない。

土器集中地点11(図版1)

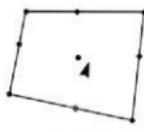
Q27-7に位置する。長軸1.9m、短軸1.0mを測る東-西方向に長い土器集中地点。遺物の垂直分布は2,500m付近に集中する。団化した遺物は出土していない。

B. 平安時代

建物跡

93-SB1(図版6・42)

20Lに位置する2(3.8~4.0m)×2(2.8~3.5m)間となる平面が台形状となる掘立柱建物。平面積は12.1m²を測り、長軸の方向はN-22°-Wである。北側桁行は西から1.7m・2.1m、南側は柱穴6が検出されておらず、柱穴3と9の間隔は4.0mである。西側梁間は北側から1.15m・1.65m、東側梁



93-SB1

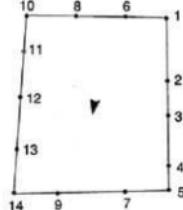
間は北から1.4m・2.1mである。柱穴の覆土は炭化物を少量含む暗青灰色粘土もしくは暗青灰色シルトである。柱穴からは土器器が出土した。

93-S B 2 (図版6・42)

23 Iに位置する3(4.5~5.2m)×4(5.7~6.0m)間となる平面が台形状の掘立柱建物。平面積は28.0m²を測り、長軸の方向はN-15°-Wである。西側桁行は北から1.45m・1.15m・1.15m・1.95m、東側桁行は北から1.45m・1.75m・2.80m、北側梁間は西から1.5m・2.15m・1.55m、南側梁間は西から1.35m・1.75m・1.55mを測る。東側桁行の柱穴11は検出されなかった。柱穴の覆土はそれぞれ状況が異なる。掘立柱建物の柱穴からの遺物の出土はなかった。

93-S I 1 (図版6・42)

26 O・Pに位置する長軸5.2m、短軸3.6mとなる平面が長方形状の竪穴建物。平面積は18.7m²を測り、長軸の方向はN-28°-Eである。柱穴は4基で概ね対角線上に位置する。カマドは確認できなかった。93-S D50と切り合いが見られるが前後関係は不明。土器類が比較的まとまって出土した。



93-S B 2

井戸

93-S E 1 (図版6・43)

20 L-3・4に位置する長軸1.9m、短軸1.8m、深さ50cmを測り、平面が隅丸方形、断面はすり鉢状となる井戸。覆土はレンズ状堆積で、11層に分かれれる。6・7層はピート層、10・11層は多量の炭化物を含む層である。土器類は定量出土した。

93-S E 3 (図版6・43)

23 H-8・13に位置する長軸1.7m、短軸1.4mを測り、平面が梢円形となる井戸。側壁は外傾して広がる。覆土はレンズ状堆積で13層に分かれ、8・10・11・13層はピート層である。土器の出土量は少ない。

土坑

93-S K 70・71 (図版7・43)

22 Hに位置する。S K70は長軸7.0m、短軸3.6m、深さ16cmを測り、平面が梢円形状の大型の土坑、覆土は3層に分かれ、1層は暗灰褐色粘土、2層は青灰色シルト、3層は青灰色粘土であり、5mm前後の炭化物を、1層は多量に2層は少量含む。93-S D22・29・35・26と93-S K71と切り合いがあり、93-S D22・29に切られ、93-S D35とは同一の覆土が堆積しており、近接した時期のものと考える。93-S D26・S K71との前後関係は不明である。多くの土器が出土した。

S K71は長軸1.1m、短軸0.9m、深さ25cmを測る隅丸長方形の土坑である。

93-S K 14 (図版7・43)

19 L-12・17に位置する梢円形の土坑。長軸2.28m、短軸1.34m、深さ13cmを測る。底面は北東から南西に向かって緩やかに傾斜し、側壁は外傾して立ち上がる。覆土は2層に分かれれる。いずれも炭化物粒を含む淡橙灰色粘土である。

93-S K 1 (図版7・44)

19 L-19・20・24・25に位置する梢円形の土坑。長軸2.53m、短軸1.21m、深さ14cmを測る。底面は南

東から北西に向かって緩やかに傾斜し、側壁は内嚙気味に立ち上がる。覆土は3層に分かれ。いずれも淡灰色シルトを基調とする土層であるが、2層は炭化物を含む。須恵器壺、土師器無台椀・釜・鍋などが出土した。

93-S K 11 (図版7・43)

20K-7・8に位置する円形の土坑。径1.89m～2.3m、深さ7cmを測る。断面は皿状である。覆土は青灰粘土の單層である。土師器鍋などが出土した。

93-S K 7 (図版7・44)

20L-11・12に位置する不整楕円形の土坑。長軸2.62m、短軸1.82m、深さ11cmを測る。断面は皿状である。覆土は2層に分かれ。1層は暗青灰色シルト、2層は暗青灰色粘土である。93-S K 8と一部切り合があり、93-S K 8を切る。須恵器無台杯、土師器無台椀・釜・鍋、自然漆などが出土した。

93-S K 8 (図版7・44)

220-12に位置する円形の土坑。径1.27m～1.3m、深さ6cmを測る。断面は浅い皿状である。覆土は2層に分かれ、ともに暗青灰色シルトを基調とする土層である。東端の一部に93-S K 7と切り合があり、93-S K 7によって切られる。土師器無台椀・釜などが出土した。

93-S K 9 (図版7・44)

20L-13・18に位置する円形の土坑。径1.04～1.23m、深さ9cmを測る。底面はほぼ平坦であり、側壁は外傾して立ち上がる。覆土は2層に分かれ、ともに灰褐色シルトを基調とする土層である。

93-S K 4 (図版8・44)

20L-10に位置する楕円形の土坑。長軸0.90m、短軸0.63m、深さ12cmを測る。底面はほぼ平坦であり、側壁は内嚙気味に立ち上がり、東壁は上端付近で開く。覆土は3層に分かれ、レンズ状堆積である。1層は淡橙灰色粘土、2層は暗赤褐色粘土、3層は青褐色粘土である。1層および2層は径1cm以下の炭化物を多量に含む土層である。

93-S K 2 (図版8・44)

20L-15に位置する隅九方形の土坑。長軸1.32m、短軸0.92m、深さ17cmを測る。底面は内嚙し、側壁は内嚙気味に立ち上がるが、北西壁は上端付近で開く。覆土は2層に分かれ、1層は暗青灰色粘土を基調とする土層、2層は青灰色粘土である。須恵器無台杯、土師器無台椀・釜・鍋などが出土した。

93-S K 3 (図版8・45)

20M-23に位置する楕円形の土坑。長軸1.28m、短軸0.97m、深さ29cmを測る。底面は北東から南西に向かって緩やかに傾斜し、側壁は外向して立ち上がるが、南側壁は途中平坦面をもつ。覆土は5層に分かれ、レンズ状堆積である。1・2層は青灰色粘土を基調とする土層、3層は暗青灰色粘土、4層はビート層、5層は青灰色シルトである。4層および5層は遺物を定量含み、特に5層からの出土が多い。土師器無台椀・釜・鍋などが出土した。

93-S K 5 (図版8・45)

21L4・5・9・10に位置する楕円形の土坑。長軸3.36m、短軸2.40m、深さ12cmを測る。断面は皿状であるが、南側壁に比べ北側壁は立ち上がりが急である。覆土は3層に分かれ、1層は暗青灰色粘土、2層は青灰色砂質土、3層は暗青灰色シルトである。比較的多くの遺物を出土した。遺物は須恵器無台杯・甕、土師器無台椀・釜・鍋、黒色土器無台椀などが出土した。

93-S K 6 (図版 8・45)

22M-3・4に位置する不整梢円形の土坑。長軸2.43m、短軸1.40m、深さ26cmを測る。底面は内凹し、側壁は外傾して立ち上がり、途中に大小の平坦面をもつ。覆土は2層に分かれ、1層は暗青灰色粘土を基調とする土層、2層は青灰色シルトを基調とする土層であり、1層は炭化物を多量に含む。

93-S K 60 (図版 8・45)

22M-15に位置する円形の土坑。径0.94~10.4m、深さ32cmを測る。底面はやや内凹する。北側壁は内堀気味に立ち上がるが、南側壁はわずかに外傾し上端付近で開く。覆土はレンズ状堆積で6層に分かれれる。2層および3層は少量の炭化物を含む。

93-S K 10 (図版 9・45)

22M-10・15に位置する不整梢円形の土坑。長軸2.79m、短軸1.88m、深さ34cmを測る。側壁は外傾して立ち上がり、途中平坦面を持ち、北壁は上端部で大きく開く。底面は南から北に向かって緩やかに傾斜する。覆土は2層に分かれ、1層は1cm以下の炭化物を多量に含む暗灰褐色シルト、2層は暗青灰色砂質土である。遺物は出土していない。

93-S K 13 (図版 9・46)

22N-17・22に位置する不整梢円形の土坑。長軸1.76m、短軸1.18m、深さは48cmを測る。底面はわずかに内凹し、側壁は途中に大小の平坦面をもつが、側壁は途中に平坦面が2か所存在する。また南東壁に比べ北西壁は立ち上がりが急である。覆土は2層に分かれ、上層は黒褐色粘土、下層は青灰色粘土である。

93-S K 35 (図版 9・46)

24I-12に位置する隅丸長方形の土坑。長軸1.0m、短軸0.68m、深さ13cmを測る。底面はほぼ水平で、側壁は外傾して立ち上がる。覆土はレンズ状堆積で2層に分かれれる。1層は暗褐色シルト、2層は黒褐色粘土であり、ともに1~5mm前後の炭化物を含むが、2層は特に炭化物の量が多い。土師器無台椀・甕、鏡、自然灑などが出土地。

93-S K 36 (図版 9・46)

24J-3に位置する円形の土坑。径0.77~0.85m、深さ14cmを測る。底面はやや内凹し、側壁は内堀気味に立ち上がる。覆土はレンズ状堆積で2層に分かれれる。1層は暗青灰色粘土、2層は黒色粘土であり、2層は炭化物を多く含む。

93-S K 54 (図版 9・46)

25M-12に位置する梢円形の土坑。長軸0.84m、短軸0.65m、深さ55cmを測る。底面はわずかに内凹し、側壁は外傾して立ち上がる。土師器甕、黒色土器無台椀などが出土した。

93-S K 101 (図版 9・46)

26O-7・8に位置する円形の土坑。径1.53m~1.84m、深さ20cmを測る。底面は北西から南東に向かって緩やかに傾斜し、側壁はわずかに外傾して立ち上がる。覆土は2層に分かれ、1層は暗灰褐色粘土、2層は淡橙灰色粘土である。須恵器甕、土師器無台椀・釜などが出土した。

93-S K 51 (図版 9・46)

26P-22・23、26P-2・3に位置する梢円形の土坑。長軸3.06m、短軸1.81m、深さ18cmを測る。底面は西端部に平坦面があり、これより西は径約40cm、深さ12cmのピット状の落ち込みがあるために深くなる。側壁は外傾して立ち上がる。

93-S K 52 (図版9)

27P-5・10に位置する鍵穴状の土坑。北端は調査区外へ広がる。長さ1.84m、幅0.88~1.68m、深さ20cmを測る。底面中央よりやや西側に平坦面があり、これより西側はやや深くなる。側壁は内嚙気味に立ち上がる。

94-S K 62 (図版10・47)

25I-1・6・7に位置する楕円形の土坑。長軸2.36m、幅1.82m、深さ20cmを測る。底面は南西から北東に向かって緩やかに傾斜し、側壁は外傾して立ち上がる。覆土は2層に分かれ、1層は褐灰色粘土、2層は灰色粘土である。

94-S K 61 (図版10)

25I-12・13・17・18に位置する南西-北東方向にのびる長方形の土坑。幅0.78~1.07m、現存長3.10m、深さ17cmを測る。底面は内嚙し、側壁は内嚙気味に立ち上がる。南側は94-S D59と切り合いがあり、94-S D59を切る。覆土はレンズ状堆積で2層に分かれる。1層はオリーブ黒色粘土、2層は灰色粘土である。1層は炭化物・酸化鉄粒を多く含む。また、遺物は1層中から定量出土した。

94-S K 53 (図版10・47)

25I-13・14に位置する楕円形の土坑。長軸1.62m、短軸0.67~0.78m、深さ19cmを測る。底面は北西から南東に向かって緩やかに傾斜し、側壁は外傾するが、北西壁に比べて南東壁は立ち上がりが急である。覆土は4層に分かれ、いずれも黄灰色シルト質粘土を基調とする土層であり、3層および4層は1mm前後の炭化物を少量含む。

94-S K 35 (図版10・47)

25I-14・19・24に位置するL字形の土坑。N-21°-E方向へ長さ3.71m、N-47°-W方向へ長さ2.83m、幅0.83~1.35m、深さ11cmを測る。断面は皿状である。覆土は2層に分かれる。1層は基本層序のV層と類似した土層で、1mm前後の炭化物・酸化鉄粒を含むオリーブ黒色粘土、2層は灰色粘土である。1層からは遺物が定量出土した。

94-S K 52 (図版10・47)

25I-19・20に位置する不整円形の土坑。径0.88~1.16m、深さ18cmを測る。底面中央に平坦面があり、これより北西はわずかに浅くなる。北西壁は外傾するが、南東壁は内嚙気味に立ち上がる。覆土は2層に分かれ、ともに灰オリーブ色シルト質粘土を基調とする土層であり、2層には多量の炭化物を含む。

94-S K 34 (図版10)

25I-15・20に位置する不整椭円形の土坑。長軸2.15m、短軸1.12m、深さ17cmを測る。底面は北東から南西に向かって緩やかに傾斜し、側壁は外傾するが、北東壁に比べ、南西壁の立ち上がりが極めて急である。覆土はレンズ状堆積であり3層に分かれる。1層は灰色粘土、2層は1mm前後の炭化物を少量含む灰オリーブ色粘土、3層は灰オリーブ色粘土をブロック状に含む灰色粘土である。

94-S K 64 (図版10)

25I-18に位置する不整円形の土坑。径0.76~0.88m、深さ11cmを測る。断面は皿状である。覆土は2層に分かれる。1層は基本層序のV層と類似した土層で、2mm前後の炭化物を含む暗赤灰色粘土、2層は2mm前後の炭化物を含む灰色粘土である。

94-S K 51 (図版10・47)

25I-18に位置する円形の土坑。径0.70~0.75m、深さ16cmを測る。底面は北西から南東に向かって緩

やかに傾斜し、側壁は外傾して立ち上がる。覆土はレンズ状堆積で2層に分かれる。1層はV層と同一もしくは類似した土層で1~2mmの炭化物を多く含むオリーブ黒色粘土、2層はオリーブ黒色粘土がブロック状に少量混じる灰白色シルト質粘土である。

94-S K 63 (図版11・48)

25 I-18・23に位置する不整円形もしくは隅丸方形の土坑。長軸1.18m、短軸0.64~0.81m、深さ16cmを測る。底面中央より南東に平坦面があり、これより北西は浅くなる。側壁はやや内縛気味に立ち上がる。覆土は2層に分かれる。1層は基本層序のV層に類似した土層で1~2mmの炭化物を含む暗赤灰色粘土、2層は1~2mmの炭化物を含む灰色粘土である。

94-S K 48 (図版11・48)

25 I-23に位置する梢円形の土坑。長軸1.39m、短軸0.96m、深さ17cmを測る。底面中央より南東に小規模な平坦面があり、これより北西はわずかに浅くなる。側壁は外傾して立ち上がる。覆土は2層に分かれ、1層は基本層序のV層に類似した土層、2層は2~3mmの炭化物を少量含む灰色粘土である。

94-S K 47 (図版11・48)

25 I-24に位置する円形の土坑。径0.78~0.88m、深さ14cmを測る。底面はやや内縛し、側壁は内縛気味に立ち上がる。覆土はレンズ状堆積で2層に分かれる。1層は炭化物を少量含む灰色粘土、2層は灰色粘土が混じる明緑灰色シルト質粘土である。

94-S K 46 (図版11・48)

26 I-4に位置する不整円形の土坑。径0.81~0.98m、深さ16cmを測る。底面は北西から南東に緩やかに傾斜し、側壁は外傾するが、北西壁に比べ南東壁は立ち上がりが急である。覆土はレンズ状堆積で2層に分かれる。1層は黄灰色粘土、2層は炭化物を少量含むオリーブ灰色シルト質粘土である。

94-S K 50 (図版11・48)

26 I-10に位置する不整円形の土坑。径0.83~0.99m、深さ11cmを測る。底面は北から南に緩やかに傾斜し、側壁は外傾して立ち上がる。覆土は2層に分かれる。1層は基本層序のV層に類似した土層で、炭化物を少量含む赤黒色粘土、2層は灰色粘土がブロック状に混じる明緑灰色シルト質粘土である。

94-S K 49 (図版11・48)

26 I-14・15・19・20に位置する梢円形の土坑。長軸2.47m、短軸1.75m、深さ16cmを測る。底面はやや内縛し、側壁は内縛気味に立ち上がる。覆土は4層に分かれる。1層はV層に類似した土層で2~3mmの炭化物を少量含む赤黒色粘土、2層は明オリーブ灰色シルト質粘土、3層は明オリーブ灰色シルト質粘土が混じる灰色粘土、4層はオリーブ灰色シルト質粘土である。

94-S K 39 (図版11)

26 K-9に位置する円形の土坑。径0.62~0.75m、深さ14cmを測る。底面は内縛する。南東壁は外傾し、北西壁が内縛気味に立ち上がる。覆土は炭化物を少量含む暗灰黄色粘土の単層である。

94-S K 38 (図版11)

26 K-14に位置する梢円形の土坑。長軸0.72m、短軸0.47m、深さ14cmを測る。底面は中央に平坦面があり、これより西は浅くなる。側壁は内縛気味に立ち上がる。覆土は1~2mm程度の炭化物を少量含む黒褐色シルト質粘土の単層である。

94-S K 37 (図版11)

27 J-4・5に位置する円形の土坑。径0.87~0.91m、深さ6cmを測る。断面は浅い皿状である。覆土は

基本層序のV層に類似した3mm~1cm前後の炭化物を少量含む黒褐色シルト質粘土の単層である。

94-S K 32 (図版11・49)

26K~27Kに位置する不整半円形の土坑。全体は長軸4.70m、短軸5.30m、深さ25cmを測る。底面はほぼ平坦で、側壁は外傾して立ち上がるが北西側は平坦面をもつ。南端部に長軸2.64m、短軸1.97m、深さ40cmの不整梢円形の土坑状の落ち込みがある。覆土は3層に分かれ、1層は灰色粘土質シルトで5mm程度の炭化物を多く含む土層、2層は炭化物を少量含有する暗灰色粘土、3層は灰色粘土質シルトである。

94-S K 66 (図版12)

27L-12・16・17に位置する不整円形の土坑。径1.95~2.33m、深さ9cmを測る。断面は皿状である。覆土は単層で、酸化鉄粒・マンガン粒を含む灰黄色粘土である。

94-S K 42 (図版12・49)

27P-20・25~27Q-21に位置する円形の土坑。径1.46~1.53m、深さ34cmを測る。底面は南から北に向かってわずかに傾斜し、側壁は、北壁がわずかに内傾し、南壁がやや外反して立ち上がる。覆土は4層に分かれ、1層は黄灰色粘土、2層は暗灰黄色粘土、3層は暗オリーブ灰色粘土で1cm以下の炭化物を多く含む土層、4層は1cm以下の焼土粒を少量含む炭化物層である。

94-S K 27 (図版12・49)

28K-17・22に位置する不整形な溝状の土坑。長軸2.36m、短軸0.85m、深さ17cmを測る。底面は西南西から東北東に向かってわずかに傾斜し、側壁は、東側壁が外傾し、西側壁が内傾気味に立ち上がる。覆土は3層に分かれ、1層は炭化物を少量含む暗灰黄色シルト質粘土、2層は炭化物を含む黒褐色粘土、3層は灰色粘土質シルトである。

94-S K 103 (図版12)

28O-7に位置する円形の土坑。径0.40~0.43m、深さ13cmを測る。底面は北北東から南南西に向かって傾斜し、側壁は外傾して立ち上がる。覆土は2層に分かれ、1層はオリーブ黒色粘土ブロックが混じる灰オリーブ粘土、2層は明褐灰色粘土であり、ともに3~5mm前後の炭化物を少量含む。

94-S K 26 (図版12・49)

29J~29Kに位置し、北西~南東方向に溝状にのびる土坑。長さ5.21m、幅1.39~1.59m、深さ24cmを測る。底面は南西から北東に向かって緩やかに傾斜する。側壁は外傾して立ち上がるが北東壁は途中に平坦面をもつ。覆土は3層に分かれ、1層は基本層序のV層に類似した黒褐色シルト質粘土、2層は暗灰黄色シルト質粘土、3層は底部に炭化物を含む灰色粘土である。

94-S K 12 (図版12)

30N-4・5・9・10に位置し、北北西~南南東方向にのびる不整梢円形の土坑。長軸4.04m、短軸1.19m、深さ15cmを測る。底面はわずかに内傾し、側壁は外傾して立ち上がる。覆土は4層に分かれ。1層は基本層序のV層と近似した土層で炭化物を多く含む黒色シルト質粘土、2層は灰色粘土、3層は灰色粘土、4層はオリーブ灰色粘土である。

不明遺構

浅い落ち込みや不整形な形態の落ち込みを93年度の調査では不明遺構(S X)としている。

93-S X 31 (図版13・49)

22H-25・22I-21・23H-5・23I-1-2に位置する平面が不整梢円形の溝状の落ち込み。長軸4.2m、短軸

1.4m、深さ38cmを測る。底面は南側から北側に向かって緩やかに傾斜し、側壁は外傾して立ち上がり、上端付近で開く。覆土は4層に分かれ、1・2層は炭化物を多く含む黒褐色粘土、3層はビート層、4層は暗青灰色粘土である。土器が比較的まとまって出土した。

93-S X32 (図版13)

23H-8・9・13・14・18・19に位置する平面が台形状の浅い落ち込み。長さ4.4m、幅1.3~2.8m、深さ18cmを測る。北東側は調査区外へと広がる。底面は南西から北東に向かって緩やかに傾斜し、側壁は外傾して立ち上がる。覆土は2層に分かれ、1・2層はいずれも暗青灰色粘土で、1層は炭化物を多く含む土層である。土器が比較的まとまって出土した。

93-S X33 (図版13・50)

22I-16・17・21・22・22H-1・2・6・7に位置する不整円形の浅い落ち込み。長軸3.1m、短軸1.7m、深さ14cmを測る。中央からやや北東側に平坦面があり、これより南西側は浅くなる。側壁は外傾して立ち上がる。覆土は2層に分かれ、1層は炭化物を多く含む黒褐色粘土、2層は地山の青灰色粘土が多く混じり炭化物を多く含む黒褐色粘土である。土器が比較的まとまって出土した。

93-S X34 (図版13・50)

21H-17・21・22、22H-1・2・6・7に位置する不整円形の浅い落ち込み。長軸5.9m、短軸2.2m、深さ5cmを測る。断面は皿状である。覆土は炭化物を少量含む暗青灰色シルトの単層である。土器が比較的まとまって出土した。

鉢状遺構

鉢状遺構は、溝の間隔・方向から7つに大別できる。

1群 (図版16)

93-S D59・60からなり、24・25M・Nに位置する。方向はN-45°-W前後、幅は20cm前後、間隔は2.2~2.4cmを測る。覆土は暗青灰色粘土を基調とする土層である。

2群 (図版14・15・51・52)

94-S D67-20・19・18・17からなる。26・27M・26Lに位置する。方向はN-45°-W前後、幅は10~30cm前後、間隔は1.4~1.9mである。覆土は炭化物を少量含む黄灰色粘土の単層のものと、この上層にV層に類似した黒褐色粘土が堆積するものがある。

3群 (図版14・15・51・52)

94-S D15・9・7、93-S D58・50からなり、25-26L-25~27M-27Nに位置する。方向はN-40°~45°-W前後、幅は10~30cm前後、間隔は1.4~1.7mである。覆土はいずれも2層に分けられ、上層がV層に類似した黒褐色粘土、下層が炭化物を少量含む黄灰色粘土からなる。ただし、93-S D7・94-S D48・50はグラウジングにより若干色調が異なり、上層は緑黒色粘土、下層は緑灰色粘土となる。SD7は94-S D8と、94-S D9は94-S D10と切り合があり、94-S D7は94-S D8に、94-S D9は94-S D10に切られる。

4群 (図版14・15・51・52)

94-S D10・8・5・3b・2からなり、26~28Nに位置する。方向はW-40°-N前後、幅は10~30cm前後、間隔は2.1~2.5mである。覆土はいずれも2層に分けられ、上層がV層に類似した黒褐色粘土もしくは緑黒色粘土、下層が炭化物を少量含む黄灰色粘土ないしは緑灰色粘土である。94-S D2は94-S D3bと切り合があり、94-S D2は94-S D3bを切る。94-S D8は94-S D7と、94-S D10は94-S D9と切

り合いがあり、94-S D 8 は94-S D 7 を、94-S D 10 は94-S D 9 を切る。94-S D 2 からは多量の遺物が出土した。

5群(図版14・15)

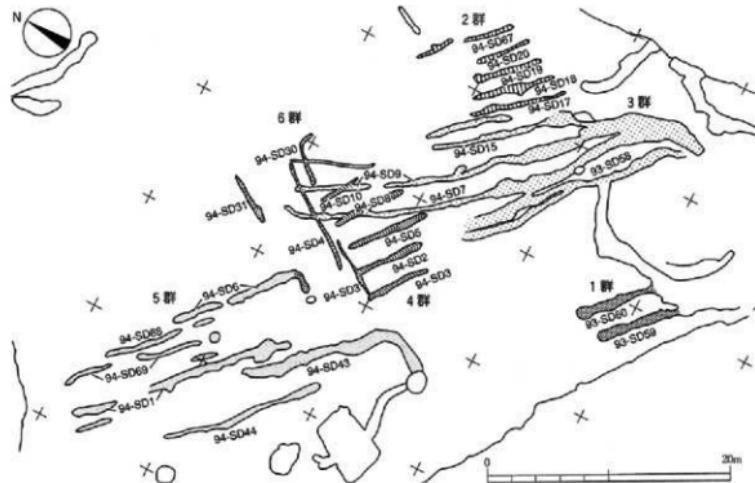
94-S D 6・68・69・1・43・44からなり、26~28O、27・28Pに位置する。方向はN-45°-W前後、幅は10~20cm前後、間隔は0.9~3.0mとばらつきがある。94-S D 6・43は南東端が南西に屈曲する。覆土は94-S D 43・44・68・69が炭化物を少量含む黄灰色粘土ないしは灰色粘土の単層、94-S D 1は2層に分けられ、上層が暗灰色粘土、下層が炭化物を少量含む緑灰色粘土である。94-S D 6 は覆土が3層に分かれ、1層がV層に類似した黒褐色粘土、2層が炭化物を少量含む緑灰色粘土、3層は暗青灰色粘土である。94-S D 6 からはまとまった遺物が出土した。

6群(図版14・15・52)

94-S D 30・3a・4・31からなり、27・28N・18Mに位置する。方向はN-30°-E前後、幅は10~30cm前後、間隔は94-S D 4と94-S D 31間が約4mの他は、1m前後である。94-S D 30は北東端が南東に屈曲する。覆土は94-S D 30が炭化物を少量含む緑灰色粘土の単層、94-S D 3・4・31は2層に分けられ、上層がV層に類似した黒褐色粘土ないしは緑黒粘土、下層が炭化物を少量含む黄灰色粘土ないしは緑灰色粘土である。94-S D 3 bは94-S D 2と、94-S D 4は94-S D 7と、94-S D 3は94-S D 15bと切り合ひがあり、94-S D 3 bは94-S D 2に切られる。94-S D 4と94-S D 7、94-S D 3と94-S D 15bの切り合ひ関係は不明。

7群(図版17)

93-S D 27・28・22からなり、22I・Jに位置する。方向はN-25°-E前後、幅は20cm前後、間隔は約4m前後である。覆土はいずれも2層に分けられ、上層がV層に類似した黒褐色粘土ないしは緑黒粘土、



第11図 鉄状遺構配置図

下層が炭化物を少量含む緑灰色粘土である。93-S D27は93-S D35と、93-S D28は93-S K70、93-S X33と、93-S D22は93-S D29・31・93-S K70と切り合い関係があり、93-S D29・31との切り合い関係は不明、93-S K70を切る。他の歓状造構に比べ溝の間隔が広く、別に分類すべきかもしれない。

水田跡

遺跡からは、水田跡と考えられる造構が、18K・18・19L・19M、および28R-32Lライン以北の区域の合計2個所から検出された。

区画1～4（図版17・54）

18K、18・19L、19Mで検出された。2筋の畦畔状の高まりによって区画1、区画2・3、区画4に分かれる。畦畔状の高まりは高低差5～20cmを測り、幅は0.3～2.0mと一定しない。区画2と区画3の境界には段差があり、区画2側が深くなるが、畦畔状の高まりは検出されなかった。区画3と区画4の南東は低地部と接する。区画2は93-S D12と接するが、切り合い関係は不明。断面はいずれも皿状であり、覆土は観察地点により若干の違いはあるものの、大半は淡橙灰色粘土の上に暗灰褐色粘土が水平堆積する。これら4区画の性格を明確にするために、区画2内の異なる深さから採取した2点の覆土をサンプルとして植物珪酸体分析をおこなったが、イネ属の機動細胞珪酸体はイネ科葉身機動細胞珪酸体全体に対して5.6%と15.5%であった。

区画5～13（図版18～21・53・55）

区画5～13は、28R-32Lライン以北で検出され、畦畔1～10によって区画される。畦畔は規模から大・中・小の3種に分類できる。大畦畔としたものは幅2.5m以上のもので、畦畔5がこれに該当する。中畦畔としたものは1.2～1.3m前後で、該当する畦畔としては畦畔1・4・6・9がある。小畦畔としたものは幅1.0m以下のもので、該当する畦畔としては畦畔2・3・7・8・10がある。

畦畔5・7の南端には水口が確認された。各水田の水の取り入れは、水田底面の標高差からみて、区画5・6→区画7→区画8→区画11へとおこなわれたものと推定される。同様にして区画9は区画7もしくは区画8を通じて水を取り入れたものと考える。

これに対して、区画10・13は様相が異なる。区画10は畦畔6を挟んで北に位置する区画8・11より底面の標高が高くなるため、これらからの水の取り入れはできない。また区画13は区画10よりも底面の標高が高い。区画10・13については別の取水口の存在が推測される。

なお区画13からは中央部を北東～南西方向に幅0.42～0.66m、深さ3.0～9.0cm、全長11.5mを測る溝状を呈した落ち込みが検出された。機能については不明である。

区画14～17（図版22・23・53・55）

区画14～17は、畦畔11～13によって区画される。畦畔は幅0.35～1.0mでいずれも小畦畔である。高さ7.0～9.5cmを測る。畦畔13南東端には水口がある。各区画の底面の標高は、区画16が最も低く、次いで区画15・17で、区画14は最も高い。区画14・15と区画17は別の水の取入れ口が存在したものと考える。なお区画16には、溝状の落ち込みが断続的にみられるが、区画13と同様に、機能については不明である。

その他（図版17・54）

22G・21H・Iに土手状の地山の高まりを検出した。北東～南西方向へS字に蛇行しながら延び、両端の直線距離約17m、幅1.06～1.84mを測る。高まりは微高地の北西側と低地部の南東側との境に位置し、南東側高低差23～33cm、北西側高低差8～14cmを測る。水田の畦畔の可能性があるが、周辺から他に畦

畔状の遺構は検出されていない。

また、畦畔等は検出されなかったがG16・H15・17・I16・18・J17・K16からは種のプラントオバー
ルが高い数値で検出されており、この周辺は水田として利用されていた可能性が高く、その場合 S D10' は水路として機能していた可能性があろう。

溝

ここでは畠状遺構を構成する以外の主な溝について記述する。

93-S D10' (図版24・50)

20 I-5から22 K-5に位置する溝。方向はN-46°-W、長さ29.8m、幅1.2~9.2m、深さ38cmを測る。覆土は4層に分かれ、1層は近世の遺物を含む灰茶褐色粘土、2層は暗青灰色粘土、3層は灰黒色粘土、4層は奈良・平安時代の遺物を含む灰黒色粘土である。底面はほぼ水平で、側壁は南側が外傾し、北側は内
縛気味に立ち上がる。北端は自然流路と、南東端は低地部と接し、21 K-13で南西縁が93-S D11と接するが、いずれも切り合い関係は不明。底面は、20 J-24付近を境にして北西側と南東側に緩やかに傾斜してのび、それぞれ標高差20cmと10cmを測る。

93-S D11 (図版24・50)

21 K-13から19 L-21に位置する溝。方向はN-20°-E、長さ17.5m、幅0.4~1.1m、深さ18cmを測る。覆土は2層に分かれ、1層は淡橙灰色シルト、2層は炭化物を多く含む青灰色粘土である。底面は水平で、側壁は内縛気味に立ち上がる。北端は93-S D10' と、南端は93-S D12と接するが、いずれも切り合い関係は不明。一定の方向への底面の傾斜はみられない。土師器無台碗・鍋が出土した。

93-S D15 (図版24・50)

19 J-9から19 K-14に位置する溝。方向はW-15°-N、長さ11.5m、幅0.4~0.8m、深さ6cmを測る。底面は内縛し、側壁は外傾して立ち上がる。覆土は橙色粘土が混じり炭化物を少量含む青灰色粘土の単層である。西端は93-S K12と、東端は湛水池と接するが、いずれも切り合い関係は不明。底面は西側から東側へと緩やかに傾斜してのび、標高差10cmを測る。

93-S D16 (図版24・50)

22 M-7から20 M-25に位置する溝。方向はN-22°-E、長さ15.0m、幅0.5~0.8m、深さ14cmを測る。底面はわずかに内縛し、側壁は西側が外傾するが東側は内縛気味に立ち上がる。覆土は淡橙灰色シルトの単層である。北東端は自然流路と接するが、切り合い関係は不明。南西側は調査区外へのびる。底面は南側から北側に緩やかに傾斜してのび、標高差7cmを測る。

93-S D17 (図版50)

22 N-14から23 N-7に位置する溝。方向はN-22°-E前後、長さ7.7m、幅0.7m前後、深さ15cmを測る。底面は内縛し、側壁は内縛気味に立ち上がる。覆土は淡橙色粘土の単層である。南西側は調査区外へのびる。一定の方向への底面の傾斜はみられない。

第V章 遺物

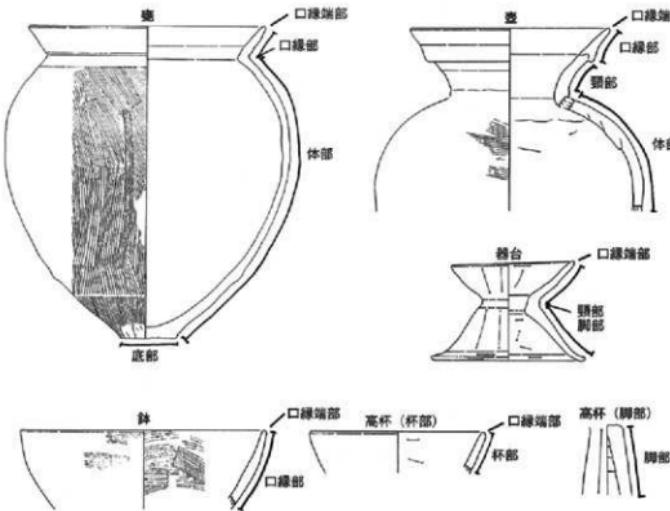
1 古墳時代前期

遺物は土器のみで、大半がVIa層からの出土で、遺構からの出土はない。コンテナ（漆箱4箱）程度の土器が出土した。器種には高杯・器台・鉢・壺・釜がある（図版25・26・58・59）。以下では器種ごとに記述を行う。各部位の名称については第12図に示した。調整技法については、「調整」という語句は省略し、単に「ハケメ」・「ナデ」・「ヘラミガキ」・「ヘラケズリ」と表現する。

高杯（1・2） 1は口縁部の破片である。内外面とも横方向のヘラミガキを行う。2は脚部。外面に縱方向のヘラミガキを行う。ともに屈折脚の畿内系高杯と考えるが、別個体である可能性が高い。

器台（3・4） 3は受け部内外面・脚部外面にヘラミガキを行う。頭部は深く、受け部は深い。4は東海系の小型器台。脚部外面に縱方向のヘラミガキを行う。受け部内外面は器面の摩滅が著しく調整は不明。

鉢（5） 口縁部が内側する。調整は口縁端部付近はヨコナデ、他の部位は内外面ともハケメで、粗製の作りである。



第12図 土器部位名称（古墳時代前期）

壺（6・16） 6は二重口縁壺。頸部の中位付近に粘土紐を張り付けることにより二重口縁状とする。口縁部から体部上半の外面には煤が付着する。16は口縁部から体部中位付近の破片である。体部外面はヘラミガキを行うが、中位付近にはハケメが残る。また外面には煤が付着する。

釜（7～15） いずれも「く」字口縁のものである。7は最大径約32cmを測り、器高36cm前後になると考る大型の壺である。口縁部上半のみヨコナデを行い、口縁部下半にはハケメが残る。8も大型の壺で7と同様の調整である。9は器高23cm前後になる中型の壺。口縁端部は外傾する面を持つ。体部内面はヘラケズリを行う。10は全形のわかる資料で、底部は平底、到卵形の体部に外側に直線的に開く口縁部が着く。口縁端部は丸い。体部内面はヘラナデである。11～14は体部上半から口縁部にかけての破片である。12～14は口縁端部に狭い面を持つ。11・15は丸い。

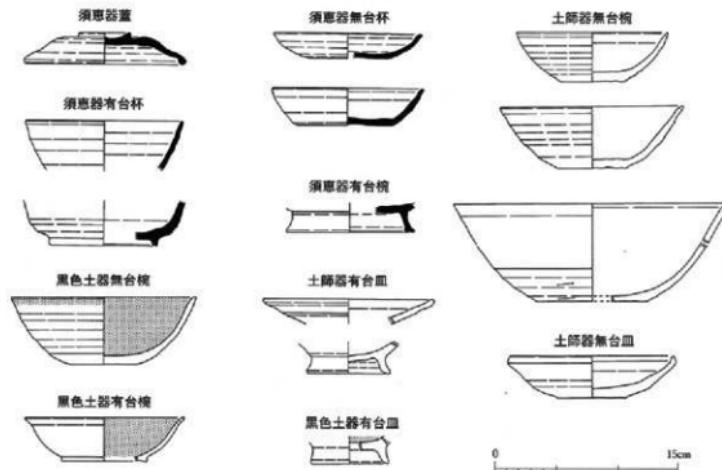
底部（17～24） 17～19は底径6～7cm前後の大型の平底で、このうち17・18・20は底部外面がわずかに窪む。21・22は底径2～3cmの小型の平底、23・24は丸底の底部である。18・20は壺、他は壺の可能性が高い。

2 平安時代以降

A 平安時代の土器

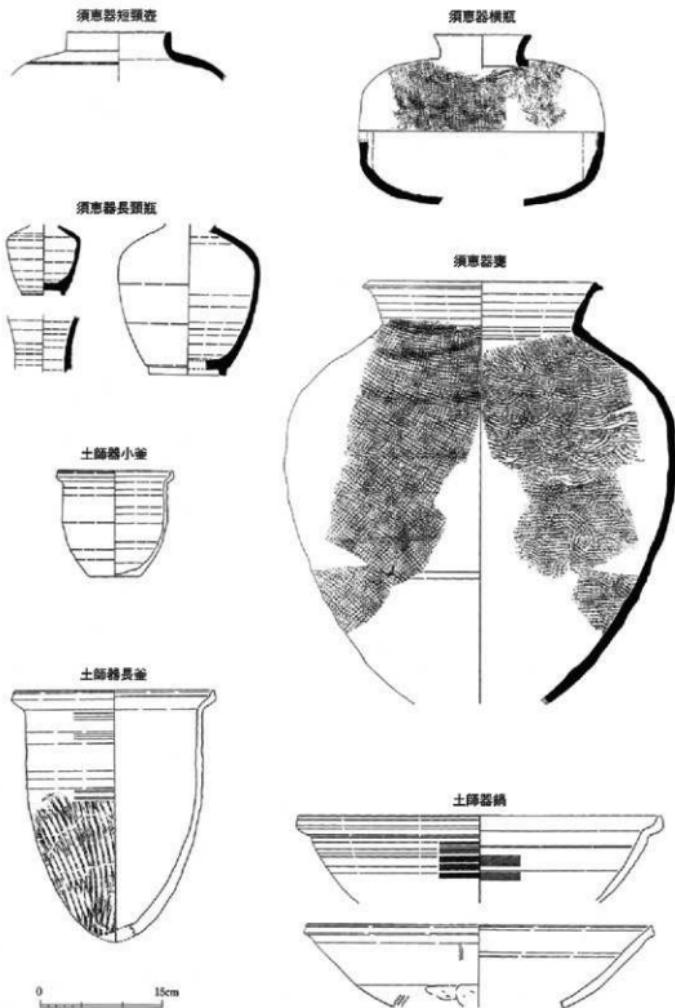
(1) 記述の方法

土器の分類は基本的には器種による大まかな分類しか行っていない（第13・14図）。調整技法の表現法は、古墳時代前期に準ずるが、高速の回転を利用したヘラケズリ・ナデ・ハケメをそれぞれ「ロクロケズ



第13図 平安時代土器器種分類図 (1)

リ」・「ロクロナデ」・「カキメ」とする。また椀など小型の土器に行なったロクロ回転を利用しないヘラケズリについては「手持ちケズリ」とする。部位の名称については、第15図に示した。なお出土量の多い土師器・黒色土器無台椀については、器高指数（器高÷口径×100）と法量を形態的な特徴を述べる際に重視した。また、須恵器については産地を記したが、「佐渡小泊窯産」とする場合は真野町に所在する大木戸窯を含み、「葦神窯産」とする場合には櫛形山脈周辺の貝屋・下小中山窯などの窯も含む。



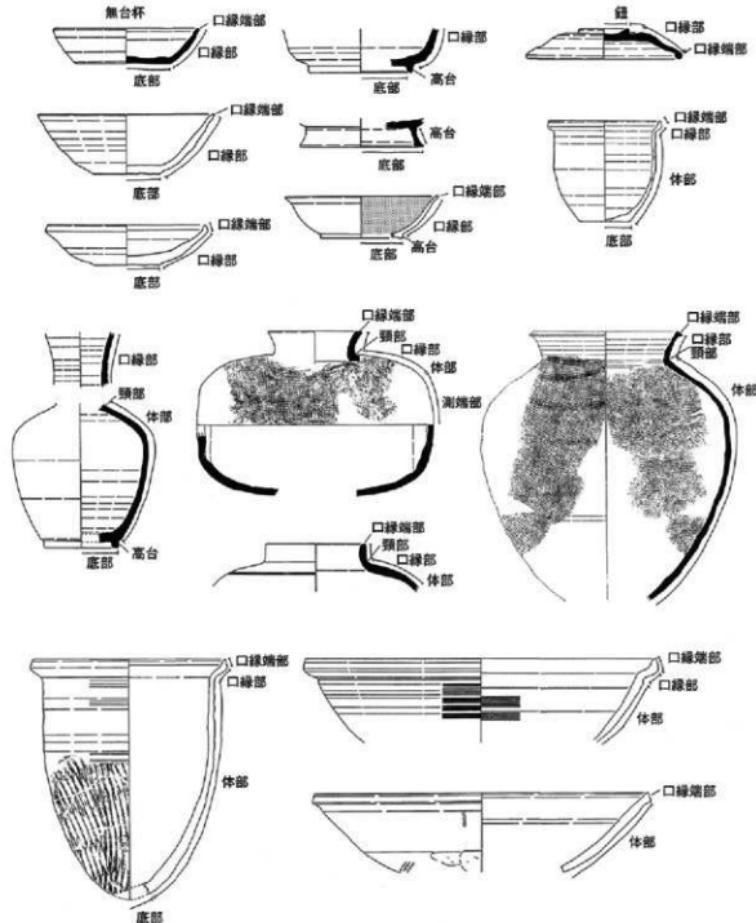
第14図 平安時代土器器種分類図(2)

② 土器各説

93-S K 70 (図版27・59・60 25~56)

須恵器無台杯、土師器無台碗・小釜・長釜、鍋、黒色土器無台碗が出土している。

須恵器無台杯 (25~28) 25~27は佐渡小泊窯産、28は新津丘陵産である。25・26は底部が比較的厚手である。



第15図 土器部位名称 (平安時代)

土師器無台碗（29～43） 29～37は口径12～13cm前後の小型のもの、38～42は口径15～16cm前後となる大型のものである。このうち29～31は全形のわかる資料で、29・30は器高指数26前後の身の深いタイプのもの、30は器高指数36の身の深いタイプのものである。30・41は外面に「×」の旋記号がある。

黒色土器無台碗（45～48） 45は黒化部分が口縁部外面にも及ぶ。47・48は底部外面にロクロケズリの後ヘラミガキを行う。

土師器小釜・長釜（49～55） 49は小釜、50～55は長釜である。長釜はいずれも口縁端部が上方に短く屈曲する。50～53・55は体部外面上半にカキメが巡る。55は全形がわかる資料で、体部外面上半は平行叩きを行うが、内面の当て具痕は確認できない。

土師器鍋（56） 体部が直線的にのび、口縁端部は内傾する。体部外面上半にはカキメが巡る。

93-S I 2 (図版28・60 57～62)

57～59は土師器無台碗。57は全形のわかる資料で、口径14cm、器高指数36前後のやや大振りで身の深いタイプのものである。内外面ともカキメ状の多条沈線が巡る。

60・61は土師器小釜。口縁端部は60が上方に短く屈曲し、61は内傾する面を持つ。調整は内外面ともロクロナデである。

62は須恵器横瓶。外面には平行叩き、内面には放射状の当て具痕が残る。新津丘陵産である。

93-S E 1 (図版28・61 63～67)

須恵器（63・64・67） 63は土師器無台杯。体部外面に「大」の墨書がある。64は有台杯、67は長颈瓶の底部。いずれも佐渡小泊窯産である。

土師器（65・66） 65は無台碗。口径約13cm、器高指数30前後となる小型で、やや身の深いタイプのものである。66は鍋。口縁端部は上方に短く屈曲する。内外面ともカキメが巡る。

93-S K 5 (図版28・61 68～75)

出土遺物には須恵器杯蓋・無台杯、土師器無台碗・小釜・長釜がある。食器具が比較的まとまって出土した。

須恵器（68～70） 68は杯蓋。軟質の焼き上がりである。口縁端部は内側に巻き込む。69・70は無台杯。器壁は薄く口縁部の開きは大きい。3点とも佐渡小泊窯産である。

土師器無台碗（71～73） 3点とも口径13cm前後の小型のものであるが、72は器高指数36前後の身の深いタイプ、71・73は器高指数30前後のやや身の深いタイプのものである。

土師器釜（74・75） 74は小釜、75は長釜である。ともに口縁端部は上方に短く屈曲する。74は内外面ロクロナデ、75の体部外面上半にはカキメが巡る。

93-S K 1 (図版28・61 76・77)

76は口径約17cmを測る大型の土師器無台碗。器高指数は約30である。77は土師器小釜。口縁部は上方に短く屈曲する。

93-S K 7 (図版28・61 78～81)

78は須恵器無台杯。佐渡小泊窯産である。79は土師器無台碗。器面の摩滅が著しい。80・81は土師器長釜。ともに口縁端部が上方に内傾しながら屈曲する。また81は体部外面上半にカキメが巡る。

93-S K 32 (図版28・61 82～85)

82～84は土師器無台碗。82は全形のわかる資料で口径約14cmとやや大振りで、器高指数は32前後である。84は底部外面に墨書があるが判読できない。85は土師器長釜。口縁端部は上方に屈曲する。体部外面上半

にはカキメが巡る。

93-S K 3 (図版28・61 86~87)

86・87は土師器無台椀。86は口縁部に炭化物が付着する。88は土師器小釜で、体部外面下半にヘラケズリを行う。89は土師器長釜。内外面ともカキメが巡る。口縁端部は外傾する面を持つ。

93-S K 101 (図版29・61 90~92)

90~92は土師器無台椀。90・91は口径13cm前後で、器高指数28前後の小型で身の浅いタイプのものである。このうち、91は見込みに回転糸切りの痕跡が確認できる。92はこれより大型になると思われる無台椀の底部である。

93-S X 31 (図版29・62 96~104)

93・94は土師器無台椀。2点とも口径12~13cm前後の小型のもので、器高指数は93は40前後の身の深いタイプ、94は器高指数30前後でやや身の浅いタイプである。

95は須恵器。口縁部にはカキメが巡る。体部外面は平行叩き、内面には同心円當て具痕が残る。新津丘陵産である。

93-S X 32 (図版29・62 96~104)

須恵器杯蓋・有台杯・無台杯、土師器無台椀、黒色土器無台椀などが出土した。食器が比較的まとまって出土した遺構である。

須恵器 (96~98) 96は蓋。口縁端部は内側に巻き込む。口縁端部付近外面のみ黒化部分が確認できる。

97は有台杯、98は無台杯であり、底部外面および口縁部内面に「平」の墨書きが確認できる。3点とも佐渡小泊窯産である。

土師器 (99~101) 99・100は土師器無台椀。99・100とも口径約13cm、器高指数30前後の小型でやや身の浅いタイプのものである。底部外面には「×」の範記号が確認できる。101は小釜の底部である。

黒色土器無台椀 (102~104) 102は黒色処理部分が口縁部外面まで及ぶ。103・104は底部破片であるが、器面の摩滅が著しく内外面とも調整は不明。

93-S X 34 (図版29・62 105~110)

105は須恵器無台杯もしくは椀類の口縁部破片。佐渡小泊窯産と考える。106~108は土師器無台椀の底部破片。109は黒色土器無台椀の底部破片であり、底部外面はロクロケズリの後ヘラミガキを行う。110は土師器長釜。口縁端部は内傾する面を持つ。

93-S X 33 (図版29・62 111~115)

土師器 (111~114) 111は無台椀、112・113は小釜、114は長釜である。112~114は口縁端部上方にわずかに屈曲する。114は内外面にカキメが巡る。

93-S X 50 (図版29・62 116~118)

116は土師器無台椀。口径約16cmを測り、口縁部・底部内外面ともヘラミガキを行う大質の精製品である。器高指数は約32でやや身の浅いタイプである。117・118は土師器長釜である。117は口縁部が上方に短く屈曲する。118は口縁端部に内傾する面を持ち、体部外面上半にはカキメが巡る。

93-S D 22 (図版30・63 129~139)

須恵器杯蓋・無台杯・有台皿、土師器無台椀・小釜・長釜・鍋、黒色土器無台椀など比較的多くの遺物が出土している。

須恵器 (119~122) 119は杯蓋。頂部はロクロナデである。鋤は中央部が窪み、口縁端部は内側に巻

き込む。口縁端部付近外面のみが黒化する。120・121は無台杯。120は体部外面に「三」もしくは「川」と「十」の墨書が確認できる。123是有台皿の底部破片。高台は高く外側に踏ん張る形態のものである。119～121は佐渡小泊窯産、122は新津丘陵産である。

土師器無台椀（123～129）123～128は口径12～13cm前後の小型のもの。全形のわかる123・124はともに器高指数35前後の身の深いタイプのものである。124は体部外面に「人」の墨書が確認できる。129は大型のものであり、底部外面から口縁部外面下半にヘラケズリの後ハラミガキを行う精製品である。

黒色土器無台椀（130・131） 2点とも底部外面から口縁部外面下半にかけてクロケズリの後、ハラミガキを行なう。全形のわかる130は口径15.5cm、器高指数30前後のやや身の浅いものである。

土師器釜（132～135） 132は小釜の底部破片。133～135は長釜であり、いずれも口縁端部が上方に屈曲する。このうち134・136は口縁部内面および体部外面上半に、135は体部上半のみにカキメが巡る。

土師器鍋（137～139） 3点とも口縁部は上方に短く屈曲する。このうち138・139は体部内外縁にカキメが巡る。139は体部下半に平行タタキが確認できる。

93-S D 35 (図版30・63 140～143)

140は須恵器無台杯の口縁部破片。佐渡小泊窯産である。141・142は土師器無台椀。141は口径約12cm、器高指数28前後の小型で身の浅いタイプのもの、142は口径約15cm、器高指数33前後の大型でやや身の浅いタイプのものである。143は土師器小釜の底部破片である。

94-S D 2 (図版31・63・64 144～164)

須恵器無台杯、土師器無台椀・小釜・長釜・鍋、黒色土器無台椀が確認できる。

須恵器無台杯（144） 体部は大きく開き身は浅い。佐渡小泊窯産である。

土師器無台椀（145～157） いずれも口径12～13cm前後の小型のものである。145・150は器高指数35前後の身の深いタイプのもの、146～148は器高指数25～28の身の浅いタイプのもの、149は器高指数30前後のやや身の浅いタイプのものである。145・157の底部外面には墨書が確認でき、2点とも「郎」の可能性が高い。

黒色土器無台椀（156） 底部外面から口縁部下半にかけてクロケズリの後ハラミガキを行なう。

土師器釜（159～163） 161は小釜の可能性があるが、他は長釜である。159・160・162は口縁端部が内傾する面を持ち、161・163は口縁端部が上方に短く屈曲する。160・162は体部外面上半にカキメが巡る。

土師器鍋（164） 体部が屈曲せずスムーズに口縁端部に至る。体部下半は平行叩きの後、ヘラケズリを行なう。

94-S D 6 (図版31・64 165～172)

須恵器無台杯（165・166） ロクロナデによる凹凸が顕著に残る。全形のわかる165は口縁部の開きが大きく身が浅い。2点とも佐渡小泊窯産である。

土師器無台椀（167～170） 167～169は口径12～13cm前後の小型のもので、このうち全形のわかる167は器高指数28前後の身の浅いタイプのもの、170は口径15cm前後の大型のもので、器高指数38前後の身の深いタイプのものである。167は底部外面に「美」の墨書が確認できる。

黒色土器無台椀（171・172） 2点とも口縁部外面下半から底部外面にかけてクロケズリの後ハラミガキを行なう。口径はともに14cm前後であるが、171は器高指数32前後のやや身の浅いタイプ、172は器高指数38前後の身の深いタイプである。

93-S D 1 (図版31・61 173・174)

173は小型の須恵器長頸瓶。口縁部を欠く。体部中位から下間に欠けてロクロケズリを行う。佐渡小泊窯産である。174は土師器小釜。口縁端部はわずかに上方に屈曲する。

93-S D 30 (図版32・64 175~187)

須恵器無台杯・有台杯、土師器無台椀・長釜がある。

須恵器 (175~178) 175・176は無台杯であり、ともに器壁は薄く口縁部の開きが大きい。177・178は有台杯である。178は外端接地の低い高台を持つ。4点とも佐渡小泊窯産である。

土師器無台椀 (179~184) 179は底部外面に墨書が確認できるが、器面の摩滅のため判読が困難であるが、「郎」の可能性が高い。180は全形のわかる資料で口径12cm前後、器高指数36前後の小型で身の深いタイプのものであり、体部外面下半から底部外面にかけて「×」の範記号が確認できる。

土師器長釜 (185~187) いずれも口縁端部が上方に短く屈曲する。187は口縁部内面、186は体部外面上半にカキメが巡る。

94-S D 7 (図版32・65 188~192)

188は土師器無台椀。口径15cm前後、器高指数31前後の大型でやや身の浅いタイプのものである。底部外面から口縁部外面下半の調整は器面の摩滅が著しく不明。189~192は土師器長釜。いずれも口縁端部が上方に短く屈曲する。189・191は体部外面上半、190は口縁部内面と体部外面上半にカキメが巡る。

94-S D 5 (図版32・65 193~198)

193~196は土師器無台椀。このうち193は全形のわかる資料で、口径13cm前後、器高指数27前後の小型で身の浅いタイプのものである。197は黒色土器無台椀。口縁部外面上半にも黒色処理が及ぶ。198は土師器長釜。口縁部は上方に短く屈曲する。体部外面上半にはカキメが巡る。

93-S D 10' (図版32・65 199~203)

199は須恵器無台杯。焼成が不良で軟質である。産地は佐渡小泊窯産である。200~203は土師器無台椀。200は全形のわかる資料であり、口径約12cm、器高指数35前後の小型で深身のタイプのものである。201は口径15.6cmを測る大型のものである。

94-S D 43 (図版32・65 204~206)

204は須恵器無台杯。底部外面には墨書が確認できるが判読不可。新津丘陵産である。

205は土師器無台椀。口縁部外面下半にはロクロナデによる凹凸が顕著に残る。206は土師器長釜、口縁端部は肥厚する。

その他の遺構出土の遺物 (図版33・65 207~223)

須恵器杯蓋 (207) 錫は環状となる。佐渡小泊窯産である。

須恵器無台杯 (208・209) 207は口径12.7cmとやや大振りで、底部の器壁が厚い。焼成は不良で軟質である。新津丘陵産である。209は佐渡小泊窯産である。

須恵器有台椀 (210) 高台径約9cmの大型のものである。有台皿の可能性もある。

土師器無台椀 (211~218) 212は口径約16cmを測る大型のものであり、他は口径12~13cm前後の小型のものである。このうち211は器高指数28前後の身の浅いタイプのもの、213・214は器高指数31前後のやや身の浅いタイプのもの、216は器高指数39前後の身の深いタイプのものである。214は底部外面に「×」の範記号が確認できる。

黒色土器無台椀 (219) 底部外面および体部外面下半はヘラケズリの後ヘラミガキを行う。

土師器釜 (220~223) 220は小釜、221~223は長釜である。221・222は体部外面上半に、223は体部外面上半にカキメが巡る。220・222は口縁部が上方に短く屈曲する。221・223は口縁端部が内傾する面を持つ。

旧河遺出土土器 (図版33・34・66・67 224~240)

須恵器無台杯 (224~227) 224~226は佐渡小泊窯産である。このうち225は底部外面に墨書きがある。227は口径16cm前後の大型のもので、新津丘陵産である。

須恵器壺・瓶類 (236・239) 236は長頸瓶、体部下半はロクロケズリを行う。佐渡小泊窯産である。239は横瓶。側端部を両側とも閉塞するタイプのものである。内面・外面右側はロクロナデ、外面左側は斜格子叩きが残る。磐井産である。

土師器鍋 (237・238) 口縁端部が上方に短く屈曲する。238は体部内外面上半にカキメが巡る。

須恵器壺 (240) 体部外面は格子叩き、体部内面上半は同心円当て具、下半は平行当て具痕が残る。佐渡小泊窯産である。

水田部出土土器 (図版35・67 241~252)

241~249は94年度調査区の水田から、250~252は93年度調査区の水田あるいは水田の可能性の高い地点から出土した。

須恵器無台杯 (241) 器壁は薄く、口縁部は大きく開く。佐渡小泊窯産である。

土師器無台碗 (242~252) 242~251は口径12~13cmの小型のもの、252は口径15cm前後の大型のものである。243・244・250~252は全形のわかる資料で、243は器高指数36前後の身の深いもの、244・251は器高指数28前後の身の浅いタイプのもの、250・252は器高指数30前後のやや身の浅いタイプのものである。246は見込み外縁が瘤む特異な形態のものである。247は底部外面に「郎」、252は体部外面に「年」・「歳」の墨書きがある。

L 26-6・7・11・12土器ダマリ (図版35・67・68 253~264)

落ち込みなどは確認できなかったが、L 26-6・7 グリッド周辺から土器がまとまって出土した。須恵器無台杯、土師器無台碗・長釜・小釜・鍋、黒色土器無台碗がある。

須恵器無台杯 (253) 器壁は薄く、口縁部は大きく開く。佐渡小泊窯産である。

土師器無台碗 (254~256) 254・255は全形のわかる資料で、254は口径12cm前後の小型のもの、255は口径14cm前後のやや大型のものである。ともに器高指数は32前後である。256は底部外面に「×」の範記号が確認できる。

黒色土器無台碗 (257) 口径15cm、器高指数31前後でやや浅身のタイプのものである。底部外面から口縁部外面下半にかけてロクロケズリを行う。口縁端部付近外面に黒色処理が及ぶ。

土師器長釜 (258~261) いずれも口縁端部は上方に短く屈曲する。259・260は体部外面上半にカキメが密に巡る。261は器面の摩滅が著しく調整は不明。

土師器小釜 (262) 口縁部が上方に短く屈曲する。調整は内外面ともロクロナデである。

土師器鍋 (263・264) 口縁端部は上方に短く屈曲する。264は体部内外面上半にカキメが巡る。263は器面の摩滅が著しく調整は不明。

N 27-19・23・24土器ダマリ (図版36・68 265~274)

落ち込み等は確認できなかったが、N 26-19・23・24グリッド周辺から比較的まとまって土器が出土した。出土した土器には須恵器無台杯、土師器無台碗・小釜、黒色土器無台碗がある。

須恵器無台杯 (265・266) 265は器高が比較的高い。266は265に比べ器高が低く、体部の開きも大きい。ともに佐渡小泊窯である。

土師器無台椀 (267~271) 267・268は全形のわかる資料で、ともに器高指数30弱の浅いタイプのものである。

黒色土器無台椀 (272) 口縁部外面下半および底部外面にロクロケズリを行う。

土師器小釜 (273・274) 口縁端部が上方に短く屈曲する。内外面ともロクロナデである。

K 27-8・11~14土器ダマリ (図版36・68 275~284)

落ち込み等は確認できなかったが、K 27-8・13グリッド周辺から比較的まとまって土器が出土した。出土した土器には土師器無台椀・皿、黒色土器無台椀・有台皿ないしは有台皿がある。

土師器無台椀 (275~280) 275・278・279は口径12cm前後の小型のもの、276・277・278は口径14~15cm前後の大型のものである。このうち275~277は全形のわかる資料で、275は器高指数31前後の小型でやや身の浅いタイプのもの、276・277は器高指数33前後のやや身の深いタイプのものである。276は口縁部外面下半から底部外面にかけてロクロケズリを行う。

土師器皿 (283・284) 口縁部が直線的に外面に広がる。283は口縁部下半にロクロケズリを行う。

黒色土器 (281・282) 281は無台椀。体部外面下半および底部外面にロクロケズリを行う。282は有台椀もしくは有台皿の底部破片である。高台はわずかに外反して広がる。

K 26-6・11土器ダマリ (図版36・68 285~287)

落ち込み等は確認できなかったが、K 26-6・11グリッド周辺から比較的まとまって土器が出土した。285は土師器無台椀、286は土師器有台椀もしくは有台皿の底部破片である。286の内側はヘラミガキを行う。287は土師器長釜。体部外面には密に、内面には疎らにカキメが遺る。

包含層出土の土器 (図版36・37・69・70 288~331)

須恵器食器具 (288~292) 288は須恵器杯蓋。口縁端部は内側に巻き込む。口縁端部外面にのみ自然釉がかかる。289は有台杯。高台は外端接続である。

290~292は無台杯。290は身が浅く口縁部の開きが大きい。291・292は290に比べ口縁部の立ち上がりが急で、身も深い。

土師器無台椀 (293~309) 293~297・299・304は口径12~13cm前後になると思われる小型のもの。このうち293~296・299・304・309は全形のわかる資料で、293~296・299は器高指数29前後の身の浅いタイプ、304は器高指数35を超える身の深いタイプのものである。このうち、293・295は体部外面下半に手持ちヘラミケズリを行う。297は底部が平高台状となる特異な形態のものである。309は底部外面に「×」の範記号がある。

298・300~305は口径14~15cm前後の大型のもの。298・300~303は全形のわかる資料であり、300~303は器高指数34~35前後のものである。

307・308は口径20cm前後となる特大型のものである。307は赤く発色する胎土を用いた口縁部外面下半および底部外面にヘラミガキを行う。

土師器無台皿 (310) 内縁気味にのびた口縁部が端部付近で短く上方に屈曲する。底部外面は回転糸切り後無調整である。

土師器有台皿 (311) 比較的高い高台が外側に踏ん張る。内面はヘラミガキを行う。有台椀の可能性もある。

黒色土器（312～317） いずれも口縁部外面まで黒化部分が及ぶ。312は有台輪であり、口縁端部はわずかに外反する。底部は低い高台を持つ。施釉陶器を比較的忠実に模倣したものである。

313～318は無台輪。313は底部外面から口縁部外面下半にかけてヘラケズリを、314・315・317・318はヘラミガキを行う。313～315は全形のわかる資料で、313は口径14cm、器高指数32前後のやや小振りで身が比較的浅いものである。314・315は口径15～16cm前後の比較的大振りのもので、314は器高指数約37と身の深いタイプのもので、315は器高指数32とこれより浅いタイプのものである。

須恵器壺・瓶頸（319～321） 319は短頸壺。肩部には沈線が二条巡る。並神窯産である。320は長頸壺の頸部破片。新津丘陵産である。321は小型の長頸壺。器壁は薄い。佐渡小泊窯産である。

土師器小釜（322～327） 322～324は口縁部が短く上方に屈曲し、325・326は口縁部が断面三角形となる。いずれも内外面ともロクロナデ、底部は回転糸切り後無調整である。

土師器長釜（328～331） 328は口縁部が断面三角形となり、329～331は上方に短く屈曲する。328・329・331は体部外面にカキメが巡る。

B. その他の遺物（図版37・38・70）

近世土器・陶器（332・333） 332は土師器手焼き。口縁部は内彎して伸び、径1cmと1.5cmの小孔が確認できる。内面は焼ける。333は京焼系陶器の底部破片である。

土製品（334） 土師器片を利用した土器片円盤。径約2.5cmを測る。

砥石（335・336） 335は現存長3.5cm、厚さ8mmを測る小型のもの、336は現存長9.5cm、幅5.0cm、厚さ約2cmの中型の砥石である。2点とも石材は凝灰岩である。

木器（337～340） 337・339は正目の板材、338はM33-18（水田区画7）から出土した杭で、水田と関わるものへの可能性が高い。

340は木簡。厚さ約3mmの薄手の正目材を用いる。上下を欠損するが、両面に墨書きが見られ「×一斗五升×」「×を□もいて□×」と読める。L19-12からの出土で、調査当初で層序の認識に混乱があった頃の出土であり、明確な出土層位は不明。近世まで下る可能性がある。このほか墨痕の存在する木片が一点。同一の小グリッドから出土している。

金属製品（341～344） 341・342は鉄器。341は刀子、345は厚さ約2mmの薄手の鉄器片であり器種は不明。出土層位からともに平安時代のものと考える。

343・344は銭貨。いずれもS X31の上面から出土した。343は至和元寶で、初鋤が1051年の北宋銭である。344は二枚重なった状況で出土した。2枚とも元豐通寶である。元豐通寶は、1078年初鋤の北宋銭であるが、中世末から近世初頭にかけて国内で定量模鋤されており、模鋤銭の可能性もある。

第VI章 自然科学的分析

上郷遺跡における古環境変遷と稻作地の範囲

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

上郷遺跡は、新潟平野の阿賀野川・信濃川流域の氾濫原に覆われた後背湿地上に位置する遺跡である。高浜（1992）によれば、新潟平野の特徴として、長大な海岸砂丘が発達すること、平野の大部分が沖積低地・氾濫原で占められ、扇状地の発達が貧弱なことがあげられている。氾濫原は、旧河道に沿って分布する微高地・自然堤防とその後背湿地からなる。今回の発掘調査では、平安時代遺物包含層や「方形溝」（第1地点：新津市細池遺跡などと同様な遺構）などの遺構、江戸時代遺物包含層が確認され、低地部と微高地の境も確認された。特に本遺跡は、平安時代の墳の微高地上に展開する集落と低地部の生産域の実態を把握する上で重要である。

今回、財団法人新潟県埋蔵文化財事業団より自然科学分析調査を応用し、古環境や水田域の広がりを推定することが望された。そこで、当社技師1名が現地調査及び試料採取を行い、協議を行った。これに基き、平安時代～江戸時代の遺跡周辺の古環境変遷および平安時代の低地部における稲作の広がりなどを検討する目的で、珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析・樹種同定を行うとした。

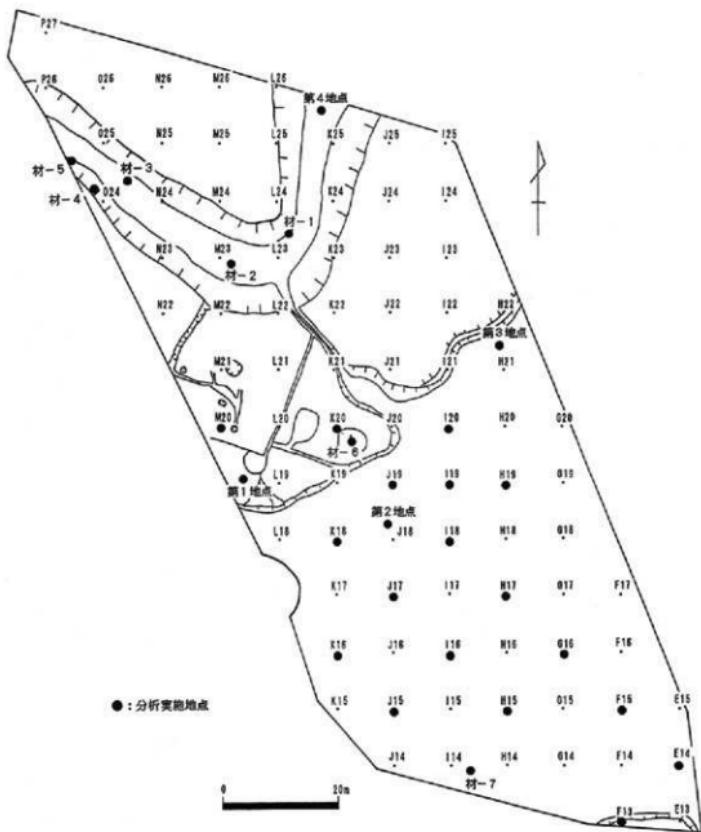
1. 層序と試料

本遺跡の基本層序は、VI層～I層の6層に分層される。最下部のVI層は灰色シルト～粘土よりなり、調査区北側で微高地を形成する。V層およびIV層は、低地部から微高地縁周辺部にみられ、V層が暗褐色～暗灰褐色を呈するシルト、IV層が灰褐色シルトよりなる。III層より上位は、低地部から微高地部までの本遺跡全体を覆い堆積しており、III層が灰褐色～暗灰色シルト、II層が暗褐色～灰褐色シルト、I層が褐色シルトよりなる。これらの各層は、場所により下位よりb層・a層に細分される。

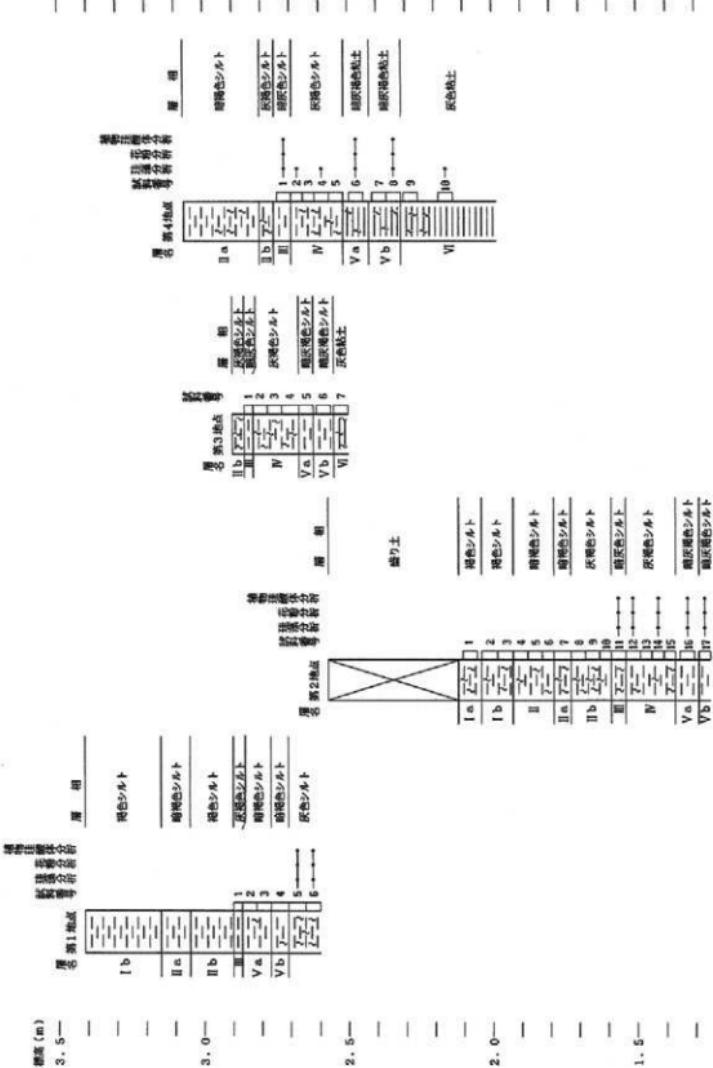
発掘調査の結果、微高地部では、VI層を掘り込んで平安時代（10世紀代）の「方形溝」（第1地点）、流路（第4地点）や井戸（SE3）などの遺構が検出されている。第1地点の遺構埋積物は、灰色シルトからなる。第4地点の流路埋積物は、暗灰色粘土（V層）、灰褐色シルト（IV層）である。また、V層で平安時代の遺物が、III層で江戸時代の遺物がそれぞれ検出される。この他、調査区内では、立木や流木などの材化石が検出されている。

試料は、第1地点～第4地点で遺構埋積物およびV層～I層を対象に5cm厚で連続試料として採取し、さらにV層（Vb層・Va層）については杭列などを利用し、平面的に採取した。また、井戸（SE3）の埋積物の最下部より試料を採取した。第1地点～第4地点の模式柱状図および分析層位を第16・17図に示す。また、V層の平面的に採取した試料の一覧および分析試料を第3表に示す。

なお、材同定試料の一覧は、同定結果とともに表9に示す。



第16図 試料採取地点位置



第17図 第1地点～第4地点の模式柱状図および分析層位

地点名	層名	層相	試料番号	分析項目 P P.O.
E 14	V	灰褐色シルト	1	○ ○
F 13	S D 1 地上	暗灰褐色粘質シルト	2	○ ○
	V	灰褐色粘質シルト	1	
F 14	V	灰褐色シルト	2	
		灰褐色粘質シルト	1	
			2	
F 15	V a	灰褐色粘質シルト	1	
			2	
	V b	暗灰褐色粘質シルト	3	○
F 16	V	灰褐色粘質シルト～黑褐色シルト	1	
			2	
G 15	V a	暗灰褐色粘質シルト	1	
	V b	灰褐色粘質シルト	2	
G 16	V a	灰褐色粘質シルト	1	
	V b	暗灰褐色粘質シルト	2	○ ○
H 14	V	灰褐色粘質シルト	1	
H 15	V	灰褐色粘質シルト	1	
			2	○
			3	
H 16	V ?	灰褐色粘質シルト	1	
			2	
H 17	V ?	暗灰褐色粘質シルト	1	
			2	
			3	○
H 18	V a	暗灰褐色粘質シルト	1	
	V b	暗灰褐色粘質シルト	2	
			3	
H 19	V a	灰褐色粘質シルト	1	
	V b	暗灰褐色粘質シルト	2	○
I 15	V a	灰褐色シルト	1	
I 16	V	灰褐色～暗灰褐色粘質シルト	1	
			2	
			3	○
I 17	V a	灰褐色粘質シルト	1	
	V b	暗灰褐色粘土	2	
			3	
I 18	V a	暗灰褐色粘質シルト	1	○ ○
	V b	暗灰褐色粘質シルト	2	○ ○
			3	
I 19	V i	灰色シルト	4	
	V a	暗灰褐色粘質シルト	1	
	V b	暗灰褐色粘質シルト	2	○ ○
J 15	V a	灰褐色シルト	1	
	V i	灰褐色シルト	2	
			3	
J 16	V	灰褐色～暗灰褐色粘質シルト	1	
			2	
			3	
J 17	V a	灰褐色シルト	1	○
			2	
			3	○
J 18	V a	暗灰褐色粘土	1	
	V b	暗灰褐色粘土	2	
			3	
J 19	V a	灰褐色粘質シルト	1	
	V b	暗灰褐色粘質シルト	2	○ ○
J 20	V a	灰褐色粘土	1	
	V b	暗灰褐色粘質シルト	2	
K 16	V a	灰褐色シルト	1	
	V b	灰褐色シルト	2	○ ○
K 17	V b	暗灰褐色シルト	1	
			2	
K 18	V a	暗灰褐色粘質シルト	1	
	V b	暗灰褐色粘質シルト	2	○ ○
	V i	灰褐色粘質シルト	3	
K 20	V a	灰褐色シルト	1	○ ○
	V b	暗灰褐色粘質シルト	2	○ ○
			3	
L 20	V b	暗灰褐色粘質シルト	1	
M 20	V a	暗灰褐色シルト	1	
	V b	暗灰褐色粘質シルト	2	○ ○
M 24	V a	暗灰褐色粘質シルト	1	
	V b	灰褐色シルト	2	
			3	
M 25	V b	褐色シルト	1	
			2	
			3	
S E 3	1 3	灰褐色砂質シルト	1	○

註) 層相記載は、農業調査所見を参考にした。

P : 花粉分析 P.O : 植物達謫体分析

第3表 V層平面採取試料の分析位置

2. 方 法

(1) 珪藻分析

試料を湿重で10g秤量し、過酸化水素水、塩酸の順に化学処理し、試料の泥化と有機物の分解、漂白を行う。自然沈降法で粘土分、傾斜法で砂分を除去した後、適当量計り取りカバーガラス上に滴下、乾燥する。乾燥後、ブリュラックスで封入する。

検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する（珪藻化石の少ない試料はこの限りではない）。種の同定は、K.Krammer and Lange-Bertalot (1986,1988,1991a,1991b) などに従う。

堆積環境の解析にあたっては、まず塩分濃度に対する適応性から産出種を海水-汽水-淡水生種に分類し、淡水生種については更に塩分・水素イオン濃度（pH）・流速に対する適応性について生態区分する。そして、産出率2.0%以上を示す分類群について、主要珪藻化石の層位分布図を作成する。図中の海水-汽水-淡水生種の帶グラフと各種産出率・完形殻産出率は全基数、淡水生種の生態性の帶グラフは淡水生種の合計を基数とした相対頻度で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は1%未満の産出、○は100個体未満における試料の産出を示す。堆積環境の解析にあたっては、安藤(1990)、伊藤・堀内(1991)の環境指標種を参考とする。

(2) 花粉分析

湿重約10gの土壤試料について、水酸化カリウム処理、重液分離（臭化亜鉛、比重2.2）、フッ化水素処理、アセトリシス処理の順に物理・化学的な処理を施して、試料から花粉・胞子化石を分離・収集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査しながら、出現する全ての種類（Taxa）について同定・計数を行う。

結果は同定・計数結果の一覧表と花粉化石群集の層位的分布図として表示する。図中の出現率は、木本花粉が木本花粉総数を、草本花粉・胞子が総数より不明花粉を除いた数を、それぞれ基数として百分率で算出する。図表中で複数の種類をハイフン（-）で結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

(3) 植物珪酸体分析

試料約10gについて、過酸化水素水と塩酸による有機物と鉄分の除去、超音波処理（80W、250kHz、1分間）による試料の分散、沈降法による粘土分の除去、ポリタングステン酸ナトリウム（比重2.5）による重液分離を順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・収集する。これを検鏡し易い濃度に希釈した後、カバーガラスに滴下し、乾燥させる。その後、ブリュラックスで封入してプレパラートを作製する。

検鏡は、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現するイネ科植物の葉部（葉身は葉鞘）の短細胞に由来する植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身の機動細胞に由来する植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、同定・計数する。なお、同定には、近藤・佐瀬(1986)の分類を参考とする。

結果は検出された植物珪酸体の種類と個数を一覧表で示す。また、各種類の出現傾向から、生育しているイネ科植物を検討するために、植物珪酸体組成図を作成する。出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の各珪酸体毎に、それぞれの総数を基数として百分率で算出する。なお、●○は1%未満を示し、短細

胞珪酸体で200個、機動細胞珪酸体で100個未満の試料においては統計的に扱うと歪曲する恐れがあるため、+/-表示する。

(4) 樹種同定

剃刀の刃を用いて、試料の木口（横断面）・柵目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

3. 結 果

(1) 珪藻化石の産状

結果を第4表と第18~20図に示す。以下、珪藻化石の産状を地点別に述べる。

〈第1地点〉

珪藻化石は、試料番号5・6の2試料とも僅かに100個体を越える程度で多くはない。また、完形殻の出現率は15%~30%であり、化石の保存状態も悪い。産出種のほとんどは淡水生種より構成され、産出分類群数は合計で67分類群である。珪藻化石群集は、2試料とも同様であり、貧塩-不定性種、真・好アルカリ性種、流水不定性種と真・好流水性種が高率である。

産出種は、流水不定性で好塩性の*Rhopalodia gibberula*が多産し、上流性河川指標種群の*Gomphonema-sumatrense*、中~下流性河川指標種群の*Cymbella sinuata*、陸生珪藻のA群の*Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica*、沼沢湿地付着生種群の*Eunotia pectinalis* var. *minor*、陸生珪藻のB群の*Pinnularia appendiculata*を伴う。

〈第2地点〉

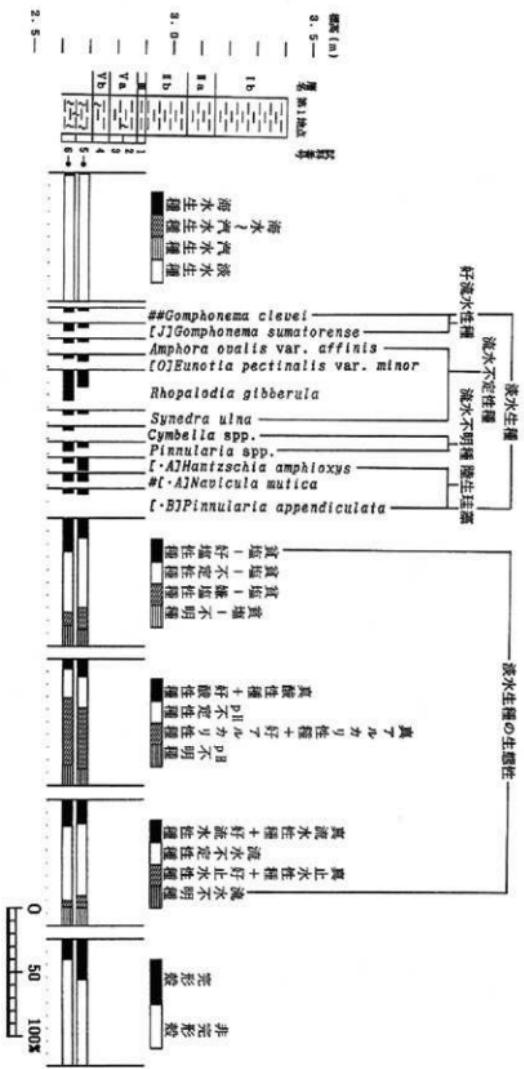
珪藻化石は、試料番号11・12・14・16・17の5試料で豊富に産出する。完形殻の出現率は、試料番号17で70%、その他試料が50%前後である。産出種のほとんどは淡水生種で構成され、産出分類群数は合計で136分類群である。珪藻化石群集は、試料番号14と16の間で変化する。試料番号17・16では、貧塩-不定性種、真・好酸性種真、好止水性種の高率が特徴である。試料番号14~11では、貧塩-不定性種、真・好アルカリ性種、真・好流水性種が高率である。

産出種は、試料番号17・16で沼沢湿地付着生種群の*Eunotia pectinalis* var. *minor*、*Gomphonema gracile*が多産し、同じく沼沢湿地付着生種群の*Pinnularia gibba*、*Tabellaria fenestrata*、*Gomphonema acuminatum*、*Eunotia incisa*、湖沼湿地指標種群の*Aulacoseira ambigua*を伴う。

試料番号14~11は、前述の沼沢湿地付着生種群に伴って、中~下流性河川指標種群の*Cymbella sinuata*、*Rhoicosphenia abbreviata*、*Achnanthes lanceolata*、好流水性の*Coccconeis placentula* var. *euglypta*を伴う。ただし、試料番号14に比べると、試料番号12・11は、上位に向かい真・好流水性種の割合が減少する傾向にある。

〈第4地点〉

珪藻化石は、試料番号10で少なかったその他の試料では豊富に産出する。完形殻の出現率は、約50~70%である。また、上位のものほど出現率が低い傾向がある。産出種のほとんどは淡水生種より構成され、産出分類群数は合計で144分類群である。珪藻化石群集は、試料番号6と4、試料番号4と2を境として変化する。試料番号8・6では、貧塩-不定性種、真・好酸性種、流水不定性種（真・好止水性種の割合



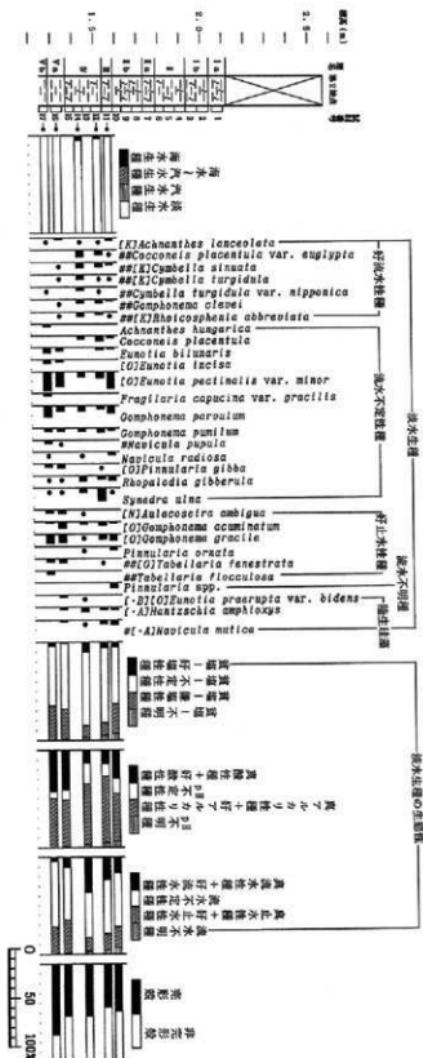
第18図 第1地点における主要珪藻化石群集の層位の変化

海水一汽水一淡水生種産出率、各種産出率、完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として算出する。いずれも100個体以上検出された試料について示した。

環境指標種群：〔J〕：上流域河川指標種。〔O〕：沼澤地付着生種（安藤、1990）

#：好汚濁性種。##：好清水性種（渡辺ほか、1986）

〔・A〕：陸生珪藻。〔・B〕：B群、伊藤・堀内、1991）



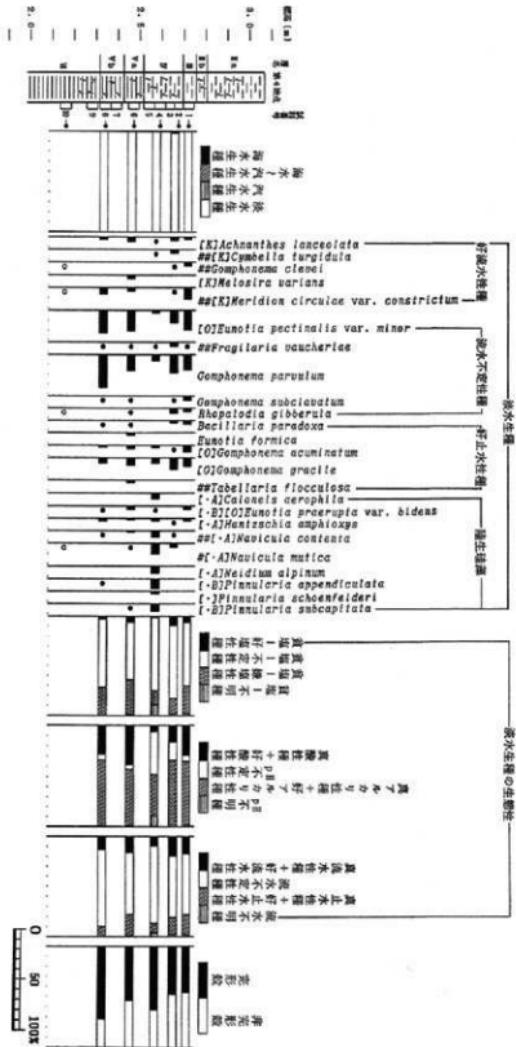
第19図 第2地点における主要珪藻化石群集の層位的変化

海水-汽水-淡水生種産出率・各種産出率・完形種産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として算出する。いずれも100個体以上検出された資料について示した。なお、●は1%未満の産出を示す。

環境指標種群：〔K〕：中-下流性河川指標種 〔N〕：湖沼混生湿地指標種 〔O〕：沼澤湿地付着生種（安藤、1990）

#：好汚濁性種 ##：好清水性種 (渡辺ほか、1986)

[・]：陸生过渡 ([・A]：A群、[・B]：B群、伊藤・梶内、1991)



第20図 第4地点における主要珪藻化石群集の層位的変化

海水-汽水-淡水生産率・各種産出率・完形数産出率は全体基數、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基數として算出する。いずれも100個体以上検出された試料について示した。なお、●は1%未満の産出、○は100個体未満の試料における産出を示す。

環境指標種群：〔K〕：中～下流性河川指標種 〔O〕：沼澤湿地付着生種（安藤、1990）

#：好汚泥性種、##：好清水性種（渡辺ほか、1986）

[・]：陸生珪藻（〔・A〕：A群、〔・B〕：B群、伊藤・堀内、1991）

も比較的高い)、試料番号4では、塩分・水素イオン濃度、流水・不定性種、試料番号2・1では、貧塩・不定性種、真・好酸性種、流水不定性種(真・好止水性種の割合も比較的高い)が高率を示す。

産出種は、試料番号8・6で沼沢湿地付着生種群の*Eunotia pectinalis* var. *minor*、流水不定性の*Gomphonema parvulum*が多産し、同じく沼沢湿地付着生種群の*Gomphonema gracile*、中～下流性河川指標種群の*Meridion circulae* var. *constrictum*を伴う。

試料番号4では、陸生珪藻のA群の*Navicula contenta*、*N. mutica*、*Neidium alpinum*、陸生珪藻のB群の*Pinnularia appendiculata*、*P. subcapitata*が多産する。

試料番号2・1では、試料番号8・6の化石群集と同様な種群が産出する。

(2) 花粉化石の産状

結果は、表5・6と第21～23図に示す。花粉化石は、全体的に保存状態が悪く、外膜が溶けて薄くなっていたり、壊れていたりする。以下に、各地点ごとに結果を述べる。

〈第1地点〉

花粉化石は、試料番号6・5とも検出個体数が少ない。検出される種類は、木本花粉12種類、草本花粉8種類、シダ類胞子の合計21種類である。

〈第2地点〉

花粉化石は、試料番号11を除く4試料で検出される。木本花粉では、ハンノキ属・ブナ属・コナラ属コナラ亜属が多産する。また、上部に向かい、マツ属・ツツジ科が増加する。この他、スギ属・クマシデ属・アサダ属・カバノキ属・コナラ属アカガシ亜属・ニレ属・ニレ属・ケヤキ属が出現する。

一方、草本花粉の出現傾向は、試料番号17・16と試料番号14・12で異なる。試料番号17・16では、イネ科が多産し、次いでカヤツリグサ科・ヨモギ属が出現する。この他、ミクリ属・サジオモダカ属・サンショウウモなどが検出される。試料番号14・12では、イネ科・カヤツリグサ科などが検出されるが、草本花粉の出現率が低下する。

〈第4地点〉

試料番号8・1では、花粉化石がほとんど検出されない。試料番号6では、ハンノキ属・ブナ属・コナラ属・コナラ亜属が多産し、マツ属・スギ属・クマシデ属・アサダ属・カバノキ属・アカガシ亜属・クリ属・シノキ属・ニレ属・ケヤキ属などが出現する。草本花粉ではイネ科が多産し、カヤツリグサ科・ヨモギ属などが出る。

〈E14・G16・I18・K16・K20〉

K20試料番号2・1の試料を除き、花粉化石が各地点で検出される。木本花粉の出現傾向は、各地点とも類似しており、ハンノキ属・ブナ属・コナラ亜属が多産し、マツ属・スギ属・クルミ属・クマシデ属・アサダ属・カバノキ属・アカガシ亜属・ニレ属・ケヤキ属などが出現する。

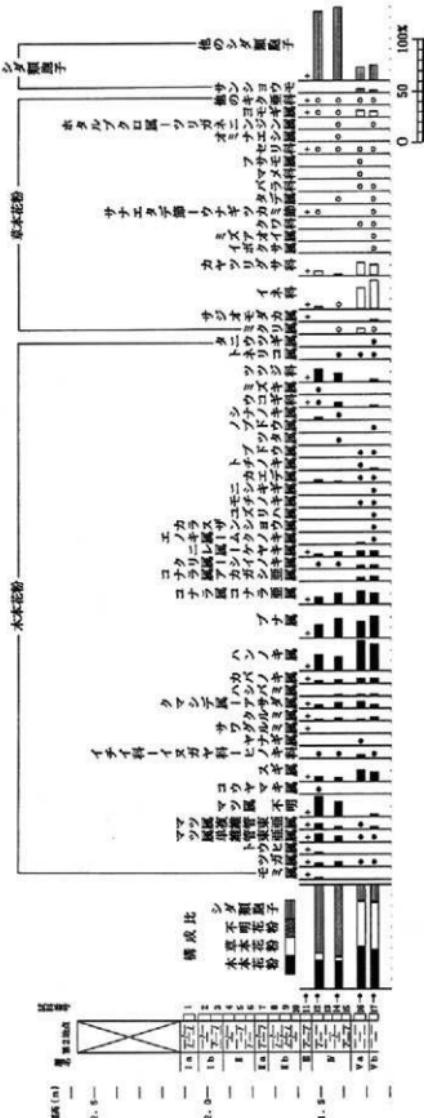
草本花粉は、イネ科・カヤツリグサ科が多産する。このうち、イネ科は、各地点ともV_a層とV_b層上部で出現率が低下する傾向がある。この他、ミクリ属・サジオモダカ属・オモダカ属・ミズアオイ属・サンショウウモなどが検出される。これらの種類の中でミクリ属がI18試料番号1で多産する。また、E14の試料番号1およびK16の試料番号2では、ソバ属が検出される。

種類(Taxa)	試料番号	第1地点		第2地点					第4地点			
		5	6	11	12	14	16	17	1	6	8	
木本花粉		-	-	1	4	-	-	-	-	-	1	
モミ属	1	3	7	10	8	-	2	2	3	-	2	
ツバキ属	2	6	7	4	-	-	-	3	8	-	-	
マツモトヨコハヤシ属	1	6	7	20	12	1	1	2	6	5	-	
マツモトヨコハヤシ属	2	14	10	15	4	2	6	4	5	5	-	
マツモトヨコハヤシ(不明)	1	22	16	58	31	-	5	5	3	3	-	
コウモリマキ属		-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	
スギ属		-	1	3	12	7	28	23	4	22	3	
イヌイロイヌガヤ科		-	-	-	1	1	2	2	-	4	-	
ヤナギ属		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	
サワダルマ属		-	-	1	4	5	4	8	-	7	1	
クルミ属		-	1	2	8	10	18	9	-	11	1	
クルミ属—アサダ属		-	-	-	-	3	4	3	-	10	-	
ハシバモチ属		-	-	1	7	7	10	10	-	10	1	
カバノキ属		1	8	10	44	28	81	69	7	33	9	
ハンノキ属	2	5	8	35	39	34	57	1	30	5		
ブナ属		2	2	19	21	-	-	-	-	-	-	
コナラ属		-	-	-	3	1	9	10	-	15	-	
コナラ属—アカガシ属		-	-	-	-	9	8	1	-	10	4	
クリ属		-	-	-	-	14	15	1	-	-	-	
ニレ属	1	1	4	7	9	3	1	-	-	-	-	
エノキ属		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	
カラスザンシヨウ属		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	
ユズリハ属		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	
モチノキ属		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	
ニシキギ属		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	
カエデ属		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	
トチノキ属		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	
ブドウ属		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	
ツタ属		-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	
ノブドウ属		-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	
シナノキ属		-	-	5	2	-	-	-	-	-	1	
ダミ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ウコギ科		-	-	4	1	8	-	3	-	-	1	
ミズキ属		-	-	4	35	18	-	5	3	2	-	
ツヅキ科		-	-	-	-	2	2	1	-	-	-	
トネリコ属		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	
タニウツギ属		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	
草本花粉		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ガマ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ミクリ属	-	-	-	-	1	36	2	1	-	1	-	
サンショウモダカ属	-	-	1	-	-	-	8	-	-	-	-	
イネ科	2	4	9	17	8	133	196	8	605	74	-	
カヤツリグサ科	5	25	34	38	9	77	72	4	112	8	-	
ボクサ属	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	
ミヤオイ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	
クワ科	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	
サクラタデ節—ウナギツカミ節	1	8	2	6	-	-	1	1	-	2	-	
タケ属	-	-	-	-	1	-	2	-	-	2	-	
アカサ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
カラマツソウ属	1	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	
キンポウゲ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
バラ科	-	-	-	-	-	-	1	2	-	2	-	
マメ科	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	
フクロソウ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
アカバナ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
フサ科	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	
セリ科	-	3	1	1	1	1	3	-	-	1	1	
オミナエシ属	-	-	-	-	1	-	-	-	-	2	2	
ゴキヅル属	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	
ホタルブクロ属—ツリガネニンジン属	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	
ヨモギ属	1	5	13	9	4	38	33	4	24	4	-	
他のキク科	-	6	2	4	1	1	-	2	-	-	-	
不明花粉	-	1	3	5	5	8	8	1	4	1	-	
シダ類 鳥子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
サンショウモ	128	142	371	683	563	80	100	465	43	28	-	
他のシダ類 鳥子											-	
合計	木本花粉	11	70	90	301	220	278	279	35	202	36	
木草花粉	12	47	66	73	30	290	326	18	756	90	-	
不思议花粉	0	1	3	5	5	8	8	1	4	1	-	
総花粉	128	142	371	683	563	97	114	465	43	28	-	
	鳥子	151	260	530	1062	818	673	726	519	1005	155	-

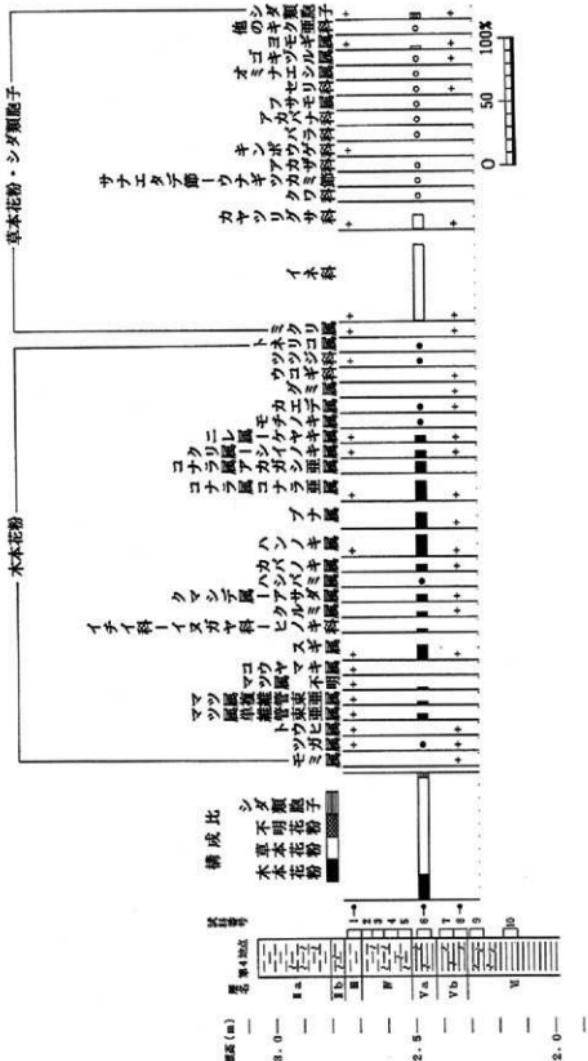
第5表 第1地点・第2地点・第4地点の花粉分析結果

種類(Taxa)	試料番号	E14		G16		I16		K16		K20		SE3
		1	2	2	3	1	2	1	2	1	2	1
木本花粉		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ツバキ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
トウヒ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
マツ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4
マツ属被子植物		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	11
クスノキ属(不規)		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	20
コクサギ科		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
スギ科	40	23	14	24	13	2	25	8	14	-	1	29
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	1	4	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1
ヤナギ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
カワダルヌ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クマシマヌ属-アザダ属	15	17	11	15	12	14	11	4	2	-	-	7
ハシバミ属	8	8	8	8	7	10	2	4	1	-	-	2
ハンノキ属	79	70	62	84	40	85	54	29	17	-	-	44
ブナ属	49	68	15	32	25	41	45	68	12	2	12	12
コナラ属	63	37	26	24	17	24	27	22	11	-	-	18
コナラ属被子植物	13	12	14	14	10	8	2	2	-	-	-	2
タリエス科	5	5	10	1	7	5	4	4	-	-	-	5
ニレ科-ケヤキ属	7	16	12	15	8	15	24	22	8	-	-	12
エノキ属-ムクノキ属	11	1	1	2	1	1	1	1	1	-	-	-
アトリエ属	6	19	2	-	-	-	2	-	-	-	-	-
モチノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
カエデ科	5	6	1	1	4	1	1	1	1	-	-	4
カエデノキ属	3	3	2	-	-	3	1	-	-	-	-	2
ドキ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
シナノキ属	-	-	3	1	-	-	-	3	-	-	-	1
グミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ワコギ科	7	1	1	1	3	1	3	1	-	-	-	1
シラカシ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
シラカシ属	10	10	3	2	2	2	2	8	3	6	-	1
エゴノキ属	-	-	1	2	2	1	1	-	-	-	-	-
トネリコ属	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ガマズミ属	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
スイカズラ属	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
草本花粉		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ガマ属		-	1	-	-	3	-	-	-	-	-	-
ミクリ属	4	7	5	2	12	14	6	11	1	-	-	2
サンオモジガマ属	1	-	4	2	3	4	6	-	-	-	-	-
スズラン属	-	-	2	5	-	2	-	1	-	-	-	-
スズラン属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ科	145	270	152	250	58	214	77	214	80	12	490	-
カヤツリグサ科	129	187	89	91	47	108	105	132	5	-	34	-
イボクサ属	-	-	4	-	-	7	-	1	-	-	-	2
シコヤシオ属	-	-	-	-	-	15	7	15	1	-	-	-
タツノ科	-	-	2	1	1	3	-	3	2	-	1	25
サンエイタデヅル-ウナギツカミ節	1	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	22
タデ属	1	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	3
ソウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7
アカシ科	3	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	41
アシショ科	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	9
カラマツソウ属	2	2	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
キンポウゲ科	-	-	1	-	-	-	1	1	2	-	-	44
アブラナ科	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
バラ科	-	-	-	2	-	-	1	-	-	-	-	-
トウダイギダ科	1	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-
シリフネソウ属	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-
ヒビシ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
アリノトウダガ属	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-
アリノ科	2	1	2	-	-	1	-	1	-	-	-	9
オオバコ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
オミナエシ属	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	9
ゴキヅル属	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-
ヨモギ属	22	36	20	39	8	15	20	8	5	-	73	-
他のキク科属	-	6	-	2	1	1	1	-	1	-	4	-
他のキク科属	2	6	-	2	1	1	1	-	1	-	2	-
タンボガ科	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
不明花粉	14	10	21	7	5	11	8	6	5	1	15	-
シダ類	1	15	14	21	4	10	25	6	1	-	-	-
サンショウワタ	176	130	55	52	81	82	65	102	432	31	240	-
クンショウモ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
合計	365	380	202	251	162	276	221	225	85	6	193	-
木本花粉	316	522	293	411	244	386	224	398	55	13	1087	-
不使用花粉	14	10	21	7	6	11	8	6	5	-	15	-
子島子	176	131	70	66	102	86	75	127	438	32	240	-
花粉	871	1023	586	735	813	759	528	756	603	52	1506	-

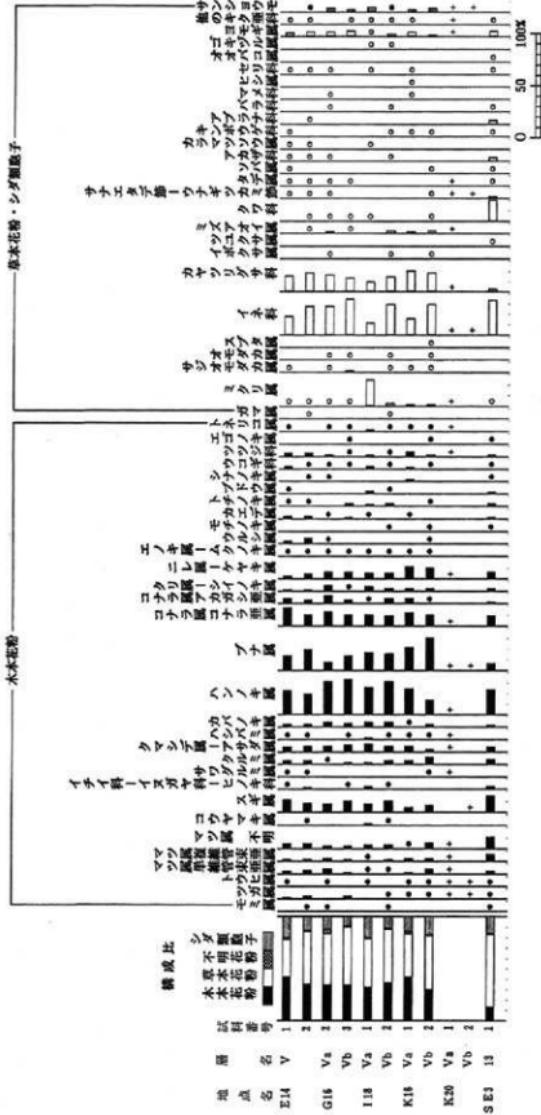
第6表 V層および93-S E 3の花粉分析結果



第21図 第2地点における花粉化石群の層位的変化
出雲市は、木本花粉は木本花粉地質、草本花粉・シダ類地質は、より不明花粉を除く数を基準として百分率で算出した。
なお、●○は1%未満、+は木本花粉100個体未満の試料において検出された結果を示す。



第22図 第4地点における花粉化石群の層位的変化
出現率は、木本花粉は木本花粉密度、草本花粉・シダ類孢子は総数より不明花粉を除く数を基準として百分率で算出した。
なお、●○は1%未満、+は木本花粉10個体未満の試料において検出された範囲を示す。



第23図 V_aおよびG16-S E 3におけるTEH化石解剖
出現率は、木本花粉は木本花粉密度、草本花粉・シダ類孢子は密度より10倍化した値を百分率として算出した。
なB、●は1%水溶、○は木本花粉10割体未満の試料において検出された種類を示す。

<SE 3>

木本花粉では、マツ属・スギ属・ハンノキ属が多産し、ブナ属・コナラ属・ニレ属一ケヤキ属が出現する。この他、クルミ属・クマシデ属一サダ属・トチノキ属・ブドウ属などを伴う。

草本花粉では、イネ科・クワ科が多産する。この他、ミクリ属・カヤツリグサ科・サナエクテ節一ウナギツカミ節・ソバ属・アカザ科・アブラナ科・オオバコ属・ヨモギ属が出現する。

(3) 植物珪酸体の産状

結果を第7・8表と第24~27図に示す。植物珪酸体は、短細胞・機動細胞珪酸体が良好に検出される地点が多い。以下、各地点で産状を述べる。

<第1地点>

植物珪酸体は、短細胞・機動細胞珪酸体とも良好に検出される。

植物珪酸体組成は、試料番号6と試料番号5で差異が認められる。試料番号6では、クマザサ属や栽培種のイネ属が多産し、マコモ属・キビ族・ヨシ属・スキ属・イナゴツナギ亞科などを伴う。これに対して、試料番号5になるとクマザサ属・イネ属が減少し、ヨシ属が多産する。

<第2地点>

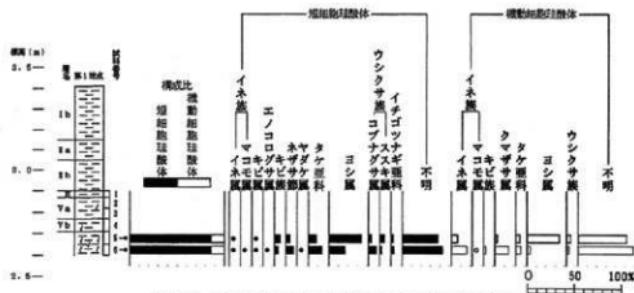
植物珪酸体は、短細胞・機動細胞珪酸体とも良好に検出される。

植物珪酸体組成は、試料番号17・16と試料番号14と試料番号12・11で差異が認められる。試料番号17・16では、ヨシ属が多産し、キビ族・クマザサ属・ネザサ節・タケ亞科・コブナグサ属・スキ属・イチゴツナギ亞科などを伴う。

試料番号14では、ヨシ属が減少して、ネザサ節・クマザサ属・タケ亞科が増加し多産する。その上位試料番号12・11では、タケ亞科が減少して、再びヨシ属が多産し、試料番号17・16にはほぼ類似する。また、

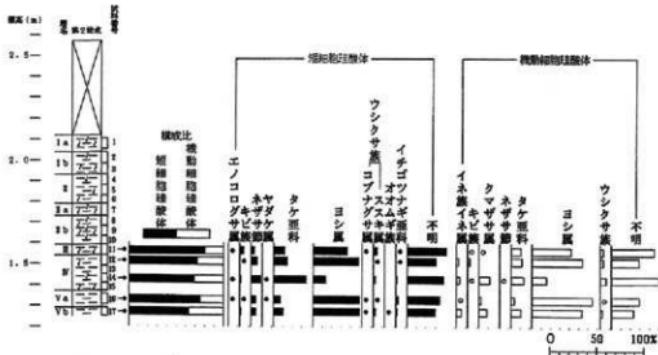
種類(Taxa)	試料番号	第1地点		第2地点					第4地点		
		5	6	11	12	14	15	17	1	6	8
イネ科葉部短細胞珪酸体											
イネ族イネ属	4	3	-	-	-	-	-	-	-	-	1
イネ族マコモ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キビ族キビ属	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キビ族工ノコログサ属	-	1	2	-	1	1	-	-	-	-	-
キビ族	39	23	15	2	3	2	3	-	-	7	9
タケ面科ネザサ節	28	48	13	16	23	15	11	1	1	6	7
タケ面科ヤマタケ属	-	2	-	-	1	1	-	-	-	-	-
タケ面科	51	86	46	36	80	23	21	2	14	22	-
ヨシ族	222	106	149	128	31	158	98	181	139	380	-
ワニクサ族コブナグサ属	19	51	-	-	-	2	1	-	-	-	-
ウシクサ族スキ属	52	15	17	1	5	3	4	1	5	10	-
イチゴツナギ亞科オオムギ族	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	2
イチゴツナギ亞科	10	20	4	2	3	6	3	-	-	5	2
不明キビ型	155	137	84	29	32	38	16	5	30	42	-
不明キビシバ型	35	26	28	14	11	25	7	12	16	49	-
不明ダンチク型	51	98	59	38	48	46	35	14	43	76	-
イネ科葉部機動細胞珪酸体											
イネ族イネ属	6	16	-	2	3	1	6	1	2	4	-
イネ族マコモ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キビ族	-	2	1	2	1	-	-	-	-	-	1
タケ面科クマザサ属	2	14	1	-	12	2	9	-	-	-	-
タケ面科ネザサ節	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
タケ面科	4	5	10	11	14	3	12	7	6	3	-
ヨシ属	36	3	42	54	16	68	62	110	76	59	-
ウシクサ族	4	2	3	3	6	1	2	-	2	3	-
不明	54	60	46	29	52	31	27	12	15	32	-
合計	547	618	416	266	238	320	201	216	265	598	-
イネ科葉部短細胞珪酸体	106	103	103	101	105	106	118	130	101	104	-
検出個数	753	721	521	367	343	426	319	346	366	702	-
組織片ヒグシバ型短細胞列	-	-	-	-	-	-	-	-	1	3	-

第7表 第1地点・第2地点・第4地点の植物珪酸体分析結果



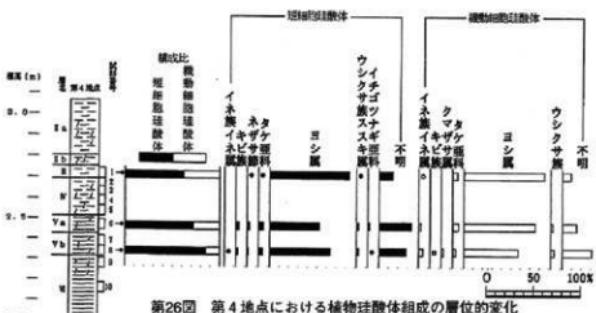
第24図 第1地点における植物珪酸体組成の層位的変化

出現率は、検出された短細胞珪酸体、機動細胞珪酸体とともにそれぞれの総数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満を示す。



第25図 第2点における植物珪酸体組成の層位的変化

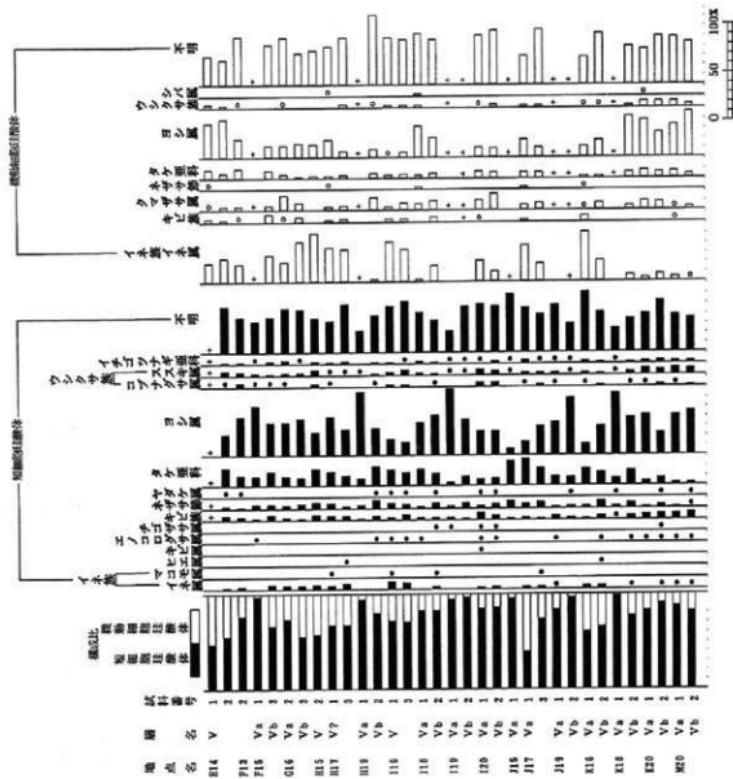
出現率は、検出された短細胞珪酸体、機動細胞珪酸体とともにそれぞれの総数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満を示す。



第26図 第4地点における植物珪酸体組成の層位的変化

出現率は、検出された短細胞珪酸体、機動細胞珪酸体とともにそれぞれの総数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満を示す。

第8表 V層の植物珪酸体分析結果



第27図 V層における植物壁酸体組成の平面的分布

出現率は、検出された短細胞壁酸体、機動細胞壁酸体とともにそれぞれの総数を基數として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、+は短細胞壁酸体で100個体未満、機動細胞壁酸体で200個体未満の検出を示す。

栽培種のイネ属は機動細胞珪酸体が試料番号17~12まで連続して検出される。

〈第4地点〉

植物珪酸体は、短細胞・機動細胞珪酸体とも良好に検出される。

植物珪酸体組成は、ヨシ属が多産し、キビ族・タケア科・ススキ属・イチゴツナギア科などを伴う。また、栽培種のイネ属が連続して検出されるものの、上位に向かい減少する。

〈E14~M20〉

各点の植物珪酸体は、短細胞珪酸体でE14で検出個数が少なく、それ以外の試料で良好に検出される。

機動細胞珪酸体は、F15の試料番号1、H19の試料番号1、I19の試料番号1・2、J15の試料番号1、J19の試料番号1・2、K18の試料番号1における8試料で検出個数が少なく、それ以外の試料で良好に検出される。

植物珪酸体組成は、各地点で差異が認められる。F15・G16・H15・H17・I16・I20・J17・K16の地点では、栽培種のイネ属が多産する。それ以外の地点E14・F13・H19・I18・I19・J19・K18・K20・M20ではヨシ属が多産する特徴がある。ただし、J15では、際立って多く検出される種類が多く、タケア科が他と比較してやや多い傾向がある。各地点でこれらの種類以外にキビ族・クマザサ属・ネザ節・ウシクサ族・イチゴツナギア科などが検出される。

(4) 樹種固定

固定結果を第9表に示す。7点の試料のうち、試料番号7は保存状態が良好ではなく、広葉樹(散孔材)の木材組織を有することは確認できたが樹種の特定には至らなかった。その他の試料には、コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節・カツラ・カエデ属・トネリコ属の5種類が確認された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris* sp.)

ブナ科

環孔材で孔圈部は1~3列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら放射状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節科 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus* sp.)

ブナ科

環孔材で孔圈部は1~2列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものと複合放射組織とがある。

番号	出土地点	試料の性格	時代・時期	樹種名
1	S E - 3	流木(立木?)	平安時代?	カツラ
2	S E - 3	流木(立木?)	平安時代?	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
3	S E - 3	流木	平安時代?	カエデ属
4	S E - 3	部材	平安時代?	トネリコ属
5	S E - 3	部材(流木?)	平安時代?	コナラ属コナラ亜属コナラ節
6	K20付近	立木	平安時代?	広葉樹(散孔材)
7	I14付近	立木	平安時代?	カツラ

第9表 樹種固定結果

4. 考察

- ・カツラ (*Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc.) カツラ科
散孔材で、管孔は単独または2~3個が複合、分布密度は高い。晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は階級穿孔を有している。放射組織は異性II型、1~2細胞幅、1~30細胞高。
- ・カエデ属 (*Acer* sp.) カエデ科
散孔材で、道管は単独および2~3個が複合、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は対列~交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1~5細胞幅、1~30細胞高。細胞壁の厚さの異なる2種類の木繊維が木口面で不規則な紋様をなす。
- ・トネリコ属 (*Fraxinus* sp.) モクセイ科
環孔材と考えられるが、年輪は確認できない。道管は单穿孔を有し、壁孔は小型で密に交互状に配列する。放射組織は同性(~異性III型)、1~3細胞幅、1~30細胞高。

4. 考察

(1) 平安時代~江戸時代の古環境変遷について

a) 低地および水路内の堆積環境

本遺跡は、阿賀野川流域の氾濫原上に位置していることを考えると、今回検出された微化石群集中には、比較的広範囲の地域から運搬され堆積したものも含まれていると考えられる。これを考慮して、低地部(第2地点)と水路内(第4地点)の結果をもとに堆積環境の変遷を述べる。

平安時代以前と考えられる地山層は、珪藻化石の産出が極めて少ないとから、堆積環境について詳しく検討することは困難である。ただし、産出種群が水生珪藻を主体とすることから、水成堆積物の可能性もある。

Va層・Vb層が堆積した平安時代の頃、低地部(第2地点)と水路内(第4地点)は同様な堆積環境と考えられる。沼沢湿地主要構成種が多く乾燥している環境よりは、沼沢湿地のような環境であったと考えられる。また、流水性種が産出することから、流れがあるとすればごく小規模であったと推測される。花粉化石や植物珪酸体では、ヨシ属・ミクリ属・サジオモダカ属・オモダカ属・ミズアオイ属・サンショウモなどの沼沢湿地に生育するものが検出された。このことでも、沼沢湿地の環境を反映していると考えられる。また、クマザサ属・ネザサ節などのササ類やイネ科をはじめ、カヤツリグサ科・ヨモギ属・サンエタデ節・ウナギツカミ節・アカザ科・アブラナ科・オバコ属などの草本類も検出される。これは、比較的乾燥した微高地に生育していたものと推定される。また、栽培種のイネ属が本層より上位で連続して出現することから、平安時代以降にイネが栽培されていたと考えられる。

IV層が堆積した頃は、低地部と水路内で違いが認められた。低地部では、珪藻化石群集で沼沢湿地主要構成種に加えて中~下流河川指標種群を多く含む。特に、下部(試料番号14)では、流水の影響が上位と比較して大きかった可能性がある。このことから、沼沢湿地であるが流水の影響を強く受けたと考えられる。

水路内では、下部(試料番号4)で水生珪藻の産出が少なく、陸生珪藻が多産する。このことから、水路内は低地と比較して流水の影響が少なく、乾くこともある半乾半湿の潤湿な環境であったと推測される。ただし、上部(試料番号2)は、第2地点と同様の化石群集で流水の影響を受ける沼澤や湿地のような状態となったと考えられる。潤湿な環境を示す層位が水路内埋積物のごく一部であったことから、

IV層下部での湿润な環境は一時的であった可能性がある。全般的にみると水路内は僅かな流れを伴いながら埋積が進んで行ったと推測される。

III層が堆積する江戸時代以降は、珪藻化石群集で低地部と水路内の差はほとんどない。IV層上部と同様に流水の影響を受ける沼沢湿地であったと考えられる。これらのことから、IV層・III層は、流水によって二次的に流入した異地性化石も多く含まれていると考えられる。

一方、植物珪酸体は、IV層～III層までV層と同様のイネ科植物が検出された。このことから、VI層～III層もV層と同様なイネ科植物が生育していたと推測される。ただし、低地部においてIV層下部ではヨシ属が減少し、ネザサ節・クマザサ属・タケア科が多産する傾向が認められた。これは、珪藻化石群集で流水の影響を反映していると考えられることから、これらの植物珪酸体も、微高地の植物が氾濫などで流れ込んだものと推定される。

d) 森林植生

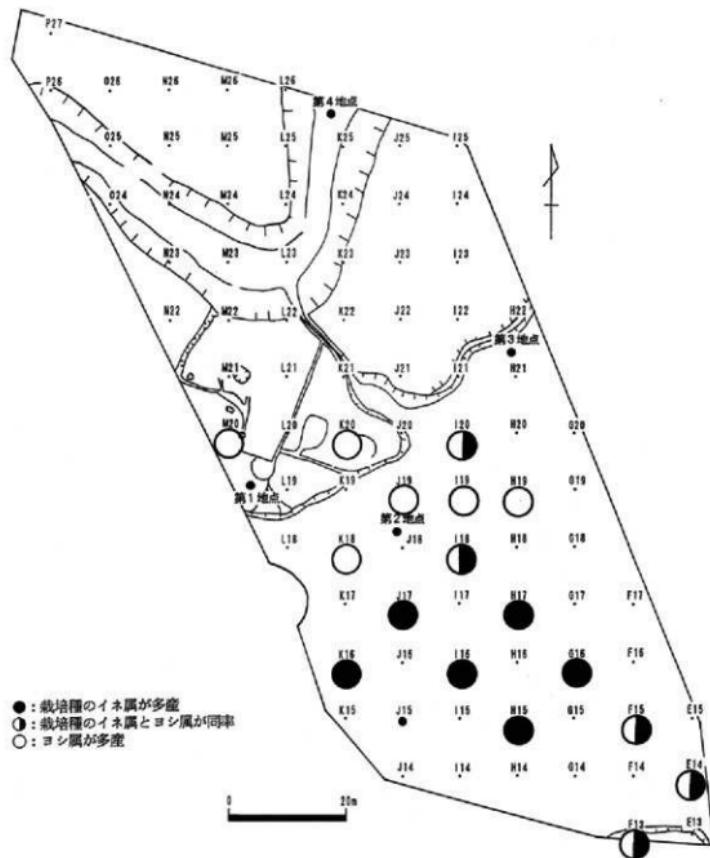
Va層・Vb層あるいはV層の主要木本花粉化石の出現傾向は、各地点で類似している。ハンノキ属・ブナ属・コナラ属が多産し、次いでスギ属・クマシデ属・アサダ属・カバノキ属・アカガシ属・ニレ属・ケヤキ属が出現する。上位のIV層・III層ではこれらの種類が減少し、マツ属・ツツジ科が増加する。また、井戸（S E 3）埋積物の花粉化石群集は、V層の花粉化石群集と類似している。これらの花粉を散布する母植物は高木性であり、しかも花粉生産量が膨大である。したがって、これらの花粉の消長は、V層の群集との対比が可能とみられる。以上のことから、各地点で得られた花粉化石群集を総括して、森林植生の考察を進める。

V層が堆積した平安時代の頃、ブナ属・ハンノキ属・コナラ属を中心とした森林が存在していたと推定される。この他にも、スギ・クマシデ属・アサダ属・カバノキ属・ニレ属・ケヤキ属などが森林構成種として存在していたと推定される。これらの種類の中で、ブナ属が冷温帯落葉広葉樹林の主要構成要素であり、その他にハシバミ属など冷温帯を中心に分布する種類が検出されている。以上のことから、現在の冷温帯を中心に形成される落葉広葉樹林のような植生であったと推定される。また、低率ながら暖温帯常緑広葉樹林の主要構成要素であるアカガシ属も検出されていることから、沿岸部などにはこれらの種類も分布していたと推定される。また、クルミ属・クマシデ属・アサダ属・ハンノキ属・トチノキ属・シナノキ属などの花粉化石や、立木などに見られたカツラ・カオデ属・トネリコ属の種類の中には、湿地林や渓谷林を形成する仲間が存在している。したがって、これらの種類が河川沿いに生育していたと考えられる。

IV層が堆積した頃、マツ属が増加したと考えられる。マツ属は、極端な陽樹であり、先駆植物の代表的な種類である。一方、低地では既に稲作が行われており、人間の活動が行われていたと推定される。これらのことから、周辺地域では、人間が周辺植生に対して著しく干渉したため、ニヨウマツ類からなる二次林が成立していたと判断される。また、同時にツツジ科などの低木類も増加したとみられる。

(2) 平安時代における稲作について

栽培種のイネ属の微化石の消長については、各杭山地点で差異が認められた。花粉化石は、イネ科が多く出現する。また、植物珪酸体は、栽培種のイネ属微動細胞珪酸体が高率に検出された地点がある。約30%以上出現する地点がG16Vb層・H15V層・H17V層？・I16V層・J17Va層・K16Va層であった。約10%以上がE14・F13・F15・I18Vb層・I20Va・b層・J17V層試料番号3・K16Vb層で



第28図 イネ属とヨシ属の平面的分布

あった。それ以外の地点は、約10%以下と低率の出現率であり、H19以外が微高地に近い地点にあたり、ヨシ属が高率に出現した（第28図）。この結果から、微高地に近い地点でヨシ属が卓越し、微高地から離れた低地部では、栽培種のイネ属が多産した。また、機動細胞珪酸体が30%以上を示すことは、これまでの当社のデータによれば稻作が行われた可能性が高い。これらのことから、微高地と低地の境などにヨシ属が卓越して生育していた可能性があり、微高地から離れた低地部の杭17列よりも南で稻作が行われていたと示唆される。また、本遺跡が立地する地形などから、一概にはいえないが、湿田型水田が行われ堆刈を行っており、このためイネの植物遺体が多く土壤中に含まれ植物珪酸体が多く検出されたと推測される。これまでに、新潟平野における稻作を示唆するデーターは乏しかったが、今後は本遺跡が一つの基準になる重要な蓄積となった。また、出土した農具類の研究などを併せることにより水田形態について詳細な検討ができると考えられる。

③ 平安時代の「方形溝」について

分析の結果、花粉化石はほとんど検出されなかった。このため、花粉化石を除く微化石を中心に考察を行う。

遺構覆土の堆積物で試料番号6・5は、珪藻化石群集で陸生珪藻が多産することを考慮すると平安時代に周囲にしばしば乾燥するような好気的な場所が推測される。しかし、壊れたり溶解していた珪藻化石が多く、好流水性種も産出されることから流れ込みがあったことも予測され、本群集が本地点の堆積環境を正しく反映している可能性は低い。植物珪酸体は、試料番号6でクマザサ属・ネザサ節が多く、試料番号5でヨシ属が多い。また、栽培種のイネ属も検出されたものの低率である。これは、細池遺跡と同様な出現率であり、本遺構が稻作に伴う遺構と判断できる結果でない。また、植物珪酸体は、様々な環境に生育する植物が混在する群集であることを示している。これらのことから、遺跡の立地条件や堆積物の状況から、今回検出された微化石の大部分は、氾濫等の影響により周辺の河川沿いの湿地や自然堤防上に生育していたものが流れ込んできたものと推測される。このため、稻作に伴う土壤も流れ込んで堆積したと考えられる。今後さらに自然科学分析を行い、データー蓄積して検討していくことが重要である。

〈引用文献〉

- 安藤一男（1990）淡水葦珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用。東北地理, 42, p. 73-88.
- Hustedt, F. (1937-1938) Systematische und ökologische Untersuchungen über die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. I ~ III. Arch. Hydrobiol. Suppl., 15, p.131-809,16, p.1-155,274-394.
- 伊藤良永・堀内誠（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用。珪藻学会, 6, p. 23-45.
- 近藤錦三・佐瀬隆（1986）植物珪酸体分析、その特性和応用。第四紀研究, 25, p. 31-64.
- Krammer, K., and H. Lange-Bertalot. (1986-1988-1991ab) Bacillariophyceae, Süßwasser flora von Mitteleuropa.2 (1-2-3-4) p.1-876,p.1-585,p.1-576,p.1-437. Gustav Fischer Verlag Stuttgart New York.
- Lowe, R.L. (1974) Environmental requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. p.1-334. In Environmental Monitoring Ser. EPA-670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U.S. Environ. Protect. Agency, Cincinnati.
- バリノ・サーヴェイ株式会社（未公表）上浦遺跡、自然科学分析報告、14 p..
- バリノ・サーヴェイ株式会社1994「新潟県埋蔵文化財調査報告書第59集 細池寺道上遺跡」新潟県教育委員会、(地)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高浜信行（1992）新潟平野の形成と地形の特徴。葦沼水田の克服、一亜田郷を事例として一、p. 1-14, 久保田 勝福。
- 日本土壤肥料学会新潟大会運営委員会、
- 渡辺仁治・山田安恵子・浅井一視（1988）珪藻群集による有機汚泥指数（D A I po）の止水域への適用。水質汚濁研究, 11, no. 12, p. 765-773.

第VII章 ま と め

1. 土 器

A 古墳時代

古墳時代前期の土器は高杯2・鉢1・小型器台2・壺2・甕9が検出された。いずれも包含層からの出土であるが、ある程度の時間幅に収まるものと考える。本土器群は、(1)屈折脚の畿内系高杯が存在する、(2)壺には有段口縁のものは確認できず、畿内系の二重口縁壺の影響を受けたものが存在する、(3)中型の甕はいずれも「く」字口縁で口縁端部の形態は、狭い面を持つものと丸いものがほぼ同量存在する、以上3点から越後地域を対象とした坂井・川村編年〔1993〕のⅣ期、能登地域の編年〔柄木1995〕の10期、漆町編年〔田嶋1988〕の9・10群に既に平行する時期と考えられ、小型器台(3・4)・鉢(5)の形態もこれに大きく矛盾するものではない。ただし7・8のような口縁部にハケメが残る「く」字口縁の大型の甕は、坂井・川村編年のⅡ期に多く見られるものでⅣ期にはこれまで検出例が無い。今後の資料の増加をまって、Ⅳ期の土器組成として定量存在するものかどうか検討する必要がある。

B 平安時代

(1) 編 年

ここでは、信濃川・阿賀野川下流域における9・10世紀の土器編年を行い、上郷遺跡出土土器の年代を明らかにしたい。以下第29~31図に添て編年の概要を述べる。

土器群の変遷

9世紀第1四半期~9世紀代2四半期: 9世紀代1四半期の良好な資料は現在のところ存在しない。9世紀第2四半期頃の資料としては西蒲原郡黒崎町緒立C遺跡S X440出土土器(以下、緒立S X440とする)〔渡辺1994〕と新津市細池遺跡S X705出土土器(以下、細池S X705)〔小池他1994〕がある。

緒立S X440は食膳具の全て須恵器が占め、須恵器には佐渡小泊窯産のものほか、新津丘陵産と考えうるものが定量存在する。一方、細池遺跡ではS X705以外からも当期と考えうる土師器食膳具が出土しており、遺跡や遺構の性格により土師器食膳具が偏在する可能性が高い¹⁾。

土師器長釜・鍋は、口縁端部の形態が、内傾する面を持つものが大半で、上方に屈曲するものは少ない。また体部上半にはカキメが密に巡るものが多く、体部上半までヘラケズリが及ぶもの(38)も確認できる。小甕には口縁端部が丸いもの(23)、底部付近にヘラケズリを行うもの(32)、外面にカキメ?が巡るもの(31)が確認できる。

9世紀第3四半期: 当期の資料としては、新潟市小丸山遺跡S D 2出土土器(以下小丸山S D 2とする)

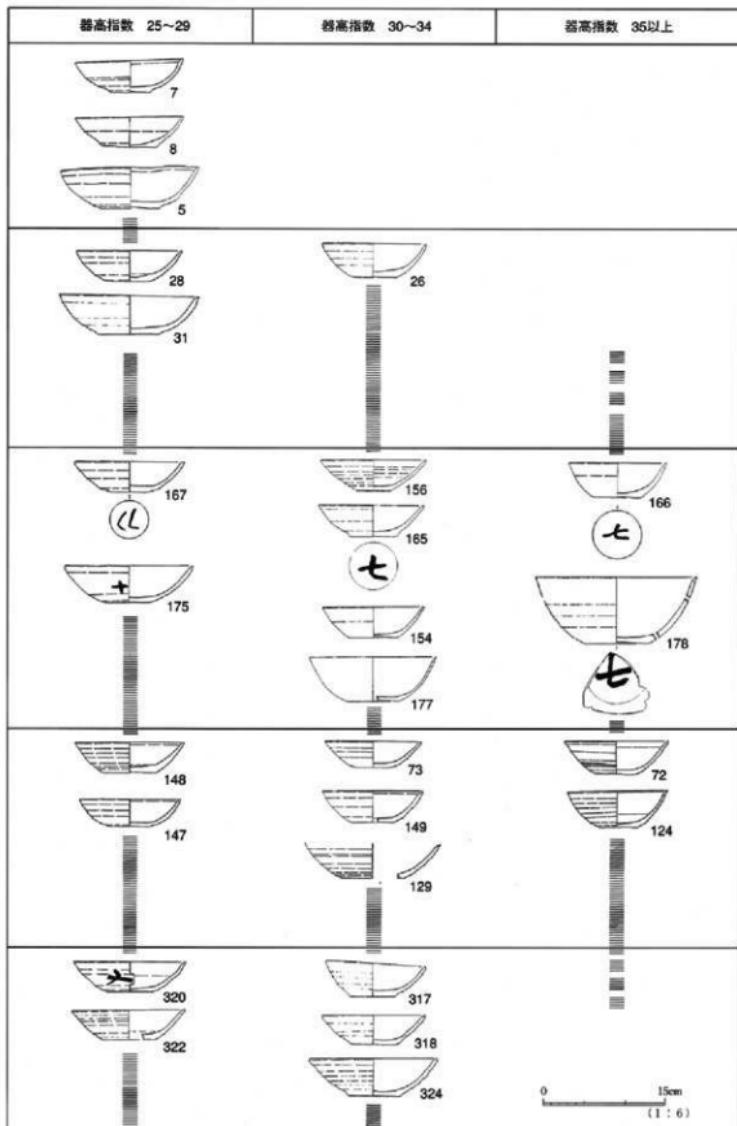
1) 望月裕司氏は細池遺跡S K808を土師器焼成遺構とする(望月1995)。細池遺跡で土師器食膳具が多い状況は、細池遺跡が土師器生産と関連した遺跡である結果とも考えられる。

	須恵器(小泊)	須恵器(在地?)	黒色土器
橋立 C 通跡 S X 40	19 18 8 10 11 16 14 13 3 1		
小丸山通跡 S D 2	21 15 14 19 11 18		
小丸山通跡 S D 4 · 5	136 142 97 101 136 94		182
上西通跡 S K 70 · S D 2 · S D 22 · S K 5	119	120 70	130
小丸山通跡 S K 1		227 (※)	338 339

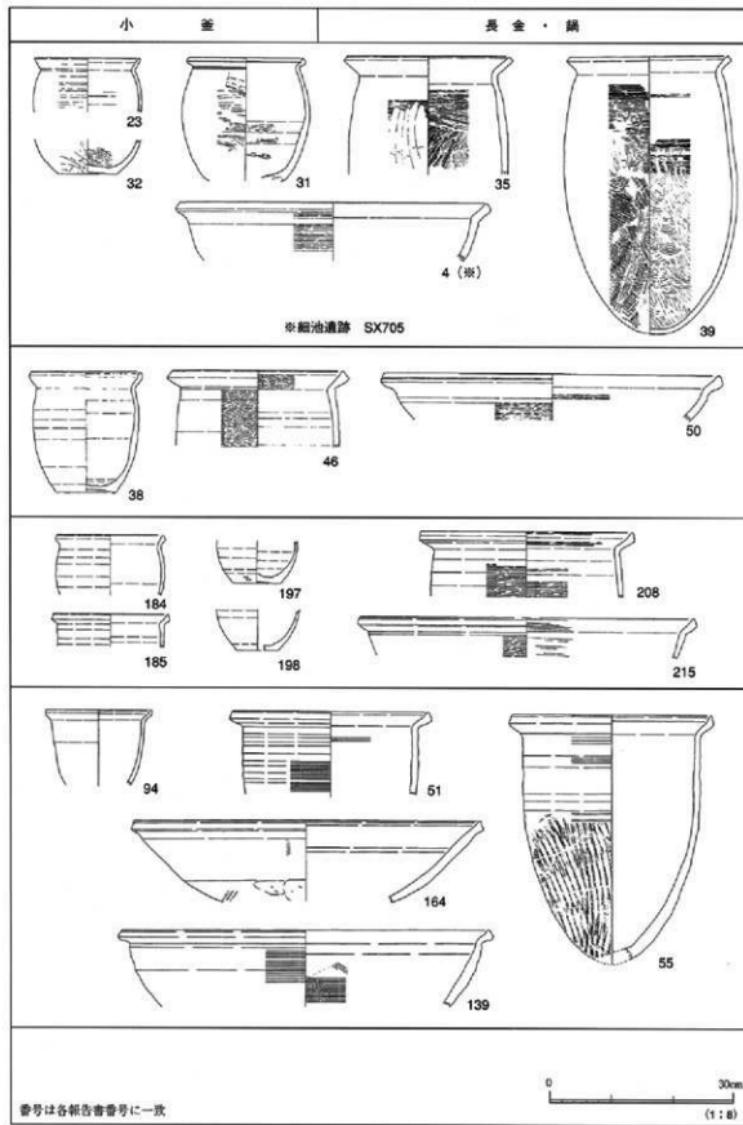
0 15cm
(1 : 6)

牛的場遺跡

第29図 平安時代土器編年図 (1)



第30図 平安時代土器編年図 (2)



第31図 平安時代土器編年図 (3)

【新潟市史編さん原始・古代・中世都会】がある。食膳具は須恵器の多くを佐渡小泊窯産のものが占めるようになる。佐渡小泊窯産須恵器無台杯の形態は、小振りで口縁部の立ち上がりが急なもの（14・15）のほかにやや大振りで、口縁部の外傾度が大きいもの（18）が確認できる。土師器食膳具は当期以降定量存在する。土師器食膳具は無台椀が大半を占め他の器種は少ない。

土師器長釜・鍋は口縁端部が肥厚するものが確認できる。小釜は口縁端部が上方に短く屈曲し、内外面ともロクロナデで、カキメやヘラケゼリを行わないものにはば齊一化される。

9世紀第4四半期～10世紀初頭：資料としては新潟市小丸山遺跡SD4・5出土土器（以下、小丸山SD4・5とする）を挙げる。食膳具には須恵器と土師器があるが、小丸山SD2に比べ土師器食膳具が増加する。無台椀が土師器食膳具の主体を占める点は前段階と同じである。また、須恵器はいずれも佐渡小泊窯のものとなり、無台杯の形態は、やや大振りで、口縁部の開きが大きものが大半を占めるようになる。

小釜・長釜・鍋は、口縁端部が上方に短く屈曲する形態のものが主体を占めるようになる。

上郷遺跡出土土器の主体となる土器群（93-SK70・SK5・SD22・94-SD2など）はこれに近接した時期のものと考える。ただし小丸山SD4・5に比べ、須恵器食膳具の比率が低い印象を受ける。小丸山SD4・5については須恵器食膳具と土師器食膳具の比率について計測を行っていないため不確実であるが、上郷遺跡出土土器の主な土器は小丸山SD4・5に若干後続する可能性がある。

10世紀前葉：小丸山SD4・5に後続する資料としては新潟市小丸山遺跡SK1がある。当期には須恵器食膳具は大幅に減少し、食膳具の主体は土師器無台椀となる。佐渡小泊窯産須恵器は277などの壺系の器種の共伴が予想されるが、信濃川・阿賀野川下流域での明確な共伴例は現在のところ存在しない。

小釜・長釜・鍋は当期以降大幅に減少する。

土師器無台椀の変遷

上記の編年を基に、土師器無台椀の形態変化をみると。無台椀の形態については、主に口径と器高・底径に注目し、法量と器高指數（器高÷口径×100）・底径指數（底径÷口径×100）の変化を中心に記述する（第32図）。

細池SK705は口径12～13cm前後と17～18cm前後の2種の法量が存在するが、ともに器高指數25～29前後のものである。ただし底径指數には40前後のものと53前後の2種が存在する。

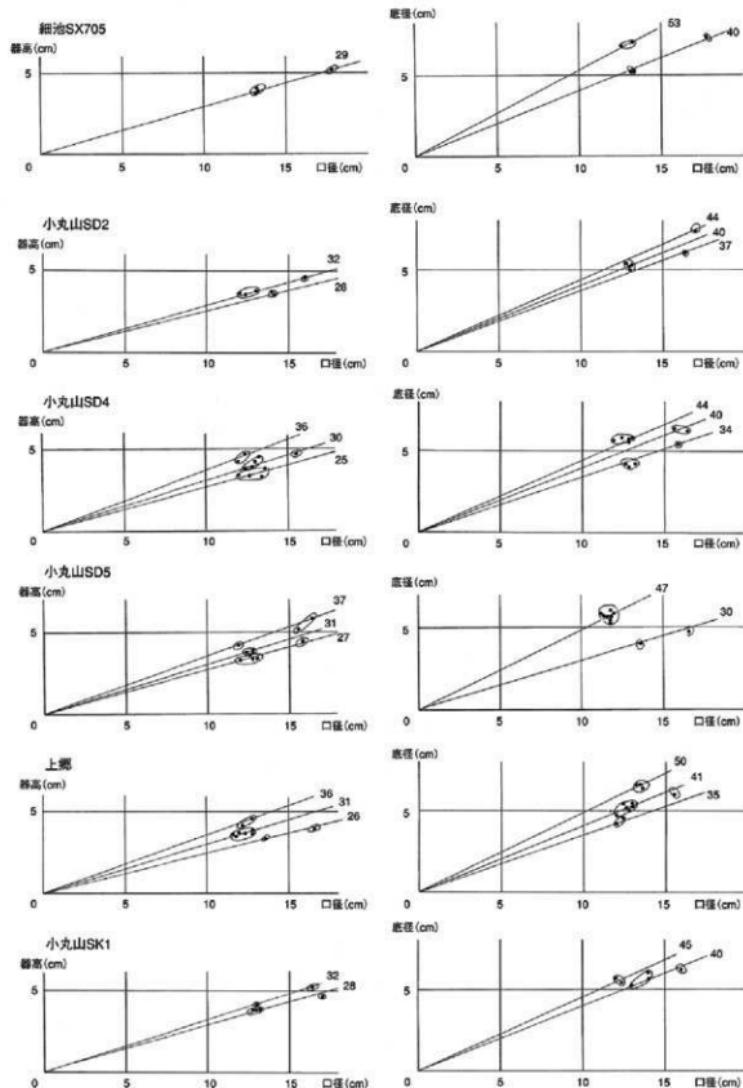
小丸山SD2にも口径12～13cm前後と17～18cm前後の2種の法量が存在するが、器高指數は25～29前後のものの他に、30～34前後のものが確認できる。底径指數は40前後のものと45前後のもの2種が確認できる。

小丸山SD4・5の器高指數は25～29のもの、30～34のもの、35以上のものの3種が確認できる。底径指數は小丸山SD4が30前後、40前後、45前後の3種。小丸山SD5が30前後、45前後の2種が確認できる。

上郷遺跡93-SK5・SD22・94-SD2の器高指數は25～29のもの、30～34のもの、35以上のもの、底径指數は35前後・40前後・50前後のそれぞれ3種が確認できる。

小丸山SK1では器高指數は25～29のもの、30～34のもの、底径指數は40前後・45前後の2種が確認できる。

以上のように、器高指數25～29のものは各時期を通じて存在する。また35以上のものは9世紀第4四半期から10世紀のごく初頭にかけて存在する可能性が高く、10世紀前葉には器高指數35以上のものは確認で



第32図 土器器無台検の器高指数（左）と底径指数（右）

きなくなり、再び25~29・30~34の2種となる。なお、信濃川・阿賀野川下流域の既存の資料では9世紀第2四半期には器高指數30~34のものは確認できないが、同時期の頸城地方では今池遺跡S D 201で確認でき、今後の資料の増加を待ってその有無を判断すべきものと考える。

底径指數は50を超えるものは9世紀第2四半期に限定できる。45前後のものは9世紀第3四半期以降に存在し、40前後のものは各時期を通じて存在する可能性が高い。また30~35のものは、9世紀第4四半期から10世紀のごく初頭にのみ存在するものと考える。

なお、今回報告した上郷遺跡出土の平安時代の土器の大半は9世紀末から10世紀初頭のなかに収まるものと考える。

(2) 器種構成比率（第10表）

上郷遺跡出土の平安時代の土器について口縁部計測法により構成比率を算出した。土器の総計は6527.2／16個体、14865片である。機能別の構成比率をみると、杯・碗・皿などの食膳具が71.7%、壺・甕などの貯藏具が1.0%、長釜・小釜・鍋などの煮炊具が27.3%である。

上郷遺跡に先行する8世紀初頭から9世紀後半の集落跡である山三賀II遺跡出土土器（個体識別法：総計949）の器種構成比率【坂井1989b】は、食膳具45.1%、煮炊具47.3%、その他7.6%と食膳具と煮炊具の比率が拮抗しており、両者の土器組成には食膳具と煮炊具の比率において大きな差がある。

一方、時期的に上郷遺跡にやや先行する9世紀後半～末に比定でき、ある程度の有力者が存在したと思われる今池遺跡のS D 3出土土器（口縁部計測法：総計2591.5／16個体、3309片）は食膳具91.0%、貯藏具1.7%、煮炊具7.3%であり、上郷遺跡出土土器よりも食膳具の比率が高く、煮炊具の比率が低い。また1個体であるが縁釉陶器が存在する点にも注目したい。

また、食膳具に占める土師器食膳具の比率をみると、今池遺跡S D 3出土土器が77.5%、上郷遺跡出土土器が75.9%、山三賀II遺跡出土土器が61.1%と、食膳具の比率が高い遺跡ほどその中に占める土師器食膳具の比率が高い。

このような構成比率の差は①鉄鍋の普及、②土器を一過性の食器として使用する規模と頻度、の2点と関連があるものと考える。3遺跡の土器の構成比率の差は、鉄鍋の普及と土器の一過性の食器として使用が、より高い階層から定着していく9世紀末から10世紀初頭には一般集落においてもある程度普及していたことを示しているのであろう。9世紀中葉以降の食器の土師器化やその後の調整の粗雑化は、当期以降一過性の食器として使用することが広く浸透したと考えるならば理解しやすい（田嶋1992）。

なお、鉄鍋の産地については、越後国内で10世紀以降製鉄遺跡が減少することや、11世紀に書かれた『新猿楽記』に「能登釜」が特産品として記されていることなどから、石川県能登地方で生産されたものが流通している可能性が高い。

2. 平安時代の遺跡

A. 上郷遺跡の遺構

建物跡 建物跡としては掘立柱建物2（S B 1・2）、堅穴建物1（S I 1）を検出した。これらの建物跡は遺跡の存続期間が9世紀末から10世紀初頭前後と非常に短いことから考え、同時存在した可能性が高い。掘立柱建物の平面積はS B 1が約12.1m²、S B 2が約28.0m²と小規模であるが、周辺にはゴミ穴と

上郷遺跡器種構成比率

種類	器種	口部部計測値(後片)	比率
土師器	無台板	3525.5 (5162)	54.0 (34.7)
	有台皿	*	(4)
	無台皿	25.5 (23)	0.4 (0.2)
黒色土器	有台板	5.8 (2)	0.1 (0.0)
	無台板	209.5 (421)	3.2 (2.8)
	杯	66.0 (40)	1.0 (0.3)
須恵器	杯	51.6 (42)	0.8 (0.3)
	無台杯	794.9 (654)	12.2 (4.3)
	有台碗	*	(3)
食膳具	有台皿	*	(3)
	無台皿	4678.8 (6354)	71.7 (42.7)
	瓶	34.7 (129)	0.5 (0.9)
炊炊具	瓶	63.2 (302)	1.0 (2.1)
	小釜	1142.2 (5608)	17.5 (37.7)
	鍋	544.0 (2479)	8.3 (16.7)
食膳具	蓋	99.0 (122)	1.5 (0.8)
	蓋	1785.2 (8209)	27.3 (55.2)
	計	6527.2 (14865)	

今池遺跡SD3器種構成比率

種類	器種	口部部計測値(後片)	比率
土師器	無台板	1795.2 (2063)	69.3 (62.3)
	有台皿	*	(4)
	無台皿	165.0 (10)	0.6 (0.3)
黒色土器	無台板	150.0 (3)	0.6 (0.1)
	杯	198.5 (243)	7.7 (7.3)
	鉢	140.0 (7)	0.5 (0.2)
須恵器	杯	12.5 (7)	0.5 (0.2)
	有台杯	67.3 (67)	2.6 (2.0)
	無台杯	238.5 (140)	9.2 (4.2)
食膳具	有台皿	*	(1)
	蓋	2357.5 (2548)	91.0 (77.0)
	瓶	42.5 (100)	1.6 (3.6)
氣泡器	蓋・瓶	3.0 (85)	0.1 (2.6)
	蓋	*	(1)
	瓶	45.5 (185)	1.7 (5.6)
土師器	長蓋	83.0 (304)	3.2 (9.2)
	小釜	86.5 (272)	3.3 (8.2)
	鍋	3.0 (1)	0.1 (0.0)
食膳具	支脚	160.0 (1)	0.6 (0.0)
	計	188.5 (578)	7.3 (17.4)
	計	2901.5 (3309)	

山三賀II遺跡器種構成比率

種類	器種	個体数	比率
土師器	杯・板	26	27
(黒色土器含む)			
須恵器	杯 蓋	71	7.5
有台杯	98	103	
無台杯	218	23.0	
折縁杯	15	1.6	
食膳具	計	428	45.1
土師器	小釜	188	19.8
長蓋	196	20.7	
蓋	44	4.6	
鍋	21	2.2	
食膳具	計	449	47.3
須恵器	その他	50	5.3
土師器	その他	22	2.3
総計		949	

口部部計測値は口縁部計測値 [宇野1992] によって得られた数値で $\chi/16$ を示す。また * は存在するが数値として現れないものを示す。

上郷遺跡食膳具構成比率

種類	器種	口部部計測値(後片)	比率
土師器	無台板	3525.5 (5162)	75.4 (81.2)
	有台皿	*	(4)
	無台皿	25.5 (23)	0.5 (0.4)
土師器	計	3551.0 (5189)	75.9 (81.7)
	黑色土器	5.8 (2)	0.1 (0.0)
	無台板	209.5 (421)	4.5 (6.6)
黒色土器	有台板	215.3 (423)	4.6 (6.7)
	無台皿	66.0 (40)	1.4 (0.6)
	計	215.3 (423)	4.6 (6.7)
須恵器	杯	51.6 (42)	1.1 (0.7)
	無台杯	794.9 (654)	17.0 (10.3)
	蓋	*	(3)
須恵器	有台皿	*	(3)
	蓋	*	(3)
	計	912.5 (729)	19.5 (11.6)
食膳具	計	4678.8 (6354)	
	計	4678.8 (6354)	

今池遺跡SD3食膳具構成比率

種類	器種	口部部計測値(後片)	比率
土師器	無台板	1795.2 (2063)	76.1 (80.9)
	有台皿	*	(4)
	無台皿	165.0 (10)	0.7 (0.4)
土師器	鉢	15.0 (3)	0.6 (0.1)
	計	1826.7 (2080)	77.5 (81.6)
	黒色土器	無台板	198.5 (243)
黒色土器	鉢	14.0 (7)	0.6 (0.2)
	計	212.5 (260)	9.0 (9.8)
	須恵器	杯 蓋	12.5 (7)
須恵器	有台杯	67.3 (67)	2.8 (2.0)
	無台杯	238.5 (140)	10.1 (4.2)
	蓋	*	(1)
須恵器	計	318.3 (215)	13.5 (8.4)
	計	2357.5 (2548)	

山三賀II遺跡食膳具構成比率

種類	器種	個体数	比率
土師器	杯・板	26	6.1
(黒色土器含む)			
土師器	計	26	6.1
須恵器	杯 蓋	71	16.6
有台杯	98	22.9	
無台杯	218	50.9	
折縁杯	15	3.6	
須恵器	計	402	93.9
食膳具	計	428	

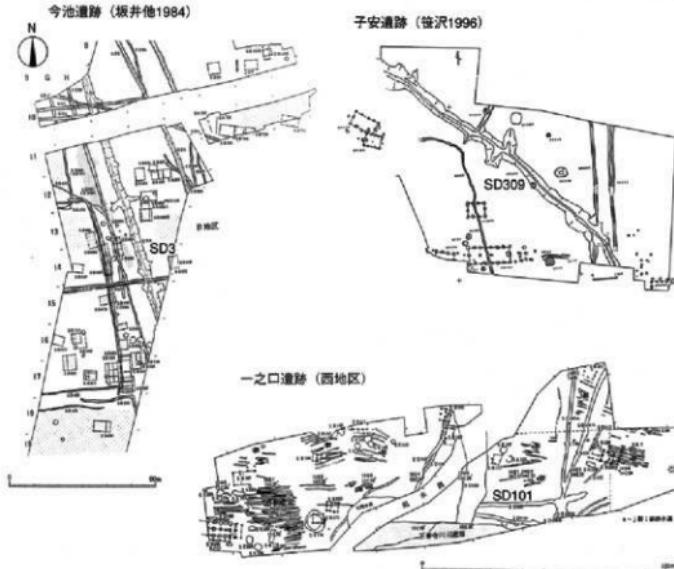
第10表 土器の器種構成比率

考える土坑や、水を得るために井戸が存在することから考え、それぞれ独自の消費活動を行なっていた單位と考える。これに対し S I 1 は周囲に井戸が存在せず、土坑の分布も希薄である。堅穴建物内からはカマド跡と考えうるものは検出されておらず、住居として恒常に使用されなかつた可能性もある。

畝状遺構 畝状遺構は新潟県内では平安時代を中心に上越市池田遺跡〔鈴木1985〕・上越市子安遺跡〔坂井他1984〕・上越市一之口遺跡〔坂井1986他・鈴木他1994〕・三島郡越路町岩田遺跡〔佐藤他1992〕・新潟市小丸山遺跡〔藤塚他1989〕などで検出されている。これらの畝状遺構の多くは建物跡に隣接する場合が多い。一方、上郷遺跡で検出された畝状遺構は旧河道の北西側にまとまっており、これまでに検出されたものと異なる。ただし、上郷遺跡で検出された畝状遺構には、SD 4・31を境に2分割できる。これらは、それぞれの耕作の主体が2棟の掘立柱建物に住む人に対応する可能性があろう。遺跡の立地する旧自然堤防が、旧河道 SD 10によって分断されるという地形的な制約が、このような建物跡と畝状遺構の分布を生じさせた可能性が高く、王朝国家型村落〔坂井1989〕のバラエティとして捉えられるものと考える。

水田跡 水田跡と思われる遺構は調査区北側と調査区中央部やや南よりで検出された。また、調査区南東の一部もプラントオバール分析の結果、水田として利用されている可能性が高い。これらの水田の灌漑用水路について、幅1m、深さ30cm前後の溝 SD 10' が調査区南東の水田の灌漑用水路として機能していた可能性があるほかは、検出されなかった。ただし、SD 10' が幅15m前後の旧河道 SD 10から派生していることや周囲の状況から考えて、他の水田跡についても、旧河道 SD 10を水源とする灌漑用水路から用水が供給された可能性が高い。

水田の広がりについては明確ではないが、一次調査の結果なども含めて考えるならば、それほど広域な広がりは持っていないかったものと考える。すなわち、上郷遺跡周辺では、幅10~15m前後的小規模な自然



第33図 頸城地方における古代の灌漑用水路

河道を水源とする幅0.5~1m前後の水路を掘削し、自然堤防の落ち駆を中心としたそれほど広域でない水田開発が行われた可能性が高い。

新潟県内における水田の灌漑用水路と考えられる平安時代の溝は頸城地方を中心にいくつか検出されている。上越市一之口遺跡（西地区）[坂井他1986]では、旧正善寺川から派生する人工と考える幅10m前後の溝（SD 101）があり、これから取水する幅1~2m前後の溝がいくつかみられる。今池遺跡では幅4~5m前後の直線的な溝（SD 3）が調査区内100m以上わたって検出された。また今池遺跡の北側に隣接する子安遺跡からは、SD 3と一連と考える溝が検出されている（第33図）。これらの事例は、ともに広域の開発を意図した、大規模な灌漑用水路と考えうる事例であり、上郷遺跡から推測される開発のあり方とは異なり、より大規模で組織的な労働編成が必要となる。上郷遺跡と一之口遺跡や今池遺跡・子安遺跡でみた開発が蒲原平野と頸城平野の開発のあり方としてある程度普遍化できるものかどうかは今後の類例の増加を待たなければならないが、このような差が、越後での頸城平野における条里地割の偏在や莊園公領体制下で「保」が卓越する状況を生み出す前提になった可能性はあろう。

B. 上郷遺跡周辺の遺跡の動態

中蒲原郡亀田町・横越町、西蒲原郡黒崎町および新潟市・新津市の一部について、発掘調査が行なわれた遺跡や、まとまった量の採集遺物がある7~11世紀の遺跡について、出土土器から存続期間を明らかにし、その意味するところを考えたい。なお、これについてはすでに宇野隆夫氏の論考があり[宇野1991]、その結論については変更の必要は無いものと考えるが、その後の資料の増加もあり、より具体的に記述していきたい。

対象とする遺跡とブロックの設定 対象とする遺跡は21遺跡である。遺跡の分布状況から8つのまとまり（ブロック）に分けるものと考える。それぞれのブロックの位置は、阿賀野川左岸の亀田砂丘上に位置する遺跡をブロック1、亀田砂丘南側の阿賀野川左岸の自然堤防上に位置する遺跡をブロック2、信濃川と西川に挟まれた微高地ないしは砂丘上に位置する遺跡をブロック3、西川左岸の微高地ないしは砂丘上に位置する遺跡をブロック4、新潟市西部の赤塚周辺の砂丘上に位置する遺跡をブロック5、能代川左岸周辺の自然堤防上に位置する遺跡をブロック6、能代川と阿賀野川に挟まれた自然堤防上に位置する遺跡をブロック7、信濃川河口付近の砂丘上に位置する遺跡をブロック8とする。

また、ここでとりあげる遺跡はブロック1では阿賀野川中洲B遺跡・茗荷谷遺跡・小丸山遺跡・山ノ山遺跡・三王山遺跡・中ノ山遺跡・荒木前遺跡、ブロック2は上郷遺跡のみ、ブロック3は縦立遺跡・的場遺跡、ブロック4は六地山遺跡のみ、ブロック5は北浦原遺跡・大藪遺跡・前田遺跡、ブロック6は長沼遺跡・川口甲遺跡・上浦遺跡・沖ノ羽遺跡、ブロック7は細池遺跡・寺道上遺跡、ブロック8は山木戸遺跡のみである。

消長の画期 第11表は各遺跡の存続期間を表わしたものである。第11表から7世紀末から8世紀初頭（画期1）、8世紀中葉前後（画期2）、9世紀前半から中葉（画期3）、9世紀末から10世紀前半から中葉（画期4）の4つの画期があるものと考える。

画期1は遺跡が増加する画期である。当該地域における7世紀前半の遺跡は希薄であったが、当期には1・4・5・6・8ブロックに遺跡が成立する。今後の調査の進展により他のブロックにも当期の遺跡が確認される可能性があろう。



国土地理院 1:50,000地形図
新潟・新津・内野・弥彦

第34図 対象遺跡位置図

遺跡名	7世紀	8世紀	9世紀	10世紀	11世紀	文献
1. 阿賀川中流A遺跡		■■■■■	■■■■■			新潟市1994
2. 茄荷谷遺跡		■■■■■ ■■				新潟市1994
3. 小丸山遺跡		■■■■■ ■■■				新潟市1994
4. 山ノ家遺跡	■■■■■					川上1992
5. 三王山遺跡		■■■■■				酒井1980
6. 中ノ山遺跡	■■■■■ ■■■	■■■■■				川上他1983
7. 芬木前遺跡	■■■■■ ■■■	■■■■■				渡辺1991、川上1996
8. 上郷遺跡			■■ ■■■■■			本書
9. 繩立遺跡	■■ ■■■	■■■■■ ■■■				渡辺他1994
10. 的場遺跡	■■ ■■■	■■■■■ ■■■				新潟市1994
11. 六地山遺跡	■■ ■■■	■■■■■				新潟市1994
12. 北浦原遺跡	■■ ■■■	■■■■■				新潟市1994
13. 大蔵遺跡		■■■■■ ■■■				新潟市1994
14. 前田遺跡	■■ ■■■	■■■■■ ■■				新潟市1994
15. 長沼遺跡	■■ ■■■ ■■■■■	■■■■■ ■■■				渡辺1991
16. 川口甲遺跡		■■■■■				川上1994
17. 上浦遺跡	■■■■■ ■■	■■■■■ ■■				渡辺1992
18. 沖ノ羽遺跡		■■■■■ ■■				石川他1994
19. 細池遺跡		■■■■■ ■■				小池他1994
20. 寺道上遺跡		■■■■■ ■■				小池他1994
21. 山木戸遺跡	■■ ■■■ ■■	■■■■■ ■■				新潟市1994

第11表 上郷遺跡周辺の遺跡の存続期間

これに対し画期2は画期1に成立した遺跡のいくつかが衰退する一方で、新たな遺跡が成立する。こうした動向は特にブロック3で顕著であり、緒立遺跡・的場遺跡が成立した。両遺跡は直線距離にして約500mの近接した位置に存在する一連の遺跡であり、大型で総柱の掘立柱建物が定量検出され、和銅開成・帶金具・木簡などが出土したほか、漁撈用の土錐・浮子が多量に出土するなど、中央への貢納物としての鮭の捕獲や、蒲原津に関連した官衙的な色彩の強い遺跡である〔渡辺ほか1994、新潟市史編さん原始古代中世部会1994〕。このような官衙関連遺跡の成立が、信濃川・阿賀野川河口付近に位置するブロック1～5・8の遺跡群の再編をもたらした可能性はある。

画期3は新たな遺跡が多く成立し、遺跡数が急増した。当期で確認できる遺跡数はピークに達する。ただし、こうした動向はブロック1・5・6・7で顕著であり、ブロック3では明確でない。

画期4は画期2・3で成立した遺跡の多くが衰退し、遺跡数が減少する。そしてこれ以降は、12世紀中葉から13世紀初頭に至るまで遺跡の動向が不明になる。ただし、これらの要因には、木製貯蔵具・鉄製煮炊具の普及による土製貯蔵具・煮炊具の減少や、木製食器具(漆器含む)の普及と一過性の食器としての土器食器の使用が特定遺跡へ集中するといった要因から、遺跡の確認が困難になっているという側面は考慮に入れなければならない。

こうした遺跡の動向は、田嶋明人氏が明らかにした手取扇状地周辺の古代遺跡の動向と異なる。手取扇状地周辺では、8世紀中葉から9世紀初頭にかけて多くの遺跡が成立し、開発の大きな画期となっていることが指摘されている。一方、ここで対象とした信濃川・阿賀野川下流域では8世紀中葉から9世紀初頭の時期に遺跡の増加は確認できず、遺跡が増加するのは9世紀前半から後半である。また、地域はことなるが閑川下流域左岸においても同様の傾向が指摘されている〔坂井1986〕。

ただし、和名抄に記された郷名の比定地の多くや、短期間で廃絶したとはいえ西大寺資材帳にあらわれる蒲原郡の初期莊園比定地が新津丘陵據部周辺に存在することを考慮するならば、8世紀代の開発が丘陵裾部周辺を中心に進展した可能性があり、上述の差異が加賀と越後の地域差となるかどうかは、丘陵據部周辺の調査事例の増加を待って判断しなければならないであろう。

なお上に示した画期は、坂井秀弥氏・宇野隆夫氏がすでに指摘しているように(坂井1989・宇野1991)、土器生産や製鉄・製塩などの在地の手工業生産の動向とよく一致する。7世紀末から8世紀初頭にかけては新津丘陵に須恵器窯が開窯する時期、8世紀中葉から8世紀後半は須恵器生産がピークに達し、新たに鉄生産が開始されるなど、新津丘陵の山林資源開発が活発になる時期¹⁾、9世紀前半から後半は須恵器生産が衰退し、従来よりも小規模分散化した土器生産地が成立したり²⁾、海岸からやや離れた内陸砂丘上に小規模な製塩遺跡が出現する時期(坂井1992)、10世紀中葉以降は不明な点が多いが、在地における土器生産・製鉄・製塩が衰退する時期と考えているが³⁾、詳細な検討はできていない。

1) 木製挽物の生産の本格的な開始時期も8世紀中葉前後である可能性が高い。

2) 上郷遺跡の出土の土器の胎土については類型化はできていないが、胎土中に含まれる海綿骨針の有・無、チャート粒の有・無、石英・長石粒の大・小や多・寡などから複数の土器生産地が存在したことが推測できる。

3) 土器流通という点では9世紀前半から後半は佐渡小泊須恵器が越後にかけて大量に流通する時期である(坂井1988・春日1991)。また当期は佐渡二見半島において製塩遺跡が急増する時期と考えられ、ここで生産された塩も小泊須恵器と共に越後に大量に供給された可能性がある。

また10世紀中葉以降は小泊須恵器の流通量が大幅に減少する。当期普及する鉄釜の产地が石川県能登地方であるとするならば、当期に物資の流通体制に変化があった可能性がある。

要 約

1. 上郷遺跡は新潟県北部の中蒲原郡横越町大字横越字上郷に所在し、阿賀野川左岸の自然堤防上に位置する。標高は3~4mで現状は水田であった。
2. 調査は国道49号横雲バイパスの建設にともない、平成4~6年度の三か年実施した。実質的な調査面積は31,200m²である。遺跡は法線内にとどまらず、周辺に広がるものと考える。
3. 調査の結果、平安時代と古墳時代前期の遺物、平安時代の遺構が検出された。
4. 古墳時代前期の土器は平箱8箱程度が出土した。坂井・川村編年のVI期に概ね平行するものと考える。
5. 平安時代の遺物は土器類を中心に、平箱100箱程度出土した。年代は9世紀末から10世紀初頭を中心とする時期のものである。
6. 平安時代の遺構には堀立柱建物2棟、竪穴住居1棟、井戸2基、水田跡、鉢状遺構、土坑、溝などがあり、平安時代の集落跡と考える。これらの遺構の年代は出土遺物から考え9世紀末から10世紀初頭を中心とするものである。
7. 当時の地形と土地利用にはある程度相関関係があり、調査区内で最も高い地点には建物跡・井戸・土坑などが存在し、その周辺には鉢状遺構が存在する。また低地部は水田として利用されている。このような遺構の構成・配置は坂井秀弥氏のいう王朝国家（型）村落のバラエティの中で捉えうるものと考える。
8. 本遺跡には木簡・墨書き土器などの文字資料が定量存在するが、検出された堀立柱建物の規模は小規模で、出土した土器類の組成も高い階層性は示さない。
9. 検出された水田は周辺の状況から考え、幅15m前後の小規模河川を水源とする可能性が高い。また水田の広がりはそれほど広域に及ばないものと考える。このような水田のあり方から推測される上郷遺跡周辺の開発は、頸城地方で検出されている何例かの古代の灌漑用水路から推測される水田開発とは異なるものである。
10. 上郷遺跡周辺には9世紀前葉から10世紀初頭の遺跡が多く存在し、当期が開発の初期の1つであったことが推測できる。これは新潟県上越市の中越川下流域左岸の状況と一致するが、近年田嶋明人氏が明らかにした石川県手取畠状地周辺とは異なる。

引用・参考文献

- ア. 浅香年木 1978 「第二編 第三章 古代における手取原状地の開発」『古代地域史の研究』法政大学出版局
- イ. 家田順一郎 1986 『小丸山遺跡 小丸山道路緊急発掘調査報告書』横越町教育委員会
- 石川智紀他 1994 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第58集 沖ノ羽遺跡Ⅰ (A地区)』新潟県教育委員会、(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- ウ. 萩代 効 1979 「新潟平野の形成とその災害をめぐって (対談)」 URBAN KUBOTA 17
- 宇野隆夫 1985 「古代の食器の変化と特質」『日本史研究』208号 日本史研究会 のち同1989『考古資料に見る古代と中世の歴史と社会』真陽社所収
- 宇野隆夫 1988 「越中の国府・莊家・村落」「歴史学と考古学—高井梯三郎先生寿記念論集」高井梯三郎先生寿記念事業会 のち同1989『考古資料に見る古代と中世の歴史と社会』真陽社所収
- 宇野隆夫 1991 「律令社会の考古学的研究—北陸を舞台として」桂香房
- 宇野隆夫 1992 「食器計畫の意義と方法」「国立歴史民俗博物館研究報告」第40集 国立歴史民俗博物館
- 宇野隆夫 1995 a 「官道遺跡から見た横江庄遺跡」「東大寺領横江庄遺跡Ⅱ」石川県松任市教育委員会
- 宇野隆夫 1995 b 「越と交わる法律の生産構造の展開—山・里・海辺の営みと古代国家」「越と古代の北陸 古代王権と交流」小林昌二編 名著出版
- エ. 遠藤孝司他 1987 a 『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第46集 岩野下遺跡』新潟県教育委員会
- オ. 大橋康二 1989 「肥前陶磁」ニューサイエンス社
- 小村 式施編 1989 「角川日本地名大辞典 15 新潟県」 角川書店
- カ. 春日実真 1991 「古代佐渡小泊窯における須恵器の生産と流通」『新潟考古学講話会会報』8号 新潟考古学講話会
- 春日実真 1992 「王朝国家期の越後—上越市一之口遺跡 (西地区)・新潟市小丸山遺跡を事例として」『新潟考古学』第4号 新潟県考古学会
- 金子拓男 1983 「第一編第三章 蔊原郡の古代」「三条市史 上巻」三条市
- 亀田町史編さん委員会 1988 「亀田の歴史 通史編上巻」
- 川上貞雄 1988 「第2編 考古」「新津市史」資料編第1巻 原始・古代・中世 新津市
- 川上貞雄 1990 「山ノ家遺跡」横越町教育委員会
- 川上貞雄 1994 「川口甲遺跡発掘調査報告書」 新津市教育委員会
- 川上貞雄 1996 「亀田町文化財調査報告書」第4集 茄木前遺跡 2次調査 亀田町教育委員会
- 川上貞雄・吉田 宗・真島信二 1983 「亀田町文化財調査報告書 第2集 中の山遺跡」亀田町教育委員会
- 川村浩司 1998 「北陸東部部の古墳出現前後の様相」「東日本における古墳出現過程の再検討」日本考古学協会 新潟大会実行委員会
- 川村浩司 1989 「越後の古代聚落系譜」『新潟考古学講話会会誌』第3号 新潟考古学講話会
- キ. 北村 寛他 1983 「猪立遺跡発掘調査報告書」 黒磯町教育委員会
- 木村宗文 1984 「文献からみた古代・中世の頃顛」「新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第35集 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡」新潟県教育委員会
- 九州陶磁文化館 1984 「国内出土の肥前陶磁」
- ケ. 深草正史 1986 「第四編第六章 大和政權と越後」「新潟県史 通史編 I 原始・古代」新潟県
- コ. 小池義人他 1994 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第59集 繩池・寺道上遺跡』新潟県教育委員会
- 小林昌二 1992 「北陸道・地域の物語の展開」「環日本海地域比較史研究」第1号
- 小林昌二 1996 「越地域における部民分布の再検討」「越と古代の北陸 古代王権と交流」小林昌二編 名著出版
- サ. 酒井和男 1980 「三王山遺跡」亀田町教育委員会
- 坂井秀弥 1984 「今池遺跡群における奈良・平安時代の土器」「新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第35集 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡」新潟県教育委員会
- 坂井秀弥他 1984 『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第35集 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1985 「劉城平野古代・中世開発史の一考察」「新潟史学』18 新潟史学会
- 坂井秀弥他 1986 『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第40集 一之口遺跡西地区』新潟県教育委員会
- 坂井秀弥他 1987 『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第48集 三島郡出雲崎町番場遺跡』新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1989 a 「第百回 まとめ」「新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第53集 山三賀Ⅱ遺跡」新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1989 b 「越後における古代手工業生産の様相」「北陸の古代手工業生産」北陸古代手工业生産史研究会

- 坂井秀弥 1989c 「山三賀Ⅱ遺跡からみた阿賀北地方の古代土器」「新潟考古学談話会会誌」第4号 新潟考古学談話会
- 坂井秀弥他 1989 「新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第53集 山三賀Ⅱ遺跡」新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1990a 「越後平安期土器縦年系図」「東国土器研究」第3号 東国土器研究会
- 坂井秀弥 1990b 「越後に於ける古代末・中世の土器様相と面圖」「シンポジウム 土器から見た中世社会の成立」シンポジウム実行委員会
- 坂井秀弥・鶴間正昭・春田真実 1991 「佐渡の須恵器」「新潟考古」2号 新潟県考古学会
- 坂井秀弥 1991 「地磚図からみた越後・佐渡の条理と開拓」「条里制研究」第7号 条理制研究会
- 坂井秀弥 1992 「新潟平野における古代埴生窯の変容—新潟市大敷遺跡を基に」「新潟考古学談話会会誌」第10号 新潟考古学談話会
- 坂井秀弥 1993 「古代越後の環境・生態力・特徴」「新潟考古学談話会会誌」第12号 新潟考古学談話会
- 坂井秀弥・川村浩司 1993 「越後に於ける古墳出現前後の土器様相」「越後地域における古墳文化形成過程の研究」研究者グループ
- 坂井秀弥 1995 「古代越後平野の環境・交通・官衙」「木簡研究」第17号 木簡学会
- 坂井秀弥 1996 「木辺の古代官衙道路」「越と古代の北陸 古代王権と交流」小林昌二編 名著出版
- 坂井陽一 1991 「地形」「新潟市史 資料編2 自然」新潟市
- 坂本貢三 1970 「王室國家体制」「漢唐 日本書」2 東京大学出版会
- シ. 品田高志 1992 「越後に於ける古墳時代土器の変遷」「柏崎市立博物館館報」6 柏崎市立博物館
- ス. 鈴木成威・春田真実 1994 「第4回 まとめ」「新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集 一之口遺跡(東地区)」
- 鈴木成威他 1994 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集 一之口遺跡東地区」新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- タ. 田嶋明人 1986 「漆町遺跡出土土器の縦年の考察」「漆町遺跡」石川県立埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 1988 「古代土器縦年軸の設定」「シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題」報告編 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
- 田嶋明人 1996 「手取平原に見る古代遺跡の動態」「東大寺領横江庄遺跡Ⅱ」石川県松任市教育委員会
- 田中久夫ほか 1994 「新潟砂丘の形成史」「第四紀研究」35-3 第四紀研究会
- チ. 寺崎裕智 1995 「上野遺跡」「木簡研究」第17号 木簡学会
- 出越茂和 1995 「北陸のクロコ土器群」「中・近畿土器の基礎研究XII」中世土器研究会
- 出越茂和 1996 「古代後期における輪皿食器(前)」「北陸の9世紀代の土器様相」北陸古代土器研究会
- ナ. 成瀬洋 1995 「下流の平野と海岸の砂丘」「日本の平野と海岸」岩波書店
- ニ. 新潟桂藻グループ 1978 「平野の地下」URBAN KUBOTA 17
- 新潟県 1985 「新潟県史 通史編1 原始・古代」
- 新潟県 1987 「新潟県史 通史編2 中世」
- 新潟砂丘グループ 1974 「新潟砂丘と人類遺跡—新潟砂丘の形成史」「第四紀研究」13-2 第四紀学会
- 新潟古砂丘グループ 1978 「新潟砂丘—新潟砂丘の形成史」「第四紀研究」17-1 第四紀学会
- 新潟市教育委員会 1994 「新潟市藏置塙山遺跡現地説明会資料」新潟市教育委員会
- 新潟市史編さん原始古代中世史部会 1994 「新潟市史 資料編1 原始古代中世」新潟市
- 新潟市史編さん原始古代中世史部会 1995 「新潟市史 通史編1 原始古代中世(上)」新潟市・新潟市史編さん近世史部会編
- 新津市史編さん委員会編 1993 「新津市史 通史編 上巻」新津市
- ヒ. 広瀬和雄 1986 「中世への転換」「岩波講座 日本考古学6 変化と画期」岩波書店
- 広瀬和雄 1989 「畿内の古代集落」「國立歴史民俗博物館研究報告」第22集 国立歴史民俗博物館
- フ. 鹿家明・小池邦明・渡辺利和 1986 「新潟市小丸山遺跡発掘調査概報」新潟市教育委員会
- モ. 鶴月精司 1986 「北陸の土器生産と土器焼成場—加賀地域を中心として」「古代の土器焼成遺跡」
- 鶴月精司 1990 「北陸における古代の土器生産体制の変容」「北陸の9世紀代の土器様相」北陸古代土器研究会
- ヤ. 山本豪他 1988 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第37集 金屋遺跡」「新潟県教育委員会」
- 日. 吉岡康輔 1983 「奈良・平安時代の土器編年」「東大寺領横江庄遺跡」松任市教育委員会・石川考古学研究会
- 四ツ屋遺跡調査團 1988 「四ツ屋遺跡発掘調査報告書」
- ワ. 渡邊朋和 1991 「長沼遺跡発掘調査報告書」新津市教育委員会
- 渡邊朋和 1992 「上野遺跡発掘調査報告書」新津市教育委員会
- 渡辺ますみ 1991 「亀田町文化財調査報告書 第3回 芦木前遺跡」亀田町教育委員会
- 渡辺ますみ 1994 「第4回 まとめ」「縦立C遺跡発掘調査報告書」黒崎町教育委員会
- 渡辺ますみはか 1994 「縦立C遺跡発掘調査報告書」黒崎町教育委員会

遺物観察表

- 1).番号は図版番号と一致する
- 2).出土の項目は、土師器については土中に含まれる鉱物や小砾などについて記述した。「英」は石英、「長石」は長石、「雲」は雲母、「ナ」はチャート、「海針」は海綿骨針を表す。
- 3).須恵器については土中の特徴から推測できる産地について記述した。
- 4).遺存の項目は実測図に対する各個体の遺存度を表す。
- 5).手法の項目は年代・系譜・産地などの目安となる特徴的な技法や調整技術を中心に記述しており、網羅的ではない。なまけづくり」としたもののうち、平安時代の壺・杯・碗・皿などはロクロケズリを意味し、ロクロを使用しないケズリ」と表す。
- 6)、「余切り」は特に断らない限り留軸余切りを表す。

古墳時代前期土器(図版25・26 1~24)

番号	地点	種類	形態	法長	土師	色調	遺存	手法	備考
1		土師器	高杯	□14.0 英・長・雲	2.5YR8/3	1/12	内外面ヘラミガキ		
2	Q29	土師器	高杯	□13.8 英・長・雲	7.5YR7/2	4/5	外面ヘラミガキ		
3	P29-14	土師器	壺 口	□10.1 英・長・雲 高8.0 割12.6	7.5YR8/5	4/5	支突部内外面・脚部内外面ヘラミガキ		
4	P29-14	土師器	壺 口	□7.4 英・長(大) 13.14	10YR8/2	2/3	脚部外面ヘラミガキ	受け部の摩滅著しい	
5		土師器	鉢	□20.0 英・長(大)	10YR8/2	1/6	内外面ハケメ		
6	028-25	土師器	壺 口	□16.2 英・長・雲	10YR8/2	上2/3 下1/3	体部外面ハケメ後ナデ・体部内面ナデ		
7	P28-8-13	土師器	壺	□26.4 英・長(大) 13.14	10YR8/2	1/2	口縁部下半ハケメ・体部内面ハケメ		
8	Q29-11-II	土師器	壺	□24.6 英・長(大)	7.5YR7/2	1/2	口縁部下半ハケメ・体部内面ハケメ		
9	Q28-8-13	土師器	壺	□18.6 英・長(大) 海針	10YR8/3	1/3	体部内面ヘラケズリ		
10	P29-14	土師器	壺	□19.5 英・長(大) 高25.3 底4.5	10YR7/2	2/3	体部内面ヘラナデ・体部内面下半ヘラケズリ		
11	P28	土師器	壺	□24.3 英・長	10YR7/2	1/6	体部内面ヘラナデ		
12	Q29	土師器	壺	□21.0 英・長(小)	7.5YR8/3	1/9	体部内面ヘラナデ		
13	P28	土師器	壺	□19.0 英・長(小) 海針	7.5YR8/2	1/8	体部内面ヘラナデ		
14		土師器	壺	□17.4 英・長・海針	7.5YR8/4	1/12	体部内面ヘラナデ		
15	029-18	土師器	壺	□17.5 英・長	10YR8/1	1/9			
16	P28-13-14-15-16	土師器	壺	底8.0 英・長・雲	10YR8/3	2/3	体部外面下半ヘラミガキ・体部内面ナデ		
17	P28	土師器	底 部	底6.6 英・長	10YR6/1	2/3	内面ヘラナデ・底部光焼法		
18	P28	土師器	底 部	底6.7 英・長・海針	10YR8/2	1/2	内面ハケメ・底部光焼法		
19	P28	土師器	底 部	底5.2 英・長	10YR6/1	1/6	体部外面下半ヘラケズリ・体部内面ヘラナデ		
20	P28	土師器	底 部	底7.2 英・長(大) 雲	10YR6/1	3/5	内面ハケメ・底部光焼法		
21	Q29	土師器	底 部	底2.6 英・長	10YR6/1	1/2	外表面ヘラケズリ	内面の摩滅著しい	
22	Q29	土師器	底 部	底2.0 英・長・海針	5YR8/3	2/5	内面ヘラナデ		
23	Q28	土師器	底 部		10YR8/1			丸底・内外面とも摩滅著しい	
24		土師器	底 部	精良	10YR8/4	2/5		丸底・内外面とも摩滅著しい	

平安時代 93-S K70 (図版27 55~56)

25		須恵器	無台杯	□12.8 高2.9 底7.0	小泊	7.5Y7/1	1/3	底部余切り無調整	
26		須恵器	無台碗	□12.8 底6.7	小泊	N6/ N6/	1/8 4/5		
27		須恵器	無台碗	□12.3 海針	小泊	N6/	1/6	底部ヘラ切り無調整	
28		土師器	無台碗	□13.0 英・長	海針	N6/	1/6		
29		土師器	無台碗	□13.0 高3.5 底5.0	ナ・長	5YR8/3	1/2		摩滅著しい
30		土師器	無台碗	□12.4 高4.5 底4.2	長・子 (少量)	5YR8/3	1/3	底部余切り無調整	底部外面ヘラ記号「×」
31		土師器	無台碗	□14.0 高3.6 底2.8			1/4		
32		土師器	無台碗	□13.6 英・長・雲	5YR8/3	1/9			
33		土師器	無台碗	□12.4 精良	2.5Y8/2	1/9			
34		土師器	無台碗	□13.0 精良	2.5Y8/2	1/6			
35		土師器	無台碗	□12.4 角	10YR8/4	1/9			
36		土師器	無台碗	□13.4 長	7.5YR6/	1/9			
37		須恵器	無台碗	□12.0 精良	2.5Y8/3	1/6			

番号	地 点	規 格	機 械	法 重	施 土	免 費	車 重	手 法	備 考
38	土師器	無台輪	口115.6	精良	7.5YR8/2	/10			
39	土師器	無台輪	口116.0	精良	10YR8/3	1/9			
40	土師器	無台輪	口116.8	チ・長・美	5YR8/4	2/3	底部糸切り無調整		
41	土師器	無台輪	口117.2	長・美	2.5Y7/2	1/6			摩減著しい
42	土師器	無台輪	口117.4	長・美	10YR8/3	1/4	底部糸切り無調整		
43	土師器	無台輪	口118.0	チ・長	7.5YR8/3	1/4	底部糸切り無調整		
44	土師器	無台輪	口118.8	チ・長	10YR8/3	1/4	底部糸切り無調整		底部外側ヘラ記号[×]
45	黒色土器	無台輪	口115.8	長・チ・美	10YR8/4	1/9	外曲カギ		
46	黒色土器	無台輪	口116.0	長・チ	2.5YR8/3	1/4	底部外側ミガキ		
47	黒色土器	無台輪	口116.2	長・チ	2.5Y8/3	1/3	底部外側ミガキ		
48	黒色土器	無台輪	口116.4	長・美	2.5Y8/3	1/3	底部ヘラケズリミガキ		
49	土師器	小 級	口115.4	チ・長	7.5YR8/3	1/6	底部糸切り?		
50	土師器	長 級	口122.0	チ・長・角	5YR8/3	1/9	体部内外面カキメ		
51	土師器	長 級	口124.0	チ・角・長	10YR8/2	1/5	体部内外面カキメ		
52	土師器	長 級	口121.0	チ・長・角	5YR8/4	1/5	体部クロナデ		
53	土師器	民 級	口121.0	長・美・チ	10YR8/1	1/3	体部内外面カキメ		
54	土師器	民 級	口120.0	長・チ・美	10YR8/3	1/6	体部内外面カキメ		
55	土師器	長 級	口124.0	チ・長(多量)	2.5Y8/3	1/3	体部外側カキメ・平行タタキ		
56	土師器	長 級	口142.0	長(木取多量)	10YR8/2	1/9	体部クロナデ		内面摩減著しい

93-S I 2 (国版28 57~62)

57	土師器	無台輪	口14.0~14.4	長・チ・長	5YR8/3	2/3	体部内外面カキメ?, 底部糸切り無調整		
58	土師器	無台輪	底5.0	長	10YR8/3	2/3			
59	土師器	無台輪	底7.0	長・チ	2.5Y8/3	1/3		摩減著しい	
60	土師器	小 級	口17.4	長・美・湯針	10YR8/4	1/6	体部クロナデ		摩減著しい
61	土師器	小 級	口13.6	チ・長	7.5YR8/3	1/3	体部クロナデ		
62	須恵器	鏡 気	新津	N/S		1/5	外曲平行タタキ・内面吹付状當て具		

93-S E 1 (国版28 63~67)

63	須恵器	無台杯	口11.2	小田	7.5Y5/1	1/3	底部ヘラ切り無調整		体部外側磨傷「大」
64	須恵器	有台杯	口12.6	小泊	NT/	1/3			
65	土師器	無台輪	口12.8	長・美・チ	2.5Y8/2	1/3			摩減著しい
66	土師器	無 収	口34.0	長・角・手	10YR8/2	1/9	体部内外面カキメ		
67	須恵器	長頭瓶	底10.0	小泊	NT/	2/3			

93-S K 5 (国版28 68~75)

68	須恵器	杵 級	口13.8	小泊	5Y8/1	1/4	肩部ナデ		
69	須恵器	杵台杯	口14.4	小泊	N/S	1/4			
70	須恵器	黑台杯	口13.0	小泊	N/S	1/3	底部ヘラ切り		
71	土師器	無台輪	口12.8	長・捷士鉄	7.5YR8/3	3/4	底部糸切り無調整		
72	土師器	無台輪	口13.0	長(多量)	5YR7/4	略充	底部糸切り無調整		
73	土師器	馬口輪	口12.0	チ・長	10YR8/3	1/3	底部糸切り無調整		
74	土師器	小 級	口13.2	瓦(大粒・多量)	10YR8/3	1/8			
75	土師器	長 級	口21.0	チ・手	10YR8/3	1/6	体部内外面カキメ		

93-S K 1 (国版28 76~77)

76	土師器	無台輪	口17.0	長	7.5YR8/4	1/3	体部内外面カギ		
77	土師器	小 級	口12.6	チ・長・英	5YR8/4	1/6	体部クロナデ		

93-S K 7 (国版28 78~81)

78	須恵器	無台杯	口12.0	小泊	6N/	1/3			
79	土師器	馬口輪	底7.0	長・美	7.5YR8/3	1/8			摩減著しい
80	土師器	民 級	口25.0	長	10YR7/3	1/9			

番号	地 点	種	單	形	質	法	重	監	土	色	調	連	存	手	法	備	考
81	土師器	長	瓶	口12.8	底6.0	長・大肚	7.5Y R5/1	1/9	休	休	休	休	休	休	休	休	休

94-S K 32 (図版28 82~85)

82	土師器	無	台	口14.0	高4.5	長・子	2.5Y R8/3	1/2	底部								
83	土師器	無	台	口12.8	底5.0	長・子	7.5Y R8/1	1/3	休	休	休	休	休	休	休	休	休
84	土師器	無	台	底4.7	子・長	2.5Y R8/2	3/4	底部	底部	底部	底部	底部	底部	底部	底部	底部	底部
85	土師器	長	瓶	口20.6	底6.4	子・子・長・子	2.5Y R8/2	1/12	休	休	休	休	休	休	休	休	休

93-S K 3 (図版28 86~89)

86	土師器	無	台	口14.0	底5.0	長・英	5Y R8/4	1/5	休	休	休	休	休	休	休	休	休
87	土師器	無	台	底5.0	子・長	5Y R8/4	2/5	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休
88	土師器	小	瓶	底6.4	子・長	2.5Y R8/3	1/2	底部	底部	底部	底部	底部	底部	底部	底部	底部	底部
89	土師器	長	瓶	口21.4	底6.4	長・大肚	10Y R8/2	1/4	休	休	休	休	休	休	休	休	休

93-S K 101 (図版29 90~92)

90	土師器	無	台	口12.8	高3.7	長・子・瓶	2.5Y R8/3	1/2	休	休	休	休	休	休	休	休	休
91	土師器	無	台	底5.0	高3.7	英・長	2.5Y R8/3	1/3	休	休	休	休	休	休	休	休	休
92	土師器	無	台	底5.0	高3.7	長・子	2.5Y R8/2	1/4	休	休	休	休	休	休	休	休	休

93-S X 31 (図版29 93~95)

93	土師器	無	台	口12.2	高5.0	英・長	7.5Y R8/3	1/6	休	休	休	休	休	休	休	休	休
94	土師器	無	台	口13.4	高4.1	長・子	5Y R7/4	1/8	休	休	休	休	休	休	休	休	休
95	須	要	要	口26.0	新津	新津	7.5Y 5/1	1/12	外	外	外	外	外	外	外	外	外

93-S X 32 (図版29 96~104)

95	須	要	要	口13.6	小田	N7/	1/12	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休
97	須	要	要	口12.8	小田	N6/	1/6	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休
98	須	要	要	口12.4	小田	7.5Y 7/1 ~6/1	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休
99	土師器	無	台	口13.0	精良(子)	7.5Y R6/1	1/3	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休
100	土師器	無	台	口12.8	子・英	7.5Y R8/2	1/4	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休
101	土師器	小	瓶	底6.0	長・子	2.5Y 8/2	3/4	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休
102	黑色土器	無	台	口15.0	精良	2.5Y 8/3	1/9	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休
103	黑色土器	無	台	底7.2	長(少)	2.5Y 8/3	1/9	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休
104	黑色土器	無	台	底7.2	英・長	2.5Y 8/3	1/4	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休

93-S X 34 (図版29 105~110)

105	須	要	無	台	口12.0	小田	N7/	1/12	休	休	休	休	休	休	休	休	休
106	土師器	無	台	底6.0	角・英	10Y R8/4	1/3	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休
107	土師器	無	台	底5.0	角・英	10Y R8/4	1/4	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休
108	土師器	無	台	底5.0	子	7.5Y R8/4	4/5	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休
109	黑色土器	無	台	底6.4	英・長	2.5Y 8/3	1/8	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休
110	土師器	長	瓶	口20.0	子・長	2.5Y 8/2	1/6	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休

93-S X 33 (図版29 111~115)

111	土師器	無	台	瓶	7.4	子・長	2.5Y 8/3	1/4	底	底	底	底	底	底	底	底	底
112	土師器	小	瓶	口14.0	長・薄斜	7.5Y R6/3	1/4	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休
113	土師器	小	瓶	口11.4	英・子・長	2.5Y 8/3	1/6	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休
114	土師器	長	瓶	口25.0	角・英・子	7.5Y R6/6	1/18	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休
115	須	要	要	瓶	17.7	小田	7.5Y 7/1	4/5	休	休	休	休	休	休	休	休	休

93-S X 50 (図版29 116~118)

116	土師器	無	台	口16.0	高5.2	長・英	7.5Y R8/3	休	底	底	底	底	底	底	底	底	底
117	土師器	長	瓶	口25.0	梗子	7.5Y R8/4	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休
118	土師器	長	瓶	口22.4	長	5Y 7/6	1/10	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休

93-S D 22 (図版30 119~139)

番号	地 点	種 類	設 置	出 墓	地 手	魚 圖	連 寸	手 法	備 考
119		須恵器	埋 置	口127 高25 幅6.5 2段脚	小泊	N 6 /	1/2	頂部ロクロナデ	体部外側墨書き
120		須恵器	無台杯	口1120 高3.2 幅6.5	小泊	N 6 /	略完	底部ハラ切り無調整	
121		須恵器	無台杯	口1122 高2.8 幅7.0	小泊	N 6 /	1/4	底部ホリ切り無調整	
122		須恵器	有台皿	底106 高4.5 幅6.6	小泊				
123		土器	無台碗	口1132 高4.5 幅6.6	精良	25Y 8 / 3	1/6	底部ホリ切り無調整	
124		土器	無台杯	口1124 高4.5 幅6.0	チ・長・ 高?	25Y 8 / 3		底部ホリ切り無調整	体部外側墨書き「人」 摩滅著しい
125		土器	無台碗	口1125 高4.9 幅6.2	英・長	75Y R 8 / 4	1/12		
126		土器	無台碗	口1125 高4.9 幅6.2	チ・長・英	25Y 8 / 3	1/12	底部ホリ切り	
127		土器	無台碗	口1125 高4.9 幅6.4	チ・長	10Y R 8 / 3	1/2		
128		土器	無台碗	口1125 高4.9 幅6.4	チ・長	75Y R 8 / 3	1/6	底部ホリ切り無調整	
129		土器	無台碗	口1125 高4.9 幅6.4	長	75Y R 8 / 3	1/10	底部・口縁部外側下面ケズリ後ミガキ	
130		馬鹿土器	無台碗	口1155 高6.0	英・チ・ 長	25Y 8 / 3	2/3	底部ミガキ?	
131		馬鹿土器	無台碗	口1155 高6.0	精良	25Y 8 / 3	1/3	底部ケズリ後ミガキ	
132		土器	小 盂	底6.5 高6.5	長・チ	10Y R 8 / 3	1/6		
133		土器	長 盂	口1230 底・長	75Y R 8 / 6	1/9			
134		土器	長 盂	口1230 底・長	英・長・英	10Y R 8 / 3	1/9	体部外側・口縁部内側カキメ	摩滅著しい
135		土器	長 盂	口1230 底・長	英・長・英	10Y R 8 / 3	1/12	体部カキメ	
136		土器	長 盂	口1230 底・長	75Y R 8 / 6	1/6	体部カキメ		
137		土器	鴨	口1446 底・長	英・長・チ	75Y R 8 / 6	1/12	体部カキメ	
138		土器	鴨	口1440 底・長	英・長	25Y 8 / 3	1/9	体部外側面カキメ	
139		土器	鴨	口1450 底・長・チ	英・長・チ	25Y 8 / 4	1/10	体部外側面カキメ	摩滅著しい

94-S D 35 (図版30 140~143)

140	須恵器	無台碗	口1120	小泊	N 6 /	1/4			
141	土器	無台碗	口1124 高5.0 幅5.0	燒土粒・ 長・チ	75Y R 8 / 6	1/3			外側赤彩?
142	土器	無台碗	口1148 高5.0 幅5.0	チ・長	25Y 8 / 2	1/3	ホリ切り無調整		
143	土器	小 盂	底6.6	英・長・チ	5Y R 8 / 4	1/3			

94-S D 2 (図版31 144~164)

144	須恵器	無台碗	口1120 高2.5 幅6.4	小泊	N 8 /	1/6	底部ハラ切り		
145	土器	無台碗	口1130 高4.6 幅5.2	チ・長	25Y 8 / 3		底部ホリ切り後無調整		底部外側墨書き
146	土器	無台碗	口1134 高3.3 幅6.6	チ・長	25Y 8 / 3	1/4	底部ホリ切り無調整		
147	土器	無台碗	口1126 高3.4 幅6.1	長・チ	25Y 8 / 3	1/4	底部ホリ切り無調整		
148	土器	無台碗	口1136 高3.8 幅6.4	チ・長	5Y R 8 / 4	1/3	底部ホリ切り無調整		
149	土器	無台碗	口1124 高3.8 幅5.3	長・英	25Y 8 / 3	2/3	底部ホリ切り無調整		
150	土器	無台碗	口1120 高4.2 幅4.0	長・英・ チ	75Y R 8 / 4	1/3	底部ホリ切り無調整		
151	土器	無台碗	口1114	チ・長	25Y R 7 / 4	1/6			
152	土器	無台碗	口1140			1/9			
153	土器	無台碗	底6.0	英・長	5Y R 8 / 3	1/2	底部ホリ切り無調整		
154	土器	無台碗	底6.6	精良	25Y 8 / 2	3/4	底部ホリ切り無調整		
155	土器	無台碗	底6.2	英・長	5Y R 8 / 4	1/2	底部ホリ切り無調整		

番号	地 点	種 別	器 様	法 形	施 土	色 調	調 孔	手 法	備 考
156	黒色土器	無台碗	底5.6	チ・長	75YR 7/3	2/5	底部ケスリ接ミガキ		底部外面に黒斑あり
157	土師器	無台杯	底5.5	チ・英	5 YR 8/4		底部系切り無調整		底部外面墨書き「部」
158	土師器	無台碗	底4.6	チ	25Y 8/3	1/3	底部系切り無調整		
159	土師器	無台碗	底2.0	チ	25Y 8/2	1/10	体部ロゴロナデ		
160	土師器	長 釜	口18.8	チ・長・チ	10YR 8/3	1/6	体部外側カキメ		
161	土師器	小 釜	口18.2	英・角	75YR 8/3	1/6			
162	土師器	長 釜	口22.2	英・長・チ チ・較大)	25Y 8/3	1/9	体部外側カキメ		
163	土師器	長 釜	口21.0	英・長・子 (多量)	75YR 8/4	1/9			
164	土師器	鍋	口43.0	英・長・子 (多量)	10YR 8/3	3/4	体部外側ケヌリ		

94-S D 6 (図版31 165~172)

165	須恵器	無台杯	口12.6 高2.9 底6.8	小泊	75Y 7/1	2/5	底部ヘタ切り無調整		
166	須恵器	無台杯	底7.8	小泊	75Y 7/1	1/2	底部ヘタ切り無調整		
167	土師器	無台碗	口13.4 高3.8 底4.9	英・チ	10YR 8/4		底部系切り無調整		底部外面墨書き「英」
168	土師器	無台碗	口15.4 高5.8 底6.4	長・チ (少量)	25Y 8/3	2/3	底部系切り無調整		
169	土師器	無台碗	口12.0	長・チ	75YR 8/6	1/9			
170	土師器	無台碗	底6.2	チ・長	25Y 8/2	1/3			摩滅著しい
171	黒色土器	無台碗	口14.0 高4.5 底5.4	チ・英・ 長	25Y 8/3	1/4	底部ケスリ接ミガキ		
172	黒色土器	無台碗	口14.3 高5.4 底6.4	長・チ・ 英(少量)	25Y 8/3	3/5	底部ケスリ接ミガキ		

94-S D 1 (図版31 173・174)

173	須恵器	長頸瓶	底5.4	小泊	N 7/	4/5			
174	土師器	小 釜	口14.0	英・チ・無孔	5 YR 8/4	1/2			

93-S D 30 (図版32 175~187)

175	須恵器	無台杯	口13.4 高2.9 底8.8	小泊	75Y 8/1	1/9	底部ヘタ切り		
176	須恵器	無台杯	口12.5 高2.7 底8.0	小泊	75Y 7/1	1/3	底部ヘタ切り		
177	須恵器	有台杯	口14.5	小泊	N 7/	1/8			
178	須恵器	有台杯	底7.2	小泊	N 6/	1/6			
179	土師器	無台杯	底4.8	チ・英	75YR 8/3		底部系切り無調整		底部外面墨書き「部」?
180	土師器	無台碗	口11.8 高4.2 底5.0	長(多量)	10YR 8/6	3/4	底部系切り無調整		体部外面ヘラ記号「×」
181	土師器	無台碗	底6.0	長・博士紋	10YR 8/3	1/4			摩滅著しい
182	土師器	無台碗	底4.8	南良(子)	25Y 8/3	1/8	底部系切り無調整		
183	土師器	無台碗	底4.8	長・英	25YR 7/4	1/4	底部系切り無調整		
184	土師器	無台碗	底4.8	長・英	75YR 8/1	1/3			摩滅著しい
185	土師器	長 釜	口21.2	長・チ(少量)	25Y 8/3	1/6	体部カキメ		
186	土師器	長 釜	口24.0	長・英	75YR 8/4	1/12	体部カキメ		
187	土師器	長 釜	口26.0	脚・チ・部	75YR 7/3	1/8	体部カキメ		

94-S D 7 (図版32 188~192)

188	土師器	無台碗	口15.0 高4.7 底5.6	精良 (チ・少量)	5 YR 7/2	2/5	底部系切り無調整		
189	土師器	長 釜	口18.2	チ・長	5 YR 8/3	1/12	体部カキメ		
190	土師器	長 釜	口18.4	長(少量)	10YR 8/3	1/9	体部カキメ		
191	土師器	長 釜	口18.0	長・チ	25Y 8/3	1/12	体部カキメ		
192	土師器	長 釜	口18.4	長・角	25Y 8/3	1/8	体部カキメ		

94-S D 5 (図版32 193~198)

193	土師器	無台碗	口13.0 高3.5 底5.7	長・英	75YR 8/5	4/5	底部系切り無調整		
194	土師器	無台碗	底5.8	精良	5 YR 8/3	3/4	底部系切り無調整		
195	土師器	無台碗	底6.0	精良・長・チ	25Y 8/3	3/4	底部系切り無調整		
196	土師器	無台碗	底4.0	脚・チ	5 YR 8/3	1/5	底部系切り無調整		

番号	地 点	種 類	部 位	法 量	拾 土	色 調	通 存	手 法	圖 芥
197	黒色土器	無台輪	口15.2	底・英	2.5Y R 8/4	1/7			
198	土器器	底	□23.0	底・素	10Y R 8/2	1/8	体部外面カキメ		

93-S D 10' (図版32 199～203)

199	須恵器	無台杯	底7.6	小泊	7.5Y 7/1	1/6	底部ヘラ切り無調整		
200	土器器	無台輪	口12.0	角・チ・高4.2 長(砂粒多 く含む) 底5.3	2.5Y 8/2	1/2	底部系切り無調整		
201	土器器	無台輪	口15.6	チ・透枝	2.5Y 8/3				
202	土器器	無台輪	底6.0	透土粒・長	2.5Y 8/2	2/5	底部ミガキ		
203	土器器	無台杯	底5.4	精良	10Y R 7/2	3/7	底部系切り無調整		

94-S D 43 (図版32 204～206)

204	須恵器	無台杯	底7.4	新津	5 Y R 7/1	1/8	底部ヘラ切り無調整	底部外面墨書き	
205	土器器	無台輪	底6.2	チ(少底)	2.5Y 8/3	1/4	底部系切り無調整		
206	土器器	長 細	□24.0	チ・長	7.5Y R 8/3	1/15		墨滅著しい	

その他の造構 (図版33 207～223)

207	98-S K 2	須恵器	杯 直	口13.6 小泊	N 6 /	4/5	底部ロクロナダ		
208	Q25pt 1	須恵器	無台杯	口12.7 新津?	2.5Y 8/2	3/4	底部ヘラ切り無調整	焼成不良	
209	98-S D 5	須恵器	無台杯	口12.6 高2.8 底7.0	小泊	N 6 /	1/3		
210	98-S D 3	須恵器	有台輪		小泊	N 6 /	1/6		
211	98-S D 9	土器器	無台輪	口13.2 チ・長	5 Y R 8/3	3/5	底部系切り無調整		
212	M21pt 5	土器器	無台輪	口15.6 高5.5 底5.2	チ・英・長	2.5Y 8/2	2/3	底部系切り無調整	
213	L23pt 8	土器器	無台輪	口13.0 高4.0 底5.2	長(少底)	7.5Y R 8/5	2/5	底部系切り無調整	
214	98-S D 8	土器器	無台輪	口12.1 高3.6 底5.6	素(少底)	2.5Y 8/2	2/5	底部系切り無調整	
215	98-S D 10	土器器	無台輪	口12.6 高3.5 底5.8	長(多量・大粒)	2.5Y 7/2	2/5	底部系切り無調整、口縁部 下手持ちケズリ	
216	98-S X 8	土器器	無台輪	口11.5 高4.5 チ	透土粒・チ	2.5Y 8/3	2/5		墨滅著しい
217	98-S D 4	土器器	無台輪	底5.6	長・英・チ	2.5Y 8/3	2/3	底部系切り無調整	
218	98-S D 10	土器器	無台輪	底4.5	チ・長	5 Y R 8/3	2/3	底部系切り無調整	
219	98-S D 6	黒色土器	無台輪	底5.0	長・チ	2.5Y 8/3	2/5	底部ミガキ	
220	98-S K 5	土器器	小 細	口13.6 高3.7 底11.0	長・英・長	2.5Y 8/3	1/3		
221	98-S D 2	土器器	長 細	口21.0 長	透土粒・チ	2.5Y 8/2	1/9	体部外面カキメ	
222	98-S D 6	土器器	長 細	口20.2 長・チ(較・多量)	5 Y R 7/4	1/2	体部外面カキメ		
223	98-S D 4	土器器	長 細	口22.0 長・チ・角	7.5Y R 8/4	1/18	体部外面カキメ		

旧河道 (図版33・34 224～240)

224	J 24-18	須恵器	無台杯	口12.6 高2.9 底7.2	小泊	N 7 /	3/4	底部ヘラ切り無調整	
225	J 23-25	須恵器	無台杯	口12.0 小泊	7.5Y 7/1	2/5	底部ヘラ切り無調整	底部外面墨書き「小」?	
226	J 23-25	須恵器	無台杯	口13.6 新津	N 7 /	1/4			
227	J 24-13	須恵器	無台杯	口16.0 高3.7 底11.0	N 7 /	1/9	底部ヘラ切り		
228	J 25-24	土器器	無台輪	口12.6 角・英・ 高3.7 底5.2	2.5Y R 8/3	1/9	底部系切り無調整		
229	J 25-18	土器器	無台輪	口12.4 高4.5 底5.2	チ・長	10Y R 8/3	1/2	底部系切り無調整	
230	K 26-2	土器器	無台輪	口12.0 高4.4 底4.6	チ・長・ 焼土粒	5 Y R 8/3	1/3	底部系切り無調整	

231	J 24-13	土器器	無台輪	□13.4 高3.6 底6.0	N 6 /	1/9		
232	L 22-21	土器器	無台輪	□6.5 高4.0 底5.4	長・英・ チ	5 Y R 7 / 4	2/5	底部 - 口縁部下平手持ちケズリ
233	J 25-24	土器器	無台輪	□12.2 高3.5 底5.3		2.5 Y R 8 / 2	3/5	底部余切り無調整
234	J D-II-E	土器器	無台輪	□14.4 高5.7	長	7.5 Y R 8 / 6	上1/9 下4/5	摩滅著しい
235	J 24-18	土器器	無台輪	□6.0 高3.5	長	2.5 Y R 7 / 6	1/4	摩滅著しい
236	J 24-23	須恵器	長圓柱	底9.5	小田	N 7 /	3/5	
237	J 24-12	土器器	輪	□41.4	長・チ	7.5 Y R 8 / 3	1/15	摩滅著しい
238	J 24-4	土器器	輪	□45.0	角・英・長	10 Y R 8 / 2	1/18	体部内外面カキメ
239	L 25-16	須恵器	横板	□12.0 高21.2 幅30.5	健持	N 6 /		外表面平行タキ、内面ナデ
240	J 24-13	須恵器	蓋	□26.0				

水田部出土土器(図版35 241~252)

241	M1-8	須恵器	無台杯	□13.0 高3.1 底7.3	小泊	7.5 Y 7 / 1	3/4	底部へラ切り無調整
242	P29-10	土器器	無台輪	□12.8	精良	7.5 Y 8 / 3	2/5	
243	T30-2	土器器	無台輪	□12.0 高4.4 底4.8	長・角	2.5 Y 8 / 3	2/5	底部余切り無調整
244	T28-4	土器器	無台輪	□13.0 高3.7 底5.5	子・長(砂 利多く含 む)	10 Y R 7 / 4	2/3	底部余切り無調整
245	T30-7	土器器	無台輪	□13.0 高3.7 底5.5	子・長	2.5 Y 8 / 3	1/3	
246	T30-7	土器器	無台輪	□4.6 高3.6	子・長	2.5 Y 8 / 3	2/5	底部余切り無調整
247	M31-5	土器器	無台杯	□6.4 高5.4	海針・精良	2.5 Y 8 / 3	4/5	底部余切り無調整
248	M31-24	土器器	無台輪	□5.4 高4.4	長	10 Y R 8 / 3	1/3	底部余切り無調整
249	Q31-24	土器器	無台輪	□5.4 高4.4	長・英	7.5 Y R 7 / 2	1/8	底部余切り
250	L18-16	土器器	無台輪	□12.8 高4.1 底5.5	長・角	2.5 Y 8 / 3	1/3	底部余切り無調整
251	I 13	土器器	無台輪	□13.0 高3.6 底5.6	長・角	2.5 Y 8 / 3	3/5	底部余切り無調整
252	I 13	土器器	無台輪	□15.2 高4.6 底6.5		10 Y R 8 / 3		体部外面無書「既」・「年」?

L 26-6・7・11・12土器ダマリ(図版35 253~264)

253		須恵器	無台杯	□13.2 高2.9 底7.8	小泊	N 7 /	1/5	底部へラ切り無調整
254		土器器	無台輪	□12.4 高4.0 底5.0	精良	2.5 Y R 8 / 3	1/2	底部余切り無調整
255		土器器	無台輪	□13.6 高4.2 底5.9	長	2.5 Y R 8 / 3	1/2	底部余切り無調整
256		土器器	無台輪	□5.0	精良	2.5 Y 8 / 3	2/3	底部余切り無調整
257		黒色土器	無台輪	□15.0 高4.7 底6.0	長・チ	10 Y R 8 / 3	1/3	底部ケズリ
258		土器器	長・輪	□22.6 高17.0	英・イ(多量)	7.5 Y R 8 / 4	1/6	摩滅著しい
259		土器器	長・輪	□22.8 高17.0	角・チ・長	2.5 Y 8 / 3	1/6	体部カキメ
260		土器器	長・輪	□22.8 高17.0	英・長(少)	10 Y R 8 / 3	2/5	体部カキメ
261		土器器	長・輪	□22.0 高17.0	チ	2.5 Y 8 / 2	1/8	摩滅著しい
262		土器器	小・蓋	□12.0 高14.0	子・英・長	2.5 Y 8 / 3	1/9	内外面クロナデ
263		土器器	輪	□45.0 (少量)	長・子	7.5 Y R 8 / 7	1/8	体部ロクロナデ
264		土器器	輪	□45.0 (少量)	長・子	7.5 Y R 8 / 4	1/5	体部外面上半・内面カキメ、体部外面 下半平行タキ

N 27-19・23・24(図版36 265~274)

265		須恵器	無台杯	□10.6 高3.2 底7.2	小泊	7.5 Y 6 / 1	1/8	底部へラ切り無調整
-----	--	-----	-----	-----------------------	----	-------------	-----	-----------

番号	地點	種類	器種	法	量	胎	土	色	周	進	序	手	法	圖	考
266		土師器	無台輪	口11.2 高2.8 底6.8	小泊	N 6 /		1 / 4	底部ヘラ切り無調整						
267		土師器	無台輪	口13.2 高3.9 底5.8	子・長	5 YR 8 / 4		2 / 3	底部系切り無調整						
268		土師器	無台輪	口13.4 高3.6 底5.1	長・チ	7.5 YR 8 / 3			底部部分切り無調整			底部外面墨書き「郎」?			
269		土師器	無台輪	口13.0 高6.0	新真(雲少 量入る)	10 YR 8 / 4		1 / 3	底部系切り無調整						
270	土師器	無台輪	底4.0			2.5 Y 8 / 3		1 / 2				摩滅著しい			
271	土師器	無台輪	底5.0			角・子	5 YR 8 / 3	1 / 3	底部系切り無調整						
272	黒色土器	無台輪	底5.0			精英	7.5 YR 7 / 3	1 / 3	底部外面ケズリ						
273	土師器	小釜	口13.0 底6.8	長・角	10 YR 7 / 2		1 / 9								
274	土師器	小釜	口13.0 底6.8	英・長	10 YR 7 / 2		1 / 10	内外面クロナデ							

K27-8・11~14土器ダマリ(図版36 275~284)

275	土師器	無台輪	口12.2 高3.8 底5.2	続土輪・ 長	10 YR 8 / 3	1 / 3						摩滅著しい			
276	土師器	無台輪	口15.7 高5.0 底7.0	長・チ	2.5 Y 8 / 3	3 / 4						摩滅著しい			
277	土師器	無台輪	口15.8 高4.8 底4.6	子・長	5 YR 8 / 3	1 / 2	底部系切り無調整?								
278	土師器	無台輪	底5.2 子・英	7.5 YR 7 / 2			底部系切り無調整					底部外面墨書き			
279	土師器	無台輪	底4.0 長(少重)	2.5 Y 8 / 4	1 / 3		底部系切り無調整					摩滅著しい			
280	土師器	無台輪	底5.8 子・英(少重)	2.5 Y 8 / 2	2 / 3							摩滅著しい			
281	黒色土器	無台輪	底6.4 子・長	7.5 YR 7 / 2	3 / 4		底部ケズリ底ミガキ								
282	黒色土器	有台輪	底8.0 長・チ	2.5 Y 8 / 3	1 / 6							摩滅著しい			
283	土師器	有台輪	口14.0 底6.8	英・長	2.5 Y 8 / 2	1 / 9	口縁部下平ケズリ								
284	土師器	有台輪	口11.2 英・長	2.5 Y 8 / 2	1 / 6										

K26-6・11土器ダマリ(図版36 285~287)

285	土師器	無台輪	底5.4 英・長	5 YR 7 / 1	1 / 2	底部系切り無調整									
286	土師器	有台輪	底6.8 長・英	10 YR 8 / 1	1 / 3										
287	土師器	長	口20.4 英・角・英	10 YR 8 / 3	1 / 2	体泥カキメ									

包含層出土の土器(図版36-37 288~333)

288	Q28-22	須恵器	杯型	口15.2 高2.1 底10.4	小泊	7.5 Y 6 / 1	1 / 6	頭部クロナデ							
289	O27-15	須恵器	有台杯	底8.8 藍帶	藍帶	N 6 /	1 / 4								
290	L27-11	須恵器	無台杯	口12.0 高2.0 底6.4	小泊	N 7 /	1 / 2	底部ヘラ切り							
291	N27-18	須恵器	無台杯	口12.2 高3.0 底5.8	小泊	10 Y 8 / 1	1 / 3	底部ヘラ切り無調整							
292	O26-24	須恵器	無台杯	口12.4 高3.6 底5.6	小泊	N 7 /									
293	N28-7-8	土師器	無台輪	口12.4 高3.5 底5.6	英・長	5 YR 8 / 4	1 / 10	底部系切り無調整・口縁半 手持ちケズリ							
294	N28-12	土師器	無台輪	口11.2 高3.7 底5.8	長・チ	2.5 Y 8 / 2	2 / 5	底部系切り無調整							
295	L25	土師器	無台輪	口12.4 高3.8 底5.9	長・多量 (大粒・多量)	5 YR 7 / 8	1 / 3	底部系切り無調整・口縁半 手持ちケズリ							
296	O25-7	土師器	無台輪	口12.0 高3.5 底5.8	英・長	2.5 Y 8 / 3	1 / 3	底部系切り無調整				灯明器として使用			
297	N27-9	土師器	無台輪?	底4.8											
298	N28-6-8	土師器	無台輪	口12.0	チ	2.5 Y 8 / 3	1 / 4	底部系切り無調整							
299	O27-17	土師器	無台輪	口11.0 高4.3 底5.5	英・チ	7.5 YR 6 / 2	3 / 4	底部系切り無調整							
300	N27-8	土師器	無台輪	口14.6 高5.0 底5.8	長・チ	2.5 Y 8 / 3	1 / 2								

番号	地点	種類	器種	法面	色調	遺存	手法	備考
301		土師器	無台輪	□14.0 高4.7 底5.2	2.5Y R 7/3	略光	底部系切り無調整	
302	I-24-9	土師器	無台輪	□13.6 高4.8 底5.4	7.5Y R 8/3	2/3	底部系切り無調整	
303	H-22-25	土師器	無台輪	□15.0 高5.3 底5.6	5 Y R 7/4	2/5	底部系切り無調整	
304	N-28-16	土師器	無台輪	□12.4 高4.4 底5.2	5 Y R 8/4	1/6	底部系切り無調整	
305	L-29-18	土師器	無台輪	底6.0	チ・長	2.5Y R 8/2	3/4	底部系切り無調整
306	O-28-11	土師器	無台輪	底5.8	長・チ	7.5Y R 8/3	3/4	底部系切り無調整
307	M-28-1-7	土師器	無台輪	□12.5 底5.0	チ・子	5 Y R 7/4	3/4	底部ミガキ 赤彩?
308	N-27-4	土師器	無台輪	底7.4	チ・長	10Y R 8/6 7.5Y R 8/6	3/4 1/10	底部系切り無調整
309		土師器	無台輪	底4.5 底(少量)	チ(少量)	10Y R 8/3	1/12	底部系切り無調整
310	N-27-20	土師器	無台皿	□13.5 高3.4 底5.5	チ・英・ 長	7.5Y R 8/6	1/2	底部系切り無調整
311	L-27-14	土師器	有台皿	底9.4	チ・英・ 長	10Y R 8/1	1/10	
312	K-27-20	黒色土器	無台輪	□13.0 高3.6 底7.0	チ(少量)	2.5Y R 3	2/5	
313	K-27-15	黒色土器	無台輪	□14.0 高4.5 底5.8	長・チ	2.5Y R 8/4	1/2	底部ケズリ後ミガキ
314	N-27-22	黒色土器	無台輪	□15.0 高5.5 底5.3	武・チ	10Y R 8/2	1/3	底部ミガキ
315	I-25-25	黒色土器	無台輪	□16.4 高5.3 底6.8	長・子	10Y R 8/3	1/2	底部ミガキ
316	M-25-26	黒色土器	無台輪	□16.0 高3.6	精良	10Y R 8/3	1/12	
317	M-25-27	黒色土器	無台輪	底3.0 底5.6	精良 チ・長	10Y R 8/3 10Y R 8/4	1/3 1/5	底部ミガキ? 底部外面ミガキ
318	O-28-2-28	黒色土器	無台輪					
319	I-23-8	須恵器	望塵鏡	□12.8 高3.6	益待	7.5Y 6/1	1/4	
320	H-21-16	須恵器	長颈瓶		新津	N 7/	1/4	
321	K-20-7	須恵器	長颈瓶		小泊	N 7/	1/4	
322	J-19-20	土師器	小 瓶	□14.1 高12.9 底6.2	英・長 (定盤)	10Y R 8/3	1/2	摩減著しい
323	M-30-25	土師器	小 瓶	□13.4 高13.2 底6.5	英・チ	10Y R 8/2	3/4	底部系切り無調整
324	I-25-23	土師器	小 瓶	□12.0 高13.2	チ・長・ 青	5 Y R 8/3	1/4	
325	N-1-9	土師器	小 瓶	□13.6 高13.2	角・長	2.5Y R 8/3	1/4	
326		土師器	小 瓶	□12.6 高13.2	角・英・ 長	2.5Y R 8/3	1/8	
327	O-23-28			底6.6				
328	I-23-24	土師器	瓦 瓶	□19.8 底22.0	英・長・ チ	7.5Y R 8/5 10Y R 8/6	1/5 1/9	体部外面カキメ 地吹き・長・ 第
329	I-25-21	土師器	瓦 瓶	□13.6 底18.4	角・長	2.5Y R 8/3 7.5Y R 7/1	1/4 1/5	体部外面カキメ 地吹き・長・ 第
330	N-28-14	土師器	瓦 瓶	□21.8 (大粒・多量)	英・ 長・美	10Y R 8/4	1/5	体部外面カキメ
331	K-27-23	土師器						
332	細コレクタ	土師器	手縫り?	□10.8		5 Y R 8/4	1/3	ロクロ威形
333		陶器	瓶			2.5Y R 8/3	2/3	透明釉 京焼系

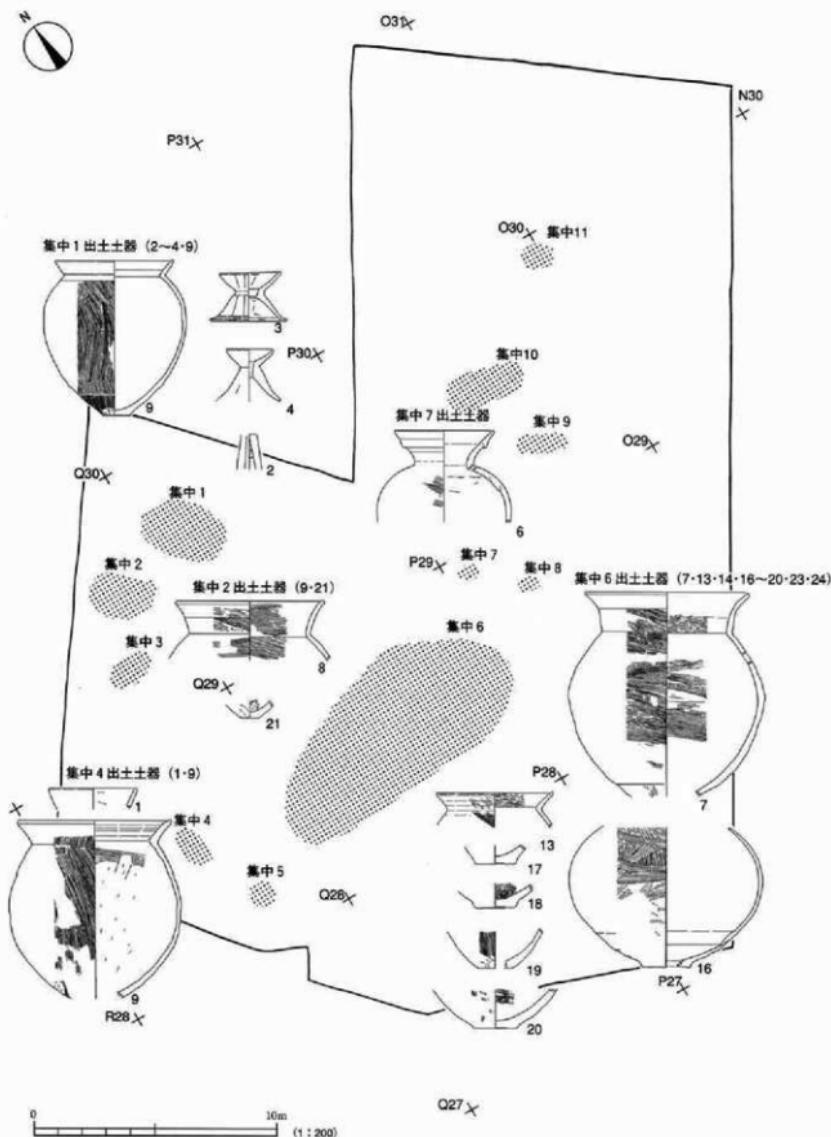
木器・金属器（図版38 334～344）

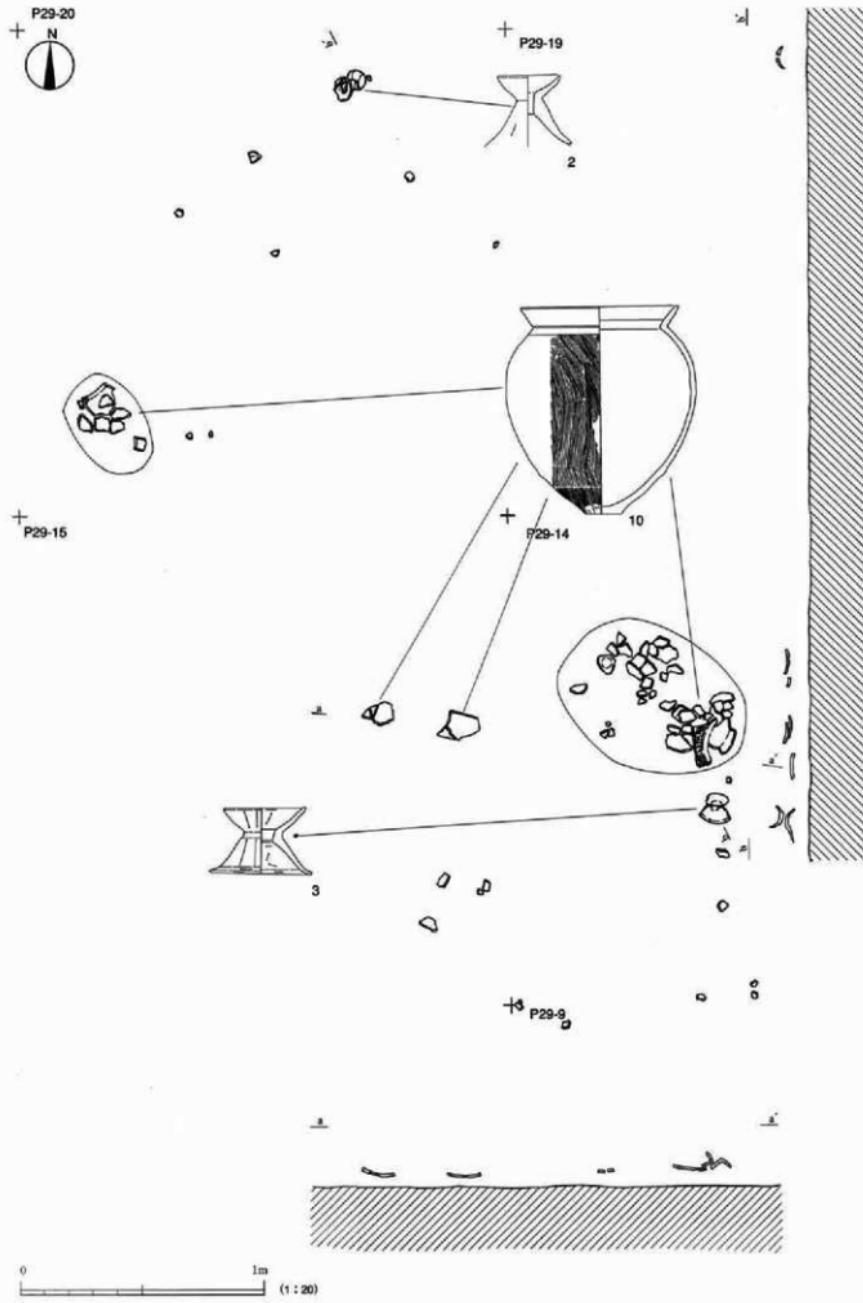
番号	地 点	種 別	材 質	形 態	法 量
334	O.26-20	土器品	土器片	土器片内壁	幅2.5cm 厚0.8cm
335	N.28-14	石 器	砾灰岩	砥 石	現存長3.4cm 現存幅2.6cm 厚0.6cm
336	K.18-22	石 器	砾灰岩	砥 石	現存長5.5cm 現存幅3.2cm 厚2.3cm
337		木 器		板 材	現存長8.7cm 現存幅4.1cm 厚0.7cm
338	M.33-18	木 器		枕	現存長20.2cm 幅5.6cm 厚3.9cm
339		木 器		皮 材	現存長23.8cm 現存幅3.4cm 厚0.2cm
340	L.19-12	木 器		木 圈	現存長13.2cm 現存幅3.4cm 厚0.2cm
341	J.21	鐵 器		刀 子	長13.8cm 幅2.6cm 厚0.5cm
342	L.20-18	鐵 器		不 明	現存長5.5cm 現存幅4.0cm 厚0.4cm
343	S.XII上III	錢 貨		重和元寶	径2.3cm
344a	S.XII上III	錢 貨		元豐通寶	径2.3cm
344b	S.XII上III	錢 貨		元豐通寶	径2.3cm

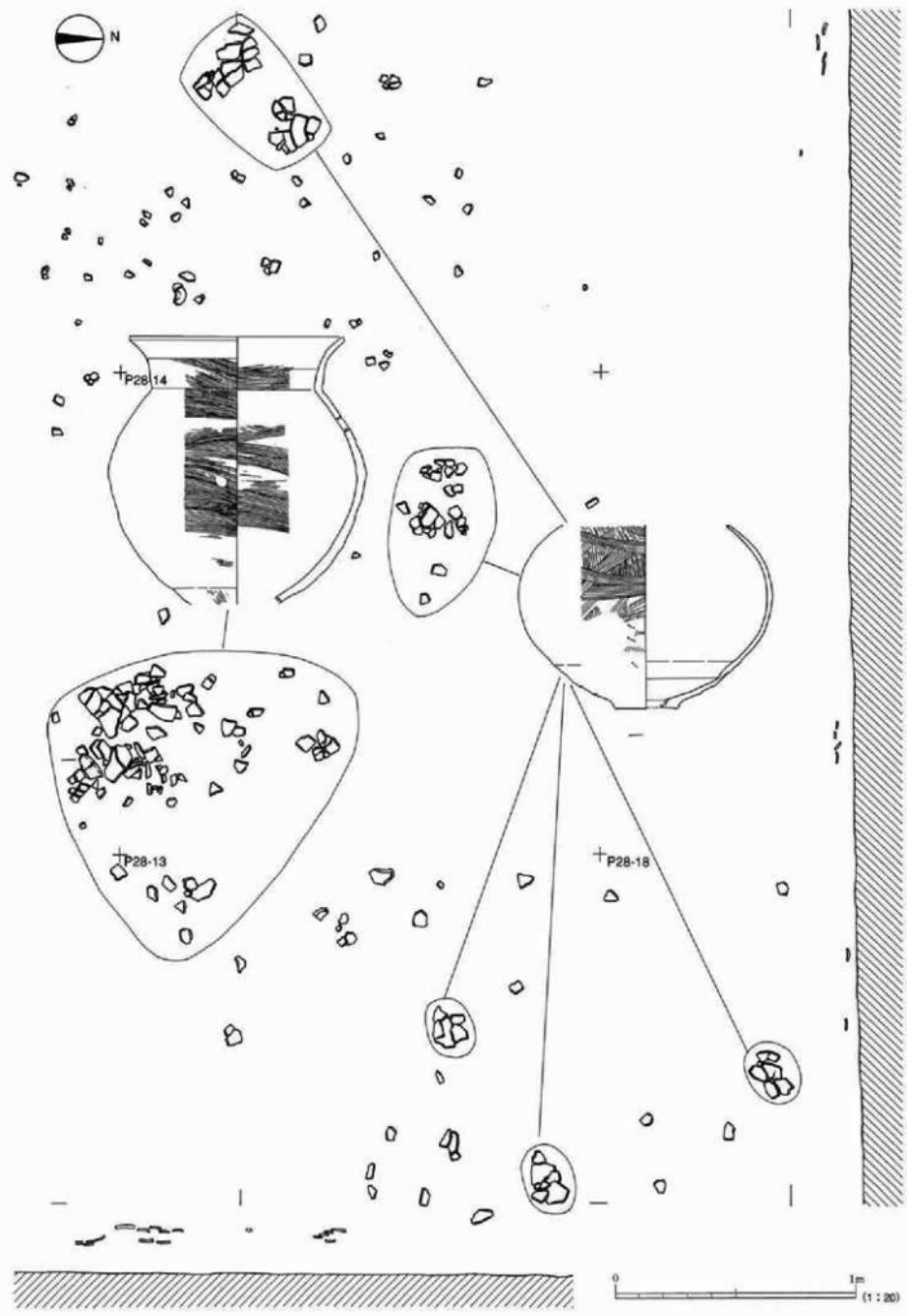
図 版

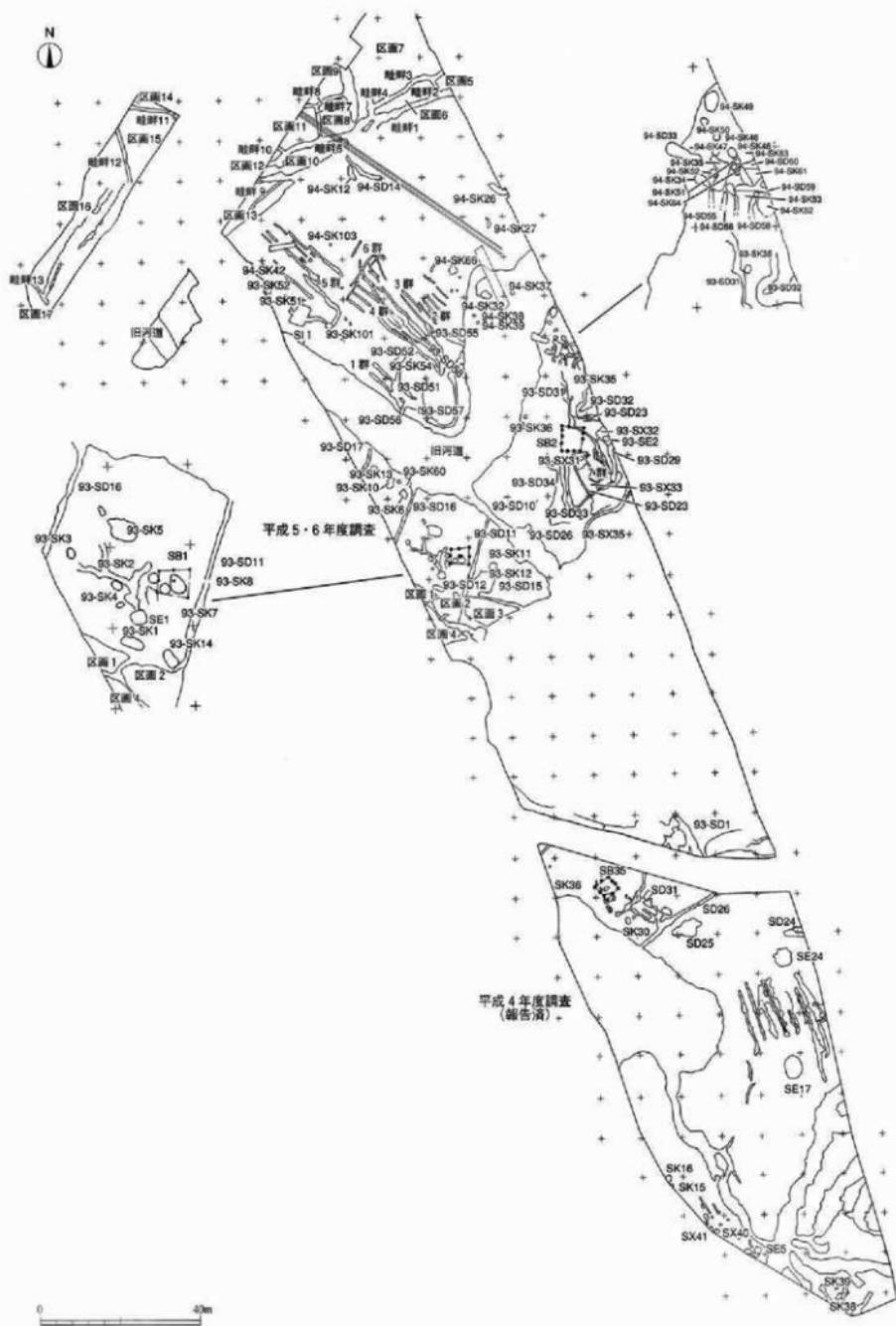
凡 例

- 1 ここにはおもな遺構・遺物の実測図と写真をおさめる。
- 2 遺物は一連番号を付し、写真もこれにしたがった。
- 3 遺物実測図において、口径復元が困難なものは、中心線と外形線を離すか、断面と外形線のみ表示した。
- 4 実測図・写真的縮尺は各図版に示した。

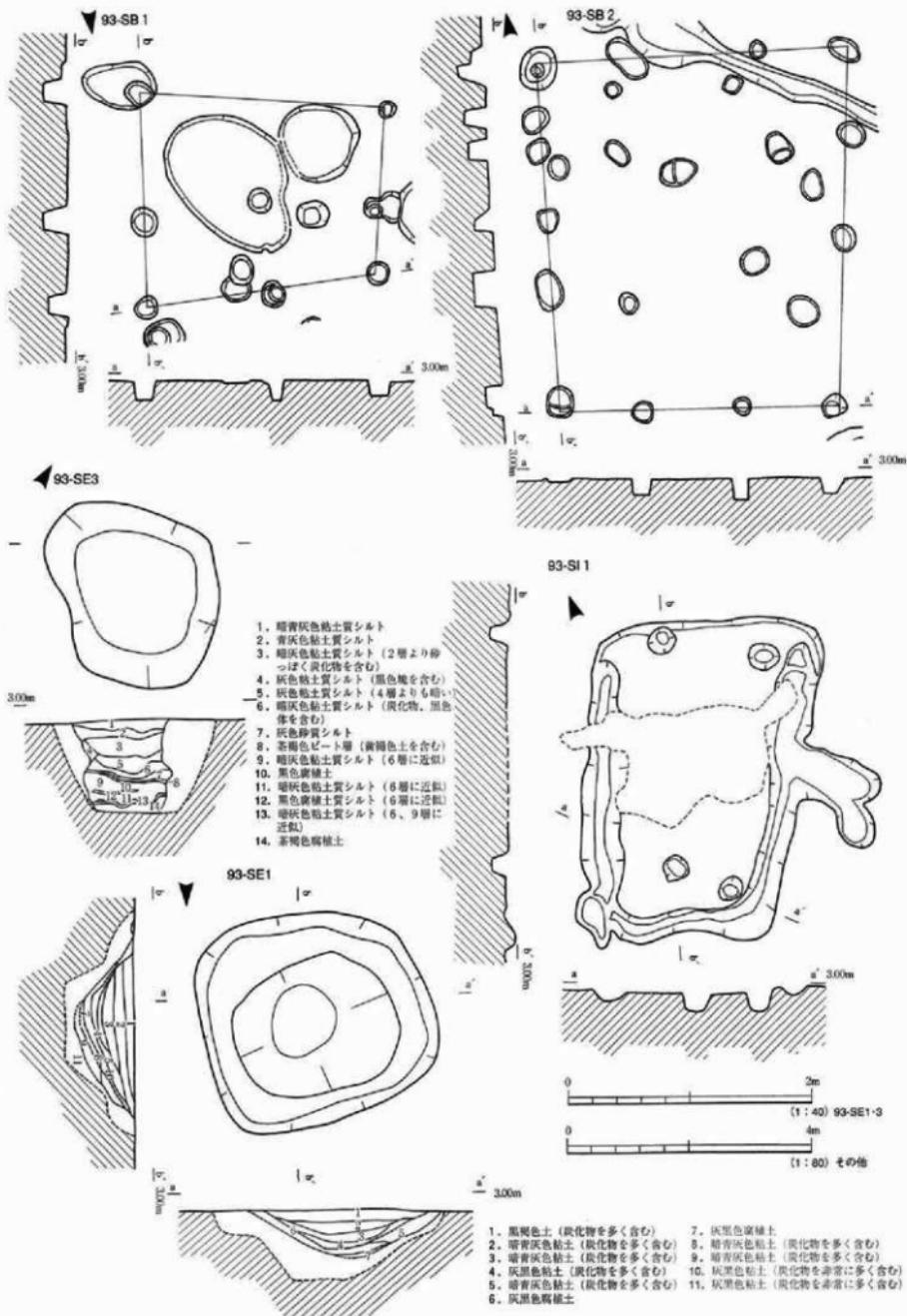


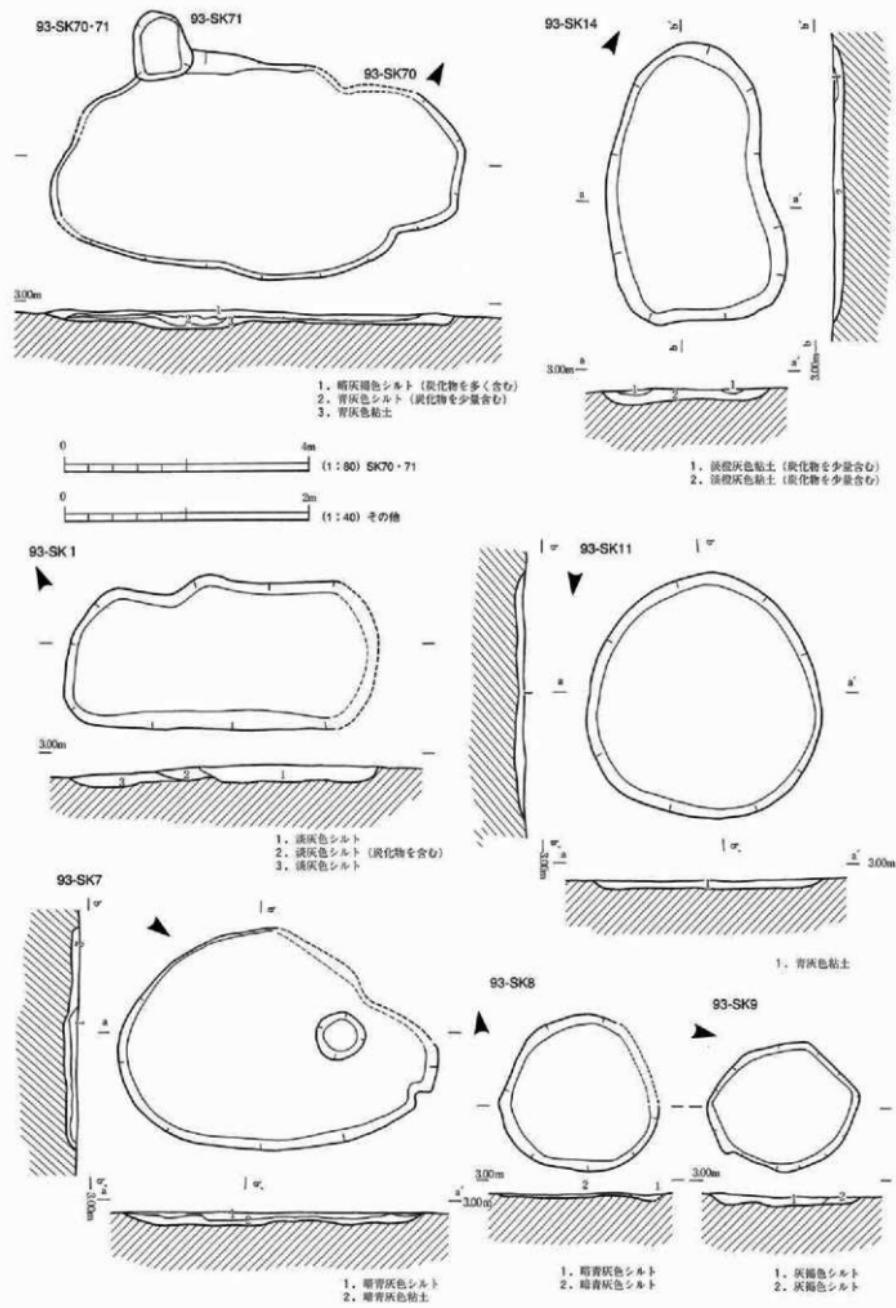


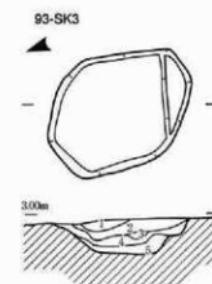
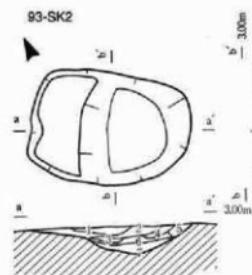
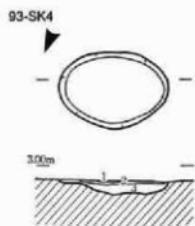




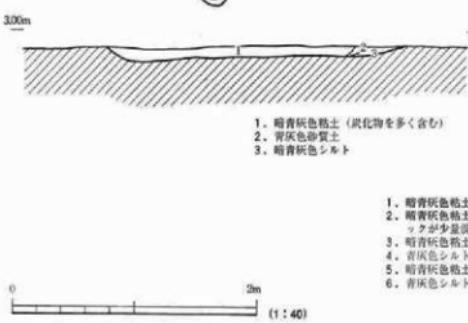
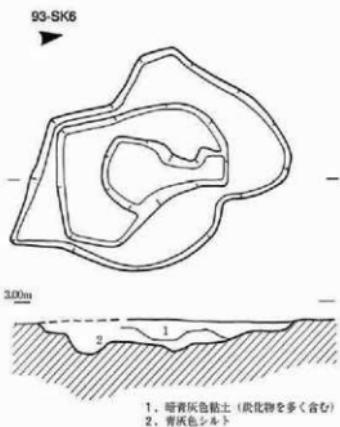
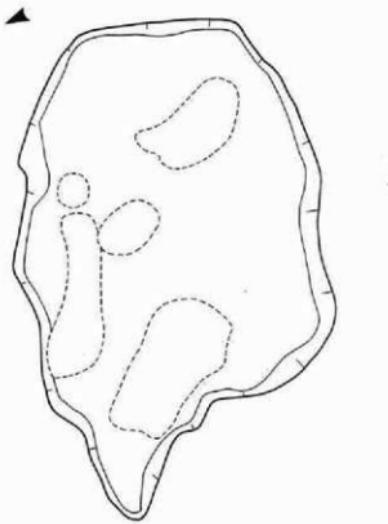


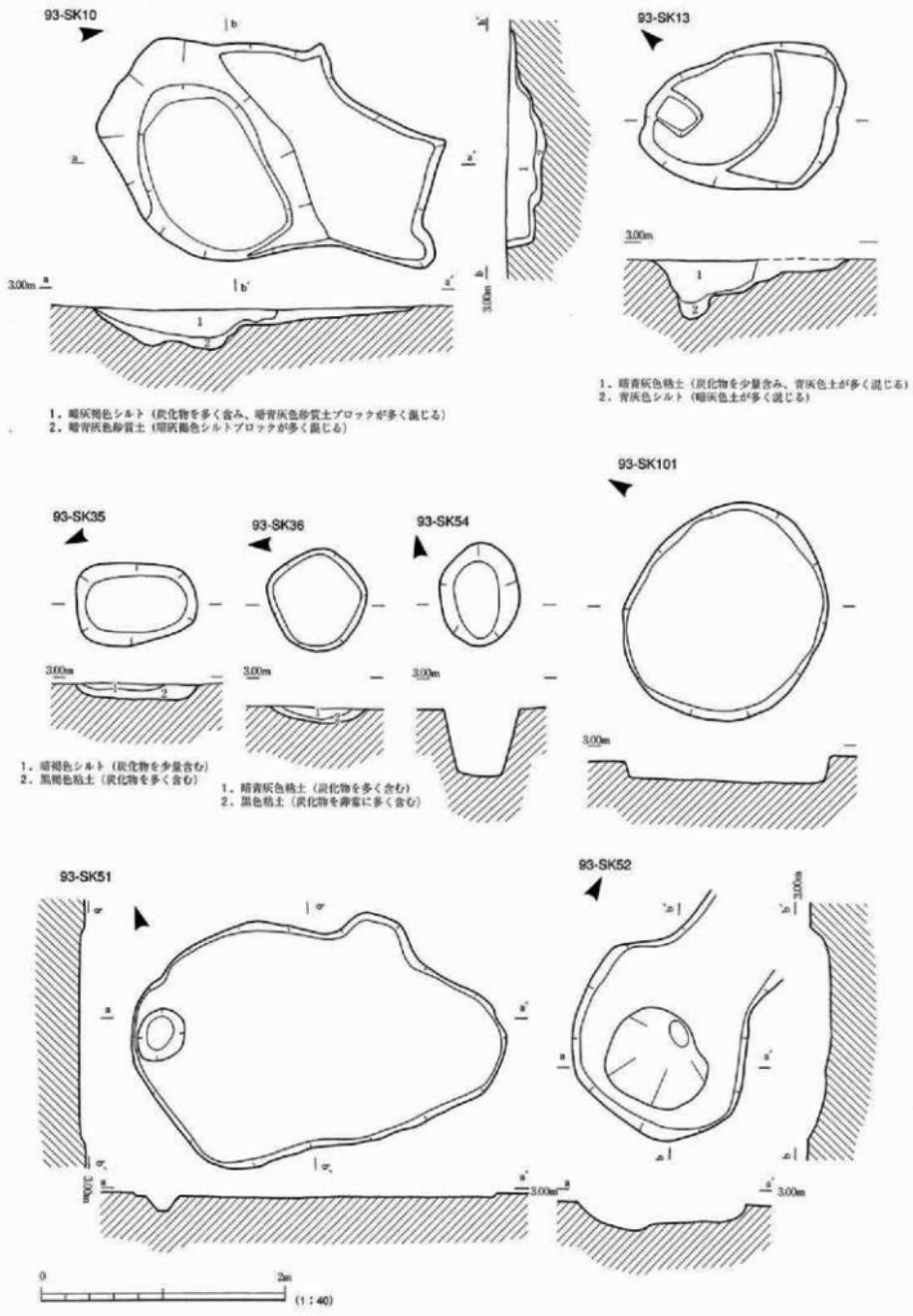


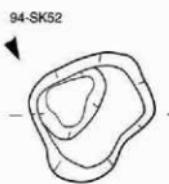
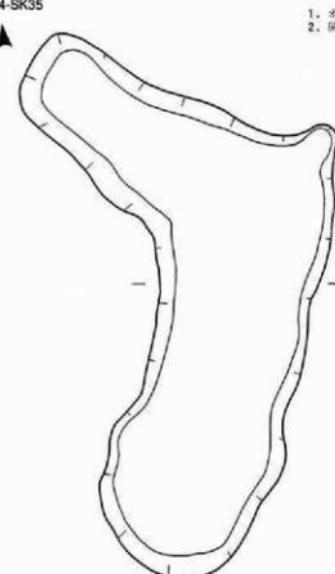
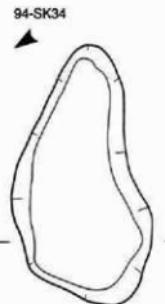
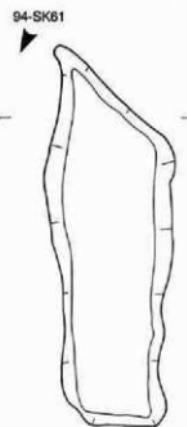
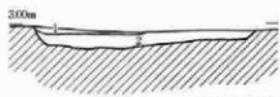
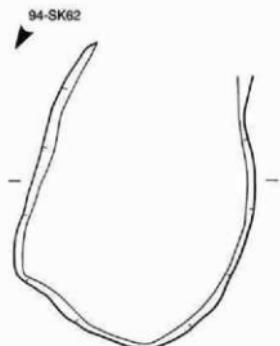




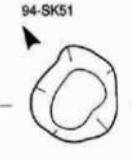
93-SK5



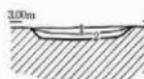
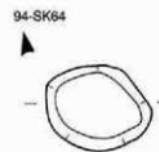




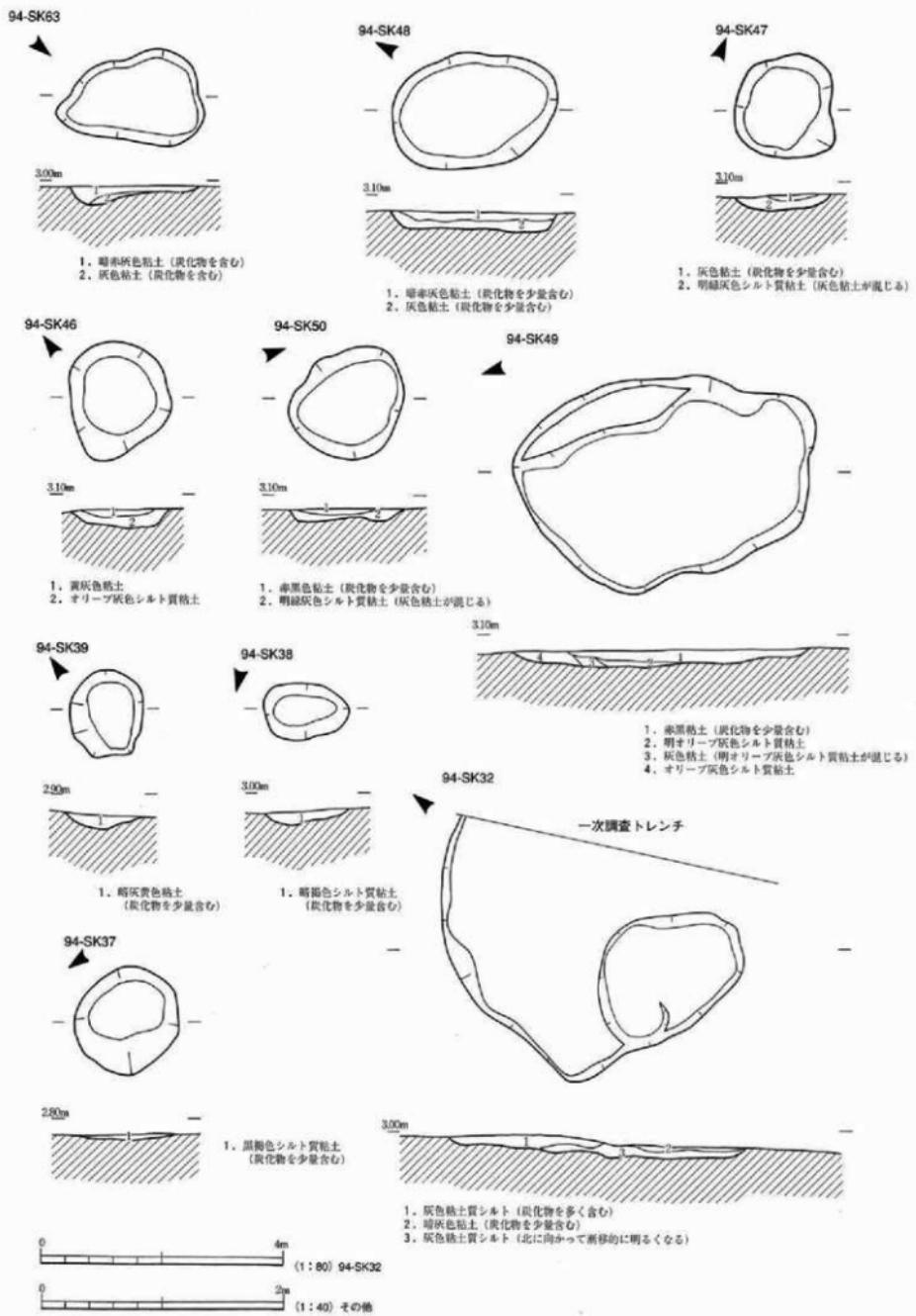
1. 灰オリーブ色シルト質粘土
2. 灰オリーブ色シルト質粘土 (炭化物を多く含む)

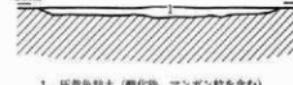
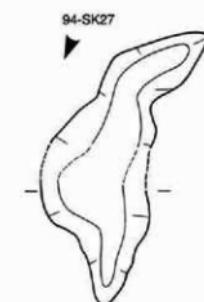
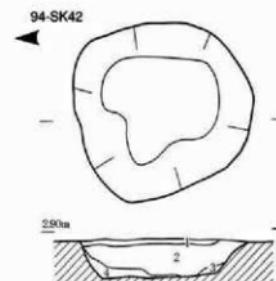
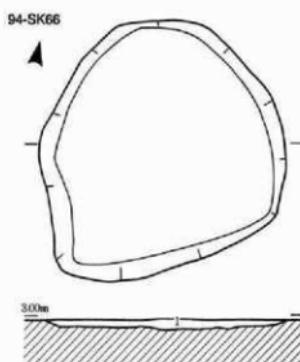


1. 帯赤灰色粘土 (炭化物を含む)
2. 灰色粘土 (オリーブ黑色粘土が少量混じる)



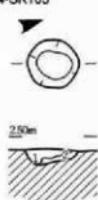
1. オリーブ黑色粘土 (炭化物を多く含む)
2. 灰白色シルト質粘土 (オリーブ黑色粘土が少量混じる)



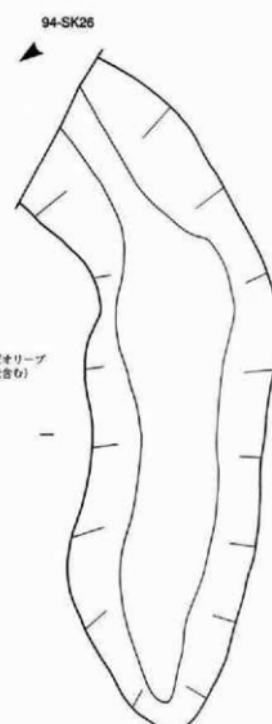


1. 費灰色粘土 (酸化物を少量含む)
2. 細灰黄色粘土 (酸化物を少量含む)
3. 細オリーブ灰色粘土 (酸化物を多く含む)
4. 酸化物層 (酸化物を少量含む)

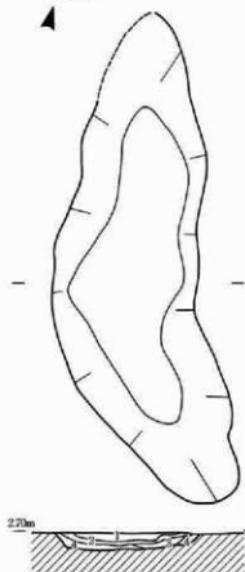
94-SK103



1. 灰オリーブ粘土 (多量の酸化鉄を含んだオリーブ
黒色粘土ブロックが混じり、酸化物を少量含む)
2. 明顯灰黄色粘土 (酸化物を少含む)



94-SK12

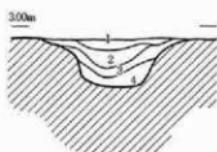
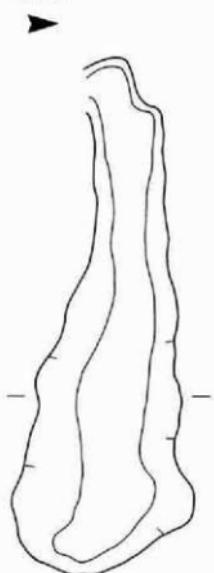


1. 黒褐色シルト質粘土 (酸化物を多く含む)
2. 灰色粘土 (酸化物を少量含む)
3. 灰色粘土 (酸化物を極少量含む)
4. オリーブ灰色粘土 (酸化物を極少量含む)



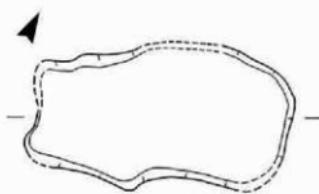
1. 黒褐色シルト質粘土 (酸化物を極少量含む)
2. 細灰黄色シルト質粘土 (酸化物を少量含む)
3. 灰色粘土 (酸化物を含む)

93-SX31



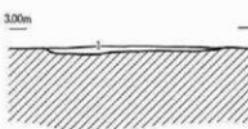
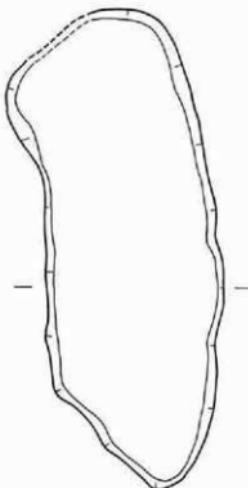
1. 黒褐色粘土 (5mm前後の炭化物を多量に含む)
2. 黑褐色粘土 (5mm前後の炭化物を多量に含む
1より暗い)
3. ピート層
4. 墓葬灰色粘土

93-SX33



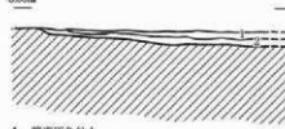
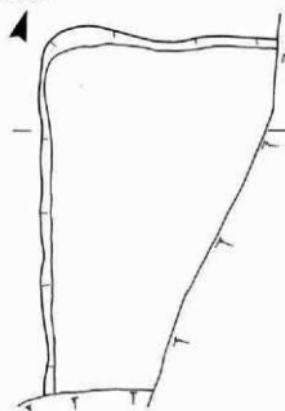
1. 黒褐色粘土
2. 黑褐色粘土 (青灰色シルトブロックが混じる)

93-SX34



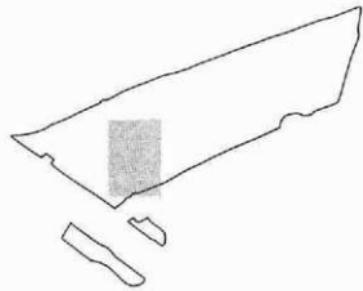
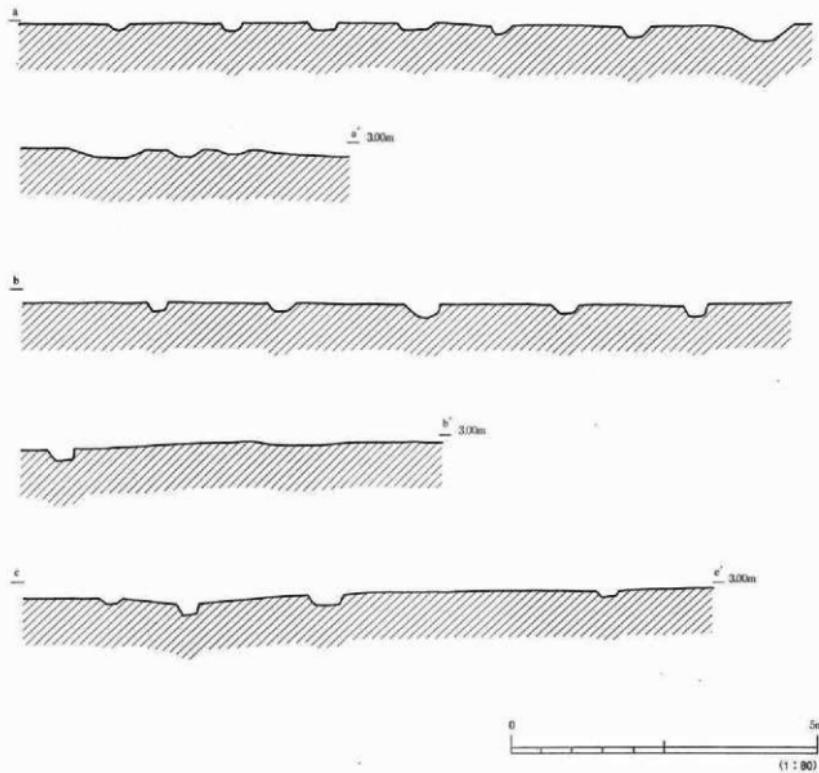
1. 墓葬灰色シルト (1~2mmの炭化物が少量混じる)

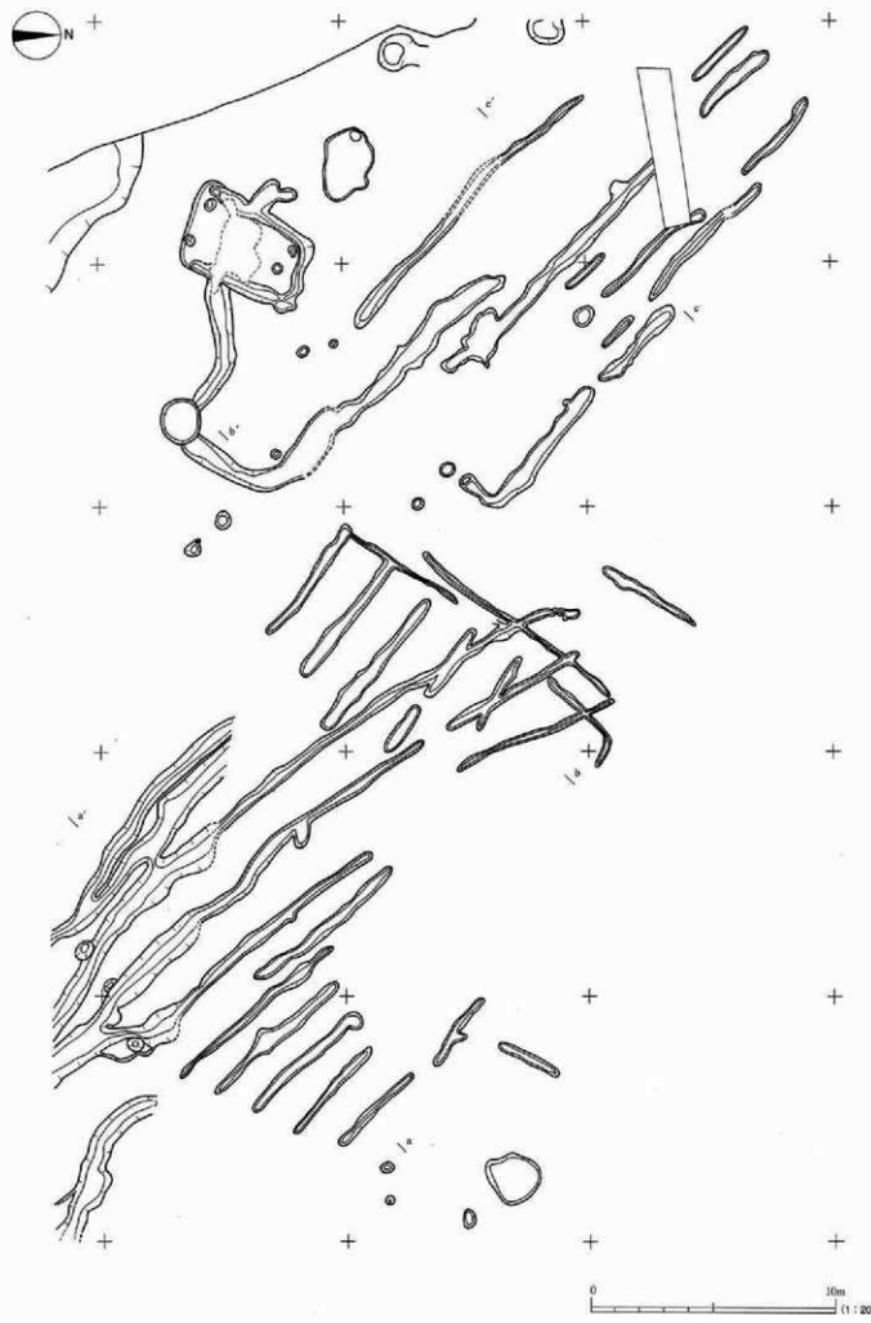
93-SX32

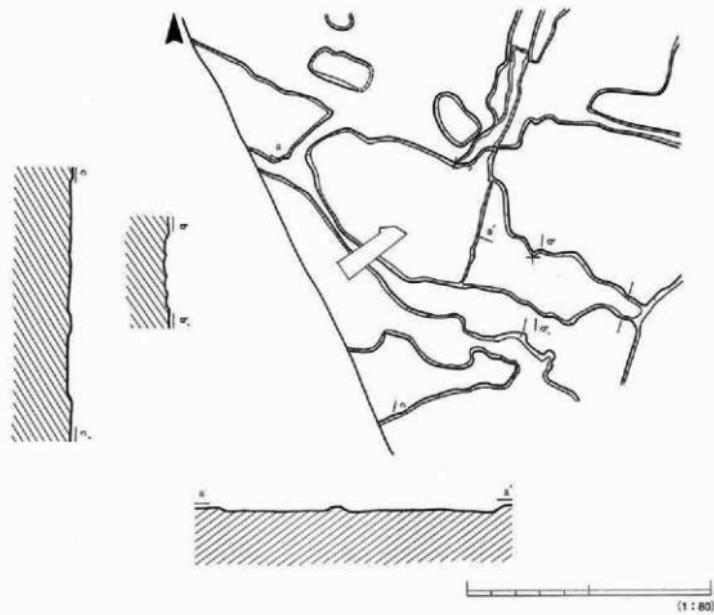
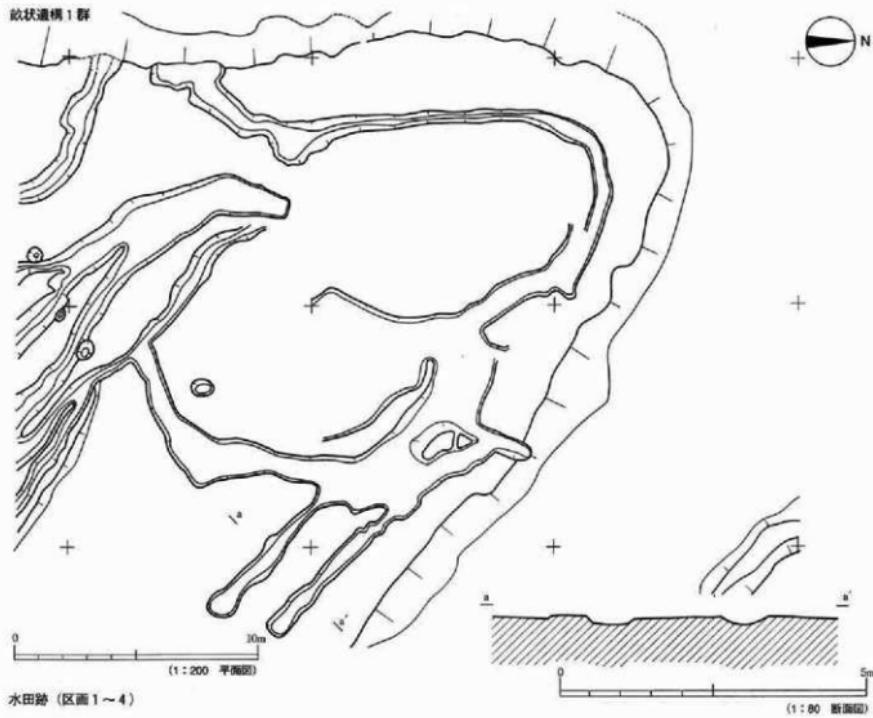


1. 墓葬灰褐色粘土
2. 墓葬灰褐色粘土 (1に比~3暗い)

0 2m (1:40)

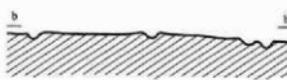


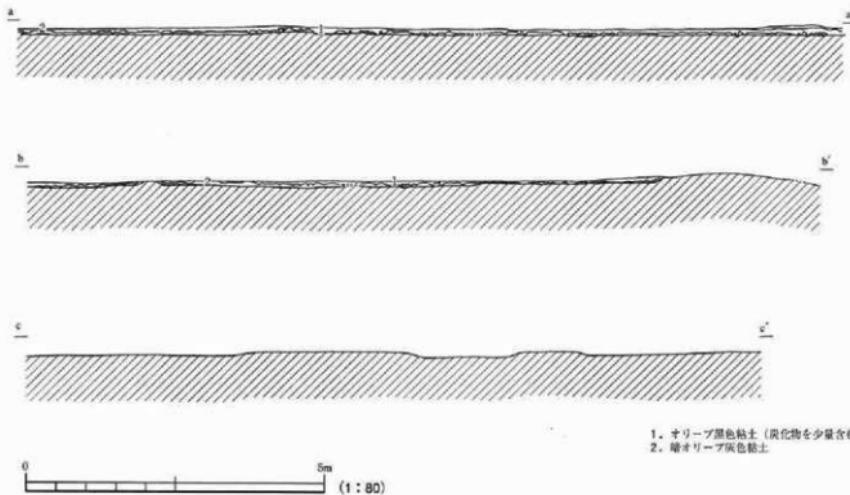


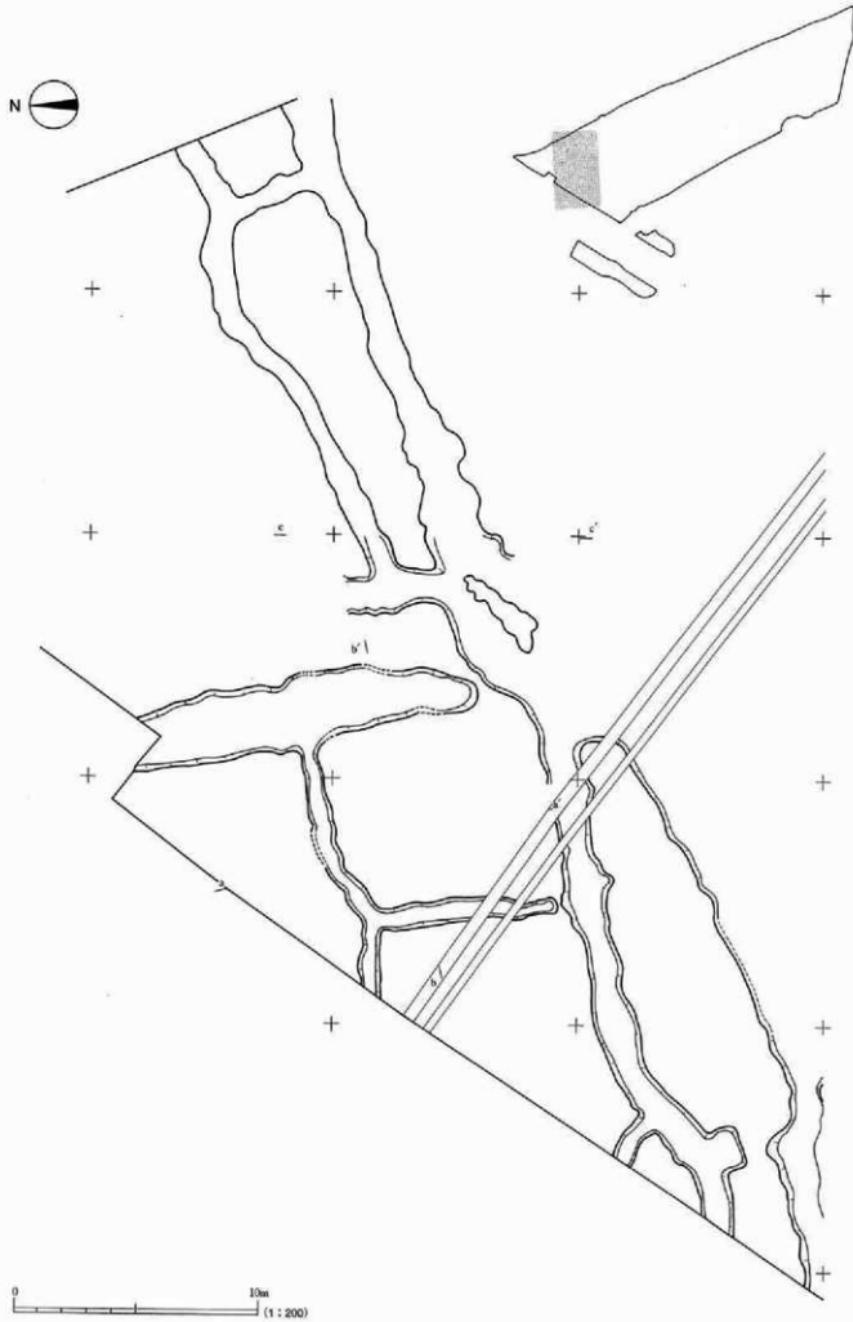


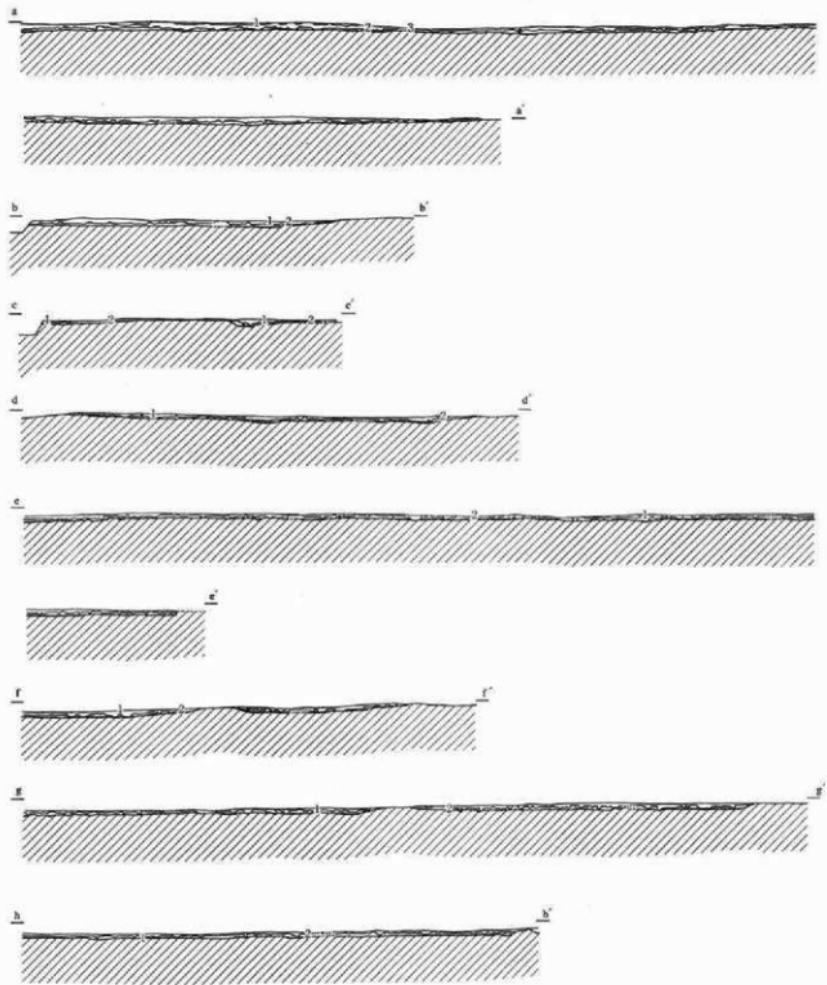


A

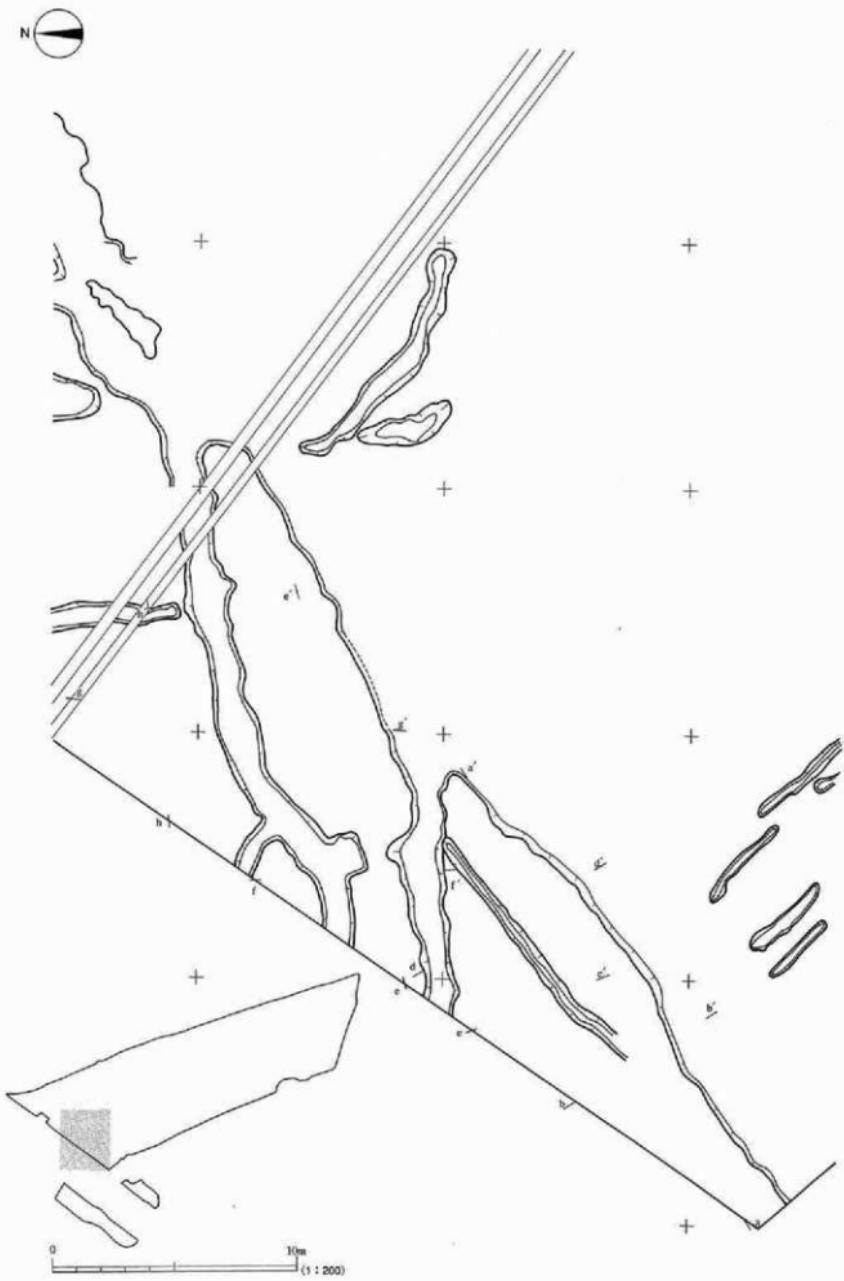


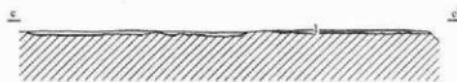




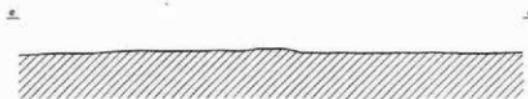


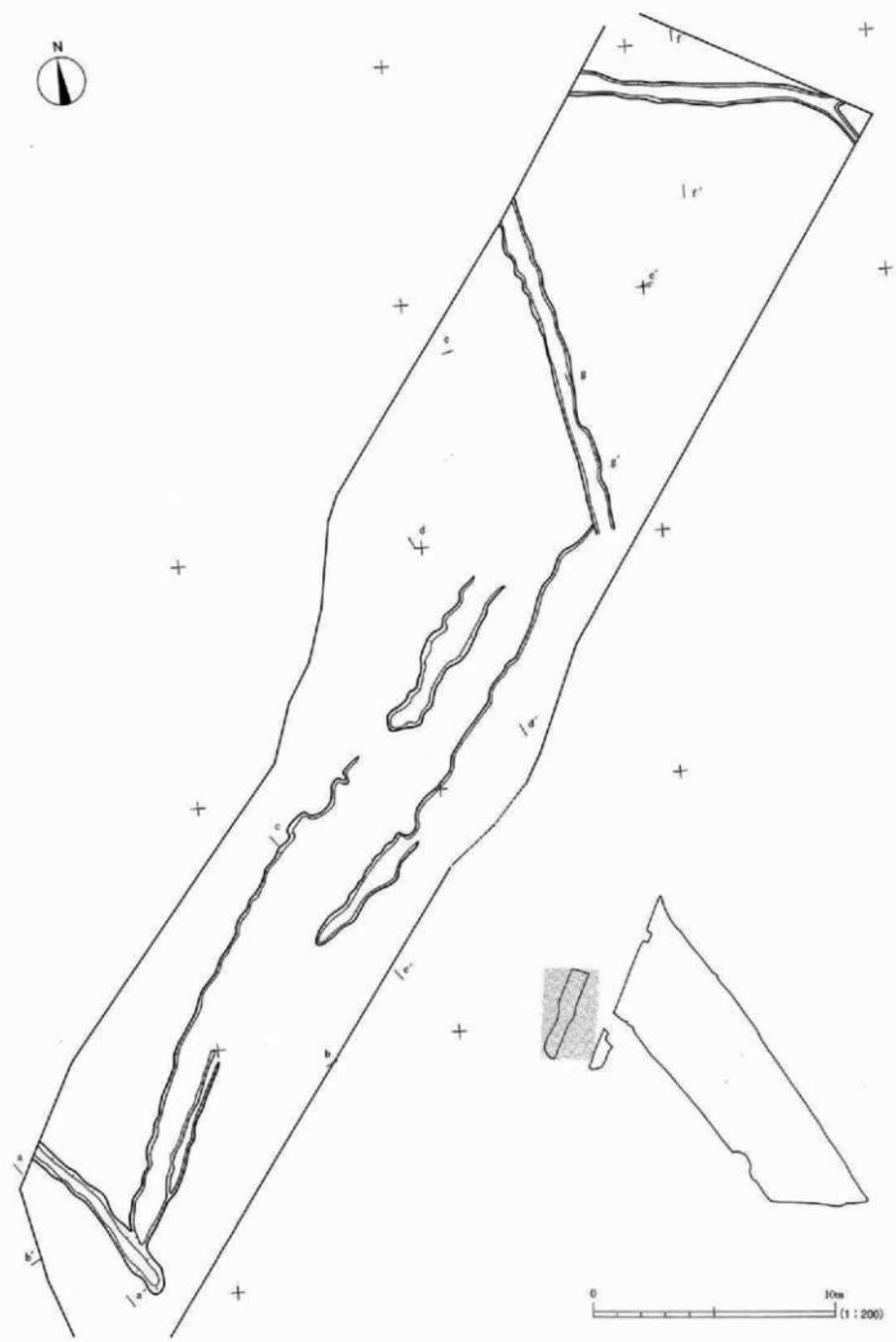
1. オリーブ褐色粘土(鉄化物を少含む)
2. 暗オリーブ褐色粘土

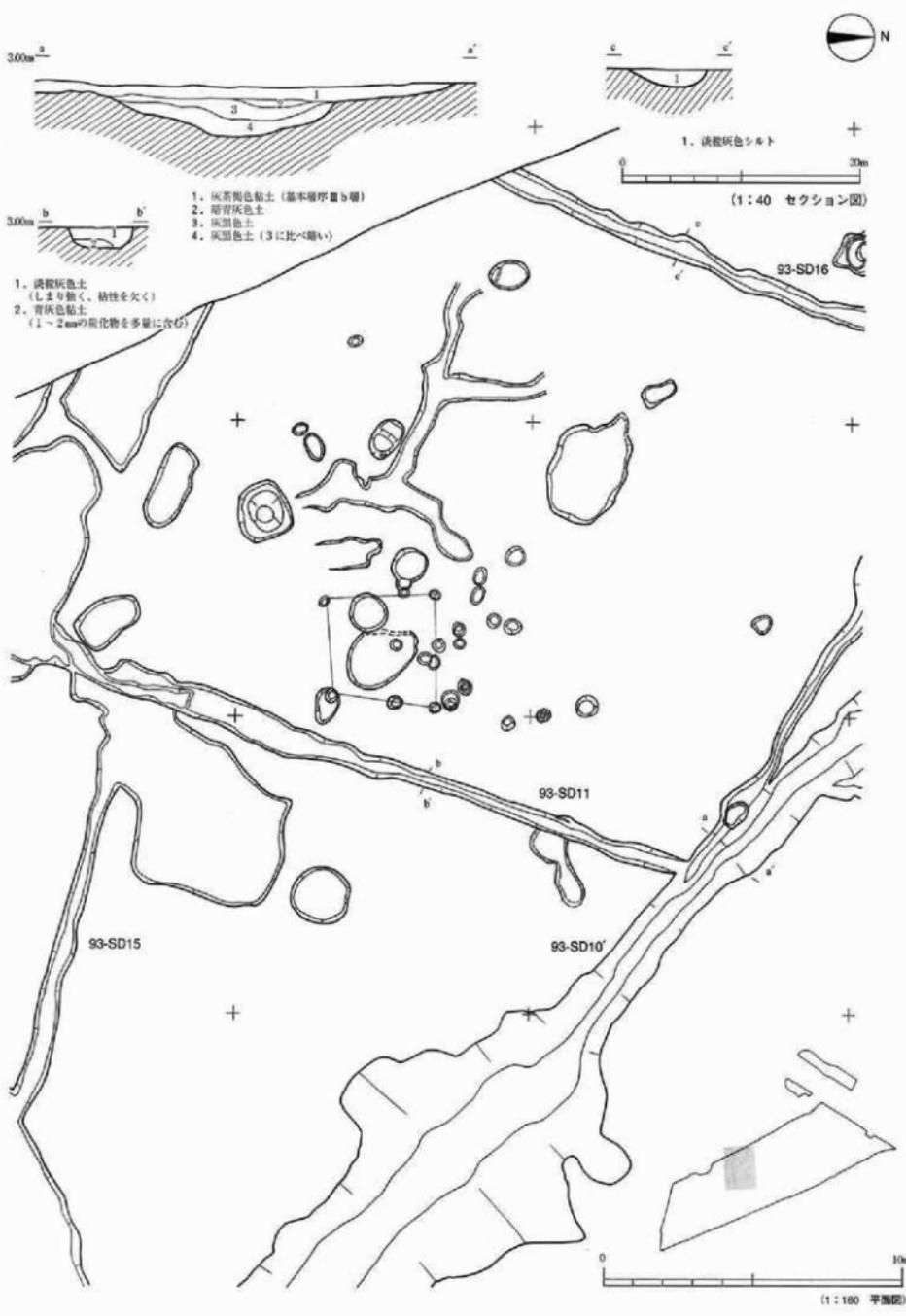


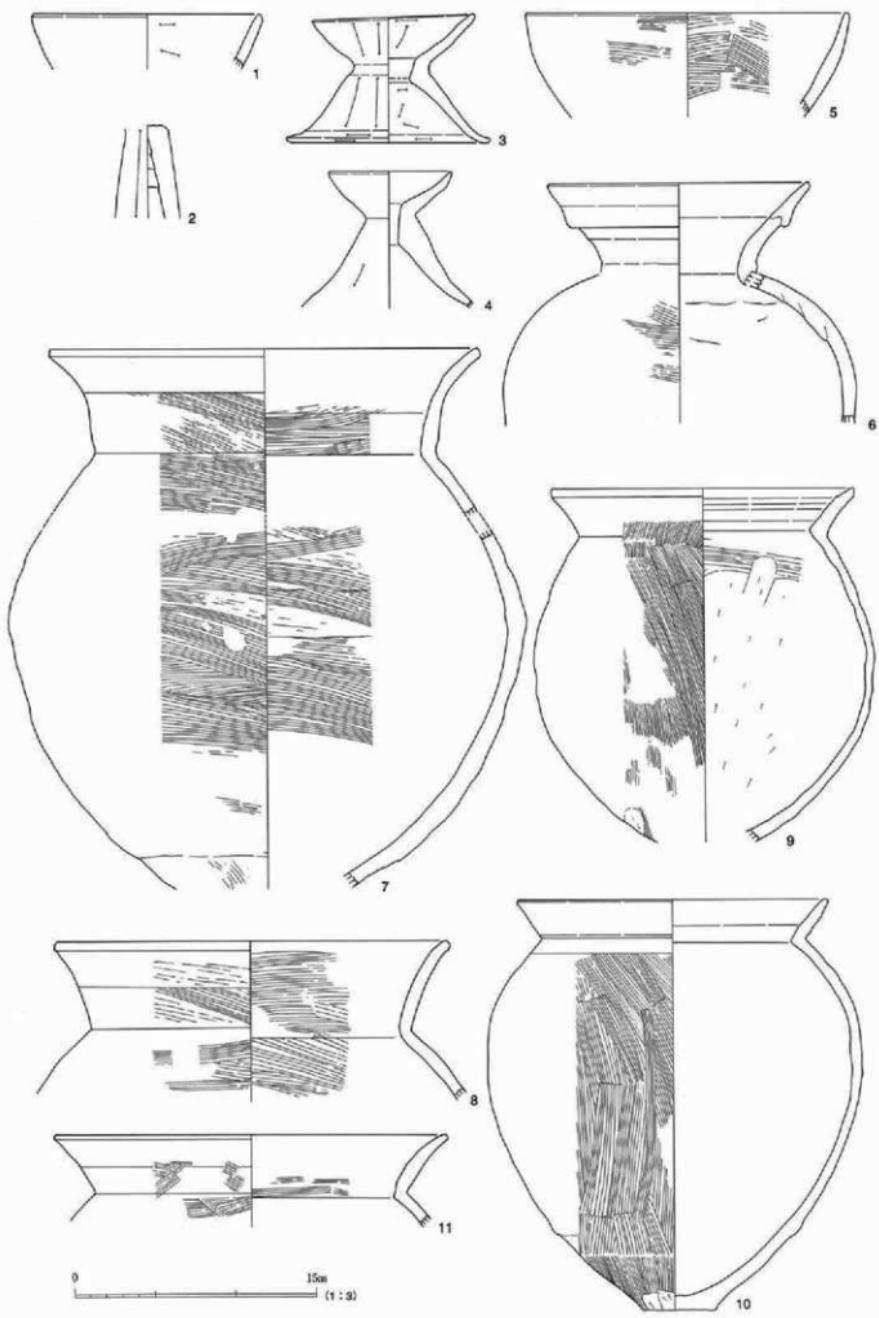


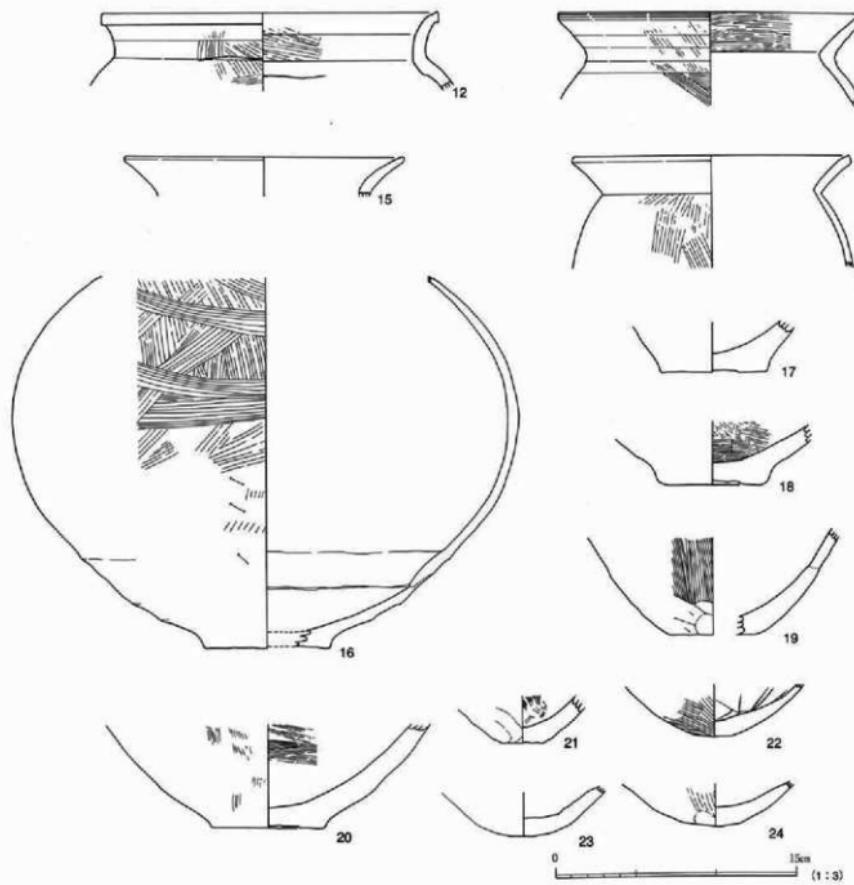
1. オリーブ黒色粘土 (炭化物を少量含む)
2. 喬オリーブ灰色粘土

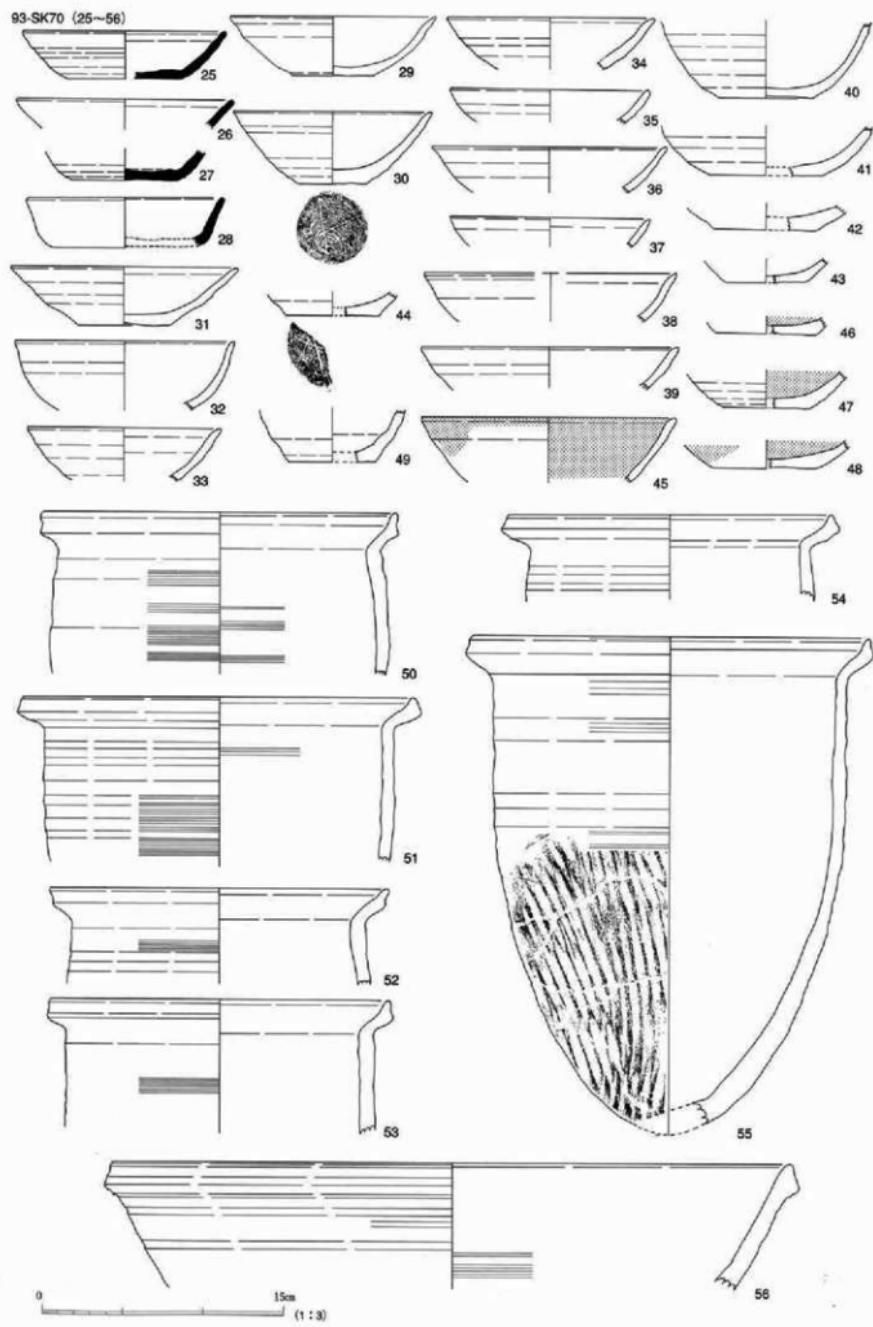




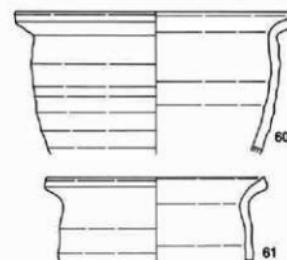
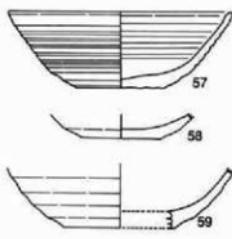




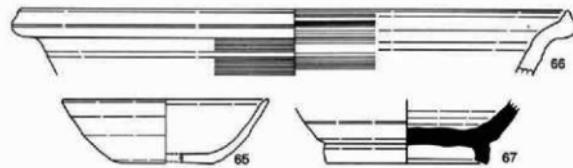
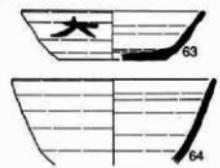




93-SI2 (57~62)

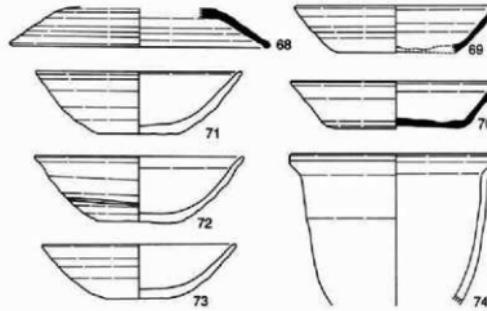


93-SE1 (63~67)

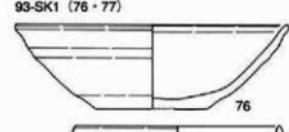
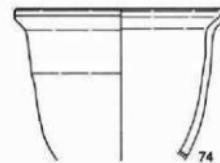


0 15cm (1:3)

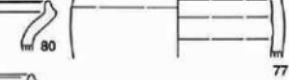
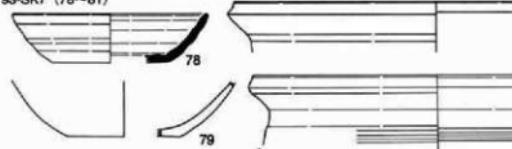
93-SK5 (68~75)



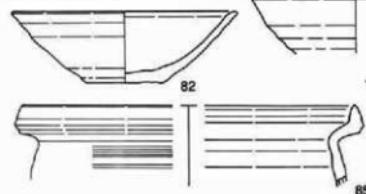
93-SK1 (76~77)



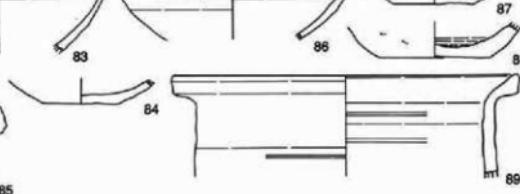
93-SK7 (78~81)



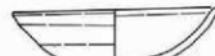
94-SK32 (82~84)



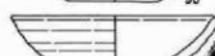
93-SK3 (86~89)



93-SK101 (90~92)



90



91

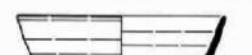


92

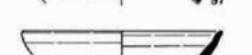
93-SX32 (96~104)



96



97

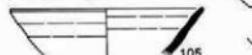


98



平

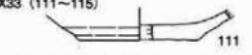
93-SX34 (105~110)



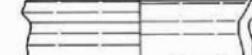
105



106



107

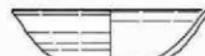


108

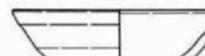


109

93-SX31 (93~95)



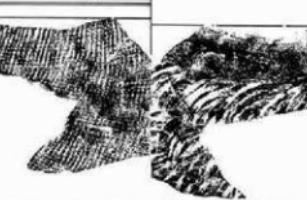
93



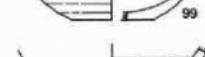
94



95



99



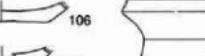
100



101



102

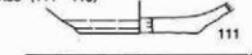


103

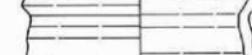


104

93-SX33 (111~115)



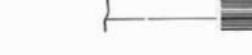
111



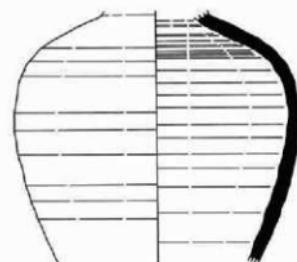
112



113



114



115

93-SX50 (116~118)



116



117

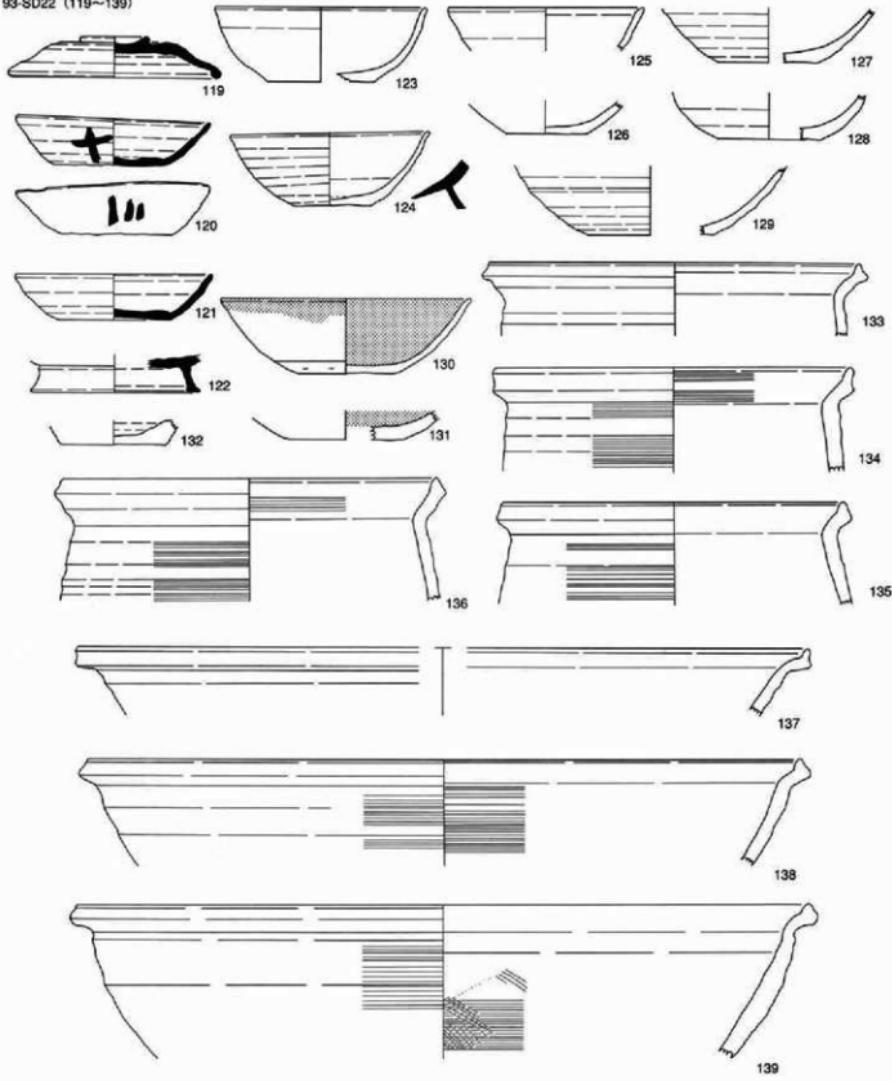


118

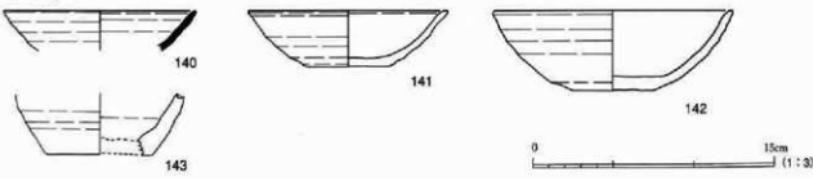
0

15cm
(1:3)

93-SD22 (119~139)

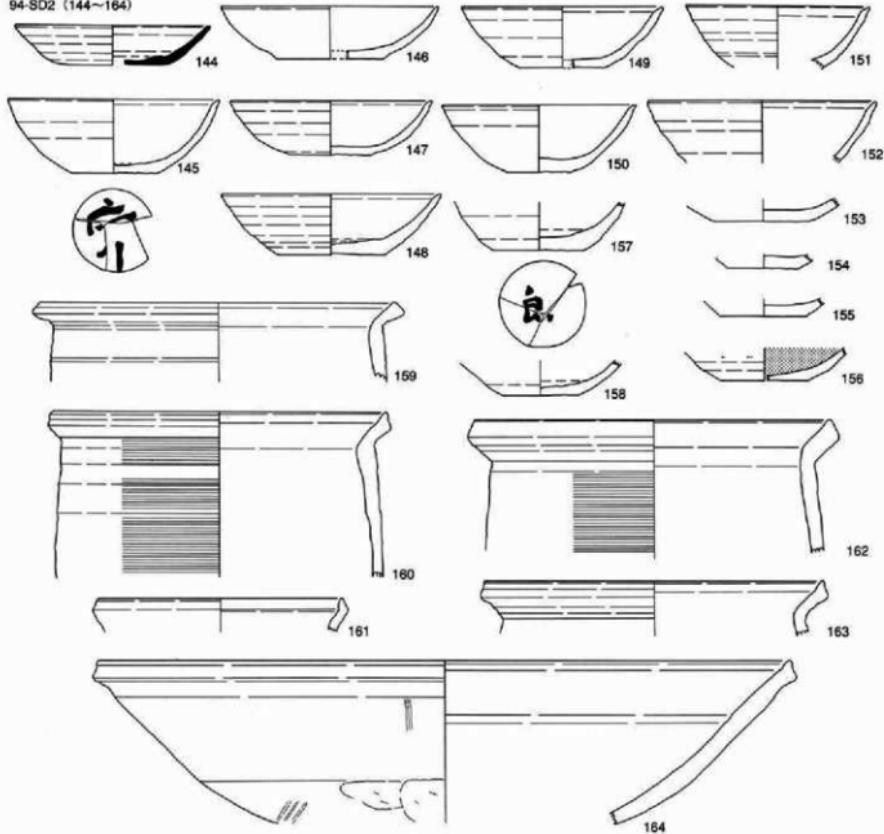


94-SD35 (140~143)

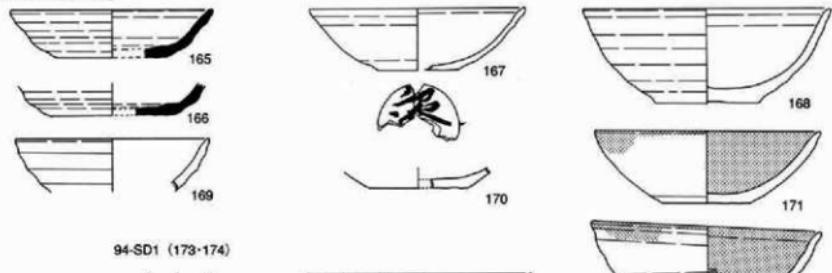


0 15cm
(1:3)

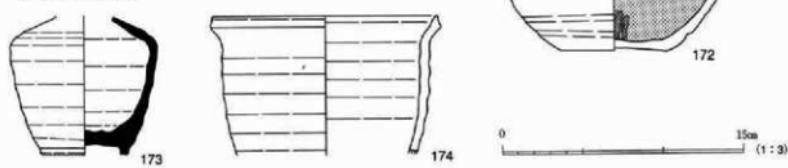
94-SD2 (144~164)



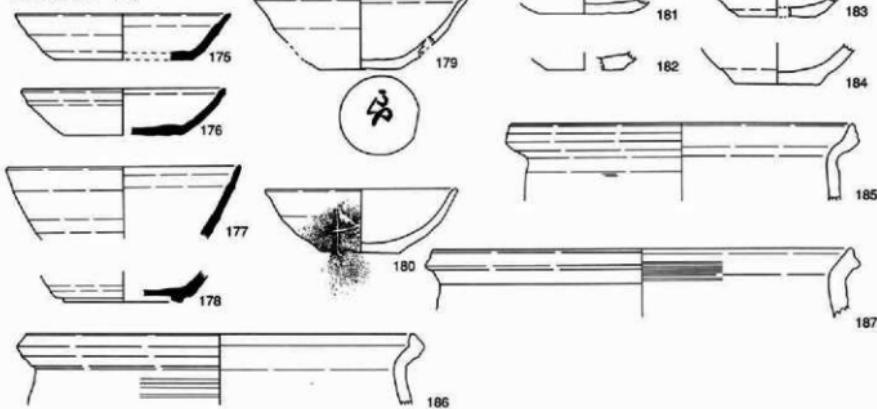
94-SD6 (165~172)



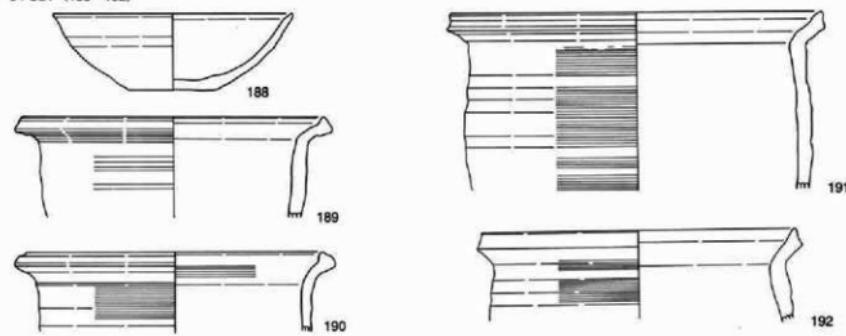
94-SD1 (173-174)



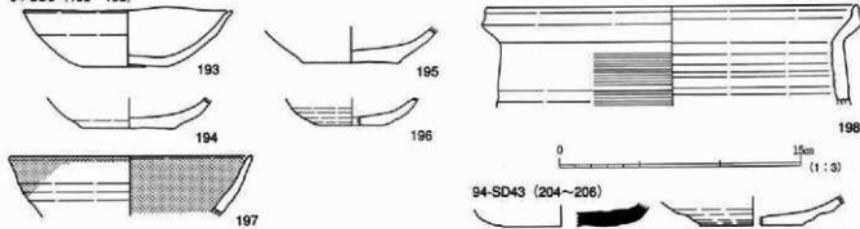
93-SD30 (175~187)



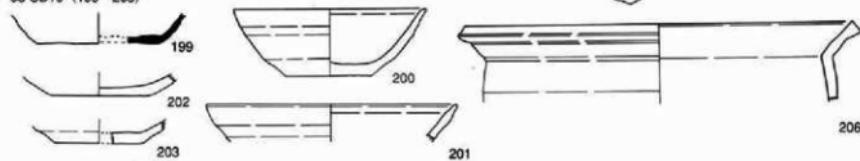
94-SD7 (188~192)



94-SD5 (193~198)



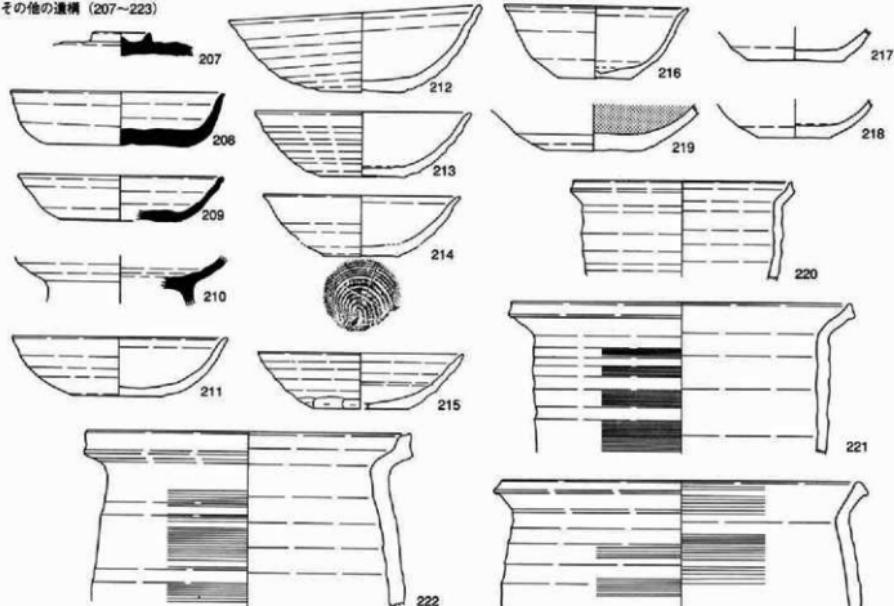
93-SD10' (199~203)



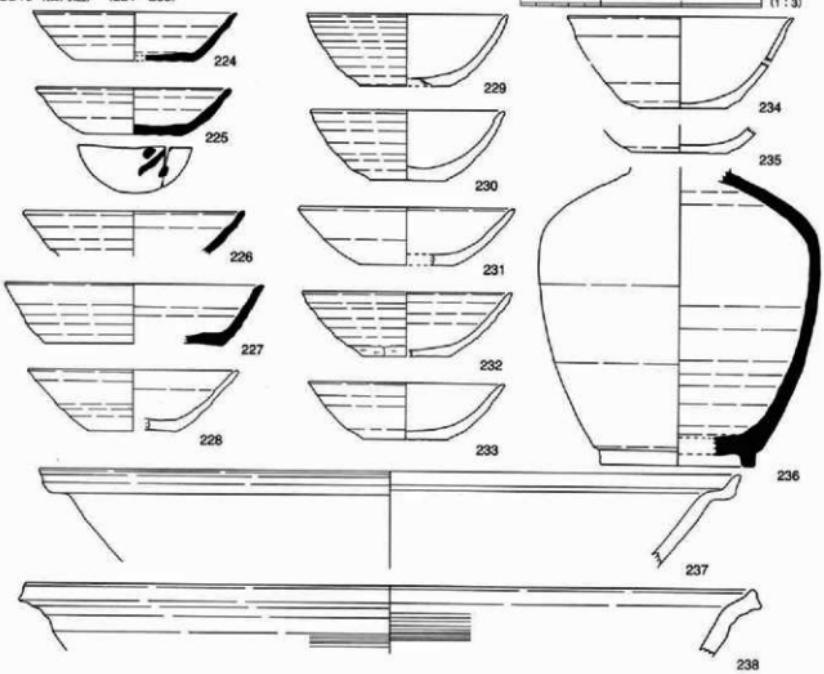
94-SD43 (204~206)



その他の遺構 (207~223)

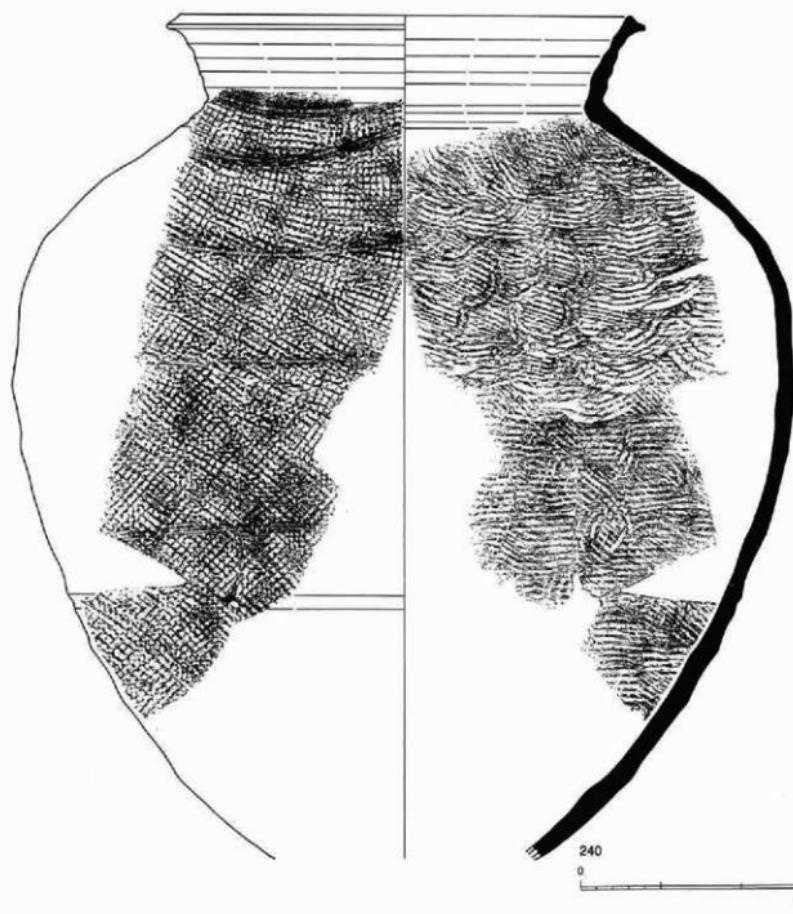
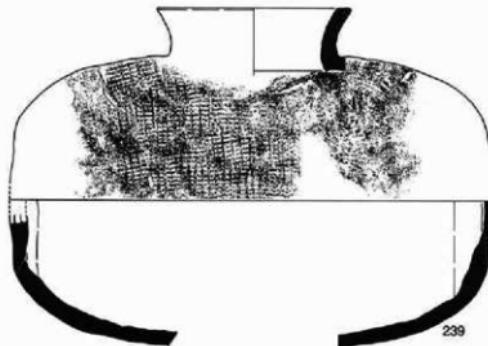


SD10 (旧河道) (224~238)

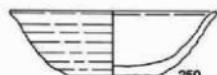
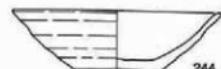
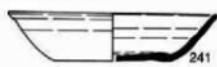


0

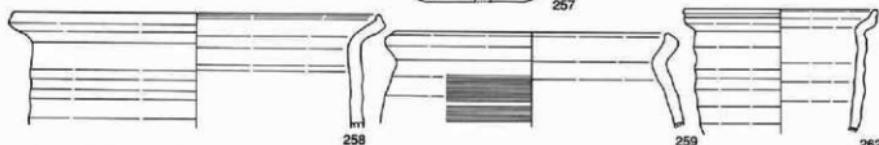
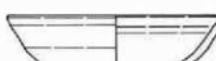
15km
(1:3)



水田跡 (241~252)



L26-6・7・11・12土器ダマリ (253~264)

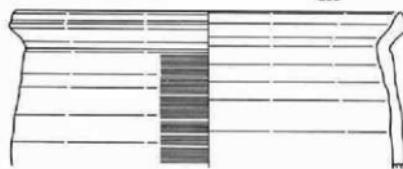


257

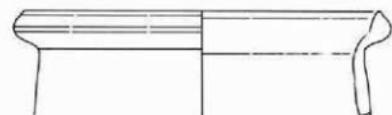


259

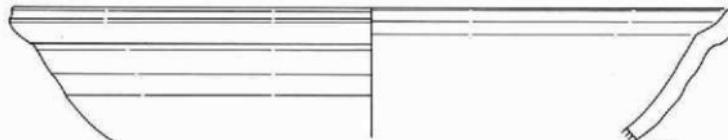
262



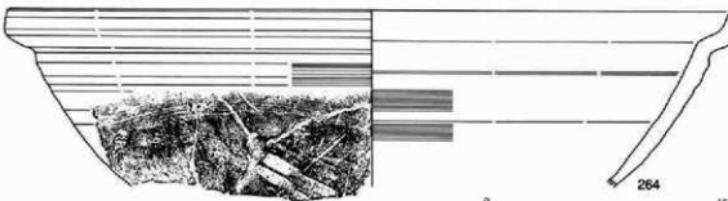
260



261

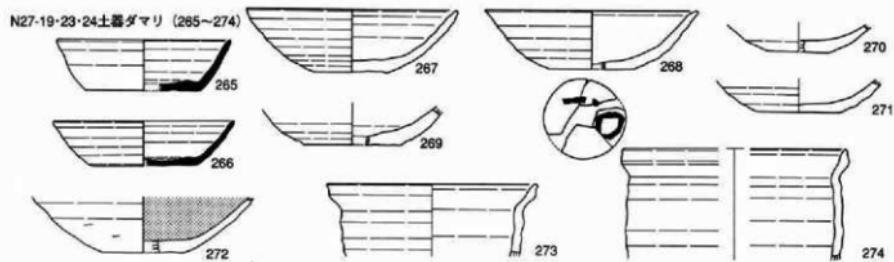


263

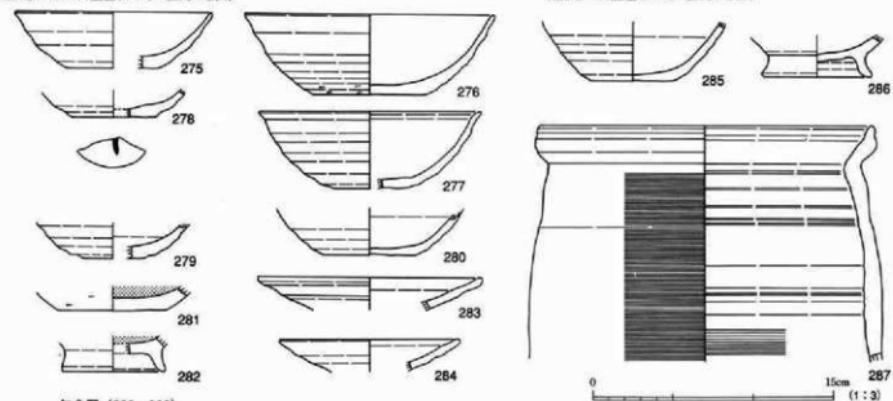


264

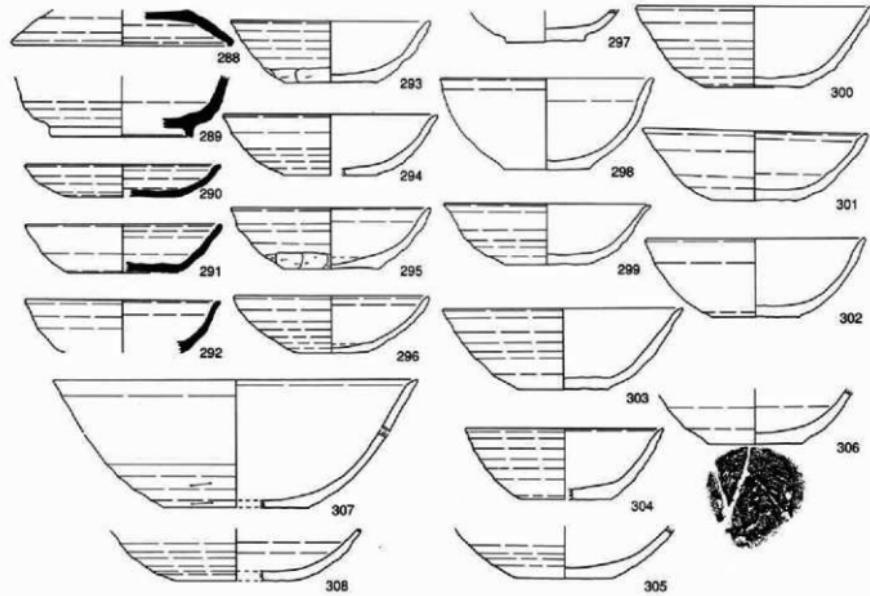
0 15cm
(1 : 3)

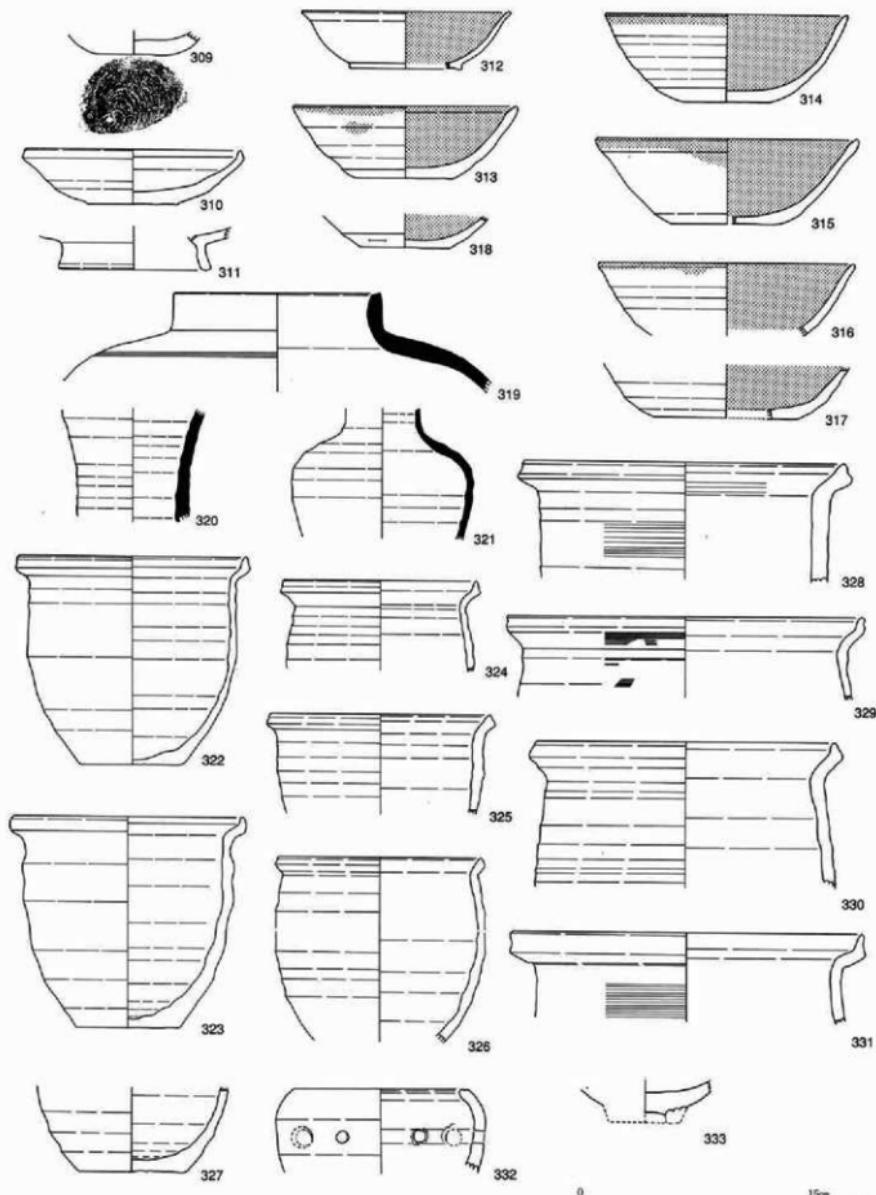


K27-8・11~14土器ダマリ (275~284)



包含層 (288~308)



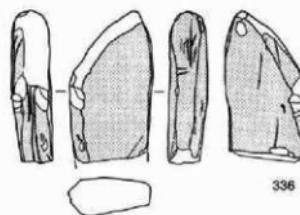




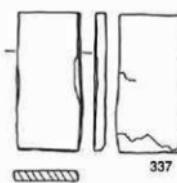
334



335



336



337



338



339



340



341



342



343



344

0 1:3 15cm
(334-342)

0 1:2 15cm
(343-344)



1. 造路俯瞰（北西から）



2. 平成 6 年度調査区全景（上空から）



3. 旧河道（SD10）
土層断面（南西から）



1. 平成5年度調査
区全景（上空から）



2. 畦畔検出状況
(南西から)



3. 基本層序





1. 93-SB 1 (北から)



2. 93-SB 2 (東から)



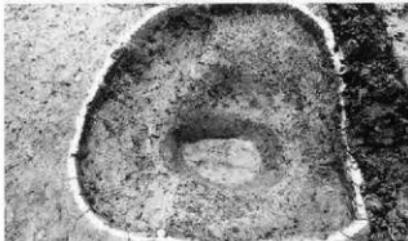
3. 93-SI 1 (南西から)

1. 93-SE1 完掘

(東から)

2. 93-SE1 土層断

面 (東から)



3. 93-SE3 完掘

(南から)

4. 93-SE3 土層断

面 (南から)



5. 93-SK70 完掘

(南東から)

6. 93-SK71 土層

断面 (北西から)

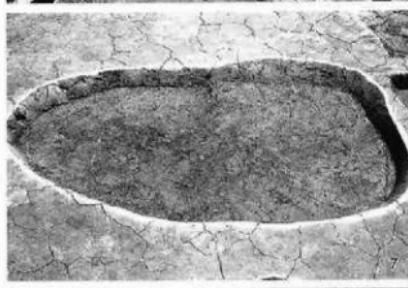


7. 93-SK14 完掘

(東から)

8. 93-SK14 土層

断面 (東から)

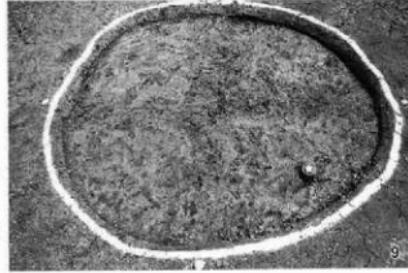


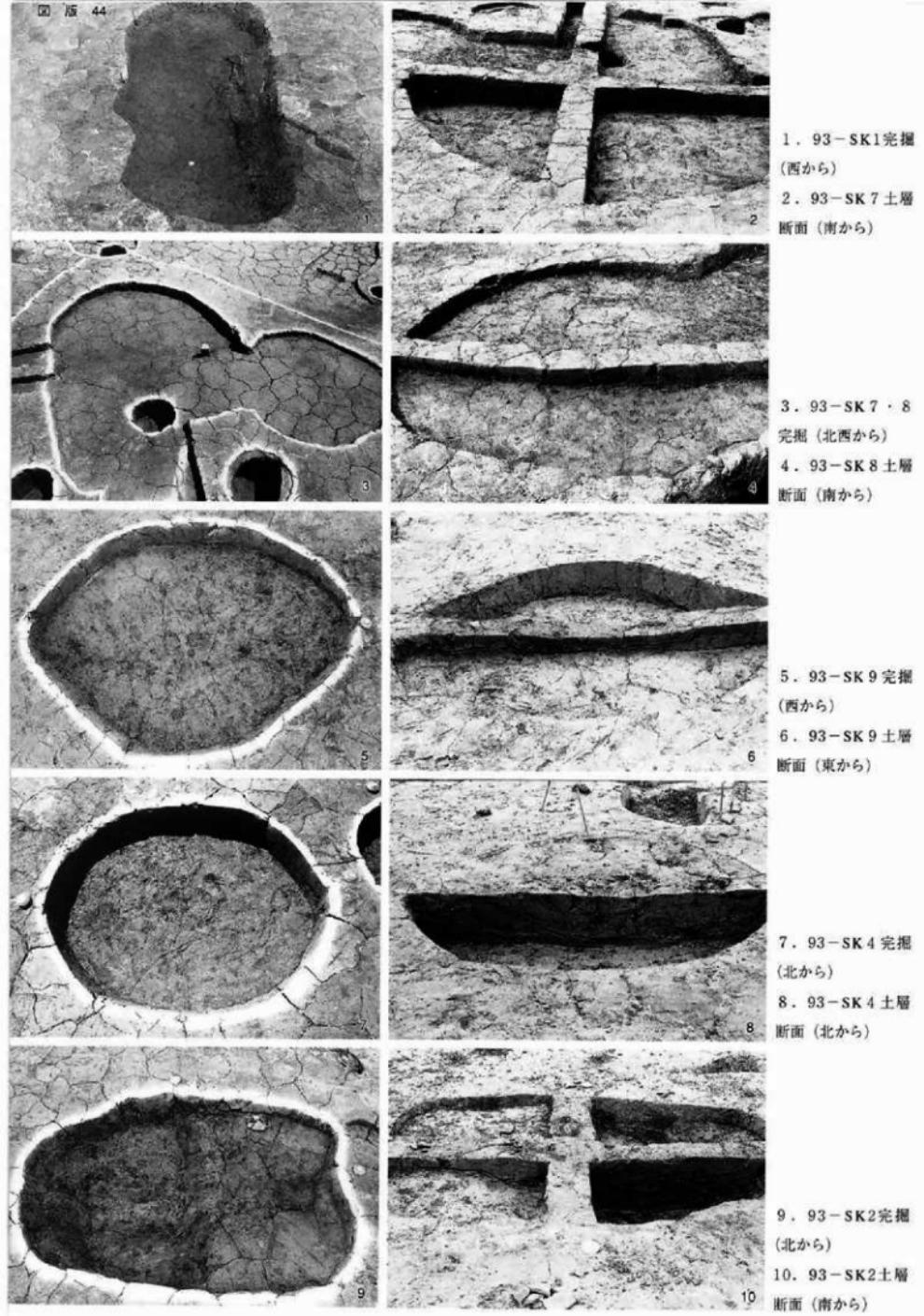
9. 93-SK11 完掘

(北から)

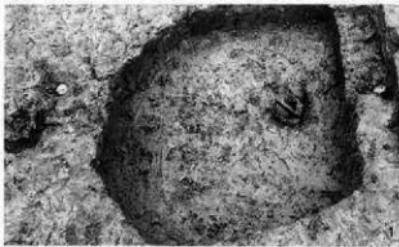
10. 93-SK11 土層

断面 (南から)





1. 93-SK 3 完掘
(西から)



2. 93-SK 3 土層
断面 (西から)



3. 93-SK 5 完掘
(東から)



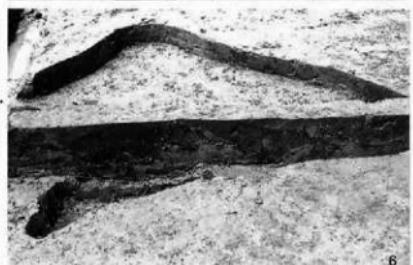
4. 93-SK 5 土器
出土状況 (西から)



5. 93-SK 6 完掘
(西から)



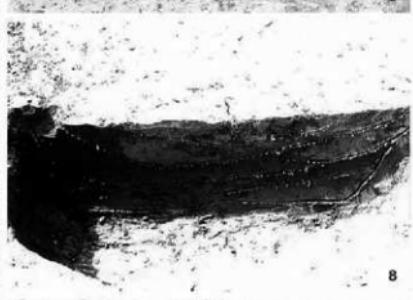
6. 93-SK 6 土層
断面 (東から)



7. 93-SK 60 完掘
(東から)



8. 93-SK 60 土層
断面 (東から)

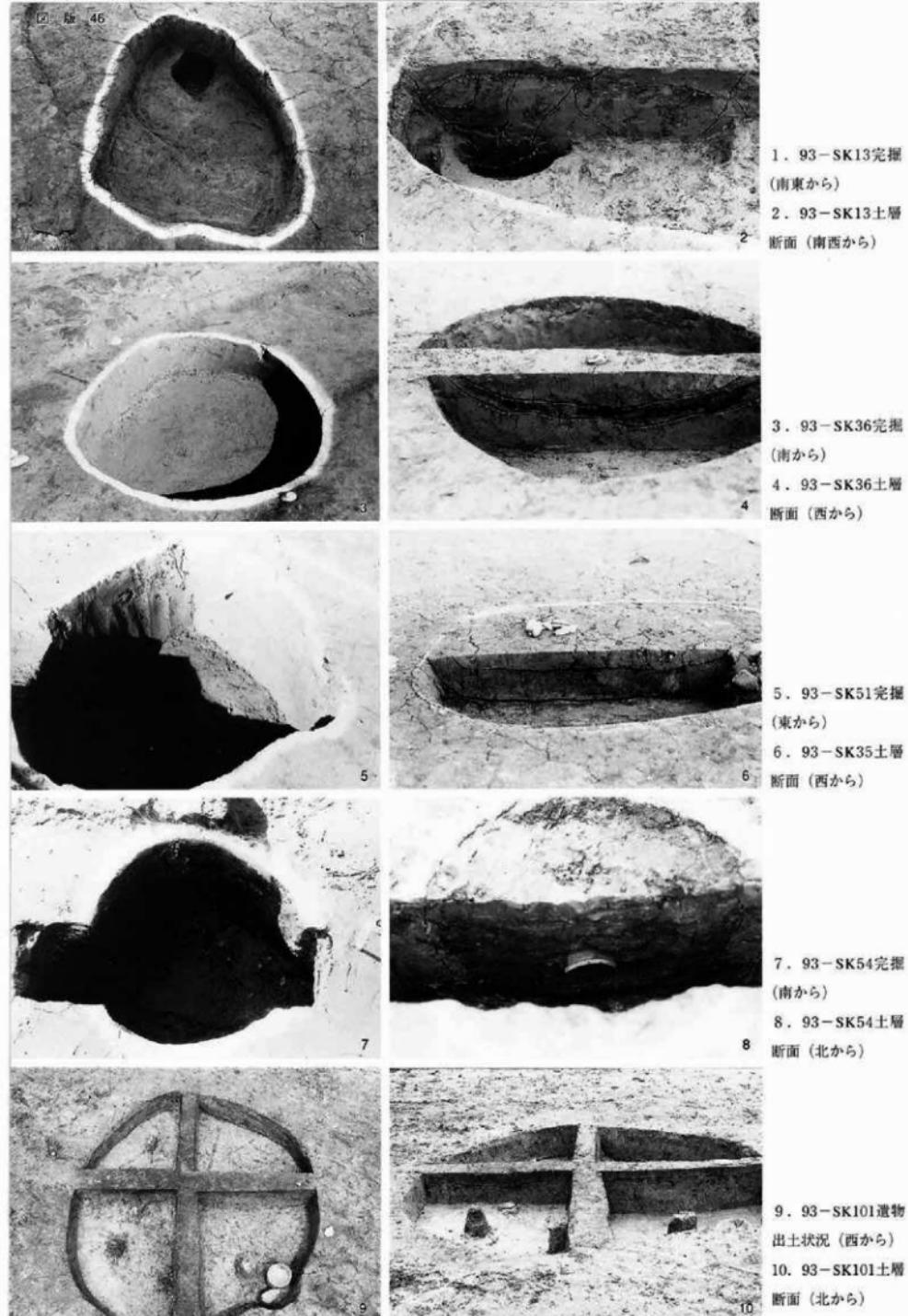


9. 93-SK 10 完掘
(南から)



10. 93-SK 10 土層
断面 (西から)







1. 94-SK62完掘
(北から)

2. 94-SK62土層
断面 (北から)



3. 94-SK53完掘
(南西から)

4. 94-SK53土層
断面 (南西から)



5. 94-SK52完掘
(南西から)

6. 94-SK52土層
断面 (西から)



7. 94-SK35完掘
(南西から)

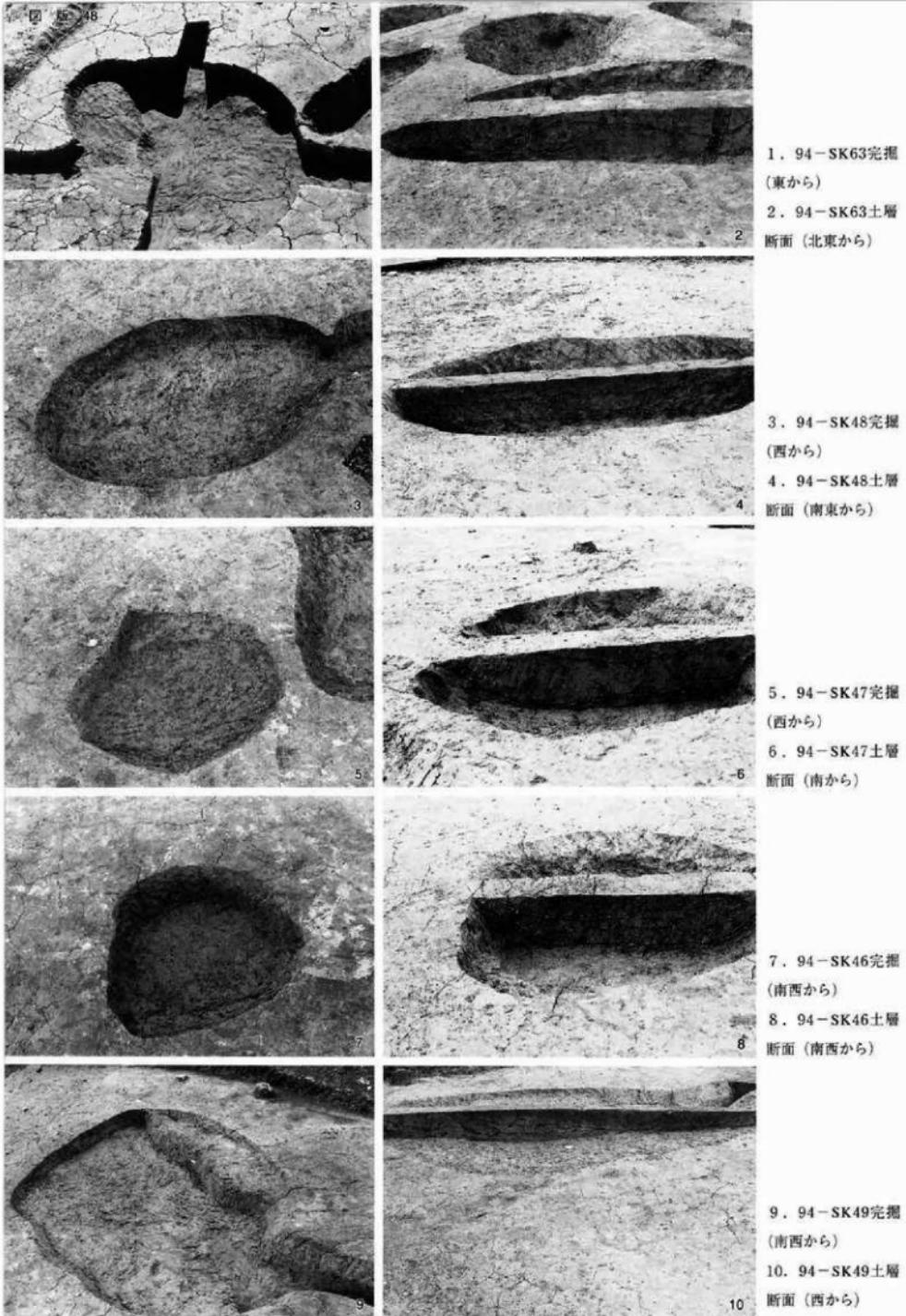
8. 94-SK35土層
断面 (西から)



9. 94-SK51完掘
(南東から)

10. 94-SK51土層
断面 (南東から)





1. 94-SK32土層
断面（南東から）
2. 94-SK50土層
断面（南東から）



3. 94-SK26土層
断面（北西から）
4. 94-SK27土層
断面（北から）



5. 94-SK27完掘
(北から)
6. 94-SK26完掘
(北西から)
7. 94-SK24完掘
(南西から)

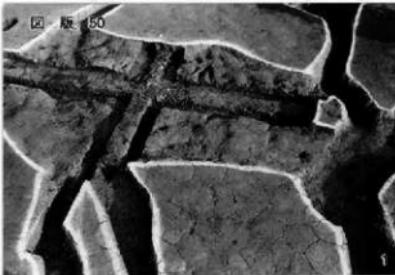


8. 94-SK42土層
断面（西から）
9. 93-SX31土層
断面（西から）



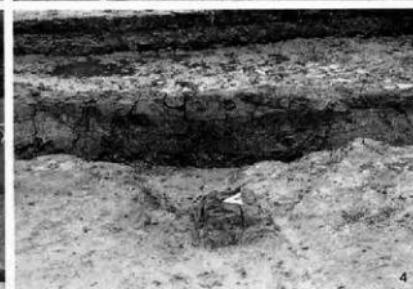
10. 93-SX31完掘
(東から)
11. 93-SX31土層
断面（西から）





1. 93-SX33完掘
(西から)

2. 93-SX34完掘
(南から)



3. 93-SD17完掘
(南西から)

4. 93-SD10土層
断面 (南東から)



5. 93-SD11完掘
(北から)

6. 93-SD11土層
断面 (北から)



7. 93-SD15完掘
(東から)

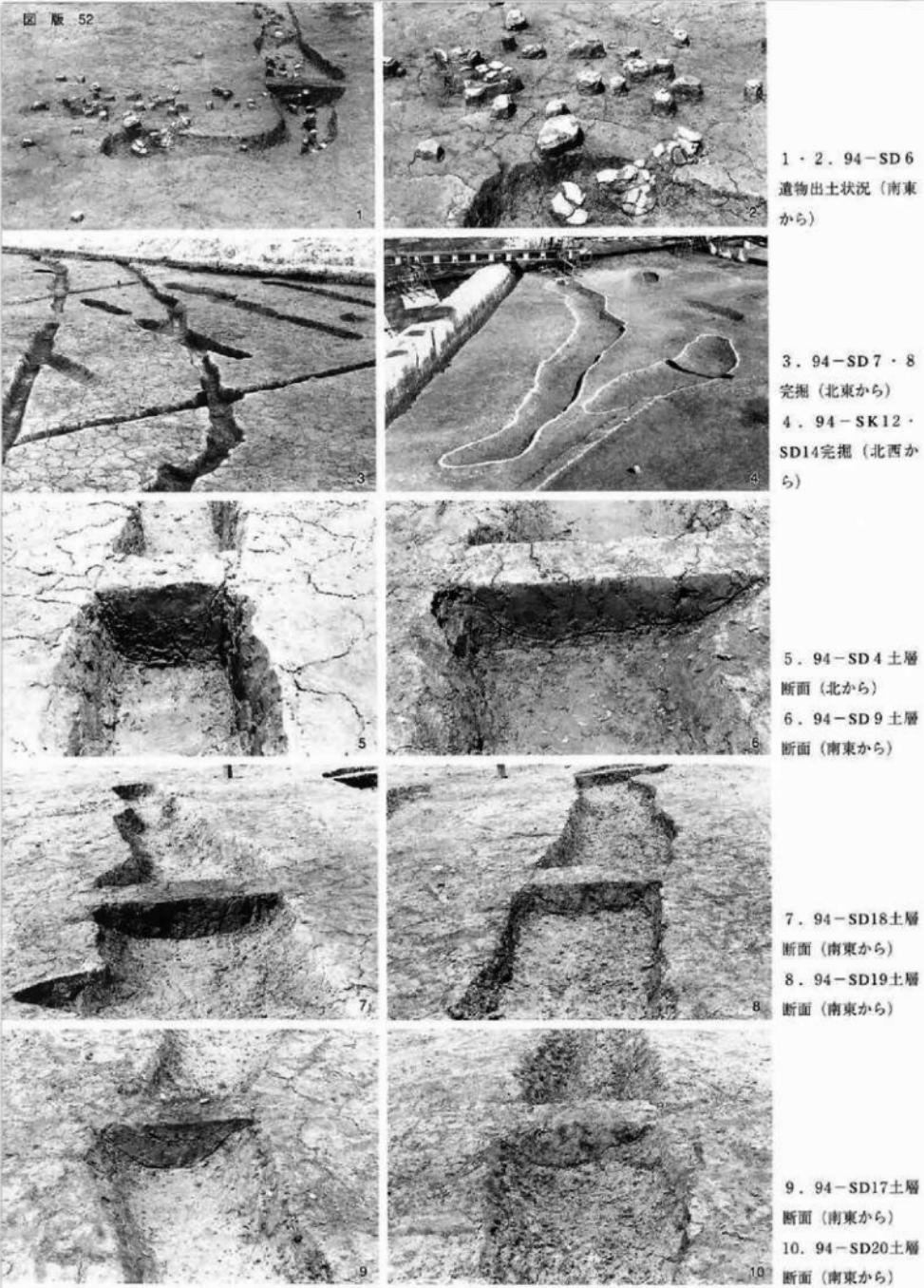
8. 93-SD22土層
断面 (南から)



9. 93-SD28土層
断面 (北から)

10. 93-SD23土層
断面 (北から)







1. 水田跡区画 7 ~
13 (南西から)



2. 水田跡水口 (南
東から)



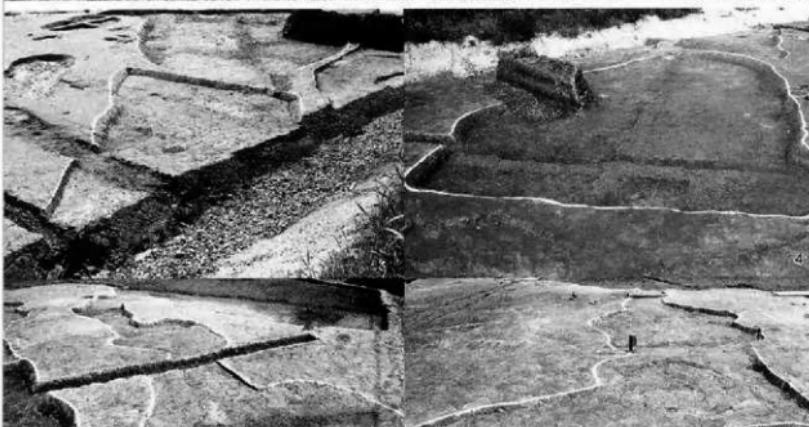
3. 水田跡区画14~
17 (北東から)



1. 畦跡状遺構（東
から）



2. 水田跡区画 1 ~
4（南東から）



3. 水田跡区画 3
(南東から)

4. 水田跡区画 2
(南東から)



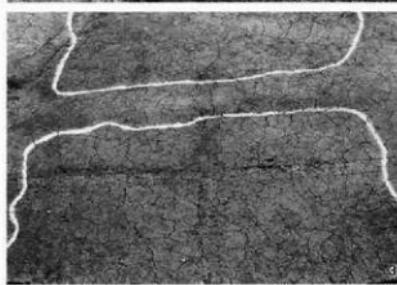
5. 水田跡区画 4
(北西から)

6. 水田跡区画 1
(北西から)

1. 畦畔3・4検出
状況(東から)
2. 畦畔13検出状況
(北西から)



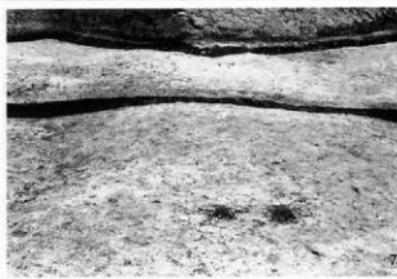
3. 畦畔4(東か
ら)
4. 水田跡区画6



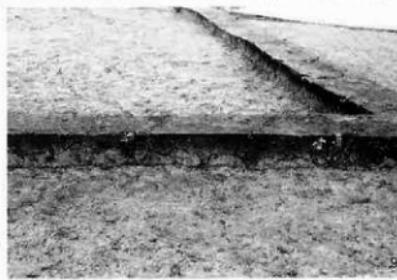
5. 畦畔5土層断面
(西から)
6. 畦畔6土層断面
(西から)

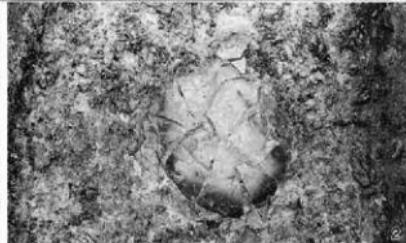
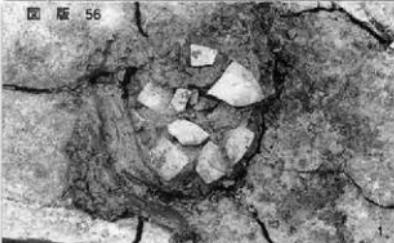


7. 畦畔5(東か
ら)
8. 水田跡土層断面



9・10. 水田跡土層
断面(南西から)





1. 土器出土状況
(平安時代 I 20-24)

2. 土器出土状況
(平安時代 H 22-7)



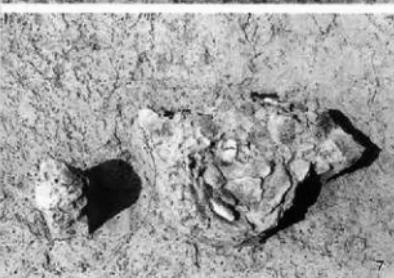
3. 土器出土状況
(平安時代 J 19-26)

4. 土器出土状況
(平安時代 J 19-15)



5. 土器出土状況
(平安時代 Q 28-ビ
ット 1)

6. 土器出土状況
(平安時代)



7. 土器集中地点 5
(古墳時代前期)

8. 土器集中地点 3
(古墳時代前期)



9. 土器集中地点 1
(古墳時代前期)

10. 土器集中地点 10
(古墳時代前期)



1. 土器集中地点 1
(古墳時代前期)



2. 土器集中地点 7
(古墳時代前期)



3. 土器集中地点 6
(古墳時代前期)



3



4



7



6 (上)



9



10



1



5



7



2



6 (下)

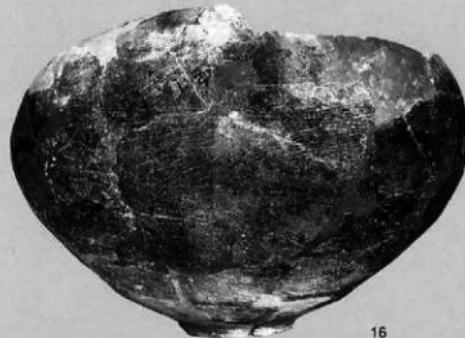


8

古墳時代前期土器 2

・平安時代土器 1

1:3



16



12



13



15



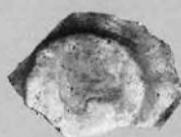
11



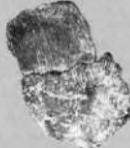
14



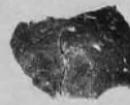
22



18



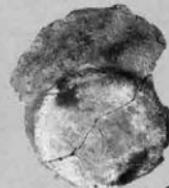
19



21



24



20



27



30



55

1:3



25



29



31



40



26



32



35



27



28



33



36



38



39



41



42



43



44



45



46



47



48



49



50



51

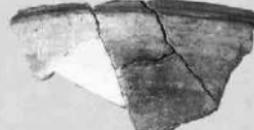


52



53

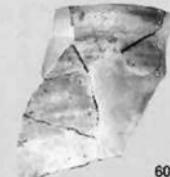
54



56



57



60



62



61



59

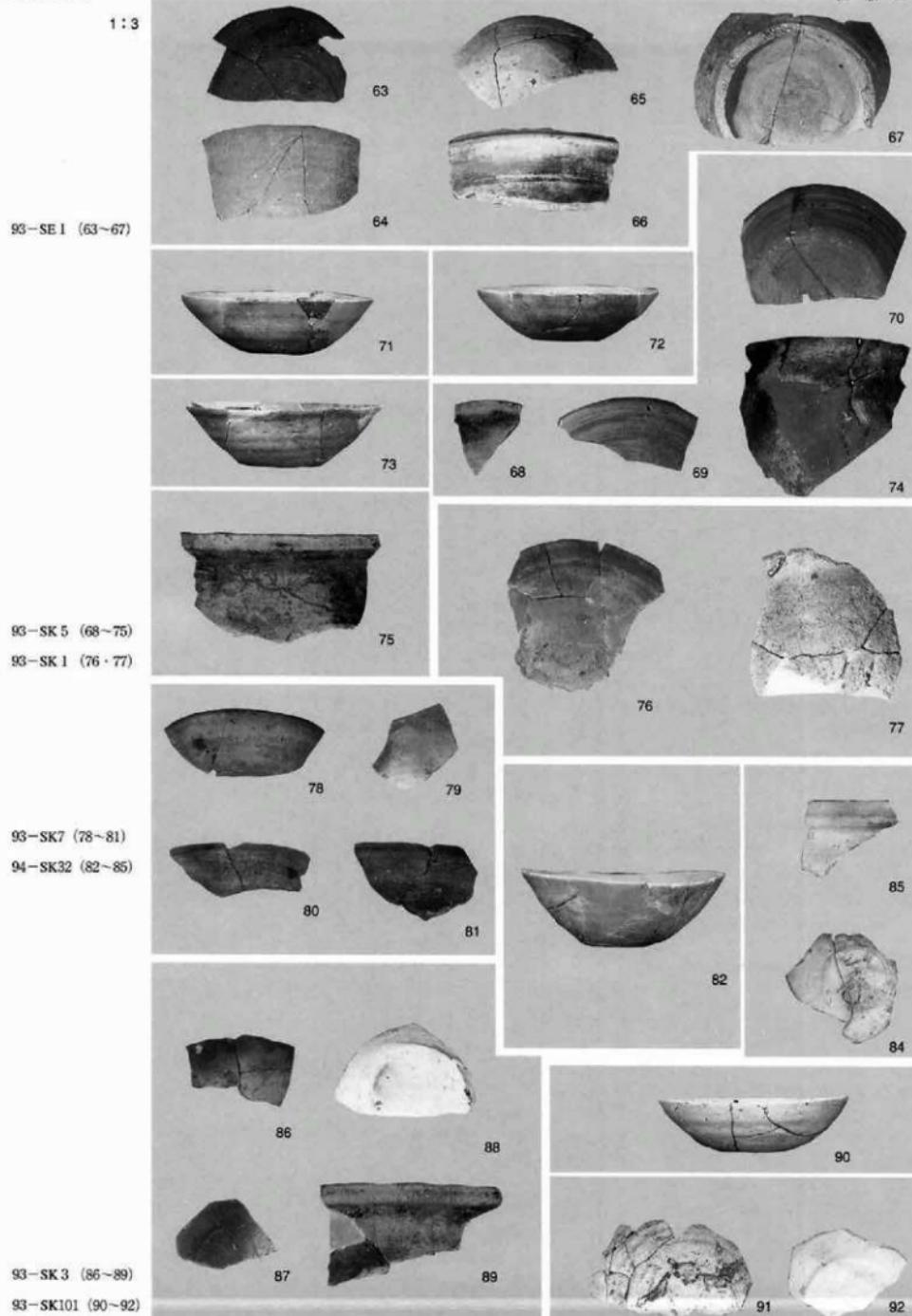


58

93-SK70 (25~56)

93-SI2 (57~62)

1:3





93



94



95



96



97



98



99



101



102



103



104



105



107



108



110



106



109



111



113



112



114



115



116



117



118

1:3

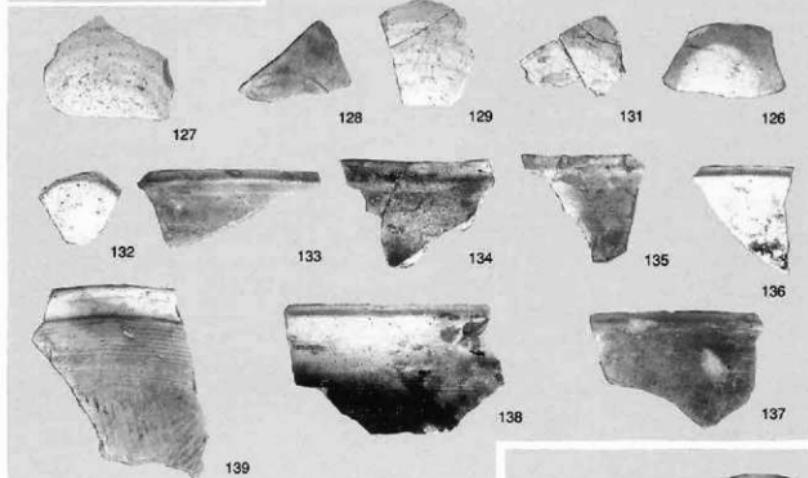
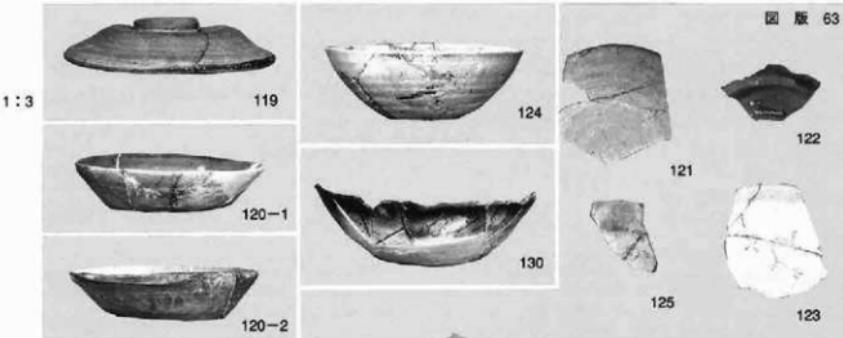
93-SX31 (93~95)

93-SX32 (96~104)

93-SX34 (105~110)

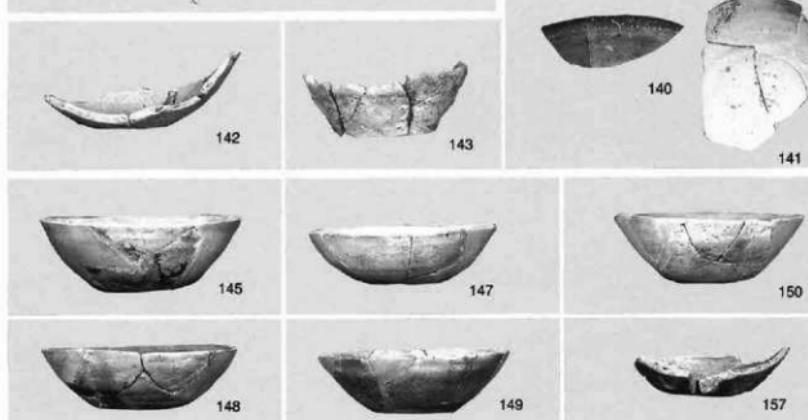
93-SX33 (111~115)

93-SX30 (116~118)



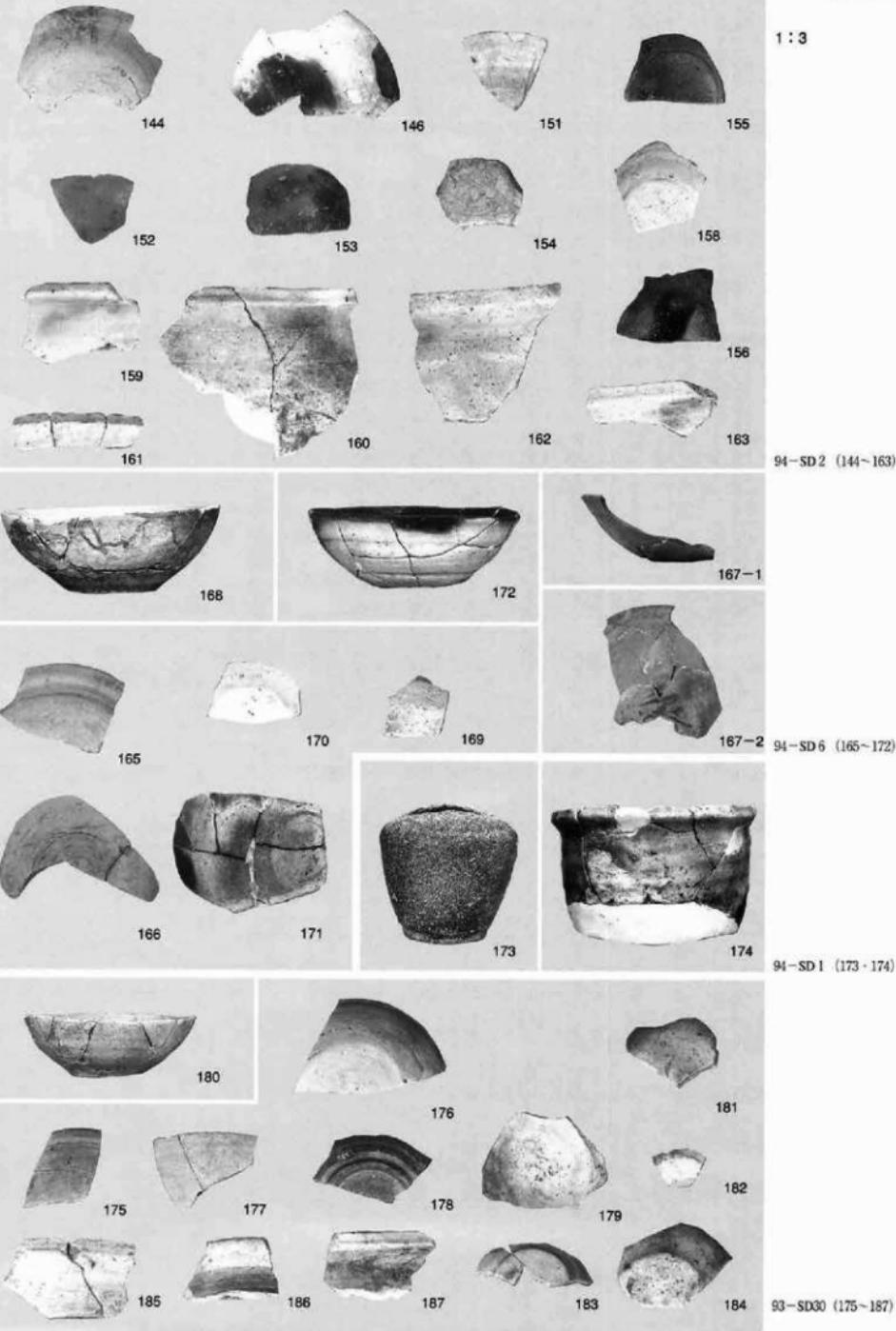
93-SD22 (119~139)

94-SD35 (140~143)



94-SD 2 (145~164)

1:3



1:3



188



189



190



191

94-SD 7 (188~192)



192



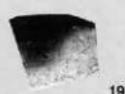
193



194



195



196



197

94-SD 5 (193~198)

93-SD10' (199~203)



200



201



202



203



204



205



206



212



207



208



214



211



209



210



216



215



213



217



219



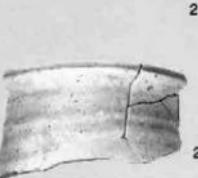
218



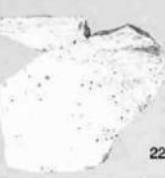
222



223



220



221



224



233



229



230



232



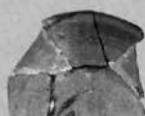
234

240 1:4
その他 1:3

236



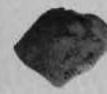
240



225



227



235



237



226



231



228



238

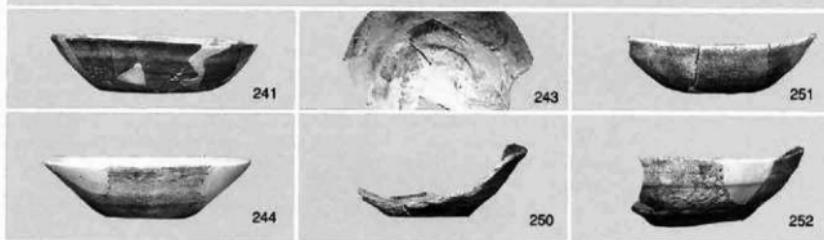
旧河道 (SD10)
(224~238・240)

1:3



239

旧河道 (SD10) (239)



241

243

251

244

250

252

242

245

246

248

247

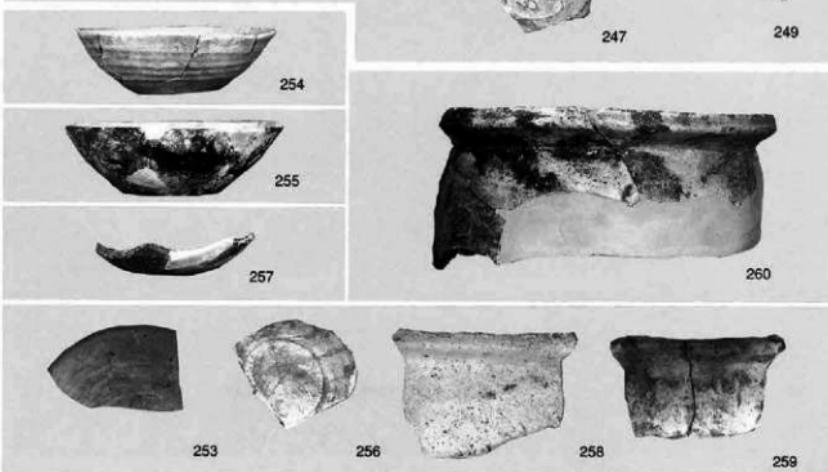
254

249

255

260

257

水田跡出土土器
(241~252)

253

256

258

259

L26-6・7・11・
12土器ダマリ (253
~260)

261



263



264

L 26-6・7・11・
12 土器ダマリ (261~
264)

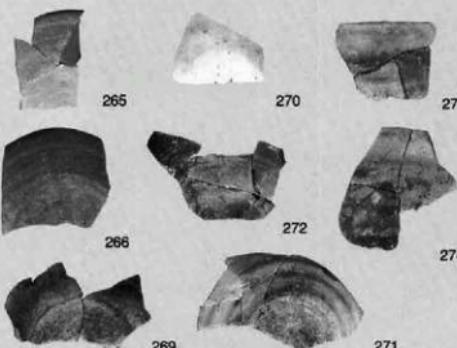
262



267



268



N 27-19・23・24
土器ダマリ (265~
274)

276



277



275

280



281



K 27-8・11-14
土器ダマリ (275~
284)

285

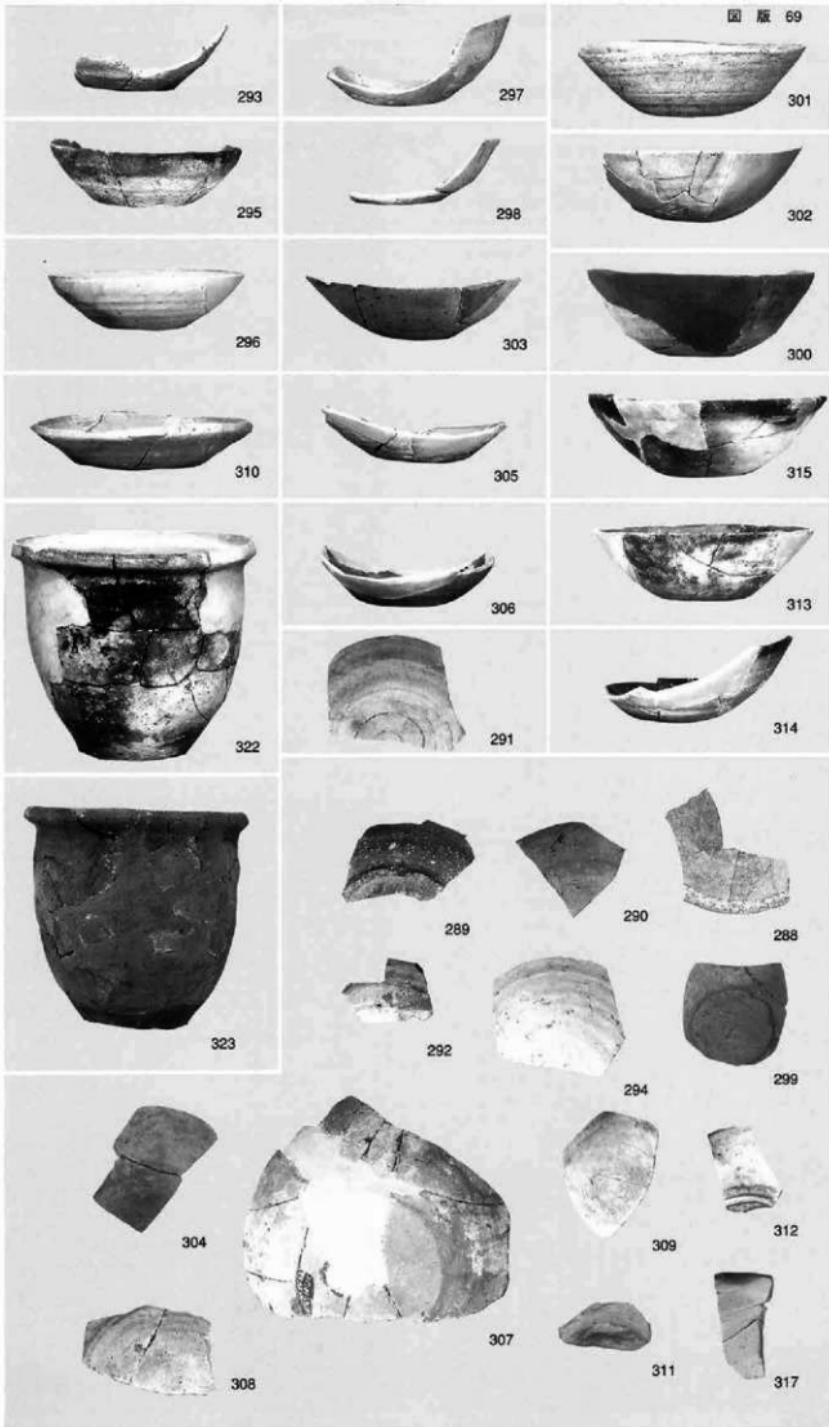


286

287

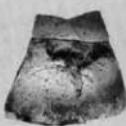


K 26-6・11 土器ダ
マリ (285~287)





316



318



319



320



324



328



321



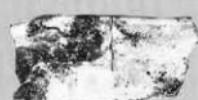
326



327



328



329



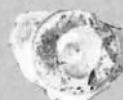
330



331



332



333



335



336



337



334



341



338



342



343

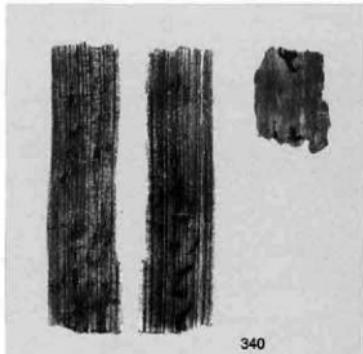


344

石器・木器・金属器ほか
335~342 1:3
343・344 1:1

包含層 (316~331)
近世の土器・陶器
(332~333)

2:3



340



98 a



124



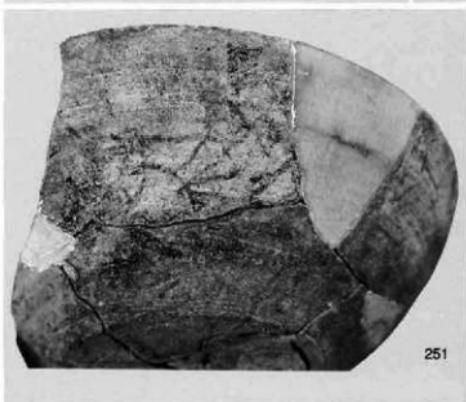
98 b



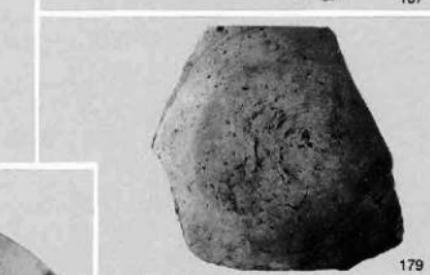
157



167



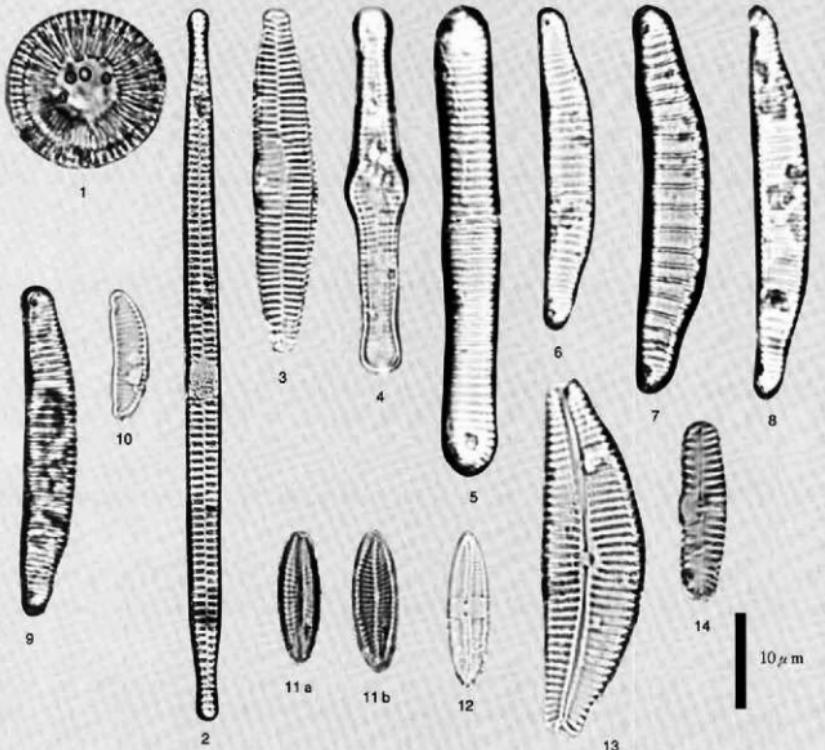
251



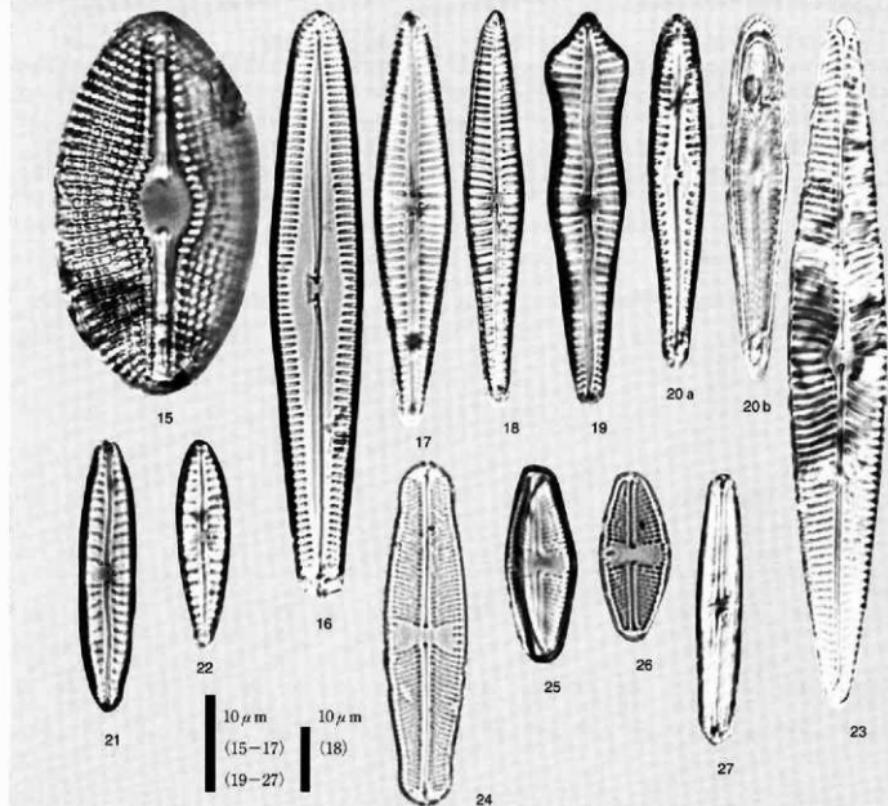
179



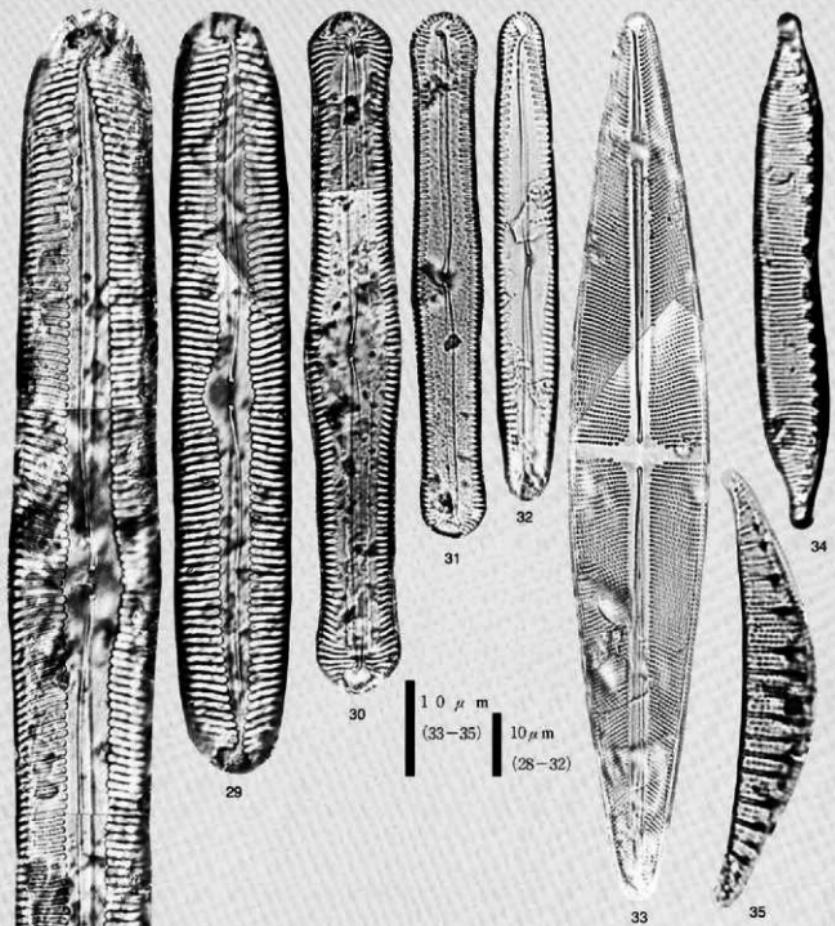
247



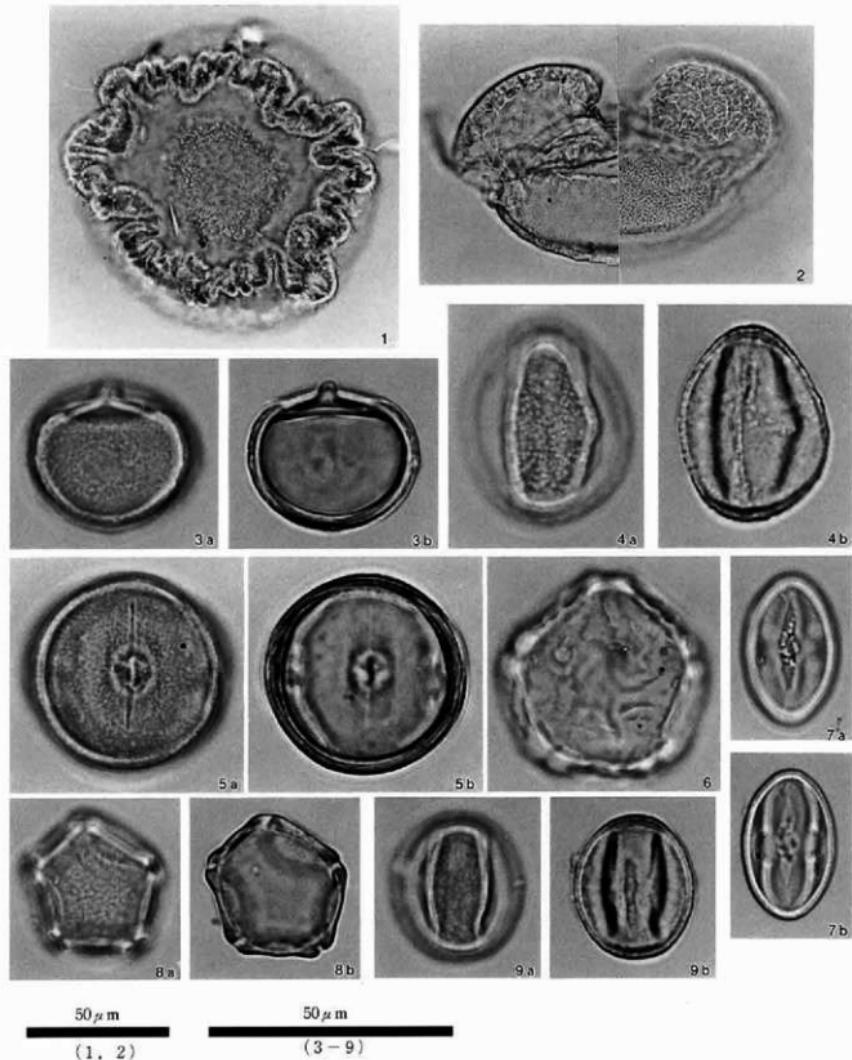
1. *Cyclotella ocellata* Pantocsek (第2地点; 試料番号11)
2. *Synedra ulna* (Kuetz.) Ehrenberg (第2地点; 試料番号11)
3. *Ceratoneis arcus* var.*recta* (CL.) Krasske (第2地点; 試料番号14)
4. *Tabellaria flocculosa* (Roth) Kuetzing (第2地点; 試料番号17)
5. *Eunotia formica* Ehrenberg (第2地点; 試料番号6)
6. *Eunotia pectinalis* var.*minor* (Kuetz.) Rabenhorst (第2地点; 試料番号17)
7. *Eunotia biseriatoidea* H.Kobayasi (第1地点; 試料番号5)
8. *Eunotia duplicoraphis* H.kobayasi (第2地点; 試料番号17)
9. *Eunotia duplicoraphis* H.kobayasi (第1地点; 試料番号5)
10. *Eunotia incisa* W.Smith et Gregory (第2地点; 試料番号17)
11. *Achnanthes subhudsonis* Hustedt (第1地点; 試料番号5)
12. *Caloneis aerophila* Bock (第2地点; 試料番号4)
13. *Cymbella turgidula* var.*nipponica* Skvortzow (第2地点; 試料番号14)
14. *Cymbella sinuata* Gregory (第2地点; 試料番号11)



15. *Diploneis elliptica* (Kuetz.) Cleve (第2地点; 試料番号12)
 16. *Gomphonema clevei* var. *inaequilongum* H.Kohayashi (第2地点; 試料番号11)
 17. *Gomphonema gracile* Ehrenberg (第2地点; 試料番号16)
 18. *Gomphonema gracile* Ehrenberg (第2地点; 試料番号16)
 19. *Gomphonema acuminatum* Ehrenberg (第2地点; 試料番号11)
 20. *Rhoicosphenia abbreviate* (Ag.) Lange-Bertalot (第2地点; 試料番号16)
 21. *Gomphonema angustatum* var. *linearis* Hustedt (第1地点; 試料番号5)
 22. *Gomphonema parvulum* Kuetzing (第4地点; 試料番号8)
 23. *Navicula radiosa* Kuetzing (第2地点; 試料番号14)
 24. *Navicula pupula* Kuetzing (第2地点; 試料番号17)
 25. *Navicula mutica* Kuetzing (第2地点; 試料番号11)
 26. *Navicula mutica* Kuetzing (第1地点; 試料番号5)
 27. *Neidium alpinum* Hustedt (第4地点; 試料番号4)

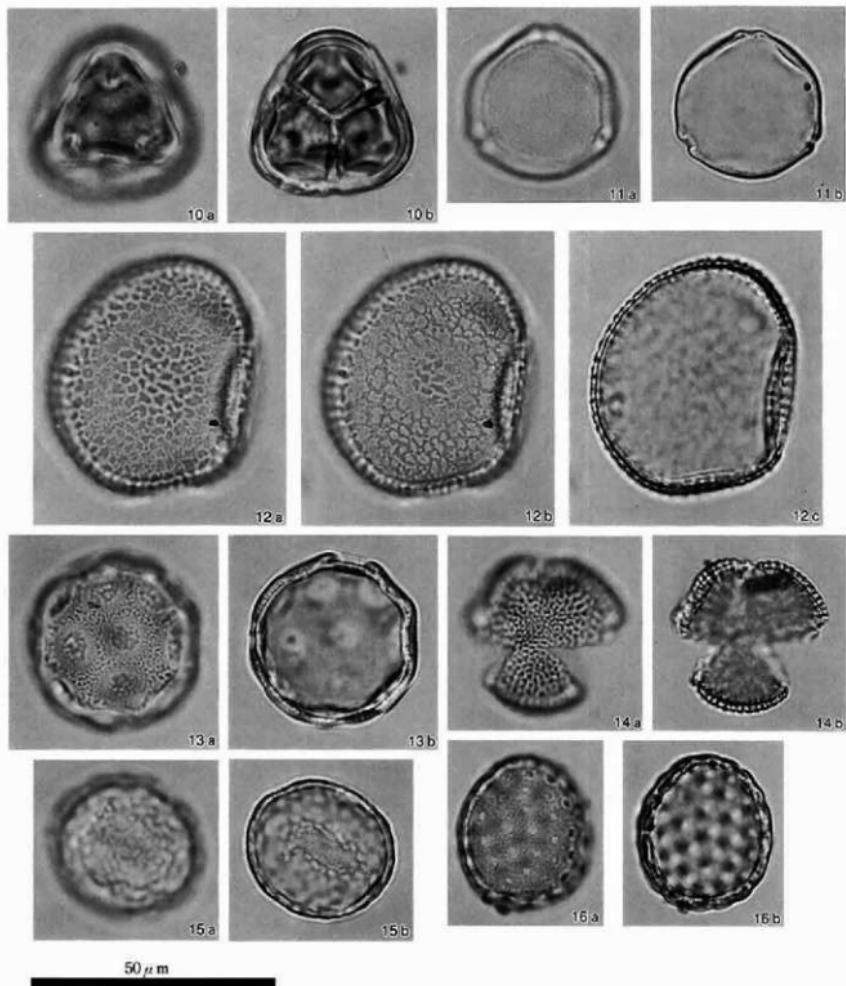


28. *Pinnularia maior* Kuetzing (第2地点; 試料番号12)
29. *Pinnularia viridis* (Nitz.) Ehrenberg (第2地点; 試料番号11)
30. *Pinnularia ornata* H.Kobayasi (第2地点; 試料番号11)
31. *Pinnularia acrosphaeria* W.Smith (第2地点; 試料番号12)
32. *Pinnularia gibba* var.*linearis* Hustedt (第2地点; 試料番号17)
33. *Stauroneis phoenicenteron* (Nitz.) Ehrenberg (第2地点; 試料番号16)
34. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (第1地点; 試料番号5)
35. *Rhopalodia gibberula* (Ehr.) O.Muller (第2地点; 試料番号12)



1. ツガ属 (I 18地点; 試料番号 1)
 3. スギ属 (I 18地点; 試料番号 1)
 5. ブナ属 (I 18地点; 試料番号 1)
 7. トチノキ属 (I 18地点; 試料番号 1)
 9. コナラ属アカガシ亜属 (I 18地点; 試料番号 1)

2. マツ属複雜管束亞属 (I 18地点; 試料番号 2)
 4. コナラ属コナラ亜属 (I 18地点; 試料番号 2)
 6. ニレ属—ケヤキ属 (I 18地点; 試料番号 1)
 8. ハンノキ属 (I 18地点; 試料番号 1)

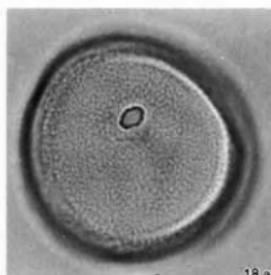


10. ツツジ科 (I 18地点; 試料番号 2)
 12. ミクリ属 (I 18地点; 試料番号 1)
 14. アブラナ科 (SE 3; 試料番号 1)
 16. アカザ科 (SE 3; 試料番号 1)

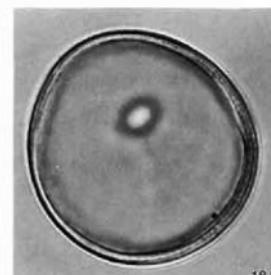
11. クワ科 (SE 3; 試料番号 1)
 13. サジオモダカ属 (K 16地点; 試料番号 2)
 15. オオバコ属 (SE 3; 試料番号 1)



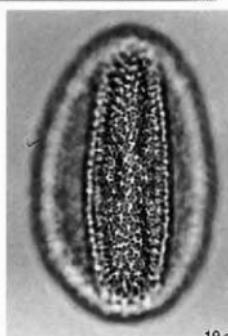
17



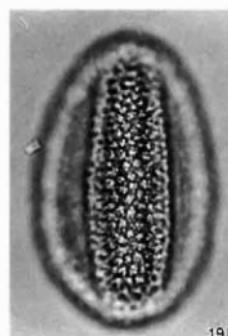
18 a



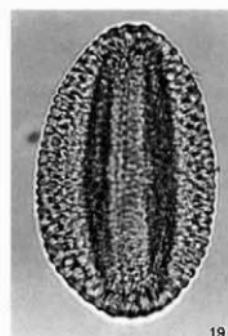
18 b



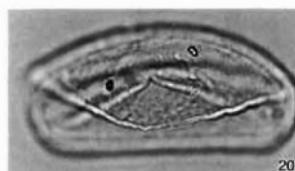
19 a



19 b



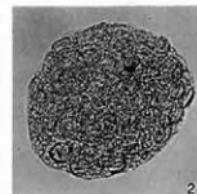
19 c



20 a



20 b



21

 $100 \mu\text{m}$

(21)

 $50 \mu\text{m}$

(17-20)

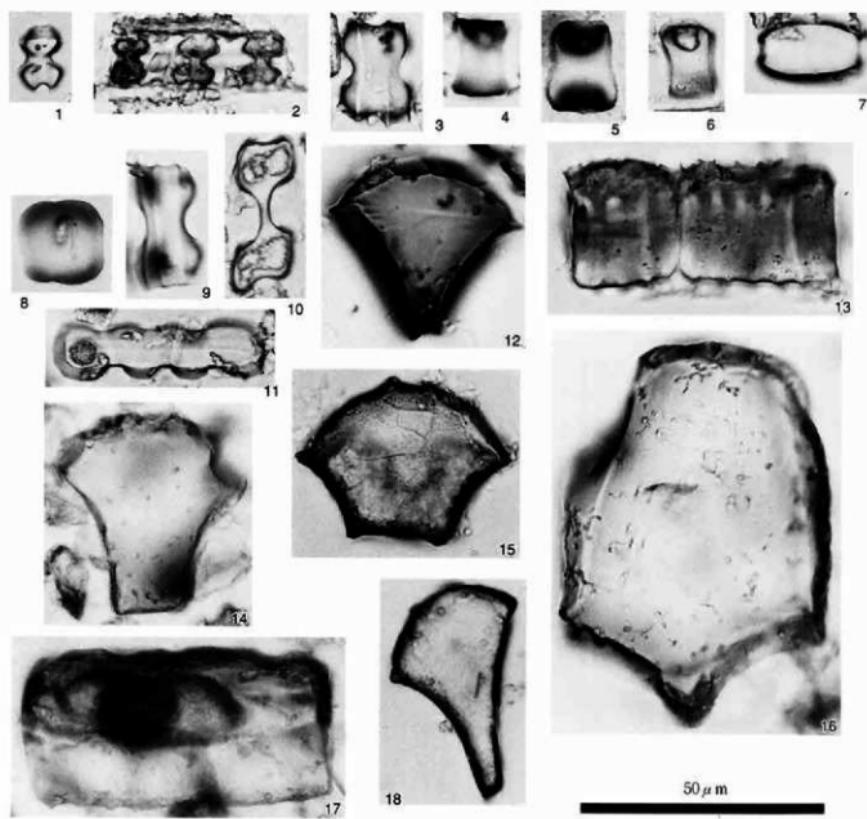
17. カヤツリグサ科 (I 18地点; 試料番号 1)

19. ソバ属 (SE 3; 試料番号 1)

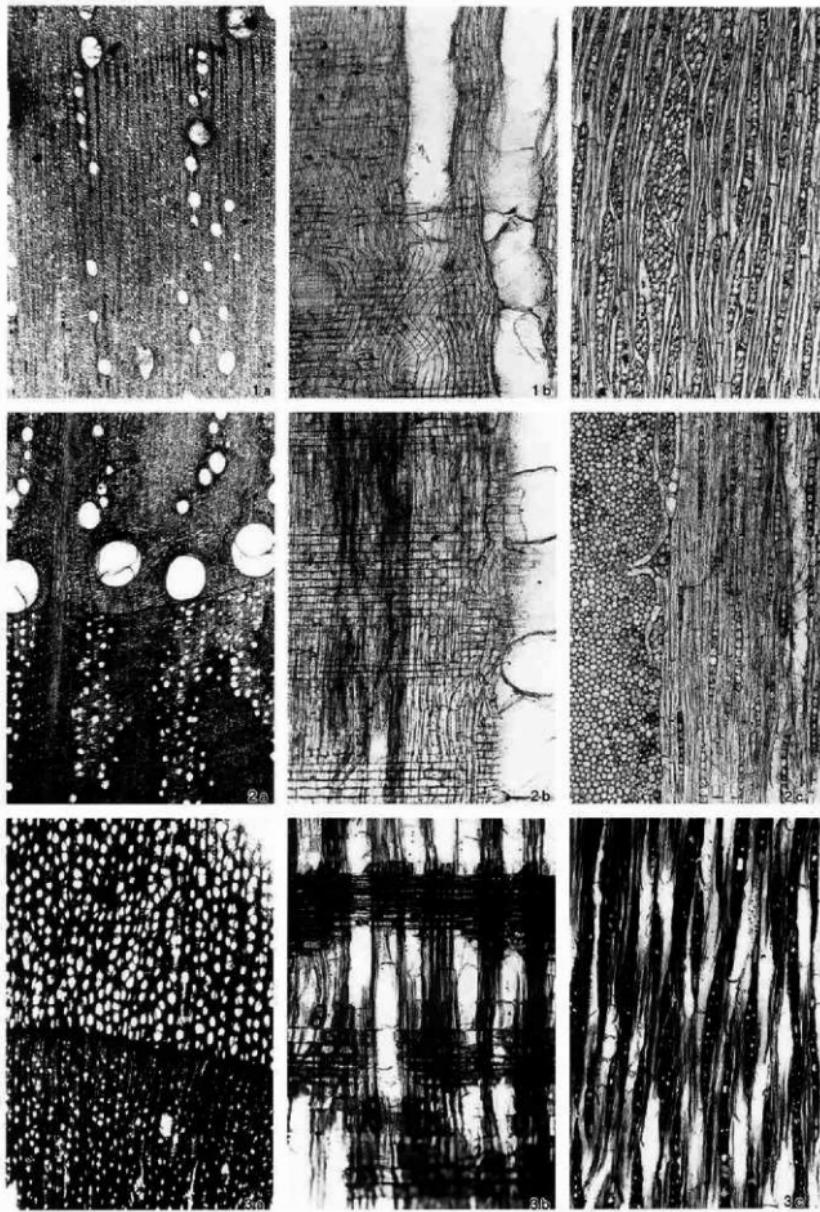
21. サンショウモ (I 18地点; 試料番号 1)

18. イネ科 (I 18地点; 試料番号 1)

20. ミズアオイ属 (I 18地点; 試料番号 2)



1. イネ属短細胞珪酸体 (H15地点; 試料番号2)
 3. キビ属短細胞珪酸体 (I20地点; 試料番号1)
 5. ヤダケ属短細胞珪酸体 (F13地点; 試料番号2)
 7. ヨシ属短細胞珪酸体 (K18地点; 試料番号1)
 9. コブナグサ属短細胞珪酸体 (M20地点; 試料番号2)
 11. イチゴツナギ亞科短細胞珪酸体 (I20地点; 試料番号1)
 13. イネ属機動細胞珪酸体 (I20地点; 試料番号1)
 15. クマザサ属機動細胞珪酸体 (H19地点; 試料番号1)
 17. キビ族機動細胞珪酸体 (G16地点; 試料番号3)
2. イネ属短細胞珪酸体列 (I20地点; 試料番号1)
 4. ネザサ節短細胞珪酸体 (K18地点; 試料番号1)
 6. タケ亞科短細胞珪酸体 (H19地点; 試料番号2)
 8. ヨシ属短細胞珪酸体 (第4地点; 試料番号1)
 10. ススキ属短細胞珪酸体 (I20地点; 試料番号1)
 12. イネ属機動細胞珪酸体 (I20地点; 試料番号1)
 14. タケ亞科機動細胞珪酸体 (第2地点; 試料番号14)
 16. ヨシ属機動細胞珪酸体 (第2地点; 試料番号11)
 18. ウシクサ族機動細胞珪酸体 (M20地点; 試料番号2)



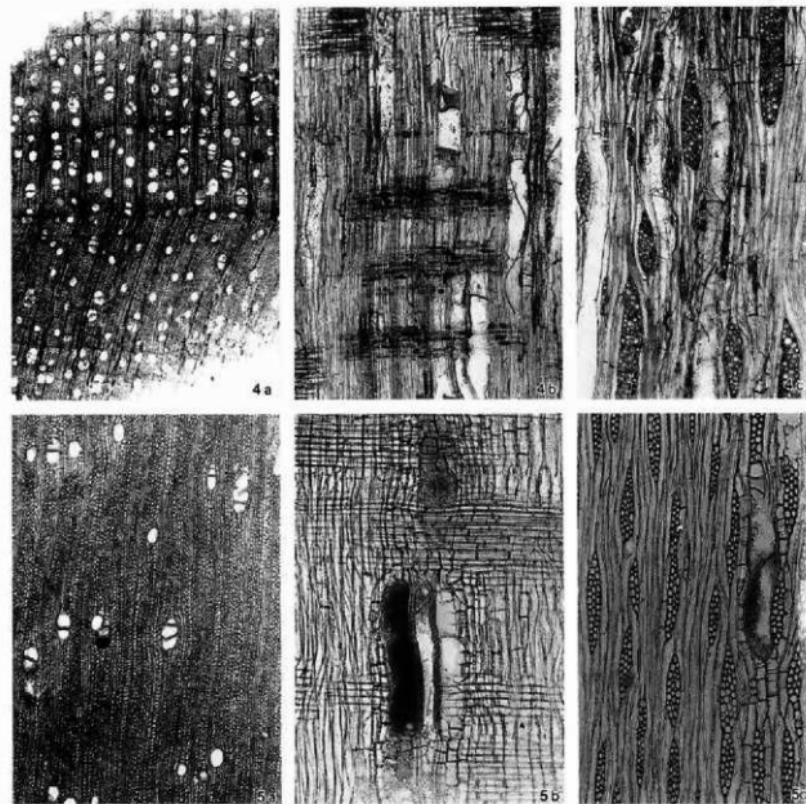
1. コナラ属コナラ亜属クヌギ節（試料番号2）

2. コナラ属コナラ亜属コナラ節（試料番号5）

3. カツラ（試料番号1）

a : 木口, b : 横目, c : 板目

200 μm : a200 μm : b, c



4. カエデ属 (試料番号3)

5. トネリコ属 (試料番号4)

a : 木口, b : 柱目, c : 板目

— 200 μm : a
— 200 μm : b, c

報告書抄録

書名	上郷遺跡II						
副書名	国道49号横雲バイパス関係報告書						
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第87集						
編著者名	上野一久・春日真実						
編集機関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団						
所在地	〒956 新潟県新津市金津市金津93番地1 TEL.0250-25-3961						
発行年月日	西暦1997年 12月26日						
所取遺跡名	所在地	コード 市町村 道番号	北緯 50分 29秒	東経 37度 08分 29秒	調査期間 19901022-199001025 19931113-19931117 19930421-19931112 19940412-19940835	調査面積 22.200m ²	調査要因 道路(国道49号 横雲バイパス) の建設に伴う事 前調査
上郷遺跡	新潟県中蒲原郡横越町大字 横越字上郷	323	8	139度 第二次調査 19931113-19931117 第三次調査 19940412-19940835			
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
上郷遺跡	集落・ 生産跡	中・近世		陶磁器・錢貨			
		平安時代 (9世紀末~ 10世紀初頭)	獨立柱建物 2棟 竪穴建物 1棟 井戸 2基	土師器・須恵器・石器・ 木器・鉄器・木簡			
		古墳時代前期	土坑・転覆遺構・ 水田跡・溝・不明 遺構	土師器			

新潟県文化財調査報告書 第87集

国道49号横雲バイパス関係発掘調査報告書

上郷遺跡II

平成9年12月25日印刷
平成9年12月26日発行発行・編集 新潟県教育委員会
新潟市新光町4-1
電話 025(285)5511(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
新潟県新津市金津93番地1
電話 025(228)3961印刷・製本 楽文堂
新潟市新島町通4ノ町2242
電話 025(228)3065

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第87集『上郷遺跡II』 正誤表追加

頁	位置	誤	正
抄録	北緯（旧座標）	37度50分29秒	37度50分38秒
抄録	東経（旧座標）	138度08分29秒	138度08分45秒

上郷遺跡正誤表

頁	行	誤	正
9	36・37	振津国人姓七位下甘尾雪麻呂	振津国人正七位下甘尾雪麻呂
11	7	I～VI層まで	I～IV層まで
17	7	2.50m付近に集中する	1.50m付近に集中する
25	11	94-SD30・31・4・31からなり、	94-SD30・3・4・31からなり、
25	15	94-SD3は94-SD2に、	94-SD3は94-SD2に、
25	15	94-SD4は94-SD7と、94-SD3 は94-SD1と	94-SD4は94-SD7・9と、 94-SD1と
25	16	94-SD3は94-SD2に切られる	94-SD3は94-SD2に切られる
25	16	94-SD4と94-SD7、94-SD3と 94-SD1との切り合い関係は不明。	94-SD4と94-SD7・9の切り合い関係は不 明。
69	計1點	長金・鍋	長釜・鍋
報告書抄録	集機関所在地	新潟県新津市金津市金津93番地1	新潟県新津市金津93番地1
図版2・3	各セクションポイントの標高を2.80mとする。		
図版16・17	各セクションポイントの標高を1.00mとする。		
図版18・20	各セクションポイントの標高を2.80mとする。		
図版22	a～dのセクションポイントの標高を2.80m、e～gのセクションポイントの標高を 3.00mとする。		
図版24	c～c'のセクションポイントの標高を3.00mとする。		